



高尾向山遺跡 II

1996

静岡県袋井市教育委員会

高尾向山遺跡 II

1 9 9 6

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成3年度に袋井市教育委員会が実施した、高尾向山遺跡^{たかおむかいやま}の第2次発掘調査報告書である。なお、第1次発掘調査は昭和63年度に袋井市教育委員会他が実施した中東遠地区新設養護学校建設にともない実施されており報告書も刊行されていることから、本報告書を「高尾向山遺跡Ⅱ」と命名して整理をはかりたい。
2. 本発掘調査は袋井市教育委員会松井一明を発掘調査の担当者として実施した。
3. 本調査、本書刊行に係る事務については、袋井市教育委員会生涯学習課文化財係が行った。
4. 本書の編集は松井一明が、挿図・図版の作成は松井・水野かおり・鈴木美恵子・関西大学考古学研究室の学生諸君、現地測量・遺構図面に関しては(株)フジヤマが、写真撮影については松井が行った。
5. 本書の執筆は松井が行った。
6. 本調査で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。
7. 本書作成にあたっては下記の方々及び関係機関にご教示、資料の提供を賜った。(敬称略)
新井端 伊丹徹 石黒立人 伊藤寿夫 伊藤雅文 漆畑敏 大島慎一 加藤理文 川江秀孝
菊田宗 木戸雅寿 小竹森直子 鐵英記 後藤健一 齋野裕彦 坂口滋皓 佐野一夫 柴田稔
進藤貴和子 白澤崇 竹内直文 種定淳介 寺沢薫 永井義博 中井均 中井正幸 中島広顕
中山誠二 西井幸雄 西川修一 瀬戸田佳男 田崎博之 常松幹雄 戸塚和美 福田聖
前田清彦 前田庄一 松本一男 宮崎幹也 向坂鋼二 山口譲治 山本宏司 吉岡康暢
米田文孝 渡井英誉 関西大学考古学研究室
8. 本発掘調査が順調に進行し無事に終了し、本書も刊行できたことは、原因者である和光開発株式会社の全面的なご協力を得ることができたためである。特にここで感謝の意を表したい。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 周辺の弥生時代・古墳時代の遺跡	3
第3章 遺構	7
第1節 弥生時代の遺構	7
i) 方形周溝墓 ii) 土器棺墓 iii) 木棺墓・土坑墓 iv) 焼土・焼土坑	
v) 1地点西端検出遺構	
第2節 古墳時代・古墳時代以降の遺構	13
i) 古墳 ii) 木棺墓・土坑墓 iii) 竪穴住居跡・掘立柱建物 iv) 炭焼窯	
v) 2地点検出遺構	
第4章 遺物	156
第1節 弥生時代の遺物	156
i) 土器 ii) 玉類 iii) 弥生時代以前の遺物	
第2節 古墳時代の遺物	157
i) 古式土師器 ii) 須恵器 iii) 土師器 iv) 鉄製品 v) 装身具・砥石	
第5章 考察	187
第1節 高尾向山遺跡に見る弥生時代後期方形周溝墓の様相	187
i) はじめに ii) 高尾向山遺跡の方形周溝墓の分析	
iii) 静岡県下における後期方形周溝墓と集落について iv) まとめ	
第2節 高尾向山遺跡の横穴式木室墳について	210
i) はじめに ii) 横穴式木室墳の構造 iii) 遠江における横穴式木室墳の分析	
iv) まとめ	

挿 図 目 次

第 1 図	高尾向山遺跡の位置図	2
第 2 図	高尾向山遺跡周辺の弥生～古墳時代の主要遺跡・古墳群分布図	4
第 3 図	グリッド配置図	18
第 4 図	高尾向山遺跡周辺地形図	19・20
第 5 図	全体図 1	21・22
第 6 図	全体図 2	23・24
第 7 図	全体図 3	25・26
第 8 図	地形測量図検索図	27
第 9 図	地形測量図 1	28
第 10 図	地形測量図 2	29
第 11 図	地形測量図 3	30
第 12 図	地形測量図 4	31
第 13 図	地形測量図 5	32
第 14 図	地形測量図 6	33
第 15 図	地形測量図 7	34
第 16 図	地形測量図 8	35
第 17 図	地形測量図 9	36
第 18 図	地形測量図 10	37
第 19 図	地形測量図 11	38
第 20 図	地形測量図 12	39
第 21 図	地形測量図 13	40
第 22 図	地形測量図 14	41
第 23 図	地形測量図 15	42
第 24 図	地形測量図 16	43
第 25 図	地形測量図 17	44
第 26 図	地形測量図 18	45
第 27 図	地形測量図 19	46
第 28 図	S X 1 実測図	47
第 29 図	S X 2・S X 7 実測図	48
第 30 図	S X 3 実測図	49・50
第 31 図	S X 4 実測図	51
第 32 図	S X 5 実測図	52
第 33 図	S X 1—1～3・S X 3—1 主体部実測図	53
第 34 図	S X 3—2・S X 4・S X 5—1・2 主体部実測図	54
第 35 図	S X 6 実測図	55
第 36 図	S X 8・S X 9 実測図	56
第 37 図	S X 6・S X 7・S X 9 主体部・S A 1 実測図	57
第 38 図	S X 10・S X 11 実測図	58

第 39 図	S X12・S X13実測図	59
第 40 図	S X10～S X13主体部実測図	60
第 41 図	S X14実測図	61・62
第 42 図	S X15実測図	63
第 43 図	S X16・S X21実測図	64
第 44 図	S X17・S X18実測図	65
第 45 図	S X14—1・2・S X15—2 主体部実測図	66
第 46 図	S X15—1・S X16・S X17—1～3 主体部実測図	67
第 47 図	S X19・S X20・S X55実測図	68
第 48 図	S X18—1・2・S X19・S X20—1・2・S X21主体部実測図	69
第 49 図	S X22・S X23実測図	70
第 50 図	S X22・S X23—1・2・S X25主体部実測図	71
第 51 図	S X24・S X42実測図	72
第 52 図	S X25実測図	73
第 53 図	S X24・S X26—3～5 主体部実測図	74
第 54 図	S X26実測図	75・76
第 55 図	S X26—1 主体部上層礫出土状況実測図	77
第 56 図	S X26—1 主体部実測図	78
第 57 図	S X26—2・6 主体部実測図	79
第 58 図	S X27実測図	80
第 59 図	S X28・S X29実測図	81
第 60 図	S X27—1・4・5・10・11主体部実測図	82
第 61 図	S X27—2・3・7・9 主体部実測図	83
第 62 図	S X27—6・8・P 1・P 2・S X28・S X29主体部実測図	84
第 63 図	S X30実測図	85
第 64 図	S X31実測図	86
第 65 図	S X32実測図	87
第 66 図	S X33実測図	88
第 67 図	S X30・S X31—1・2・S X32・S X33—1 主体部実測図	89
第 68 図	S X33—2・S X34—1・4・S X35主体部実測図	90
第 69 図	S X34実測図	91・92
第 70 図	S X35・S X38実測図	93
第 71 図	S X36実測図	94
第 72 図	S X37実測図	95・96
第 73 図	S X34—2・3・S X36—1・2 主体部・焼土13実測図	97
第 74 図	S X37—1～3・S X38主体部実測図	98
第 75 図	S X39・S X40実測図	99
第 76 図	S X41実測図	100
第 77 図	S X43実測図	101・102
第 78 図	S X39・S X40・S X42・S X43—1 主体部実測図	103

第 79 図	S X43—2～5 主体部実測図	104
第 80 図	S X43—6～9・P 1 主体部実測図	105
第 81 図	S X44実測図	106
第 82 図	S X45実測図	107
第 83 図	S X46・S X51実測図	108
第 84 図	S X47・S X52実測図	109
第 85 図	S X44～S X47主体部実測図	110
第 86 図	S X48実測図	111
第 87 図	S X49実測図	112
第 88 図	S X48—1・2・S X49・S X51・S X52主体部実測図	113
第 89 図	S X50・S X53実測図	114
第 90 図	S X54・S X56実測図	115
第 91 図	S X57実測図	116
第 92 図	S X58実測図	117
第 93 図	S X53・S X54・S X56・S X57—1 主体部実測図	118
第 94 図	S X57—2～5 主体部実測図	119
第 95 図	S K 1～S K 3・S K16実測図	120
第 96 図	S K 4～S K 6 実測図	121
第 97 図	S K 7～S K10実測図	122
第 98 図	S K11～S K14実測図	123
第 99 図	S K15・S K17～S K23実測図	124
第 100 図	S K24・S K25・8 号墳実測図	125
第 101 図	1～6 号土器棺実測図	126
第 102 図	7～12号土器棺実測図	127
第 103 図	13～18号土器棺実測図	128
第 104 図	19～21号土器棺・焼土 1～3 実測図	129
第 105 図	焼土 4～8・16実測図	130
第 106 図	焼土 9～12・14・15実測図	131
第 107 図	焼土17～20・1 号窯実測図	132
第 108 図	2・3 号窯実測図	133
第 109 図	1 地点西端 S K 1～S K 4・S K16・S B 1・S D 1 実測図	134
第 110 図	1 地点西端 S B 2～S B 4・S H 1 実測図	135
第 111 図	2 号墳墳丘実測図	136
第 112 図	1 号墳墳丘・主体部実測図	137・138
第 113 図	3 号墳墳丘実測図	139・140
第 114 図	4 号墳墳丘実測図	141・142
第 115 図	3 号墳・4 号墳主体部実測図	143
第 116 図	7 号墳閉塞石実測図	144
第 117 図	5 号墳墳丘実測図	145・146
第 118 図	5 号墳主体部実測図	147・148

第 119 図	7 号墳墳丘実測図	149・150
第 120 図	7 号墳主体部実測図	151・152
第 121 図	2 地点全体図	153
第 122 図	2 地点 S D 1 ～ S D 5 実測図	154
第 123 図	2 地点 S D 6 ～ S D 9 実測図	155
第 124 図	土器実測図 (1)	162
第 125 図	土器実測図 (2)	163
第 126 図	土器実測図 (3)	164
第 127 図	土器実測図 (4)	165
第 128 図	土器実測図 (5)	166
第 129 図	土器実測図 (6)	167
第 130 図	土器実測図 (7)	168
第 131 図	土器実測図 (8)	169
第 132 図	土器実測図 (9)	170
第 133 図	土器実測図 (10)	171
第 134 図	土器実測図 (11)	172
第 135 図	土器実測図 (12)	173
第 136 図	土器実測図 (13)	174
第 137 図	土器実測図 (14)	175
第 138 図	土器実測図 (15)	176
第 139 図	土器実測図 (16)	177
第 140 図	土器実測図 (17)	178
第 141 図	土器実測図 (18)	179
第 142 図	土器実測図 (19)	180
第 143 図	土器実測図 (20)	181
第 144 図	土器実測図 (21)	182
第 145 図	金属器・玉類実測図 (1)	183
第 146 図	金属器・玉類実測図 (2)	184
第 147 図	金属器・玉類実測図 (3)	185
第 148 図	金属器・玉類実測図 (4)	186
第 149 図	高尾向山遺跡方形周溝墓分析図	189
第 150 図	高尾向山遺跡周辺の弥生時代遺跡分布図	191・192
第 151 図	木棺分類・周辺遺跡遺構図	193
第 152 図	静岡県下の弥生時代後期方形周溝墓集成図 1	201
第 153 図	静岡県下の弥生時代後期方形周溝墓集成図 2	203
第 154 図	高尾向山遺跡周辺の古墳時代遺跡分布図	211・212
第 155 図	高尾向山遺跡周辺古墳・磐田原の横穴式木室概念図	214
第 156 図	遠江の後期群集墳・横穴群と横穴式木室墳分布概念図	215

写真図版

- 図版 1 (1)遺跡遠景 (2)遺跡全景
- 図版 2 (1)遺跡全景 (2)遺跡全景
- 図版 3 (1)S X 1・3・4 (2)S X 1 主体部 (3)S X 3 主体部 (4)S X 5 主体部
- 図版 4 (1)S X 6・7・12 (2)S X 14・17・18・19 (3)S X 14
- 図版 5 (1)S X 14 墳丘断面 (2)S X 14 主体部 (3)S X 14 主体部 (4)S X 14 主体部 (5)S X 22 主体部
- 図版 6 (1)S X 14 (2)S X 16・21 (3)S X 26
- 図版 7 (1)S X 26 第 1・2 主体部 (2)S X 26 主体部土層断面 (3)S X 26 主体部発掘風景
- 図版 8 (1)S X 26 第 4・5 主体部 (2)S X 27 (3)S X 27 第 1・4・5 主体部
- 図版 9 (1)S X 31 (2)東南端群全景 (3)S X 34
- 図版10 (1)S X 33・35・36・38 (2)S X 37 (3)S X 37 墳丘断面
- 図版11 (1)S X 40・S K 12・13 (2)S X 43 (3)S X 43 第 1 主体部 (4)S X 43 第 2 主体部
- 図版12 (1)S X 43 第 5 主体部 (2)S X 43 中央 P i t (3)S X 45 (4)S X 47
- 図版13 (1)S X 46・51 (2)S X 57 (3)S X 57 第 1 主体部 (4)S X 57 第 2 主体部
- 図版14 (1)4 号土器棺 (2)5 号土器棺 (3)8 号土器棺 (4)9 号土器棺 (5)10・11 号土器棺 (6)13 号土器棺
- 図版15 (1)14 号土器棺 (2)15 号土器棺 (3)16 号土器棺 (4)18 号土器棺 (5)19 号土器棺 (6)21 号土器棺
- 図版16 (1)S X 3 第 2 主体部 (2)S K 14・15 (3)焼土10・11・12
- 図版17 (1)焼土 4 (2)S X 26 焼土14 (3)3 号墳 (4)3 号墳主体部
- 図版18 (1)3 号墳主体部 (2)3 号墳主体部 (3)3 号墳小口礫積 (4)4 号墳
- 図版19 (1)4 号墳主体部 (2)5 号墳 (3)5 号墳主体部 (4)5 号墳主体部
- 図版20 (1)5 号墳玄室内土器出土状況 (2)5 号墳閉塞石 (3)7 号墳
- 図版21 (1)7 号墳主体部 (2)7 号墳閉塞石 1 面 (3)7 号墳土層断面 (4)7 号墳周溝土器 2 出土状態
- 図版22 (1)7 号墳主体部玄室内土器出土状態 (2)8 号墳全景 (3)8 号墳主体部 (4)1 地点西端
- 図版23 (1)S H 1、S B 2・3 (2)2 号窯 (3)3 号窯 (4)2 地点拡張 4 全景
- 図版24 遺物写真 (1)
- 図版25 遺物写真 (2)
- 図版26 遺物写真 (3)
- 図版27 遺物写真 (4)
- 図版28 遺物写真 (5)
- 図版29 遺物写真 (6)
- 図版30 遺物写真 (7)

高尾向山遺跡第Ⅱ次発掘調査報告書

第1章 はじめに

高尾向山遺跡の立地する同一の台地上においては、かつて谷坂古墳群、最近では団子塚遺跡などの発掘調査が進み、袋井市域では最も埋蔵文化財の様子が明らかとなり、袋井市域の弥生～古墳文化を知るうえで非常に重要な地域となっている。しかしながら、この地区は袋井の市街地に近いせいか開発も最も進んだ地域となっており、次第に遺跡群が失われている現状で、過去の景観の記憶をも薄れつつある地域となっている。

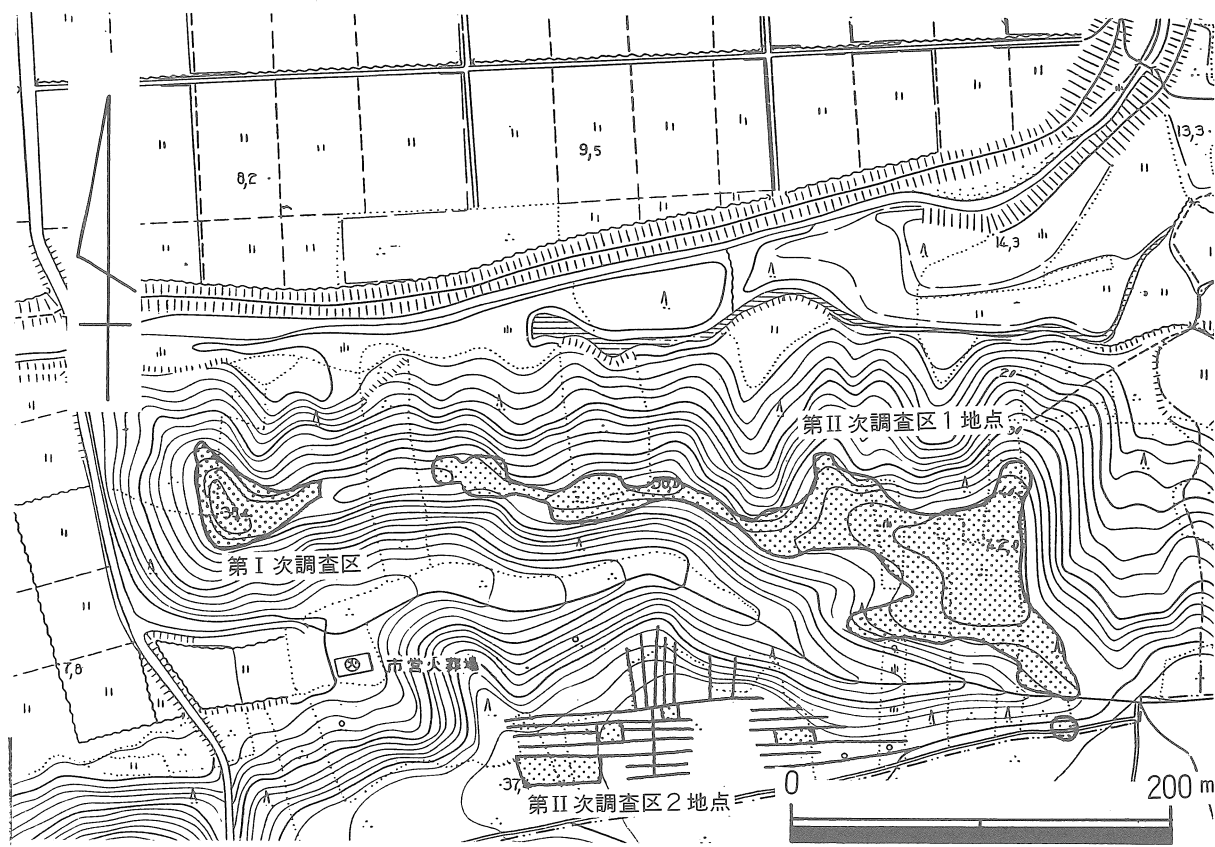
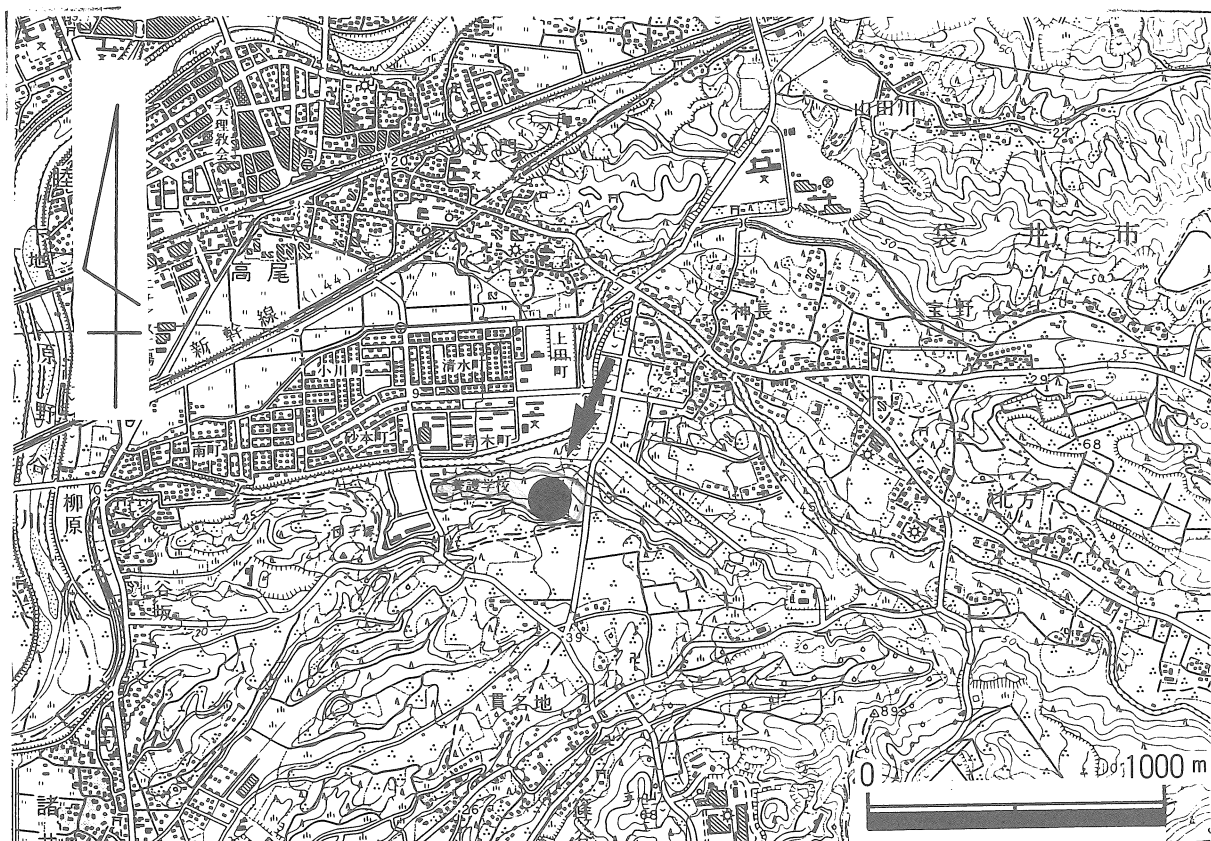
高尾向山遺跡は袋井市域の東南域を占める小笠山の北西山麓に形成された段丘上に立地している。この段丘は小笠山を水源とする法多沢川、小笠沢川などの多くの小河川により侵食をうけて複雑な地形を呈している。この地形が好まれ、近年の発掘調査や分布調査にて旧石器時代から現在に至るまでの様々な時代の遺跡が、連綿と営まれている状況が判明してきている。

高尾向山遺跡は従来の遺跡地図によると高尾向山古墳群として知られており、本発掘調査が実施される以前は古墳群としての位置づけがなされていた。平成2年5月に和光開発株式会社より袋井市高尾向山地内にて宅地造成を行いたいとの相談が袋井市教育委員会もたらされた。この時点で遺跡地図の照会をまず行い、開発用地内に周知の埋蔵文化財である高尾向山古墳群があることが判明した。この後、同用地内に埋蔵文化財の所在の有無を現地踏査し確認するために、和光開発株式会社より平成2年9月11日付けで「埋蔵文化財等文化財所在調査依頼書」が提出されたのを受けて、袋井市教育委員会事務局職員である吉岡伸夫と白澤崇が現地へ赴き、古墳と思われる埋蔵文化財が用地内に少なくとも15基以上存在していることを確認した。ただし、開発用地が山林とかなり荒れた茶畑であったので、正確な古墳の基数やその他の埋蔵文化財の所在の有無については判断できる状況ではなかったため、試掘調査を行い遺跡の範囲や性格を判断する必要も確認された。また、周知の文化財である高尾向山6号墳は従来の見解どおり全長40mクラスの前方後円墳であることが確認された。

以上の現地踏査の結果については、平成2年11月6日付けの「埋蔵文化財等所在調査の結果について」で和光開発株式会社に回答された。この回答を受けて和光開発株式会社は平成3年10月以降に、同用地を開発したい旨を袋井市教育委員会に連絡してきた。袋井市教育委員会は、①先の回答で触れられた通り原則として試掘調査を実施した後に埋蔵文化財の所在状況を確認したいこと、②高尾向山6号墳は袋井市では数少ない保存状況の良い前方後円墳であるため、試掘調査を実施して古墳の範囲を確定した後、公園用地として現状保存できないかという2点についての協議を行った。①の点については開発を急ぎたい希望が和光開発株式会社から示されが、袋井市教育委員会としては試掘調査と平行しながら本調査も行い発掘調査の期間短縮を計っていく努力をしたいが、工事と発掘調査を平行して進めることは危険防止のためにできるだけ避けることで調整がなされた。②の点については重要な古墳であるため、できるだけ公園用地として設計変更を進めていってもらうことで合意した。

平成3年度になってからは、開発計画が変更され平成3年度内の発掘調査の実施は不可能となり、発掘調査が可能になるのは遅くとも平成4年5月以降になることが明らかとなった。よって、発掘調査計画も変更することとなった。

平成4年度になると開発計画も軌道に乗り、平成4年6月1日付けで委託契約を締結し発掘調査を開始した。なお、遺構が密に発見されると予測される開発区域北側の1地点については本調査を実施



第1図 高尾向山遺跡の位置図

し、茶畑の天地返し等の予測される2地点については8月以降の試掘調査を実施した後に発掘計画の変更を行うことで発掘調査を進めることとした。また、懸案であった高尾向山6号墳については、開発用地から除外されたため試掘調査の必要がなくなった。

第2章 周辺の弥生時代・古墳時代の遺跡

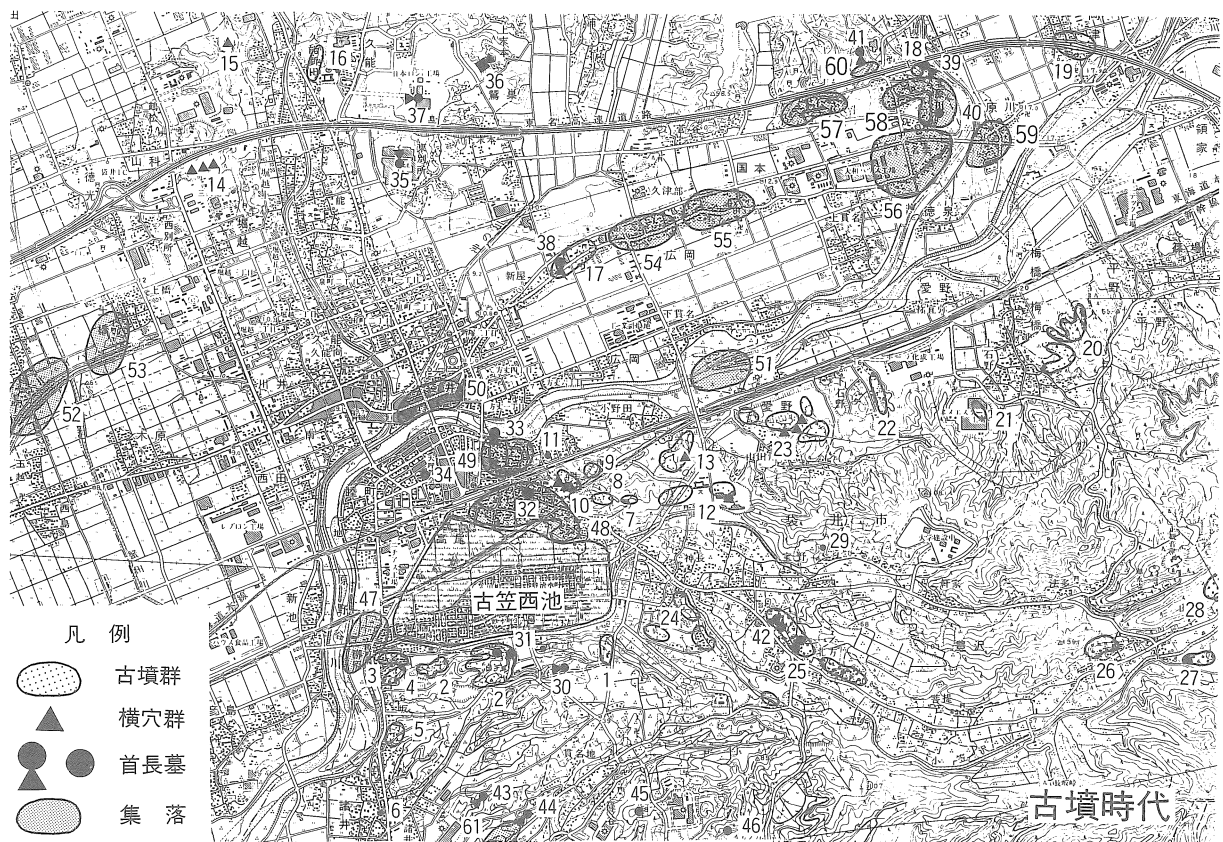
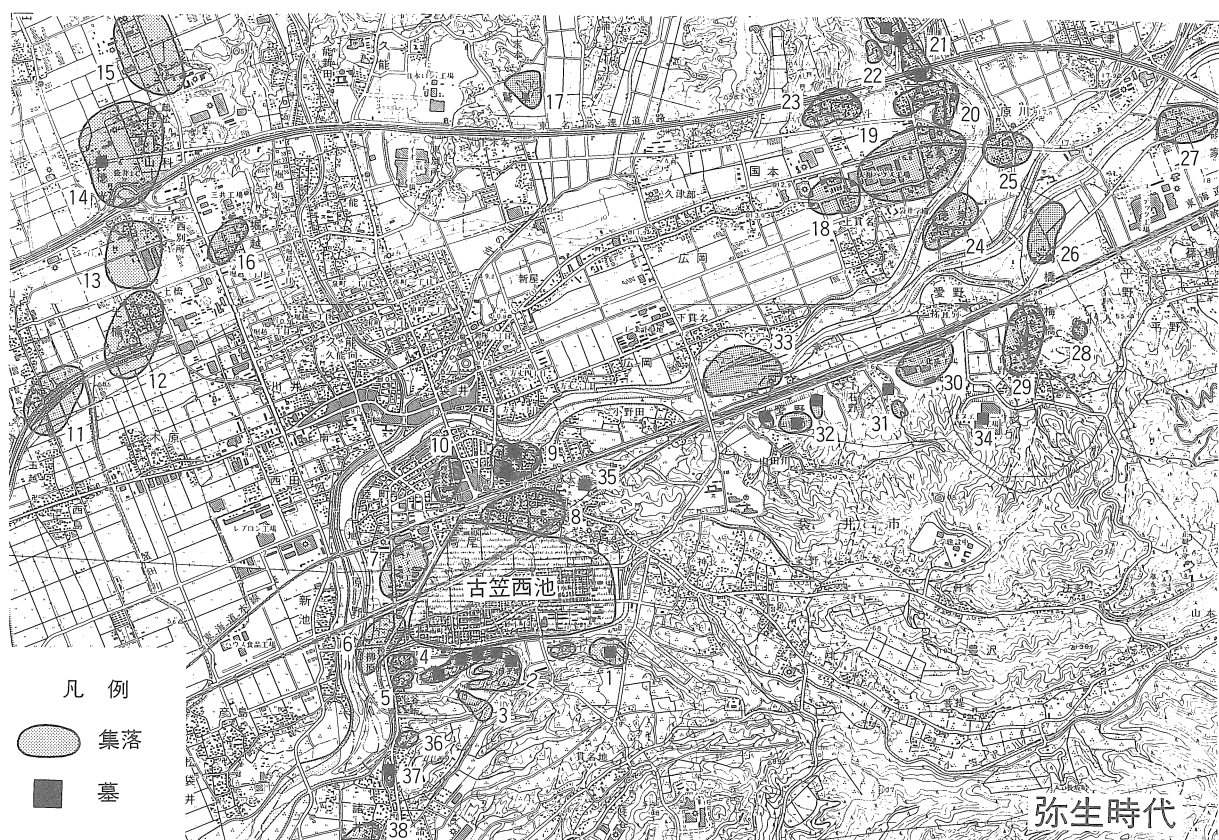
今回の発掘調査で得られた主な成果は、弥生時代後期の方形周溝墓と古墳時代後期の古墳群の検出にある。本章ではこれらの成果を受けて、周辺の弥生時代と古墳時代の遺跡の状況について簡単に触れてみたい。

弥生時代の遺跡は冒頭でも触れた通り比較的発掘調査例が多い。まず隣接した団子塚遺跡（第2図2）について触れてみたい。団子塚遺跡では台地縁辺部で弥生時代中期中葉から中期末葉まで造墓が続く総数約100基からなる一大方形周溝墓群が確認された。段丘内側には弥生時代後期の住居群が展開しており、位置的にみて高尾向山遺跡で発見された後期の方形周溝墓群の集落として考えることのできる遺跡である。この後期集落は団子塚遺跡だけでなく北原遺跡（3）も含むと考えられ、後期集落としては大きな範囲を形成しており、大門Ⅰ遺跡とともに後期拠点集落といえるものである。

柴田稔氏らによって復元された古笠西池（柴田稔 1992）の北岸の段丘上には大門Ⅰ遺跡（8）、掛之上遺跡（9）が位置している。大門Ⅰ遺跡は弥生時代中期中葉から始まるこの付近では、歴代の拠点的な集落といえる遺跡である。掛之上遺跡でも団子塚遺跡と同じく弥生時代中期中葉～中期末の方形周溝墓が見つかってきており、1次～3次調査の結果から見ても団子塚遺跡に匹敵する方形周溝墓群を有している遺跡と思われる。おそらく団子塚遺跡と掛之上遺跡の中期墓域を形成した集落は大門Ⅰ遺跡であったと考えられる。その他古笠西池を形成した原因となったと思われる原野谷川の自然堤防上には、後期集落と目されている三門遺跡（10）、関口遺跡（7）、柳原遺跡（6）等が分布しており大門Ⅰ遺跡を中心とした遺跡群の形成が見られる。

大門Ⅰ遺跡を中心とする遺跡群の周辺には鶴松遺跡（14）を中心とする遺跡群、坂尻・不入斗Ⅰ遺跡（19・23）を中心とする遺跡群、愛野向山Ⅱ遺跡（32）を中心とする遺跡群等が存在している。鶴松遺跡は太田川水系では弥生時代中期前葉から始まる最も有力な歴代の拠点集落である。同一の太田川東岸の自然堤防上には後期の集落である鶴田遺跡（15）、小山角田遺跡（13）、土橋遺跡（12）、玉越遺跡（11）、堀越ジョウヤマ遺跡（16）などの集落が成立し、一大有力集落群を形成している。

坂尻・不入斗Ⅰ遺跡は弥生時代中期中葉から成立する遺跡であるが、内容がもう少しわからない遺跡である。付近の段丘上には弥生時代中期前葉から後期にかけて造墓の続いた団子塚遺跡に匹敵する規模を有する方形周溝墓群が見つかった山下・宇佐八幡境内遺跡（21）が存在する。山下・宇佐八幡境内遺跡の方形周溝墓群を形成した集落は、集落規模から見て坂尻・不入斗Ⅰ遺跡だけでなく同一段丘上のさらに北側に展開した金鑄原遺跡等も含めて考えたほうが良いだろう。また、原川遺跡（25）では弥生時代中期前葉の単純時期の集落が見つかってきており、この集落の墓域も一部含んでいるかも知れない。弥生時代後期になると、段丘上には金鑄原遺跡、権現山遺跡（22）、山下・宇佐八幡神社境内遺跡、石ノ形遺跡（20）、低地の原野谷川の自然堤防上には坂尻遺跡のほか国本遺跡（18）、梅橋北遺跡（24）などが成立し遺跡群を形成する。他には逆川と原野谷川の合流する地点の南側丘陵地に立地する愛野向山Ⅱ遺跡、愛野向山Ⅳ遺跡（31）、低地に立地する愛野向山Ⅰ遺跡（30）、石野遺跡（29）など弥生時代後期の遺跡群が見られるが、前述した3つの遺跡群ほど密な分布は示していない。下貫名遺跡（33）などの未発見の沖積低地部遺跡の在り方が問題となろう。



第 2 図 高尾向山遺跡周辺の弥生～古墳時代の

弥生時代

1. 高尾向山	14. 鶴松	27. 領家
2. 団子塚	15. 鶴田	28. 若作
3. 北原	16. 堀越ジョウヤマ	29. 石野
4. 八坂	17. 久野城	30. 愛野向山Ⅰ
5. 北山	18. 国本	31. 愛野向山Ⅳ
6. 柳原	19. 坂尻	32. 愛野向山Ⅱ
7. 関口	20. 石ノ形	33. 下貫名
8. 大門Ⅰ	21. 山下・宇佐八幡境内	34. 上石野1号墓
9. 掛之上	22. 権現山	35. 地藏ヶ谷1号墓
10. 三門	23. 不入斗Ⅰ	36. 山畑
11. 玉越	24. 梅橋北	37. 王子
12. 土橋	25. 原川	38. 十二所
13. 小山角田	26. 梅橋	

古墳時代

1. 高尾向山	22. 愛野向山A	43. 貫名地A3号
2. 団子塚	23. 愛野向山B	44. 貫名地B1号
3. 北原	24. 雲座	45. 観音山
4. 八坂	25. 長者平	46. 五ヶ山B2号
5. 山畑	26. 山本	47. 柳原
6. 王子	27. 山本山	48. 大門Ⅰ
7. 洪垂神社上	28. 菩提山	49. 掛之上
8. 大門山	29. 宝野金山	50. 袋井宿
9. 井守塚	30. 高尾向山6号	51. 下貫名
10. 地藏ヶ谷	31. 団子塚5・9号	52. 玉越
11. 能光寺境内	32. 大門大塚	53. 土橋
12. 金山A	33. 狐塚	54. 久津部
13. 金山B	34. 御所森	55. 国本
14. ズン坂	35. 東別所1号	56. 坂尻
15. 北の谷	36. 座王権現神社	57. 不入斗Ⅰ
16. 道ヶ谷	37. 東山	58. 石ノ形
17. 七つ森	38. 久努大塚	59. 原川
18. 宇佐八幡宮	39. 宇佐八幡宮1号	60. 権現山
19. 岡津	40. 石ノ形	61. 古新田
20. 若作	41. 権現山	
21. 上石野	42. 長者平A39号	

主要遺跡・古墳群分布図

高尾向山古墳群の周辺には袋井市でも有数の古墳群・横穴群が所在し、しかも発掘調査が実施されたものが数多く所在する。発掘調査が実施された5世紀後半～6世紀中頃の木棺直葬墳は高尾向山古墳群(1)のほか愛野向山古墳A～C群(21・22)で30基以上、金山A・B古墳群(12・13)、雲座古墳D群、団子塚古墳群(2)、地藏ヶ谷古墳群(10)、井守塚古墳群(9)、谷坂古墳群などの各古墳群で2～4基程度発掘調査が実施されている。ほかに発掘調査は実施されていないが、変形獣形鏡の出土が伝えらる洪垂神社上古墳群(7)や大門山古墳群(8)も5世紀後半～6世紀中頃の木棺直葬の古墳群と考えられる。

同時期の首長墓としては5世紀後半では全長40mクラスの前方後円墳になる狐塚古墳(33)、高尾向山6号墳(30)、6世紀前半～中頃では遠江では初期の横穴式石室を採用する直径26mの大門大塚古墳(32)、直径20mクラスの御所森古墳(34)や高尾団子塚5・9号墳(31)等が知られている。

首長墓のグループとしては古墳の分布から見ると狐塚古墳・大門大塚古墳・御所森古墳と高尾向山6号墳・高尾団子塚9号墳の2グループに分けられそうであるが、高尾向山6号墳の年代については出土品が知られておらず明確な築造年代はわからないため、このグループわけについては確定できない。大門大塚古墳については主体部や周溝の範囲確認調査、明治時代の出土であるが、鏡・馬具・直刀・玉類・須恵器など豊富な副葬品が知られ、6世紀中頃の首長墓としてはこの地域では最も有力視してよい古墳である。高尾団子塚9号墳では帽・振り環頭大刀・馬具・挂甲・鉄鏃・玉類・須恵器などが出土し首長墓としての豊富な内容の副葬品をもつが、主体部は木棺直葬であり、墳丘規模や群集墳の古墳群形態を採用することから考え合わせると大門大塚古墳よりやや下位に位置づけられる古墳であろう。

6世紀後半以降の横穴群は、地藏ヶ谷横穴群(10)や愛野向山横穴群(23)が30基以上の群で存在している。小規模なものとしては山本山古墳群(27)で、ほぼ同時期の横穴式石室の古墳と併存する形で4基1単位程度からなる横穴群が見つかっている。周辺部にも菩提山横穴群(28)などの小規模横穴群がいくつか所在する。

長者平古墳群(25)を中心として豊沢地区に宝野金山

古墳群（29）、金銅装大刀を出土した山本古墳群（26）や山本山古墳群等の横穴式石室墳が小笠沢川流域を中心として分布しており、主に原野谷川水系に分布する横穴群とは分布域を異にしている。

高尾向山古墳群で見つかった横穴式木室は北山古墳群（4）、団子塚古墳群（2）でも採用されている。横穴式木室を採用した古墳は近年の発掘調査で多く見つかり、特に磐田原台地東南部と高尾向山古墳群周辺部の古墳群に集中的にみられる。また、横穴式木室古墳は首長墓と思われる掛川市堀ノ内13号墳でも採用されていることが近年の発掘調査で判明し、磐田原東南部古墳群から高尾向山古墳群周辺部、堀ノ内古墳群の集団とのつながりがクローズアップしてきている（松井一明 1996）。

高尾向山古墳群を形成したと思われる古墳時代後期の集落を見ると、古笠西池周辺での一番至近距離にある遺跡としては大門Ⅰ遺跡（46）や掛之上遺跡（47）などがあげられる。大門Ⅰ遺跡では大形倉庫と思われる掘立柱建物、掛之上遺跡でも掘立柱建物が集中する地区が見つかり、いずれの遺跡も同時期の居館集落と目されている。小笠沢水系ではほかに柳原遺跡（45）等が古墳時代後期の集落として考えられている。

もう一つの高尾向山遺跡の至近の居館集落としては最近の発掘調査で、古墳時代中期の古新田遺跡（58）が見つかった。古新田遺跡ではコの字あるいはL字配置をとる掘立柱建物や倉庫群などが見つかってきており、古墳時代中期の居館集落の具体像を示してくれた。周辺には前方後円墳である貫名地A 3号墳（42）、貫名地B 1号墳（43）、円墳である観音山古墳（44）などの小規模クラスの首長墓が存在するが、古新田遺跡とのその直接的関係については明らかでない。

原野谷川水系では袋井宿遺跡（48）や、下貫名遺跡（49）などが知られている。あるいはやや離れているが久津部遺跡（52）、国本遺跡（53）なども含めたうえで、原野谷川水系の地蔵ヶ古墳群・横穴群、金山古墳群・横穴群、愛野向山古墳群・横穴群などの集落になると思われる。しかしながら遺跡の内容は発掘調査がなされていないため、古墳群・横穴群との具体的な関係が論述できない。

古墳時代後期の集落としては坂尻遺跡（54）が見逃せない。坂尻遺跡は原野谷川水系では古墳時代後期においては最有力の集落と目されている遺跡である。近年の調査でも大形の掘立柱建物や倉庫等が見つかってきており、古墳時代後期の居館集落と推定されている。遺跡の周辺部には古墳時代後期の集落である原川遺跡（57）、石ノ形遺跡、不入斗Ⅰ遺跡等が成立し坂尻遺跡を含めると一大遺跡群を形成していることがわかる。特に6世紀末～7世紀初頭に集落の拡大現象がピークに達することが判明しており、当地域の横穴群の築造時期のピークとも一致することから、後期古墳群を考えるうえで興味深い現象が捉えられている。なお、坂尻遺跡の墓域については、遺跡北方の谷間に築造され続けた菅ヶ谷横穴群等が考えられる。

以上のように高尾向山古墳群の周辺部には5世紀後半～7世紀にかけての一大群集墳地帯を形成しており、しかもグループのなかに中規模の首長墓も存在していることから、群集墳の成立と首長墓との関係を知る上で重要な資料を提供している地域であることが理解される。また、それぞれの古墳群を築造した被葬者の住んでいた集落や、集落のなかに居館集落も含むことが考えられ極めて示唆に富んだ内容を示しており今後の資料蓄積が待たれる。

【 参考文献 】

- 柴田稔 1992 「周辺の環境」『団子塚遺跡（Ⅰ）』浅羽町教育委員会
松井一明 1996 「原野谷川中流域における初期群集墳・後期群集墳の成立と展開」『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ』袋井市教育委員会

第3章 遺構

第1節 弥生時代の遺構

今回の調査では弥生時代の主な遺構としては後期に該当する方形周溝墓58基、土器棺墓21基、木棺・土坑墓9基、その他弥生時代後期の遺構と推定される焼土等が検出することができた。また、1地点については発掘調査区域中央部分ではほとんど遺構の発見はないので、1地点西端と東端は別遺跡と認識したほうがよいと思われた。また、1地点西端で検出された遺構群についても、昭和63年度実施された第1次発掘調査で検出された遺構群との係わりを考えたい。2地点については、弥生時代の遺構は発見されなかった。以下遺構ごとに説明を加えていきたい。

i) 方形周溝墓

今回検出できたほとんどの方形周溝墓は、1地点東端の比較的平面積が広い丘陵上で東西方向に並んで発見された。丘陵内側のJ10～13区などには墓域が設定されていないことから、台地縁辺部を意識した群の造りになっていると思われる。また、1地点西端の狭い丘陵上及び斜面に見られた木棺・土坑墓と溝状遺構等が検出され、これらの遺構群についても方形周溝墓になる可能性が高い（SK1～3とSD1・SK4の2基か?）と思われるが、別項目にて報告した。

平面形態・墳丘規模・盛土 平面形態は基本的には四隅にブリッジが意識されたタイプで、墳丘の四隅を突出させるものが多い。なお、四隅のうち1箇所切れるものはSX5・8・10・15・18・26・32・36・37・44、2箇所切れるものはSX6・14・17・20・25・27・34・39・45・46・48・49・51・52、3箇所切れるものはSX31・39・53、4箇所切れるものはSX40・47である。周溝が全周するものも少なからず存在し、SX1・3・4・11・18・19・33・35・38・41・43が該当する。斜面部に築造されたもののうち谷側の溝を省略するもの、或は自然流失で溝が確認できないものが存在し、SX2・7・9・12・13・16・21～23・28・29・42・50・54～56・58などが該当する。SX24・30は周辺の周溝墓の溝に囲まれることにより方形の墓域を確保したものである。これらの内SX16・21・23・28・29・56など斜面部立地の平面形が長方形になるタイプのもの、SX35などの小形のものは四隅の突出がほとんど見られない特徴をもち、群の中では異質な平面形態をとる。また、墓域の西端に存在するSX1についても、墓域の西端側に該当する2隅には突出部を設けないことが確認され、斜面部に存在するものに突出部を設けていないものが多いことを考え合わせると、この突出部は墳丘にいたる出入口の可能性が高く墓道との係わり合いが強いと考えられる。この点については四隅突出形態の方形周溝墓出現過程の問題と共に、第5章にて問題点の深化をはかりたいと思う。

墳丘規模についてはSX43の長軸20mを最大として、14m以上の規模になる比較的大形のものはSX14・26・37の合計4基が知られる。以下10m前後のものが多いが、SX9・13・19・40など5m以内になる小形のものもあり、墳丘規模についてはばらつきが大きく均質ではないことがわかる。

墳丘の盛土が確認できたのはSX14・26・27・34・37・43・57など墳丘規模が10m以上になる比較的大形の方形周溝墓が多かったが、第15図～第27図の地形測図に見られる微地形を検討すると、SX1・3～6・25・32・36・39・45・48・49などでも墳丘状の高まりが観察され、これらの中形の方形周溝墓も低墳丘の盛土をもっていたと理解される。また、小形の方形周溝墓についても検出面での主体部の深さを検討すると非常に浅いものが多いので、これらの方形周溝墓も低墳丘の盛土をもっていた可能性が高いと思われる。

さて、盛土が確認された方形周溝墓を検討すると、盛土の厚さはおおむね20～30cmであるが検出面での主体部の深さは非常に浅いため、大形の方形周溝墓の場合について本来は1 m以上の盛土が存在していたと推定される。さて、その盛土の工法であるがS X37の土層状況が参考になる。S X37の盛土については図の中では細かく分層できなかったものの、上層が黄色味が強く礫を多く含むのに対し、下層は赤褐色味が強く礫をあまり含まない層で形成されていた。地山である礫層の直上に堆積している赤褐色土については反対に、下層が黄色味が強く礫を多く含むのに対し、上層は赤褐色味が強く礫をあまり含まない層で形成されている。このことから、S X37の盛土の築造は周溝を掘る際、地山の赤褐色土を上層から下層にかけて掘り進み逐次盛土を積み上げていった工法をとっていると理解され、周溝以外の他の場所からの盛土の供給はなかったと考えられるのである。おそらく他の方形周溝墓についても同様で、周溝の掘削した土のみを利用して盛土を築造していったと考えられる。

単位群 単位群の形成は南北方向の13グリッドラインで丘陵が狭くなる地形制約もあってか、S X53・55などの形態と小単位群の形成が乱れた小形の方形周溝墓が見られるので、ここで東西大きな群の別れを設定したい。西側のグループはS X14の大形方形周溝墓を中心としてS X10・11・15・17～20が団壘状のまとまりを持ち単位群を形成しているもの（瀬名遺跡型、以下の用語については松井一明1992より引用）と、S X1・3・4とS X5～7のように結合（先行する方形周溝墓の溝の一边を再利用し新たに次の方形周溝墓を築造し続ける方法）しながら重列状に単位群を形成していくもの（山下遺跡型）とがある。東側のグループもS X26・37・43の発掘調査区東側の谷に面した大形方形周溝墓を中心としてS X27・32～36・38・39・41・57が団壘状のまとまりを持ち単位群を形成しているものと、S X25・51・46～48とS X31・45・49・50の結合或は連結（先行した方形周溝墓の溝を再掘削しながら新たに次の方形周溝墓を築造し続ける方法）しながら重列状に単位群を形成しているものがある。詳細な単位群の抽出と造墓順位の考察は第5章で行う。

埋葬主体部 方形周溝墓の埋葬主体部は堀方をもち木棺を埋納したと思われる土坑（木棺主体部）、遺体を直接埋葬したと思われる土坑（土坑主体部A・B類）、成人埋葬とは思えない小形土坑（土坑主体部C類）、壺棺を利用した土器棺墓の4種類が認められた。土器棺墓については方形周溝墓外から検出されたものもあるため、それらをまとめて別項目で報告する。

木棺主体部に埋納された木棺については、小口板が底板の上の型式（瓜生堂遺跡分類Ⅰ類、瓜生堂遺跡調査会 1981）と思われ、当地域の弥生時代中期の方形周溝墓によく見られる小口板を底板より下に掘下げた穴に埋め込むタイプのもの（瓜生堂遺跡分類Ⅱ類）は存在していない。木棺を埋設したと思われる堀方土層断面が観察された主体部は、S X1—1・2、S X3—1、S X4、S X6、S X7、S X10、S X11、S X12、S X14—1、S X15—1、S X16、S X19、S X21、S X22、S X23—1、S X24、S X26—1・2、S X27—1・2・4・5、S X28、S X31—1、S X32、S X33—2、S X34—1、S X36—1、S X37—1～3、S X38、S X40、S X43—1・2、S X45、S X49、S X51、S X54、S X57—1・3の主体部が該当した。さらに、おそらくあまり広い堀方を持たないため木棺埋設の土層断面観察ができないもので、平面形態が比較的整った長方形、断面形態も立ち上がりが垂直に近いものを木棺主体部として想定しうる主体部は、S X5—1、S X9、S X17—2、S X18—1、S X20—1、S X23—2、S X25、S X30、S X33—1、S X34—3、S X35、S X39、S X42、S X46、S X48—1・2、S X52、S X53、S X56の主体部が該当した。復元しうる木棺の大きさは、大きいものでS X27—1・2・5主体部が全長2 m以上を測る大形木棺、S X21、S X27—4、S X31—1、S X32、S X34—1、S X37—2、S X43—2、S X45主体部の全長1.7 mを測る中形木棺以外は、いずれも長さ1.6m以内になる小形のものがほとんどであるため、これら

の木棺は遺体は足のみを屈葬した埋葬方法（仰臥屈肢葬）を採用していると推定される。

堀方の土層断面観察ができないもので、平面形態も整った長方形にならず、断面形態も立ち上がりが緩やかなものを木棺をもたない主体部（土坑主体部）と考えた。土坑の長軸方向の長さが1.7m以上あり伸展葬が予想されるものと、それ以下の規模で屈葬（仰臥屈肢葬）になるものがある。前者の伸展葬の土坑主体部（A類）と想定されるものは、S X 26—3～6、S X 27—3・8・10・11、S X 34—2・4、S X 43—5・6、S X 57—2・4、後者の屈葬の土坑主体部（B類）と想定されるものに、S X 5—2、S X 27—6、S X 43—3・4、S X 44、S X 47、の主体部があげられる。このうち、S X 44、S X 47の主体部については堀方が楕円形であるが、底面が比較的平らなので木棺の可能性も考えられる。

以上のほかにはたして成人の人体埋葬が可能かどうかかわからないが、直径1mに満たないような小形の土坑を埋葬主体（土坑主体部C類）と考えるならば、S X 15—2、S X 17—1、S X 18—2、S X 20—2、S X 27—7、S X 31—2、S X 36—2、S X 43—7～9、S X 57—5の主体部があげられる。また、主体部のほとんどが自然流失あるいは他の主体部との切り合いで不明なものとしてS X 13、S X 27—9、S X 29の主体部があるが、おそらくすべて木棺主体部であったと思われる。

墳丘内埋葬施設のほかに溝内埋葬と思われる主体部も確認された。すなわち、S X 1—3、S X 3—2、S X 14—2の主体部、S X 35東溝のほかにS K 17・18・22などがあげられる。S X 1—3、S X 3—2、S X 14—2の主体部は、溝からやや突出するように方形の土坑が掘られたもので、おそらく木棺主体部と思われる。S X 35東溝は他の溝よりも深く楕円形に掘られた土坑状の溝で、これを埋葬主体部と仮定するならば、伸展葬の土坑主体部（A類）と思われる。S K 18・17・22は直径1mに満たない小形土坑（土坑主体部C類）であり、埋葬主体ならば成人埋葬は想定できないものである。

以上のほかに、埋葬主体ではないが祭祀行為に係わるものと考えられる遺構として、方形周溝墓の溝・墳丘内、周辺から焼土あるいは焼土坑、柱穴状の小穴が見つかってきている。このうち焼土・焼土坑については、焼土・焼土坑の項でまとめて記述しここでは小穴のみについて触れてみたい。

小穴はS X 6、S X 17、S X 27、S X 43で確認された。S X 6では3つの小穴が墳丘西側で西溝に平行するように一直線に並び、あるいは掘立柱建物の一部になる可能性も考えられる。S X 17の小穴は墳丘中央で検出され、浅く皿状に開くもので小形の主体部になる可能性もある。S X 27については2つの小穴が中央の主体部を避けるように墳丘北側で確認され、深さ45cm、直径30cmを測る深いもので何らかの柱穴になると考えられる。S X 43の小穴は墳丘中央で確認され、深さ90cm、堀方の直径75cm、柱痕の直径35cmを測る非常に太い柱を立てたと考えられ、しかも堀方には礫を裏込めとして入れかなり固く叩き締めていることから、相当高い木柱が立てられていたと推定される。北側に若干の張り出しが認められていることから、柱の立替が1回あった可能性も指摘しておきたい。

遺物の出土状態 遺物の出土状態は主体部内部から出土するものと、溝内から出土するものがある。まず、主体部での遺物の出土状況を検討してみたい。土器については木棺上ないし主体部埋設土上層から出土し、それらの主体部はS X 1—1、S X 23、S X 26—1・2、S X 27、1・2・8、S X 34—1、S X 37—3、S X 43—1・4・5、S X 57—2・3の主体部である。このうち比較的完形率の高いものをあげると、S X 1—1主体部の壺底部、S X 37—3主体部の口縁・頸部を欠く小形壺ほかはすべて小破片の土器類である。よって、土器を出土したほとんどの主体部については、主体部が埋設された後その上で土器を細かく粉碎した祭祀行為を行っていたことが想定される。

ガラス小玉を出土した主体部についても木棺上ないし主体部埋設土上層からガラス小玉が出土しており、それらの主体部はS X 26—1（3個出土）・3（26個出土）・4（55個出土）、S X 37—1

(1個出土)、S X43—5 (3個出土)、S X57—2 (7個出土)・4 (1個出土)の主体部である。なお、玉の検出は埋土を採集して水洗別をして得たものがほとんどのため、確実な出土状況を把握していないが、木棺底にまとまって出土していないことは確認されているので、多くの場合は遺体に装着された装身具ではなく、土器と同じように主体部が埋設された後にその上で玉をばらまくなどの祭祀行為がなされたものと考えたい。さらに検討を進めるならば、玉が出土したすべての主体部は発掘区東端の小谷に添って築造され埋葬主体が3基以上(以後多数埋葬と表現したい)ある有力方形周溝墓群の主体部である。ちなみに、このうち木棺埋葬と思われる主体部はS X26—1とS X27—1主体部で、どちらも有力な被葬者の主体部と思われる中央木棺であるが、それ以外の主体部は土坑主体部でありまして有力な埋葬主体とはいえない状況である。出土個数もS X26—1主体が3個、S X27—1主体が1個となるのに対し、S X26—4主体部が55個、S X26—3主体部では26個の出土があるなど、主体部個々を見ると玉の副葬量により有力被葬者を特定することはできない。

これら以外に遺物ではないものの、木棺上層に大形礫を置くもの、礫群が置かれたと推定されるものが確認された。これらの主体部はS X3、S X14、S X22、S X26—1・2、S X27—4・5、S X34—3、S X43—3～5、S X45、S X49、S X57—2である。S X14では人頭大の大形礫が木棺内に陥没したような状態で出土したが、それ以外の主体部では拳大の礫が主体部埋土上層に陥没したように数個～数十個単位でまとまって出土しているため、埋葬主体の墳丘地表面での目印あるいは木棺上での祭祀具として使用されていた可能性が考えられる。

以上の結果から見ると、木棺上ないし主体部埋設土上層から粉碎された土器やばらまかれた玉礫、あるいは埋葬位置を墳丘地表面での目印としているような礫など、多種類の祭祀行為の痕跡を示す状況が確認された。これらの祭祀行為がコンスタントに行われた主体部が存在する方形周溝墓をあげるならば、発掘区東端の小谷に添って築造され多数埋葬の有力方形周溝墓群である。

溝内出土土器のほとんどは、小破片に破碎されたものが多く時期決定しうるものは少ない。ある程度まとまって時期決定できる土器の出土した方形周溝墓は、S X14、S X26、S X27、S X37、S X43で、いずれも比較的大形あるいは多数埋葬の方形周溝墓である。かなり細かな小破片の土器が出土した方形周溝墓をあげると、S X1、S X3～S X6、S X17、S X19、S X20、S X22、S X25、S X33～35、S X41、S X44、S X45、S X47、S X50、S X51、S X53、S X57である。出土状態に特に規則性があるわけではないが、S X1、S X3、S X4は東溝北端から少ないながらも土器の破片が出土する傾向があることから、後述する墓道との関連で墓の入口近くで行われた祭祀に関連したものとも推測される。同じように、S X37南溝東端でも比較的大形破片からなる壺形土器が出土しており、これなども墓の入口近くで行われた祭祀行為によるものと考えられる。S X26北・西溝では脚部を欠損した高坏の坏部が出土しており、墳丘上で行われた祭祀行為の後に脚部を破壊し廃棄されたものと考えられる。このように、溝内出土の土器のほとんどは時期決定できないほど小破片化し摩滅し、土器本来の破片が全て出土していないことから、墳丘内で執り行われた祭祀行為のために細かく破碎された土器の一部が流れ込んだものと推測される。また、時期決定しうる土器量は少ないが出土土器から検討すると、弥生時代後期前半～後半にかけて築造された方形周溝墓群と考えられる。

ii) 土器棺墓

土器棺墓は今回の調査で総計21基確認された。この数値は現在知りうる限りでは、静岡県下での弥生時代の一遺跡で出土した土器棺の量としては最も多いものであろう(向坂鋼二 1991)。

出土位置についてはバラエティーがあるものの、墳丘内に埋葬された10・11号土器棺、周溝の底に埋葬された18・20号土器棺、周溝の端に埋葬された12・16号土器棺、周溝の墳丘側縁に埋葬された5・

8・9・14号土器棺、周溝の外縁に埋葬された1・2・15号土器棺、周溝墓同士が連結しているために内・外縁区別はつかないが周溝の縁に埋葬されている3・6号土器棺、周溝墓の入口に埋葬している7・13・19号土器棺、周溝墓には近接しているがまったくの外側に埋葬している4・17・21号土器棺などがある。出土位置についてはとくに規則性は見受けられないものの、SX3、SX14、SX32・44、SX43付近に集中する傾向は伺える。

土器棺の身の器種は全て壺形土器である。壺単独棺の2・4・6・7・18～21号土器棺と、合口棺で身が壺で蓋が壺になる組み合わせは1・3・5・8・10～16号土器棺、身が壺で蓋が甕の組み合わせになる9号土器棺、身が壺で蓋が高坏の組み合わせになる17号土器棺がある。埋葬状態を見ると、直立置き1・5・8・10・13～16号土器棺、やや斜行置きの2・3・11号土器棺、横置きの4・6・7・9・12・17～21号土器棺となる。この状況から検討すると、おおむね単独棺についての埋葬状態は横置きのものが主になり、合口棺についての埋葬状態は斜行置きないし直立置きするものが主になる。これは直立置きするものは口が上を向くため必然的に口を塞ぐ蓋が必要になり、単独棺は横置きにすることにより口が横を向くため蓋が必要にならなかったと考えられる。

しかし、この基本原則から外れるものとして、斜行置きの埋葬状態であるが単独棺の2号土器棺、横置きの埋葬状態で合口になる9・12・17号土器棺である。9号棺は甕の口縁部の大形破片を蓋に、17号棺についても高坏の坏部の大形破片を蓋に使っていることから、他の壺を蓋とする合口棺とは異なる組み合わせである。発掘調査時点においては土器棺が自重あるいは後世の攪乱で壊れていたため、明確な埋葬状態を復元することはできないが、おそらく胴部に大きく穴を穿って遺体を入れる口としたため、蓋は壺ではなく甕や高坏の大形破片で蓋をしたものとも考えられるが推測域をでるものではない。12号土器棺については身が蓋に比べると小形の壺形土器であることからやはり胴部に大きく穴を穿ち、壺形土器の大形破片を蓋とした可能性も考えてみたが、さらに推測の域をでるものではない。2号土器棺については横置きに近いものであったのだろうか、この棺についても埋葬状態が今少しはつきりしないため明確な理由はまったくわからない。

iii) 木棺墓・土坑墓

方形周溝墓の周辺部に木棺墓・土坑墓と思われる埋葬遺構が検出された。SK6～11については後述する古墳時代の木棺直葬墳に隣接して検出されたため、古墳時代の遺構として認定した。それ以外の木棺墓・土坑墓と思われる遺構について方形周溝墓の埋葬主体部と同じ基準で分類すると、明確な堀方を持つ木棺墓はSK12・14・15、平面形態が長方形で底が比較的平になり木棺墓と推定されるSK13・24、土坑墓で伸展葬と思われる規模をもつ（土坑主体部A類に相当）SK5（土坑墓A類）、はたして埋葬遺構なのか確証をもてないが直径1m内外の小形土坑（土坑主体部C類に相当）になるSK19～21・23・25（土坑墓C類）に分類できた。なお、本項目で取り上げた木棺墓・土坑墓については何れも遺物がほとんど出土しないため、遺物からの時期認定はできていない。

木棺墓は単独で方形周溝墓群とは谷を隔てた南の台地端の微高地に立地するSK24と、2基一組みで検出されたSK14・15、SK12・13に分けられ、前者は方形周溝墓群と関連がある遺構なのかかわからないが、後者は方形周溝墓群中に含まれるため関連遺構として認定してもよいだろう。

土坑墓のSK5についても方形周溝墓に隣接しているため、方形周溝墓群に関連した遺構と認定してもよいだろう。小形の土坑状遺構については周溝内埋葬遺構に類似のものがあることと、SK23から弥生時代後期の土器が出土しているため、弥生時代の遺構として認定できる要素もあるが、なかには方形周溝墓と無関係な遺構も含まれている可能性も否定しきれない。

iv) 焼土・焼土坑

土坑壁面が焼けており埋土にも焼土粒子が混じるものを焼土坑とし、単なる焼土面しか検出できなかったものを焼土として分類した。遺構名称は図版中に両者ともに焼土として報告した。前者は焼土1・4・8・13・15・16・19、後者は焼土5・7・14・17・18・20が該当し合計20基が検出された。

焼土坑の分布についてはおおむねS X14の周辺部に多く群集しているが、S X34の墳丘内の焼土13やS X57西溝外縁に位置する焼土19が離れて検出されている。立地条件から見ると比較的丘陵の斜面部に移行する場所に造られた焼土1・2・8・12・16・19と、平坦面にある焼土3・4・13とに分けられるが、前者のほうが圧倒的に多いことから、斜面部に存在することが本遺構の用途を推定する手掛りになると思われる。また、土坑の形態を検討すると、焼土1・4・8・15の長楕円形のものと、焼土2・3・9・10・11・12・16の楕円形のものに分けられる。ただし、何れも土坑壁面が強く赤化していることから高い熱を受けていたことが分かり、形態的な違いから用途が別れるとは言い難い。

さて、この遺構の該当期の問題であるが、遺物が出土する遺構がまったくないため、確実な時期決定はできない。方形周溝墓に近接しているものが多いこと、方形周溝墓の墳丘内から検出されており、そのうえ方形周溝墓との切り合い関係が少ないことなどから、弥生時代後期の遺構とも考えられた。しかし、唯一焼土4とS X5の東溝とに切り合い関係が認められ、焼土4のほうが古い遺構であることが確認された。よって、焼土坑のほとんどは方形周溝墓築造以前の遺構と考えられる。縄文時代中期の土器片も微量ではあるが出土しているので、縄文時代中期の遺構に該当するとも考えてみたが、当地域における縄文時代中期の遺跡（長者平遺跡他）ではあまり検出されない遺構であるため、いちがいに縄文時代の遺構と決めることもできない。今後の類似遺構の発見を待ちたい。

単なる焼土面として確認された焼土遺構のうち検出位置で検討してみると、方形周溝墓の溝内で見つかった焼土5・6・18・20、墳丘内から見つかった焼土14、周溝外から見つかった焼土7にわけられる。焼土17については検討の結果、4号墳周溝内から見つかったものと判明し、弥生時代の遺構からは除外した。まず、方形周溝墓の溝内から見つかった焼土5・18・20について検討すると、溝がある程度埋まった段階で火が炊かれている状況を示すが、その土層状態を観察するとあまり硬化した赤化面は形成しておらず焼土粒子が混じる程度のものであることから、長時間そこで火を炊いた状況を示す遺構とは思えない。焼土6については溝の底面で見つかったもので浅い土坑状を示す遺構であるが、やはり強度の赤化面は形成しておらず焼土坑とは異なり長時間火を炊いた痕跡を示す遺構とは思えない。したがって、これらの方形周溝墓の溝内から見つかった焼土については、方形周溝墓築造時点ないしある程度の時間の経過のなかでの祭祀行為に係わる遺構と考えたい。その祭祀行為に係わる火を炊いた時間（回数）は、極めて短時間（1回）であったと推測しておきたい。

S X26の墳丘内の旧表土面より見つかった焼土14については、S X26築造時に表土に繁茂していた雑木・草を焼却した遺構と考えられた。しかし、この遺構についてもあまり強く焼けた赤化面が観察されないことや、炭化物が旧表土面全体に見られないことから見ても、周溝内検出の焼土と同じく方形周溝墓築造時の祭祀行為に係わる遺構と推測しておきたい。周溝外縁で見つかった焼土7は、焼土8・16に接近した位置にあり、しかも焼土面はよく焼けていることから、焼土坑との関連で考えたい遺構である。おそらく焼土坑の底面が残存した遺構であると考えられる。

v) 1地点西端検出遺構

冒頭で述べた通り1地点西端検出遺構の内容は丘陵の比較的高い位置で確認された掘立柱建物と方形周溝墓あるいは埋葬遺構と認識される遺構群、丘陵上の窪地から検出された縄文時代中期と古墳時代前期に該当する竪穴住居跡と掘立柱建物群に分けられ、本項目では前者について報告する。

丘陵頂部で土坑ないし木棺主体部と思われるものが4基確認された。すなわちSK1～3・16であり、先の方形周溝墓の主体部の分類から検討するといずれも土坑主体部に分類される。これらの土坑墓を取り囲む斜面部の溝が検出できていないため、はたして方形周溝墓の主体部となるかどうかはわからない。ただし、SD1とSK4は斜面部に形成された方形周溝墓であると考えられ、しかもSK4は木棺主体部である可能性が高いので、丘陵頂部の土坑墓群も方形周溝墓の主体部の一部になると考えられないこともない。重複するように検出された掘立柱建物（SB1）とSD1からは弥生時代後期前半の遺物が出土し、第1次発掘調査区からも弥生時代後期と推定されている竪穴住居跡、柱穴群が見つかっていることから、丘陵頂部の墓は第1次発掘調査地点で検出された遺構群を中心とする弥生時代後期の小集落（袋井市教育委員会他 1990）の墓域の一部になると考えてもよいだろう。

第2節 古墳時代・古墳時代以降の遺構

古墳時代の遺構は第1次発掘調査分も含めると小形の古墳7基、および古墳に伴うと思われる木棺墓・土坑墓、先に述べた1地点西端で検出された竪穴住居跡1棟、掘立柱建物2棟である。

i) 古墳

古墳は埋葬主体部が木棺直葬になる1～4号墳と、横穴式木室の5・7号墳、横穴式石室状遺構の8号墳に分けられる。

墳丘・平面形態 古墳の墳丘形状が分からない8号墳を除き、その墳丘規模は1号墳は径10m、2号墳は長軸径14m短軸径10m、3号墳は径10m、4号墳は径10m、5号墳は径12m、7号墳は径11mを測り、何れも径10m前後の小規模な古墳である。墳形は1・3～5・7号墳についてほぼ円墳になると思われるが、2号墳は周溝がはっきりしないものの楕円形となるかも知れない。8号墳については周溝は見られないものの、主体部の位置がわかるくらいの低墳丘の盛土はあったと考えたい。

明確に全周する周溝が確認された古墳はないが、1・7号墳は全周する周溝、3・4号墳は1ないし2箇所のブリッジをもち溝の一部が墓道状に斜面地へ伸びていく特殊な周溝、5号墳はやはりブリッジを1箇所もつ構造の周溝になると推定される。明確な盛土により墳丘を築造していることが確認された古墳は3・4号墳である。3号墳は方形周溝墓と重複していないので、純粹に古墳築造時の盛土が確認され、しかも主体部は盛土内に造られていた。3号墳主体部の堀方底面は古墳築造時の表土面であることから、主体部位置を古墳築造当初にある程度決めておき、その場所の盛土は極力避けたいうえで盛土形成の最終段階で再度木棺を埋葬する土坑を掘削して古墳を築造したと思われる。4号墳は方形周溝墓（SX27）の墳丘の高まりを再利用しており、方形周溝墓の盛土だけでは視覚的效果が足りないためか、さらに方形周溝墓の盛土上に1m前後の土を盛り、再度木棺埋葬のための土坑を掘削して古墳を築造したと推定される。横穴式木室墳である5・7号墳も方形周溝墓（SX37・57）の盛土を再利用しその上に盛土をしておいた古墳と思われるが、墳丘断面では古墳時代の盛土は確認されなかった。主体部の深さから見てもう1m程度の盛土の必要性が認められることから、古墳時代の盛土も存在していたと思われる。

遺物の出土状態 葺石・埴輪をもつものはないが、1・5・7号墳の周溝から須恵器坏類、4号墳の周溝から土師器高坏類、2号墳墳丘裾から土師器の高坏破片、3号墳の墳丘頂部から須恵器の甕・土師器の壺が出土している。周溝内出土の土器類は何れも細かく破碎されており、古墳の墓前祭祀に係わる遺物と考えても良いものであろう。とくに7号墳の周溝内出土の須恵器類は主体部内出土の土器量を凌駕し、所謂追葬時の主体部内土器の掻き出しとは思えず、何らかの墓前祭祀を彷彿させるもの

があろう。また木棺直葬墳の周溝内出土土器類の出土位置に規則性はあまり見られないのに対し、横穴式木室墳の周溝内出土土器類は主体部羨門付近の周溝内より集中的に出土していることから見て、主体部の変化だけでなく墓前祭祀方法の変化が周溝内の土器の出土位置から伺えた。

単位群 単位群の分析をするならば、古墳の分布と主体部の類別から、1・2号墳、3・4号墳、5・7・8号墳の3つの小単位群に分けられる。木棺直葬墳と横穴式木室墳の関係については、出土した土器型式から検討してみると、木棺直葬墳出土の須恵器が須恵器編年MT15～TK10型式を示すのに対して、横穴式木室墳出土の須恵器はTK43型式でも新しい段階に属すると思われることから、1型式以上の年代的開きが認められ、高尾向山古墳群でも木棺直葬墳から横穴式木室へスムーズには移行する状況にないのだろうか。この点については遠江全域の群集墳を見ても、重要な検討課題となっている（松井一明 1996）。ただし、木棺直葬墳でも土師器しか出土しなかった2号墳と4号墳の該当時期を仮にMT85～TK43型式の古い段階に充てることが可能ならば、同一集団（集落）の墓制が同一墓域のなかで木棺直葬墳から横穴式木室墳へとスムーズに変化したといえるのであろう。

主体部 古墳の主体部は先に述べたように木棺直葬墳、横穴式木室墳、横穴式石室状遺構の3種類が見られた。木棺直葬墳の1～4号墳の主体部はいずれも小形の箱式木棺になり、1・3・4号墳の主体部は木棺堀方に青白粘土塊・粒子を含む堀方土をもつ。とくに、3号墳の主体部は東側小口部に礫積みが認められ、礫間に青白色粘土詰めるという丁寧な造りであった。4号墳においても東側小口部に顕著な青白色粘土と拳大の礫が認められた。こうした木棺小口部の礫積みや顕著な青白粘土の設定はおそらく当地域の木棺直葬墳ではよく見られるやり方で、副葬品の出土状況から見て被葬者の頭位方向を示すと考えている。基本的には1棺埋葬であるが、2号墳は2棺埋葬であった。

木棺直葬墳の副葬品は馬具・直刀・刀子・鉄鏃・玉類が出土した3号墳、刀子・鉄鏃・玉類が出土した1号墳、刀子が出土した4号墳で認められた。2号墳は2基の主体部ともに副葬品は出土しなかった。4号墳については主体部の2／3以上が失われているため、副葬品の全組成を示してはいないが、現況から見て直刀等の副葬はなかったと思われる。

まず、比較的豊富な副葬品をもった3号墳の副葬品の出土位置について検討してみたい。先に述べた考え方で被葬者の頭位方向を東と見た場合、馬具は被葬者の顔面上付近でしかも木棺の蓋に乗せられた状態、直刀は切先を足元に向け足の位置に平行するように添えられ、足元には刀子・鉄鏃が納められていたと考えられる。鉄鏃の先端はいずれも東側を向いており、鉄鏃群の西側には赤色顔料（ベニガラか？）が散布していた。この赤色顔料は鉄鏃の出土位置から見て、有機質のみからなる靱に塗られていた顔料であった可能性が指摘できる。1号墳の被葬者の頭位方向の検討は主体部の構造上の特徴からできないが、玉類が主体部東側にまとまって出土していることから、頭位方向は東と仮定してみたい。すると、玉類は首飾りになり刀子は胸の上と腕の脇、鉄鏃は足元近くに添えられていたと思われる。鉄鏃の先端はいずれも西側を向いており、靱は伴っていないと思われる。

次に、小単位群ごとの副葬品の組成傾向を見ると、1・2号墳の単位群ではどちらも刀を持っておらず1号墳で刀子や鉄鏃、2号墳は無副葬といった貧弱な内容となっているのに対し、3・4号墳では3号墳で馬具や刀を持ち4号墳でも刀子を持つことから、小単位群ごとに武器の保有傾向が異なっていることが判明した。よって、高尾向山古墳群の木棺直葬墳群は3号墳のみが馬具を持つことからみて、4基からなる単位群に対し1基やや優勢な副葬品を持つ古墳が存在することも判明した。

横穴式木室（5・7号墳）の形態は、いずれも壁を支える柱の配置、土層断面から見て合掌式天井になる木室と考えられる。平面形態はいずれの古墳も堀方形態から見ると一見両袖式であるが、前道が木室部の中央には取り付くものではないため、片袖型式になるものといえる。玄室床面にみられ

る敷石は小石を敷詰めたもので、5号墳では玄室ほぼ全面に、7号墳は玄室中央に敷かれない部分が観察された。敷石をはずした床面には、堀方壁沿いに木室の壁材を固定したと思われる小溝、垂木を埋め込んだと思われる小穴が見られた。小穴のうち奥壁中央と玄門部にやや深い小穴が存在し、これは木室の棟木を支える棟持柱の柱穴と思われた。壁を支える補強材の粘土については、5号墳で玄室の奥壁側半分と袖部に多く使用しており、7号墳については奥壁部分に限られるようで、7号墳については全面粘土を貼ったような状況とは程遠いものであった。7号墳の小溝は敷石のない部分にも存在していることから、横穴式木室の小溝は壁材固定の役割だけでなくおそらく排水溝の役割も担っていたものと考えられる。また、7号墳については中央に小溝と敷石のない部分が存在することから、あらかじめ2棺以上の追葬を想定していたと考えられる。閉塞石の状態も2回の床面が確認され、玄室内の遺物も床直で出土するものと4～5 cm浮いた状態で出土するものがあるので、7号墳については最低1回の追葬があったと思われる。5号墳については閉塞石は後世の攪乱でほとんどははずされていたため、閉塞石での追葬面の存在は確認できなかったが、玄室内遺物を見るかぎり追葬があったと思えない。7号墳玄門部に閉塞石の自然落下とは思えない石列が存在しており、框石になるとも考えられる。5号墳玄門部の石については奇麗な石列となっていないため、閉塞石の自然落下の石か框石となるかは判別できなかった。

横穴式木室墳の副葬品は5号墳では刀子・鉄鏃・玉類・砥石、7号墳では刀子・鉄鏃・玉類・鉄釧・耳環が認められた。どちらの古墳も一部木の根の攪乱を受けていたものの、副葬品の全組成を示しており、直刀あるいは馬具等の副葬はなかったと思われる。とするならば通常の横穴式石室や横穴を主体部にする後期古墳の副葬品の内容と比較すると、あまり有力な副葬品の内容とは言えない。この点については、第5章の周辺地域の横穴式木室の動向を検討する中で進めたい。築造時期は、玄室内と周溝内出土須恵器からTK43の新段階～TK209段階に該当すると考えられる。

以上の特徴から高尾向山古墳群に存在した横穴式木室墳の主体部型式は、磐田原の後期群集墳、高尾向山古墳群周辺部でよくみられる横穴式木室の特徴を示しており、鈴木敏則氏の分類によると遠江I型とされたものである（鈴木敏則 1991）。

8号墳については副葬品や伴出遺物もないことから該当時期はわからない。しかしながら、隣接遺跡である団子塚古墳群の中にも同種類の遺構が見つかり、須恵器編年TK217平行期になると報告されている（浅羽町教育委員会 1992）。8号墳のような石室をもたないが、平面形態をみるかぎり明らかに横穴式石室の堀方を意識した造りとなっているため、かつて横穴式石室状遺構と分類したことがある（袋井市教育委員会 1994）。さらに、土坑の底面に敷石が見られ木棺・人体の埋葬が可能なものをAタイプ、小石室のような石組み・敷石をもち木棺・人体の埋葬が不可能なものをBタイプに分類し、さらに静岡県下の同種類の遺構の分析から、Aタイプは6世紀後～7世紀代、Bタイプは7世紀後～8世紀初頭に該当するものが多いと考えた。8号墳については敷石らしいものはないが、木棺・人体の埋葬は可能なものであるためAタイプと考えてよいもので、おそらく6世紀後～7世紀代に該当し、横穴式木室との関連で考えられる埋葬遺構であろう。

ii) 木棺墓・土坑墓

先に述べたように、3・4号墳周辺部に集中的に見られる土坑群については、伴出遺物はないものの木棺直葬墳に伴う土坑墓群と認定し本項目で報告する。土坑の形態から見ると人体を直接埋葬した土坑墓になるものと、木棺を埋葬したものに分けられそうである。

木棺埋葬の土坑はSK8で、測板、小口板を固定したと思われる小溝が壁際に検出されている。斜面部に位置しており自然の土の流失ため1/3以上失われているが、全長2 m以上にはなる木棺で、

弥生時代の木棺と比較すると明らかに大形化しており、木棺直葬墳の主体部に見られる箱式木棺と同規模になると思われる。この木棺墓は検出位置から見て、3号墳に付属するものと考えたい。

土坑墓については弥生時代の土坑墓に準じて分類すると、伸展葬の可能（土坑墓A類）なSK7・9・10と、屈葬になる（土坑墓B類）と思われるSK10に分けられる。弥生時代のものと比べると、土坑墓A類が卓越しているようである。

この種の木棺直葬墳に伴うであろう木棺・土坑墓は愛野向山B古墳群などでも確認されるようになってきており、土坑墓上で土器祭祀を行うものや、鉄鎌など副葬品をもつものなどがある。浅羽町北山遺跡では後期古墳である横穴式木室墳に伴う土坑墓・木棺墓が報告されており（浅羽町教育委員会1987）この種の遺構が後期群集墳の中にも存在することが明らかとなりつつある。

iii) 竪穴住居跡・掘立柱建物

竪穴住居跡（SH1）は一辺6mの規模、平面形は方形になるものである。壁際には壁溝が認められ、主柱穴は6本認められることから、1回の立替・拡張があったものと思われる。床面はそれ程硬化しておらず使用期間は短いものと思われる。炉については床面を精査してみたものの、焼土粒子すら検出できなかった。はたして、一般的な住居として認定してもよいものか、立地条件と共に検討を要するだろう。出土遺物は壁際や床面から小形埴が4点、底部穿孔の壺形土器底部破片など出土しており、一般的な住居跡らしからぬものも見られる。竪穴住居跡にいたる斜面部を掘り込んだ道状遺構は、住居東南部分に取り付き西に伸びている。おそらく第1次発掘調査区に向かうか、谷部に下る道状遺構と推測される。

掘立柱建物は3棟確認された。SB4については他の2棟と比べて柱穴の堀方が大きく、唯一竪穴住居跡と切りあい関係があるもので、柱穴内から縄文時代中期後半の土器片、SH1の埋土からも同一時期の縄文土器片が出土していることから見て、縄文時代中期後半の間口1間の掘立柱建物であったと考えられる。他の2棟（SB2・3）は竪穴住居跡とは接近するものの切りあわず、おそらく竪穴住居跡と同時期の古墳時代前期に該当するものと考えられる。SB2は間口梁行1間・桁行2間、SB3は間口梁行1間・桁行1間の建物で、どちらも竪穴住居跡とはかなり接近しているために、高床倉庫であった可能性が高いと思われる。

以上の竪穴住居跡・掘立柱建物は、丘陵上でも窪地という本来ならば居住地に向かない場所に立地する理由は、風除けのためかあるいは特殊な性格を持つ住居であったかの何れかであろう。おそらく竪穴住居跡で生活の場としての炉が検出されなかったことと、小形埴が多く出土したことから後者の祭祀的様相の強い使われかたをした遺構群と推測したい。

iv) 炭焼窯

窯状遺構と思われる遺構が、方形周溝墓群西端付近に同一方向で並ぶように3基検出された。窯の構造はいずれも中央に小溝をもち、平面形態は長楕円形なものである。床面は赤化し、床直の土層中に多量の炭片が含まれていることから、この窯状遺構が炭焼窯であることを示している。1号窯は大きさも2m程度しかなく床面もあまり焼けていないことから、炭焼きに失敗している可能性が高いと思われる。2号窯は全長3.9m、3号窯は全長3mを測り、どちらも床面は良く焼けていることから、炭焼きは成功したものと考えられる。上部構造についてはよくわからないが、検出時の深さがあまり深くないことからほとんど地上式の構造になると思われ、木材を詰め天井を造り、炭が焼きあがった段階で天井を壊し炭を取り出すといった工程を踏み、1回限り使用された炭焼窯であったと思われる。主軸方向はいずれの窯も窯の床面がより低くなり焚口になると思われる方向は北西を向いている。おそらく、この方向は炭を焼く季節の風向き（晩秋～冬か？）になると考えられる。

この種の炭焼窯は浜松市の三方原台地において近年かなりの数が見つかってきている（太田好治 1990）。出土遺物が少ないため確定した時期はいえないもののわずかに出土する遺物から、12～13世紀代を中心とする鎌倉時代の炭焼窯と推定されている。中・東遠江ではあまり見られない遺構であるが、西遠江と同じ構造の炭焼窯が当地域にも存在していたと思われる。ただし、西遠江の炭焼窯は焚口が地下にトンネル状に掘り込まれる構造が多い。よって、今回検出の炭焼窯は明確な焚口を設けないことから、地上に焚口を設ける構造になっていると推定され焚口形態が三方原の炭焼窯とは異なることが指摘しうる。

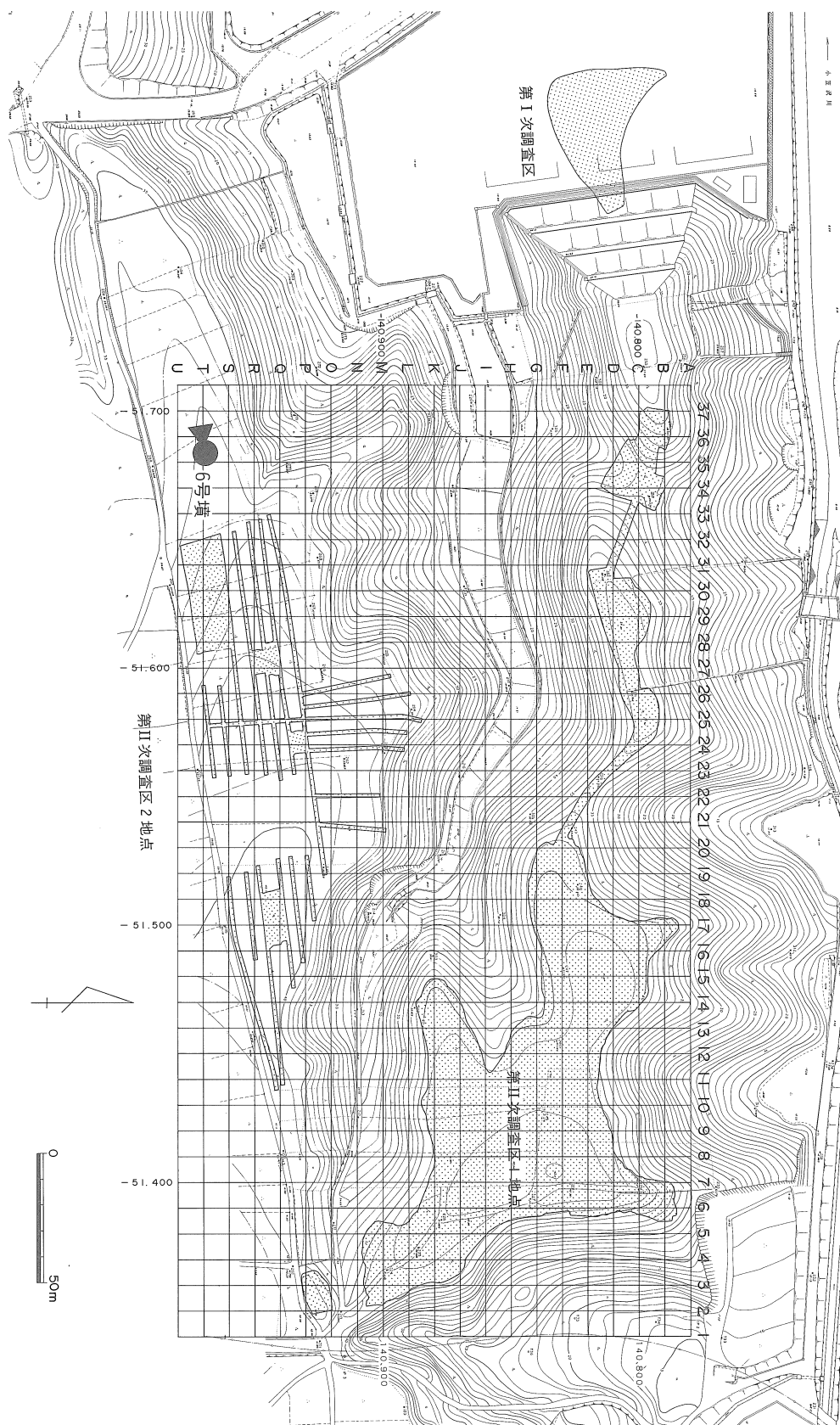
v) 2 地点検出遺構

2 地点の発掘調査は遺構の所在状況を確認するため、試掘トレンチを設定し確認調査を実施した。その結果時期不明の溝状遺構が数本検出された。溝状遺構の性格を確認するために、拡張区を設定し発掘調査を進めた。拡張区 1 では窪地に 4 本の溝が確認され、微地形を見るかぎり降雨の際の水道になる部分に溝が掘られていることから、排水のための溝（畑の排水溝か？）と考えられる。拡張区 2 ～ 4 で検出された溝状遺構も、拡張区 1 で検出された溝と同一方向を示すことから、これらの溝状遺構も排水溝と考えられる。

S D 1 から 7 世紀～ 8 世紀代に該当する須恵器甕の破片が出土しているが、遺構の土層から見るとそれほど古い遺構とは考えられず、近世～近代に掘削されたものと考えたい。なお、今回の調査範囲からは古墳時代の遺構はまったく検出されなかったため、全長 40m クラスの前方後円墳になると思われる高尾向山 6 号墳は全くの独立墳、付近に群集墳をもたない首長墳であることが判明した。

【 参考文献 】

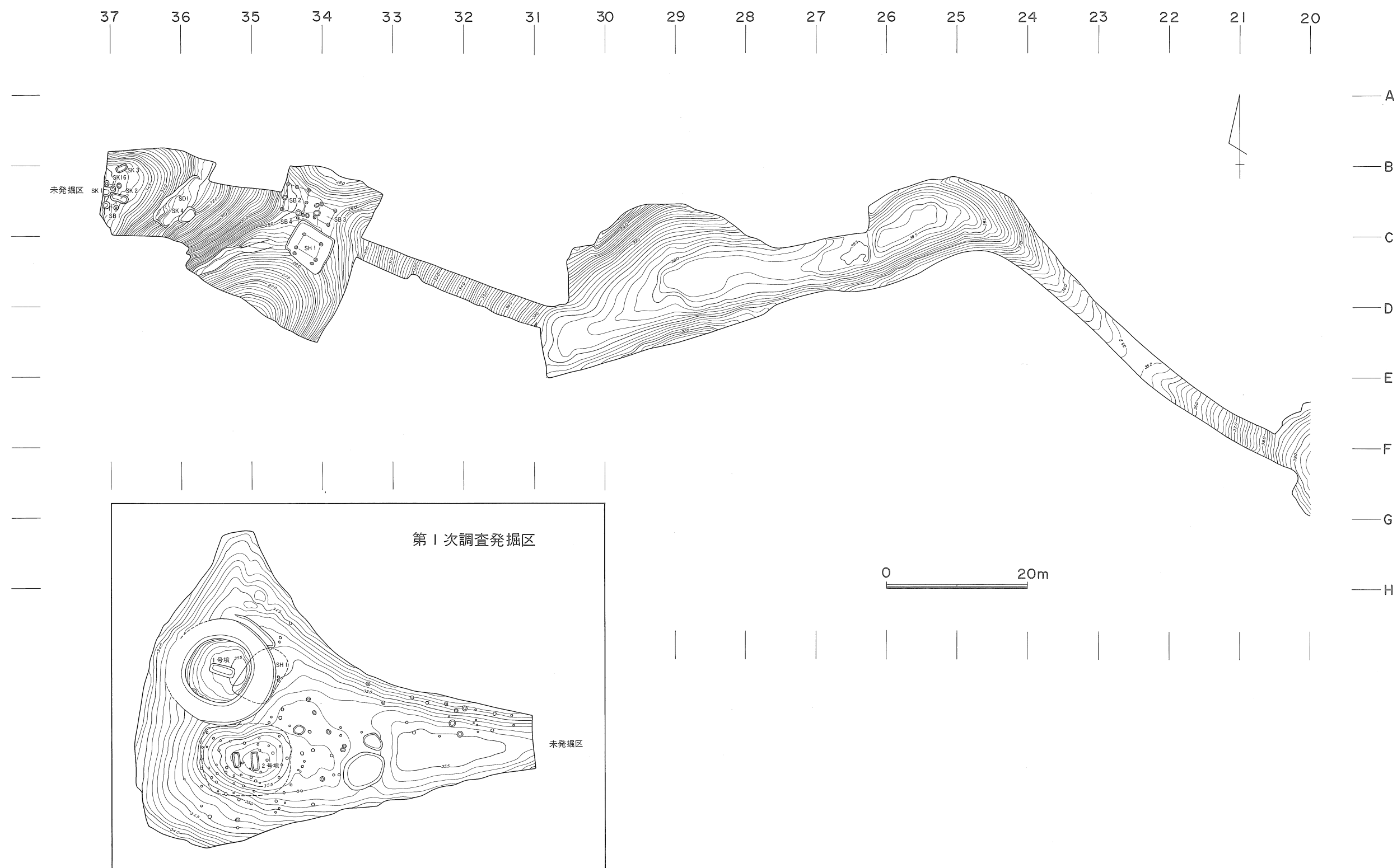
- 袋井市教育委員会他 1990 『高尾向山遺跡』
袋井市教育委員会 1994 『山田原遺跡群 I』
浅羽町教育委員会 1987 『北山遺跡』
浅羽町教育委員会 1992 『団子塚遺跡（I）』
瓜生堂遺跡調査会 1981 『瓜生堂Ⅲ』
太田好治 1990 「古代・中世の都田」『都田地区発掘調査報告書下巻』浜松市文化協会
鈴木敏則 1991 「横穴式木室雑考」『三河考古』第 4 号 三河考古刊行会
松井一明 1992 「静岡県下における中期方形周溝墓の出現過程について」『宇佐八幡境内遺跡』袋井市教育委員会
松井一明 1996 「原野谷川中流域における初期群集墳・後期群集墳の成立と展開」『金山古墳群・金山横穴群 I・II』袋井市教育委員会
向坂鋼二 1991 「静岡県下の土器棺」『静岡県博物館協会研究紀要』第 13 号 静岡県博物館協会



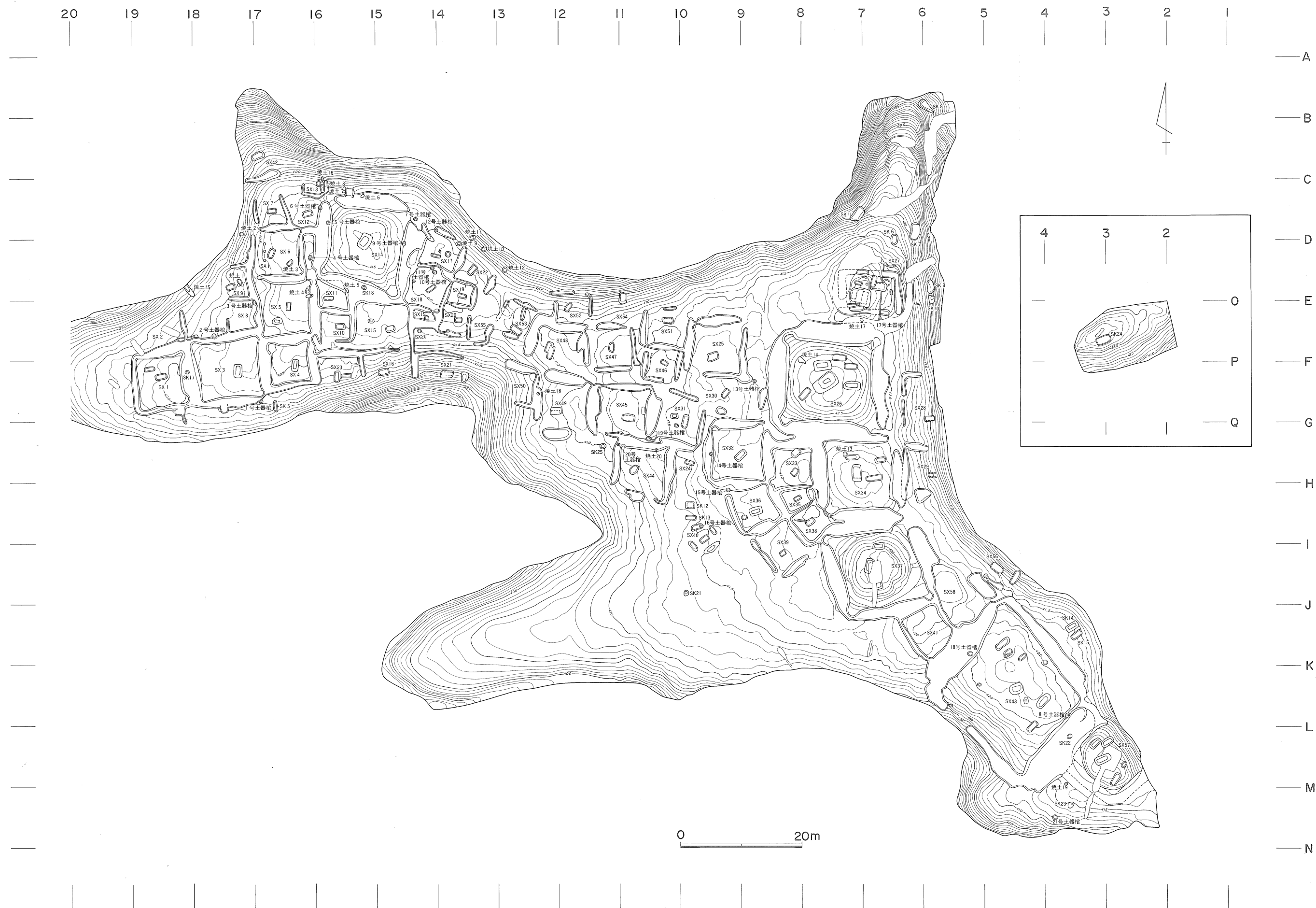
第3図 グリッド配置図



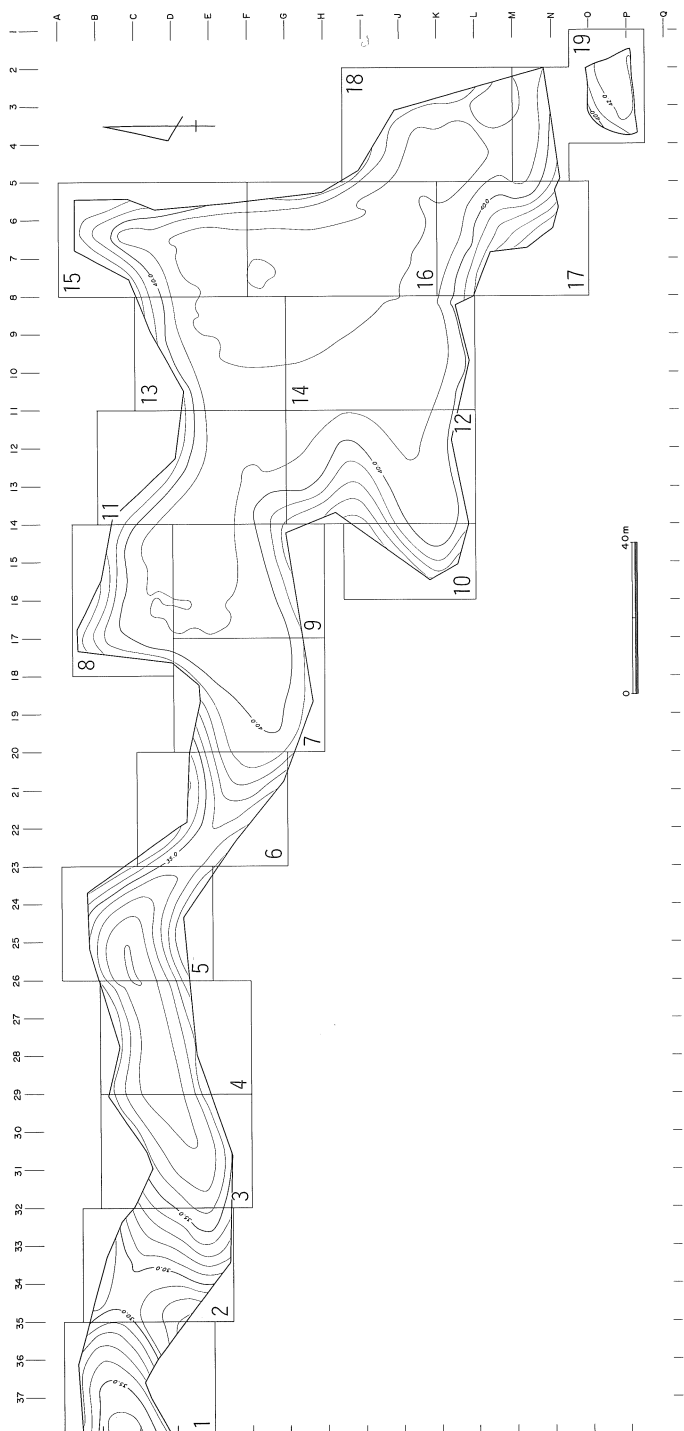
第4図 高尾向山遺跡周辺地形図



第5図 全体図1 (弥生～古墳時代前期)



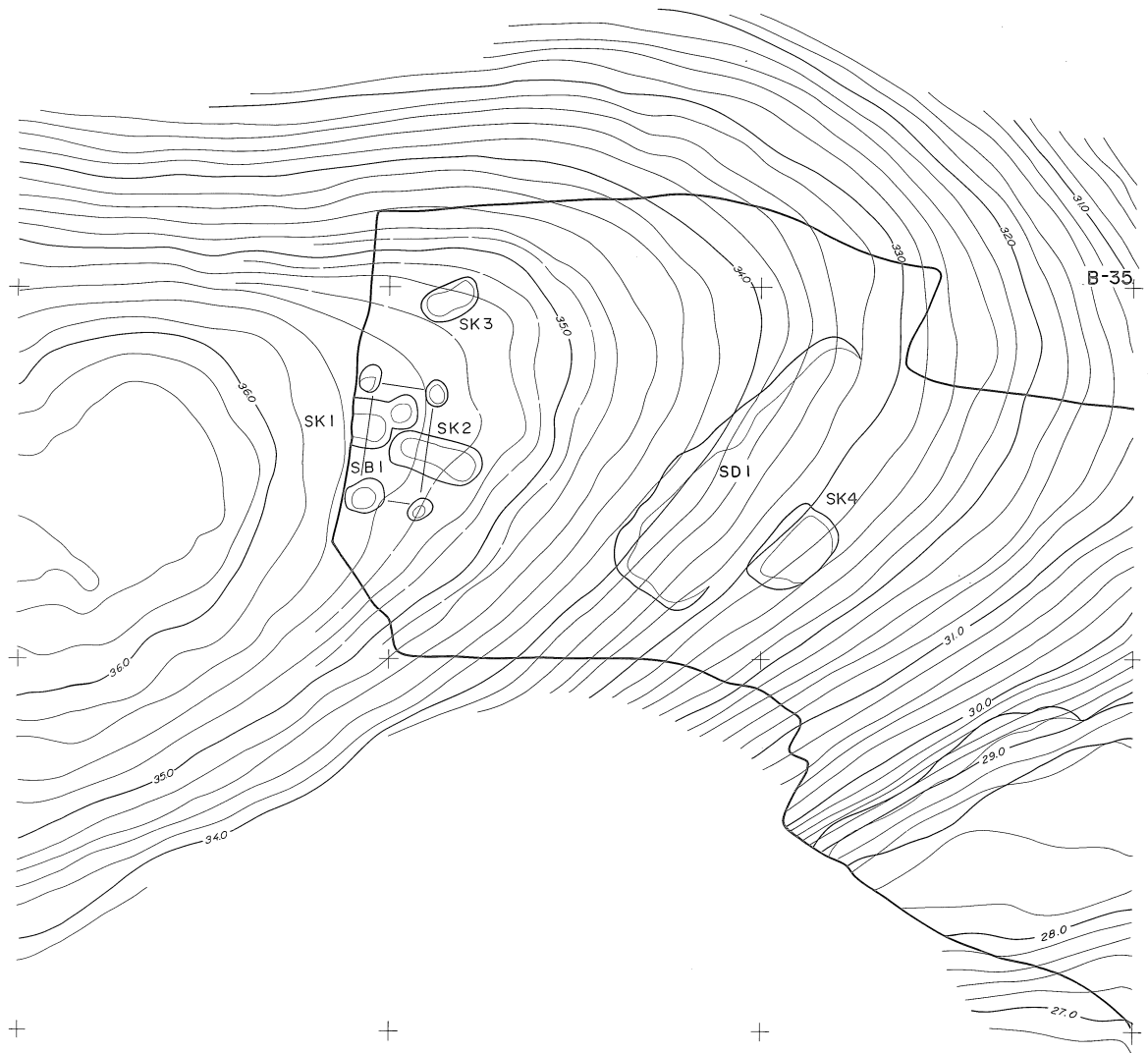
第6図 全体図2（弥生～古墳時代前期）



第8図 地形測量図検索図

A-38

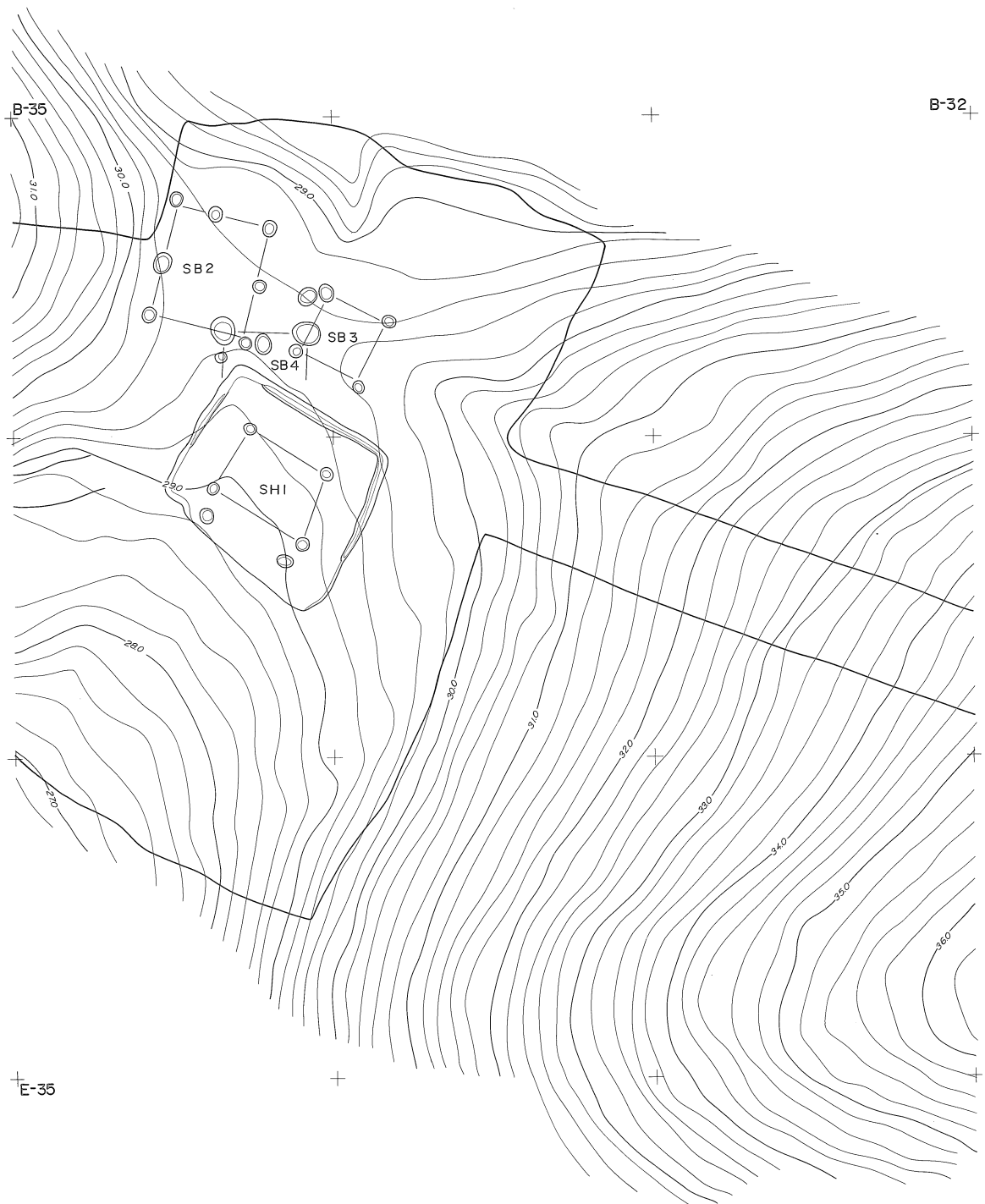
A-35



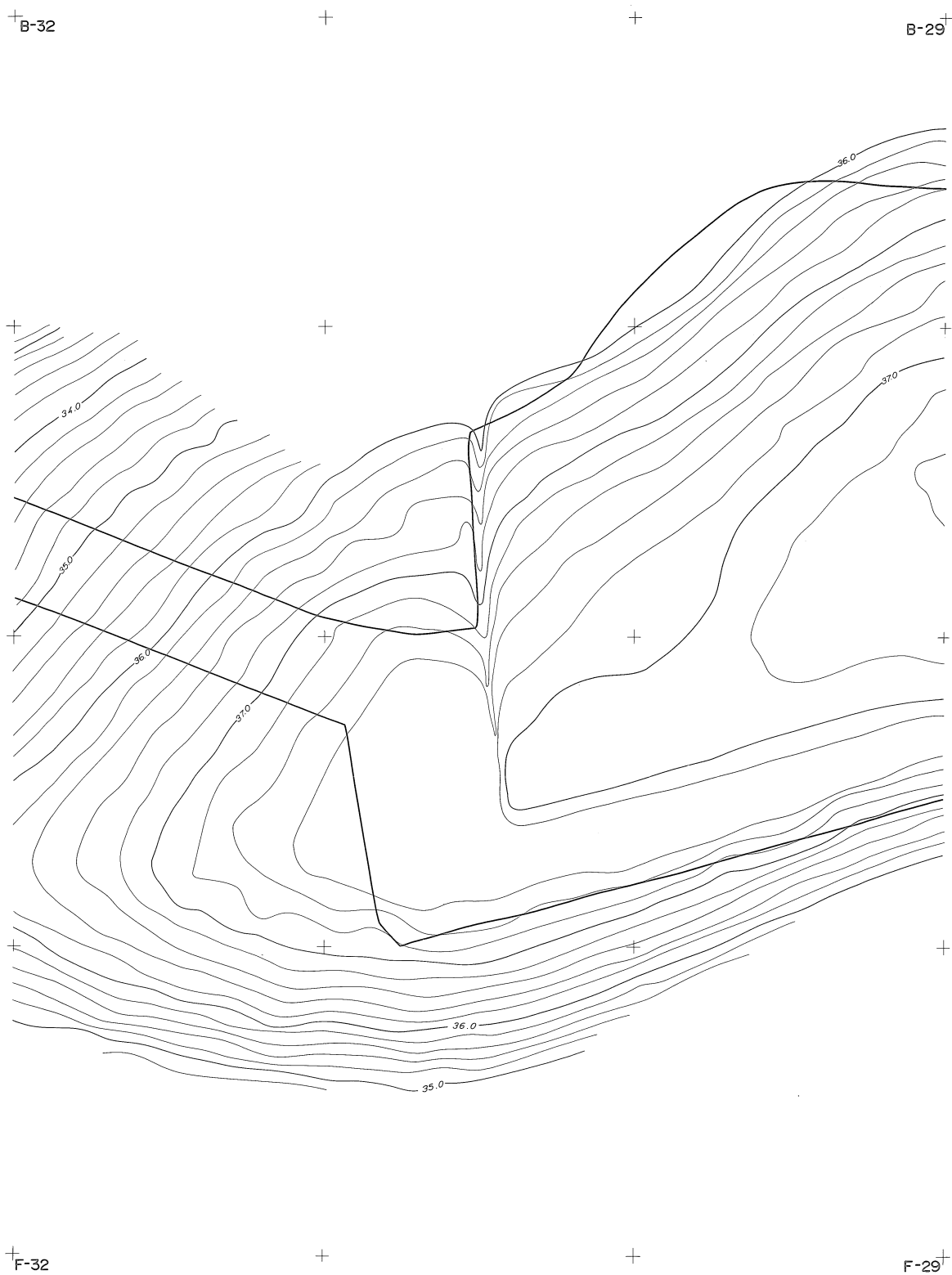
E-38

E-35

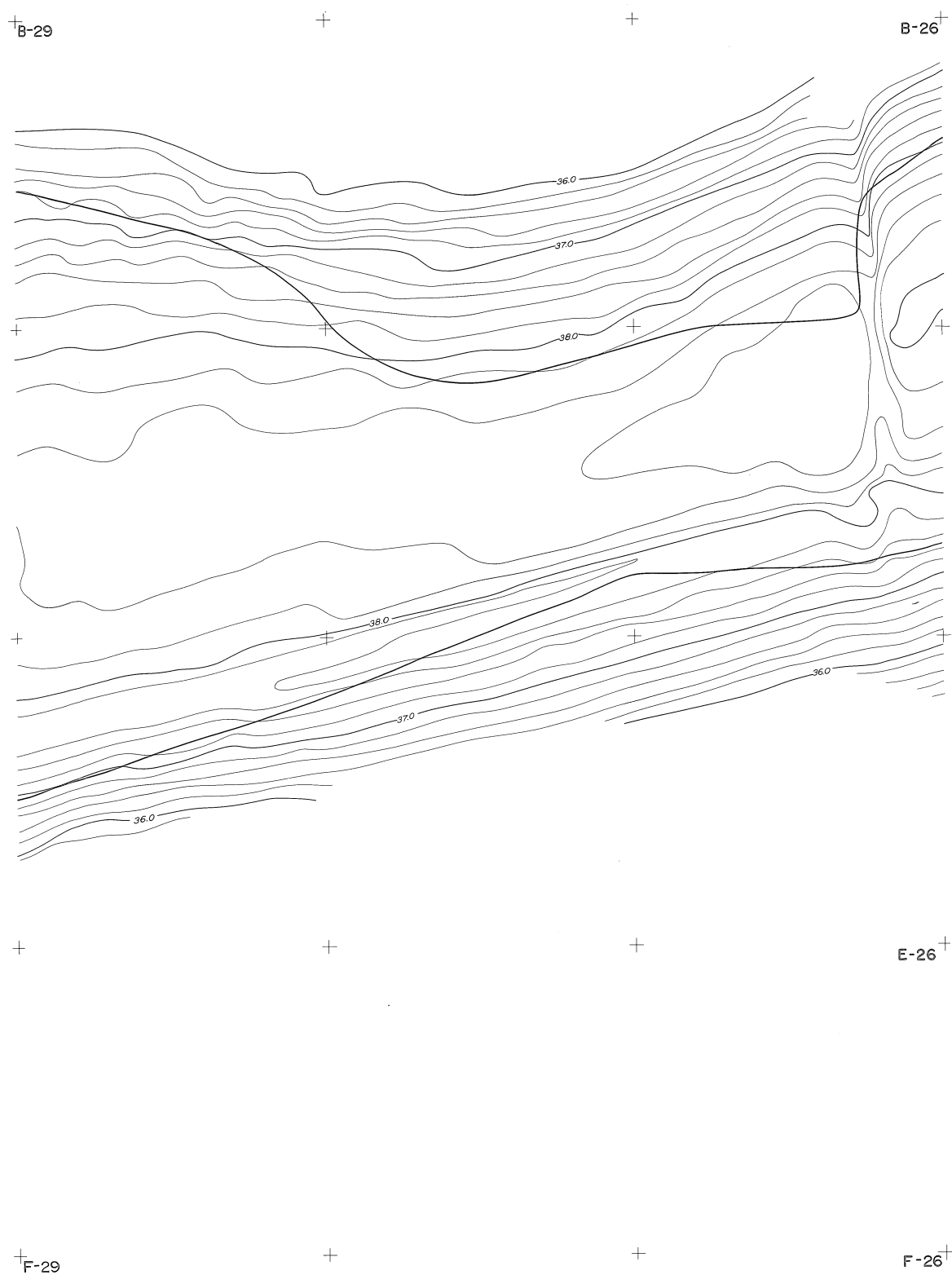
第9図 地形測量図1



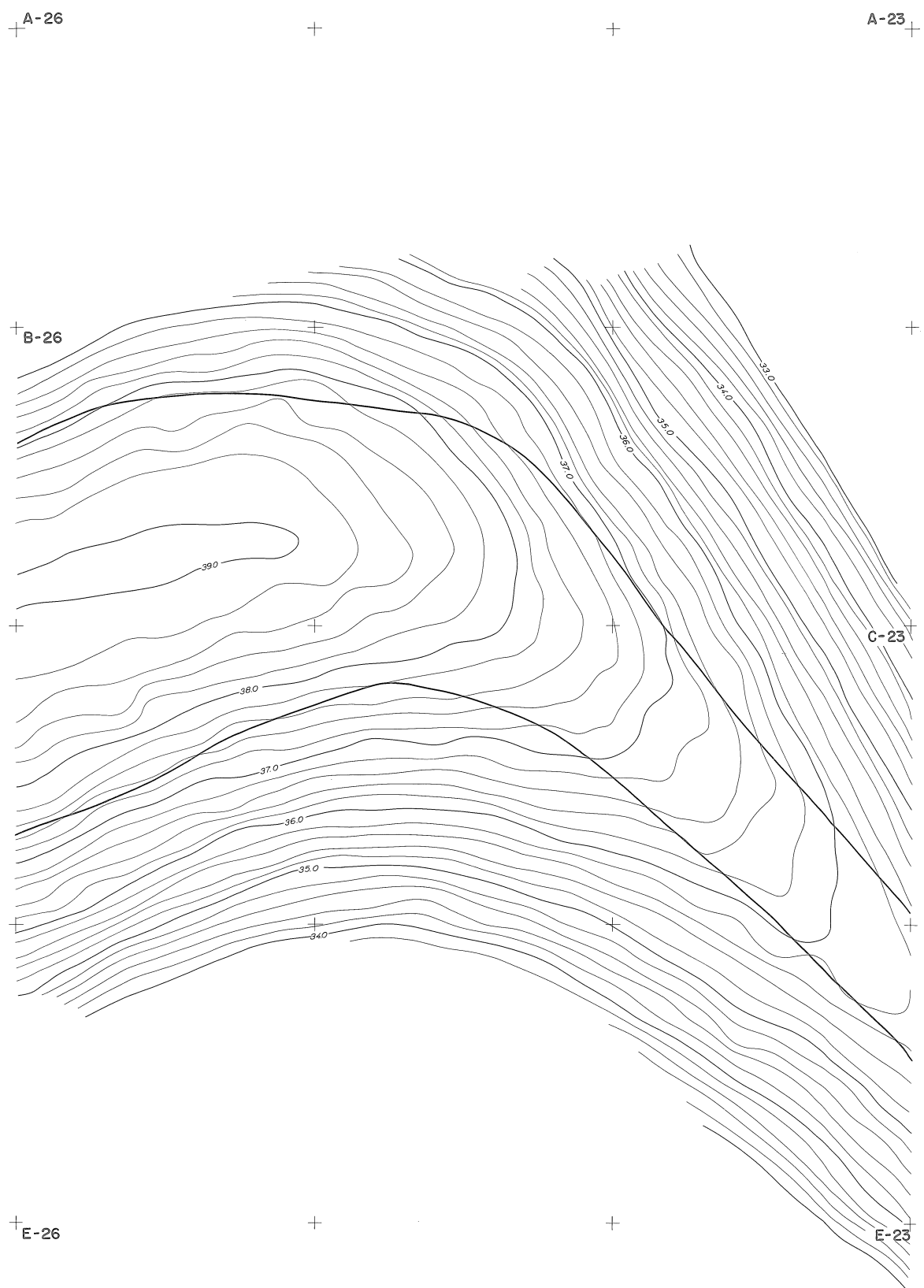
第10図 地形測量図 2



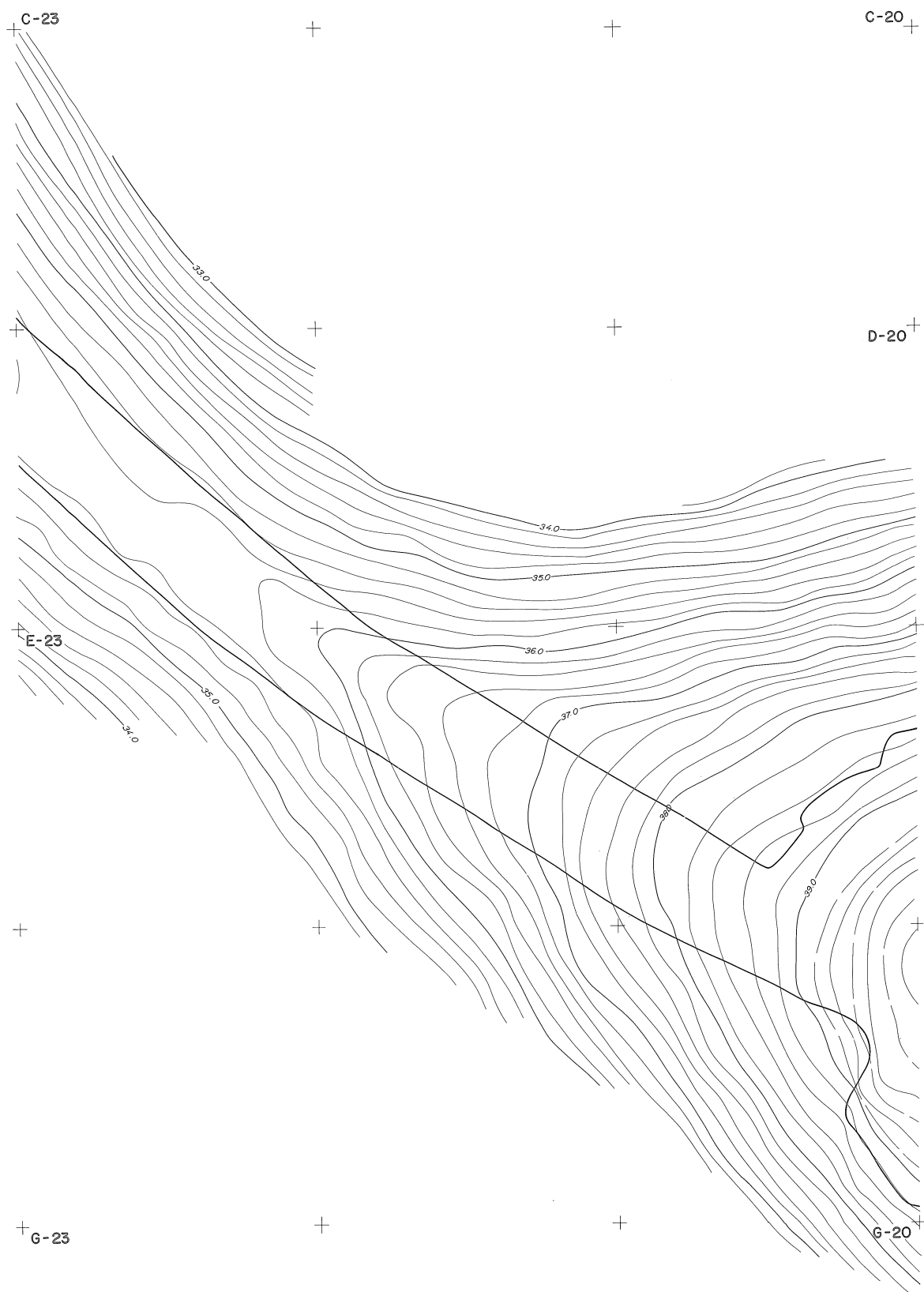
第11図 地形測量図 3



第12図 地形測量図 4



第13図 地形測量図 5



第14図 地形測量図 6



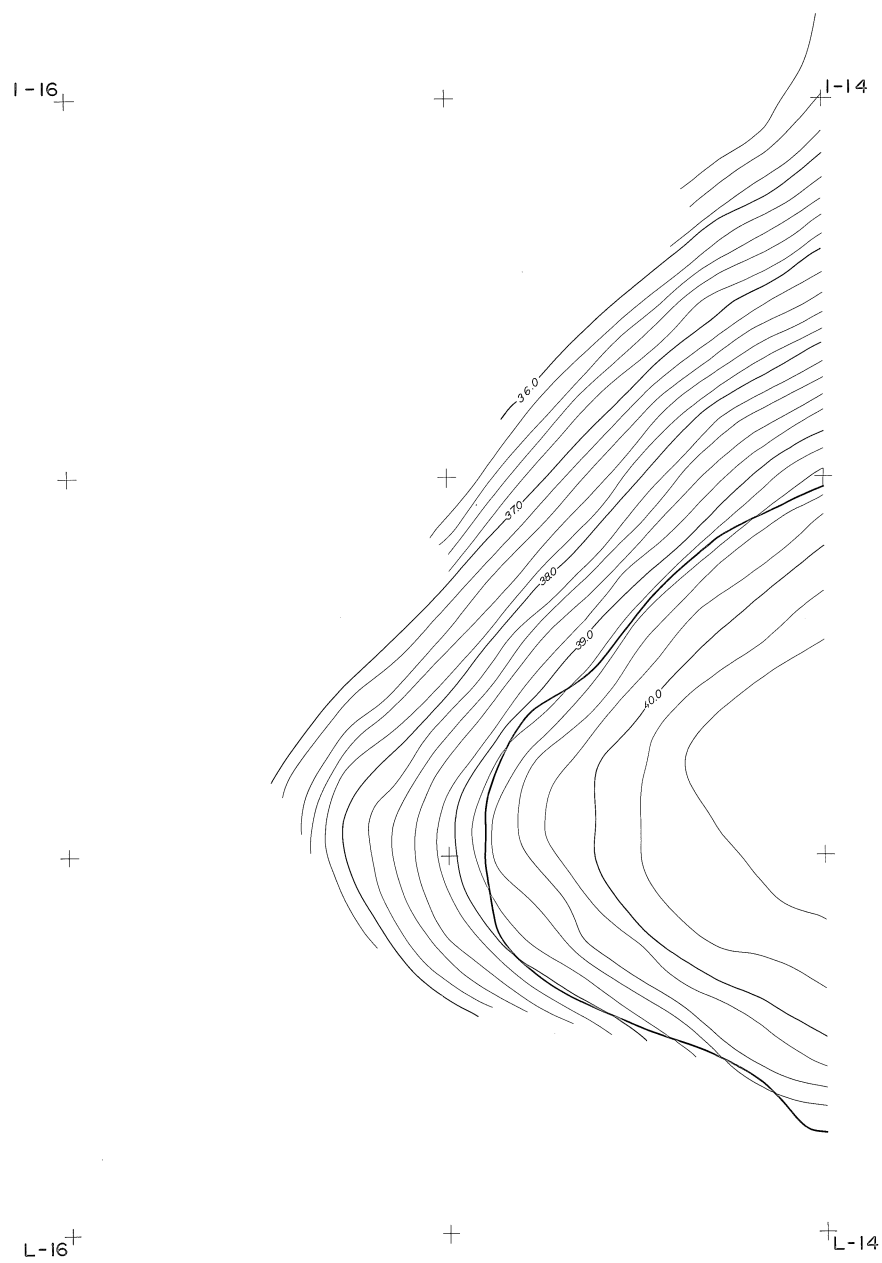
第15图 地形測量图 7



第16図 地形測量図 8



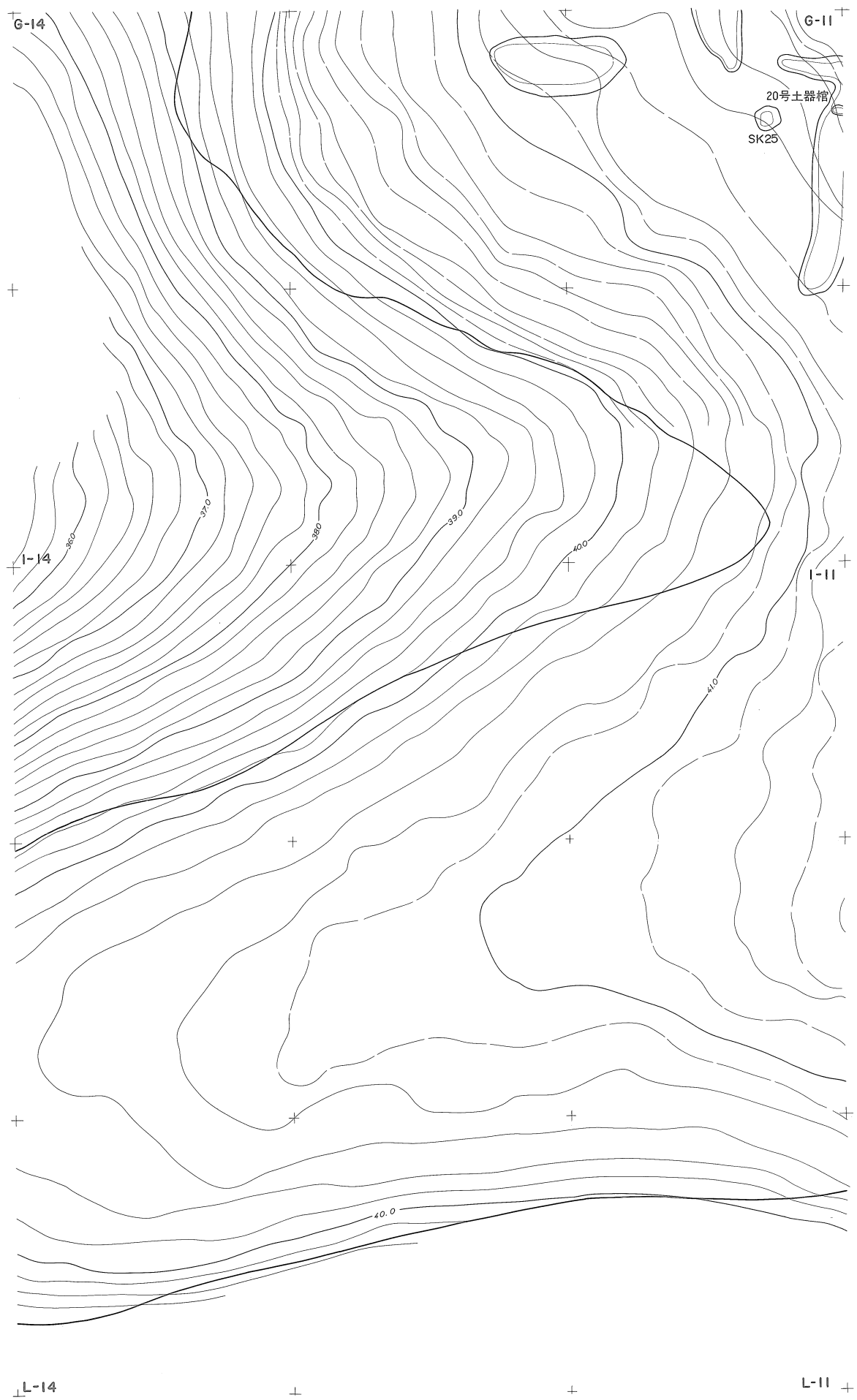
第17図 地形測量図 9



第18図 地形測量図10



第19图 地形测量图11



第20図 地形測量図12



第21図 地形測量図13



第22図 地形測量図14

±A-8

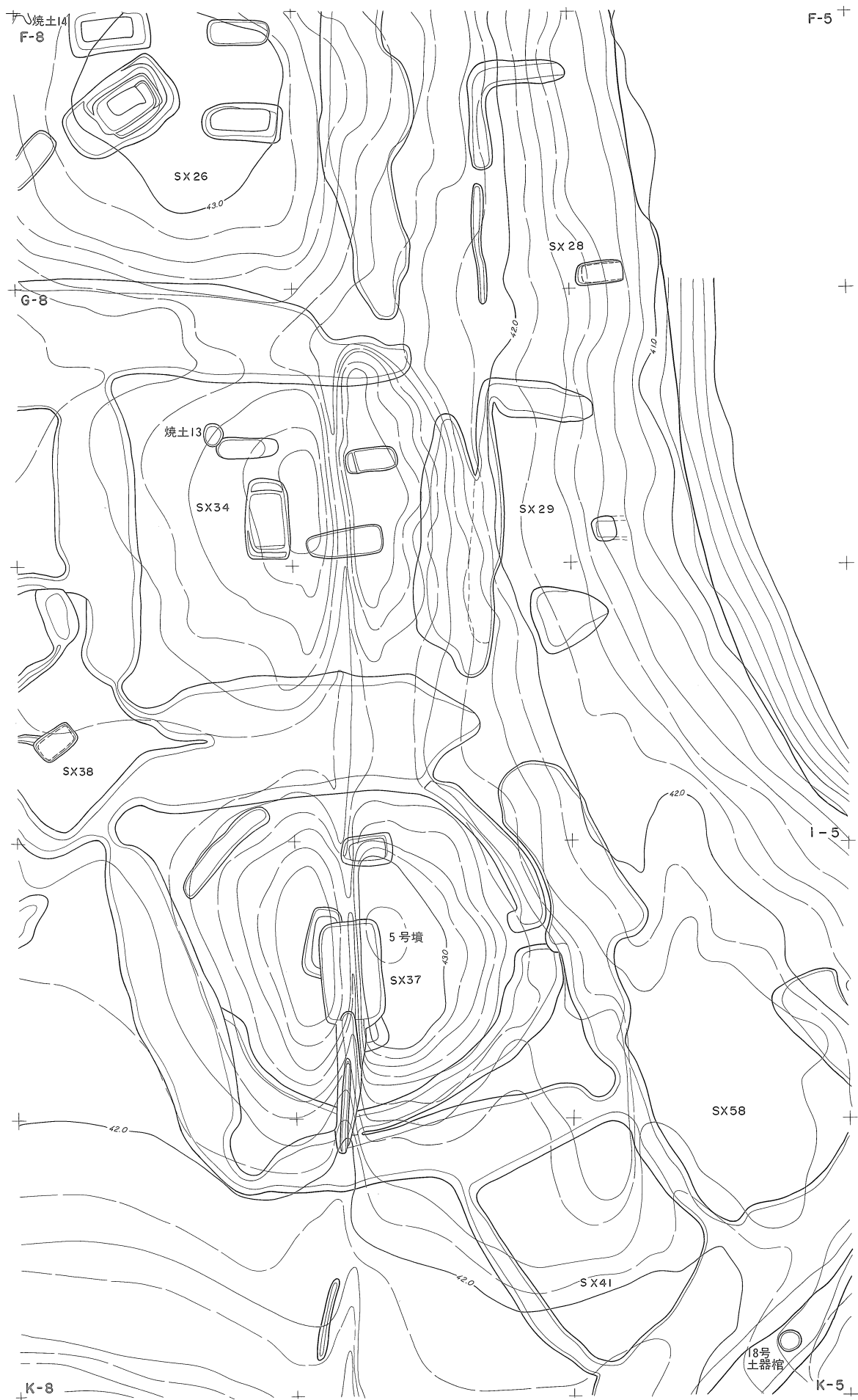
+

+

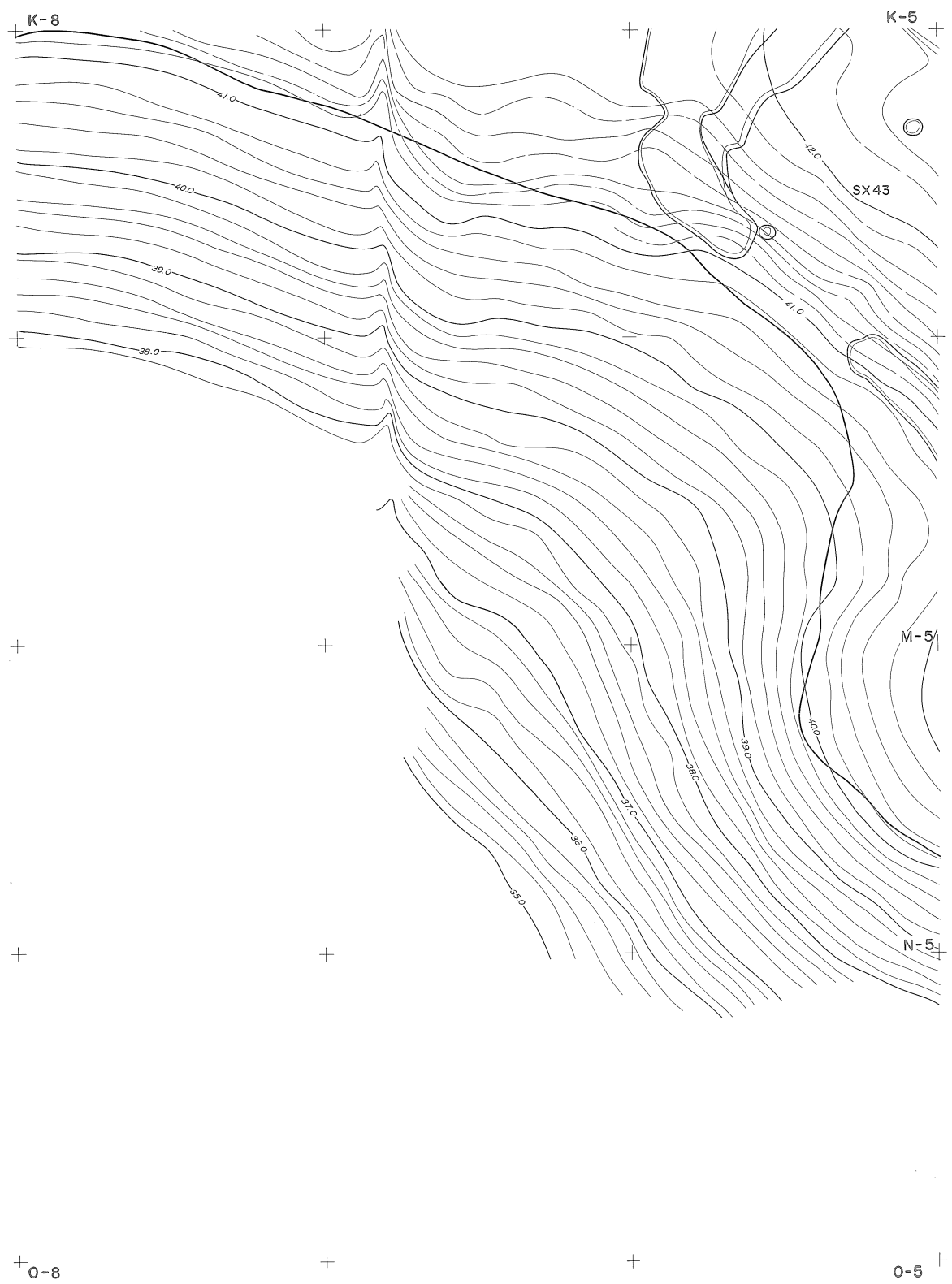
A-5 ±



第23図 地形測量図15



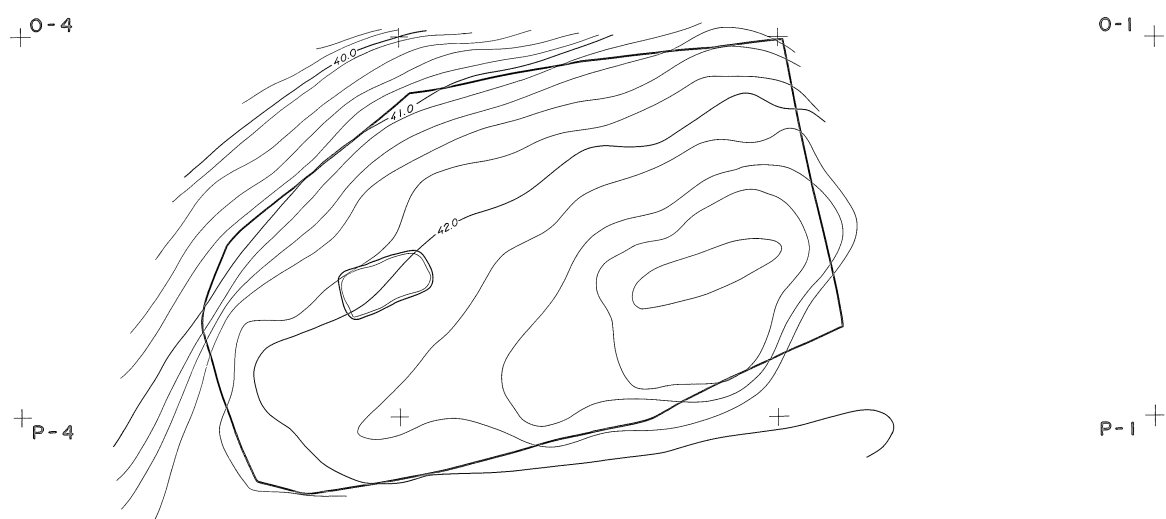
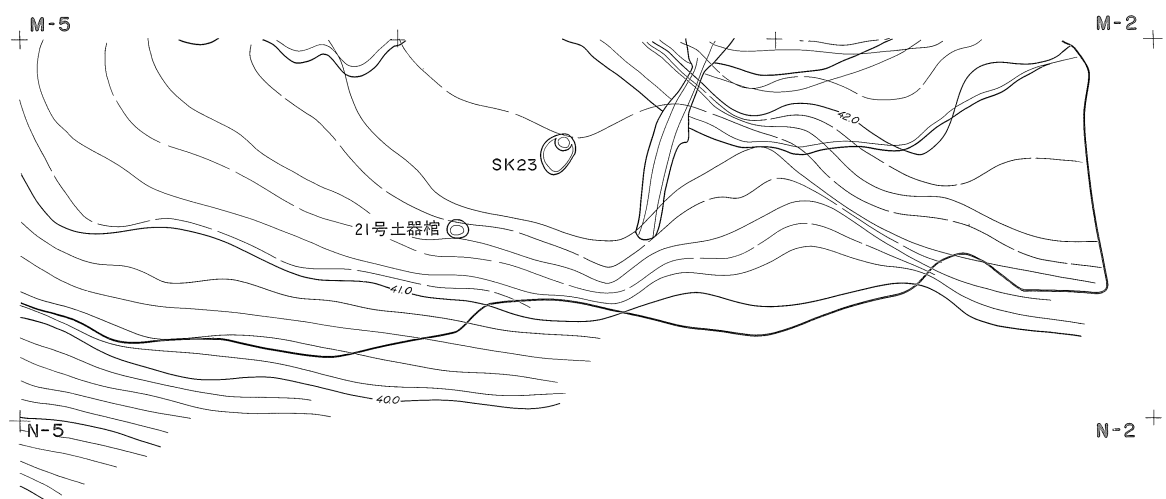
第24図 地形測量図16



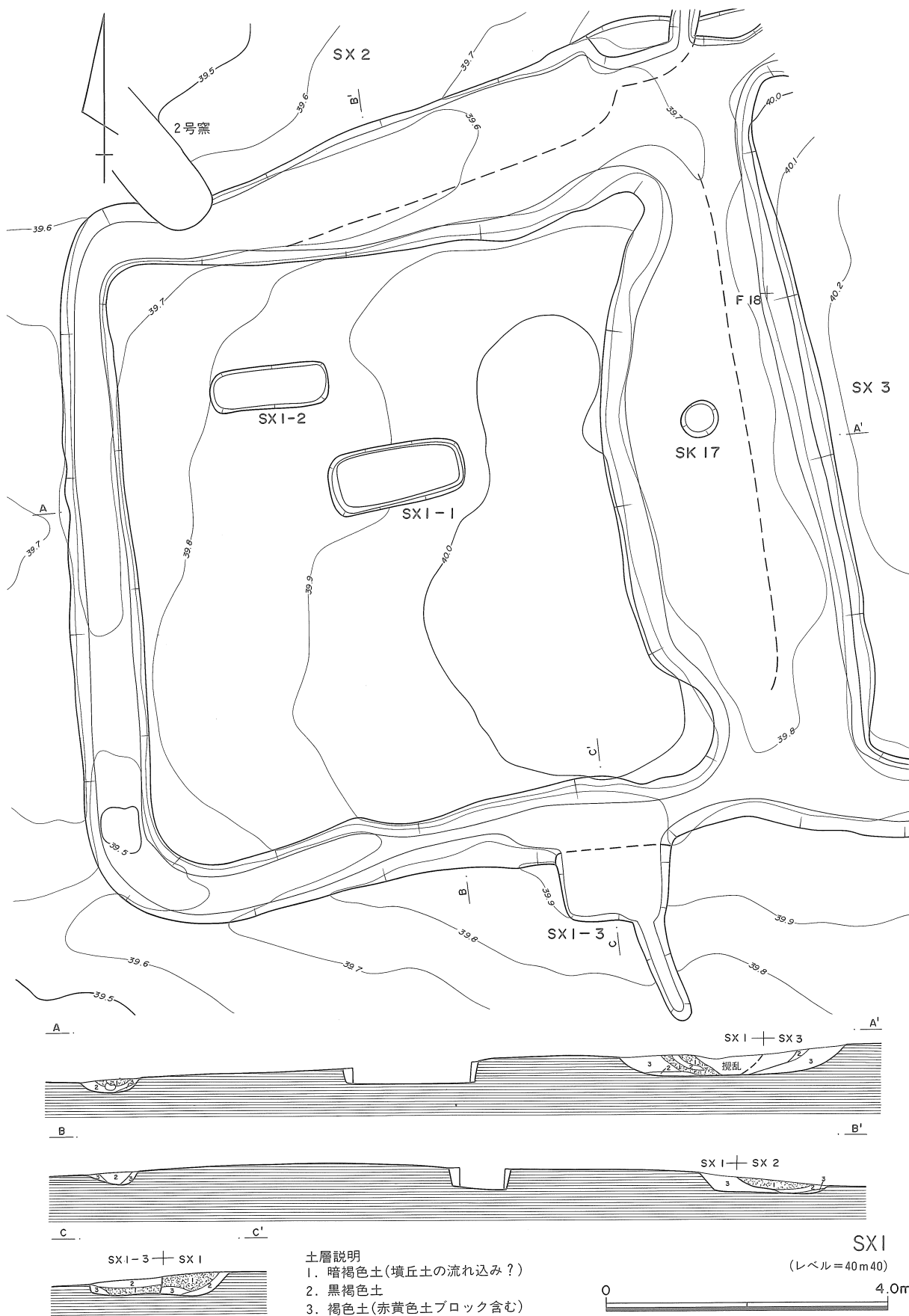
第25図 地形測量図17



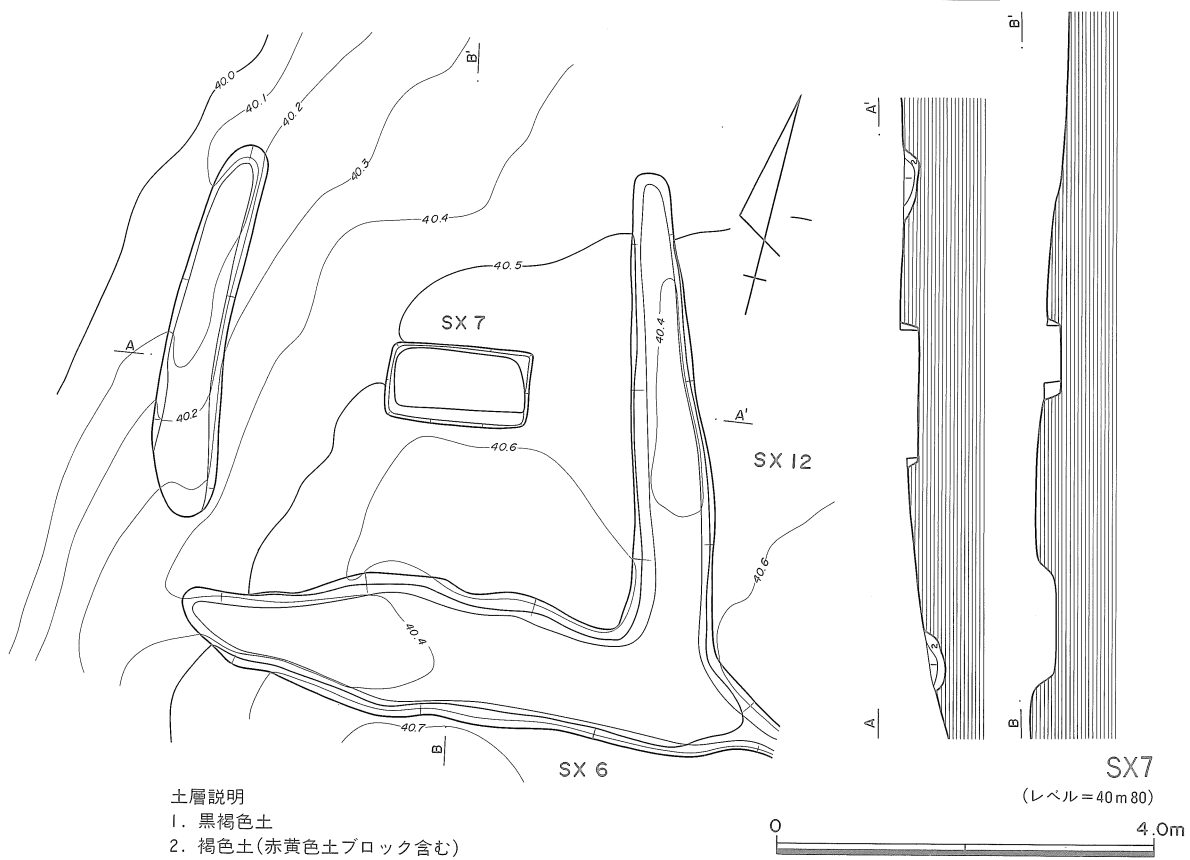
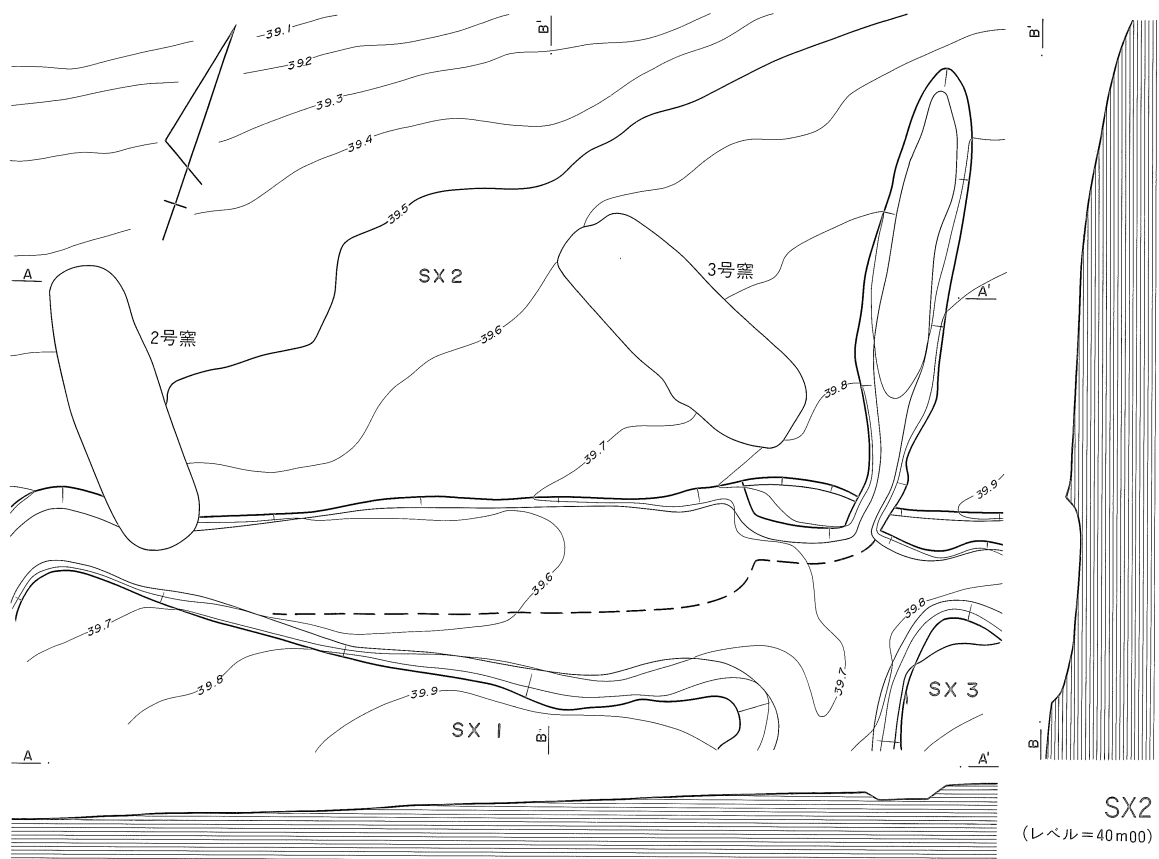
第26図 地形測量図18



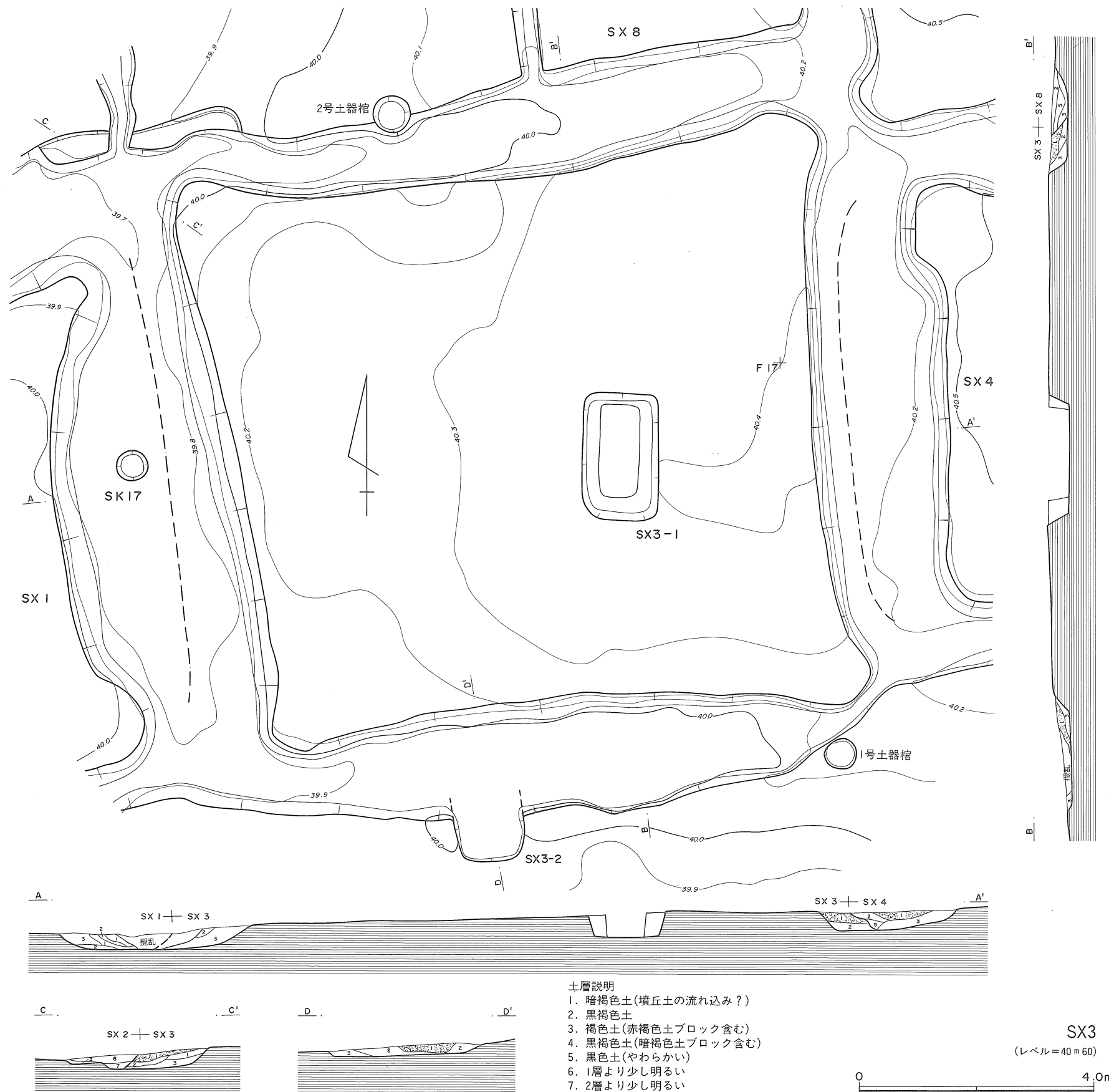
第27図 地形測量図19

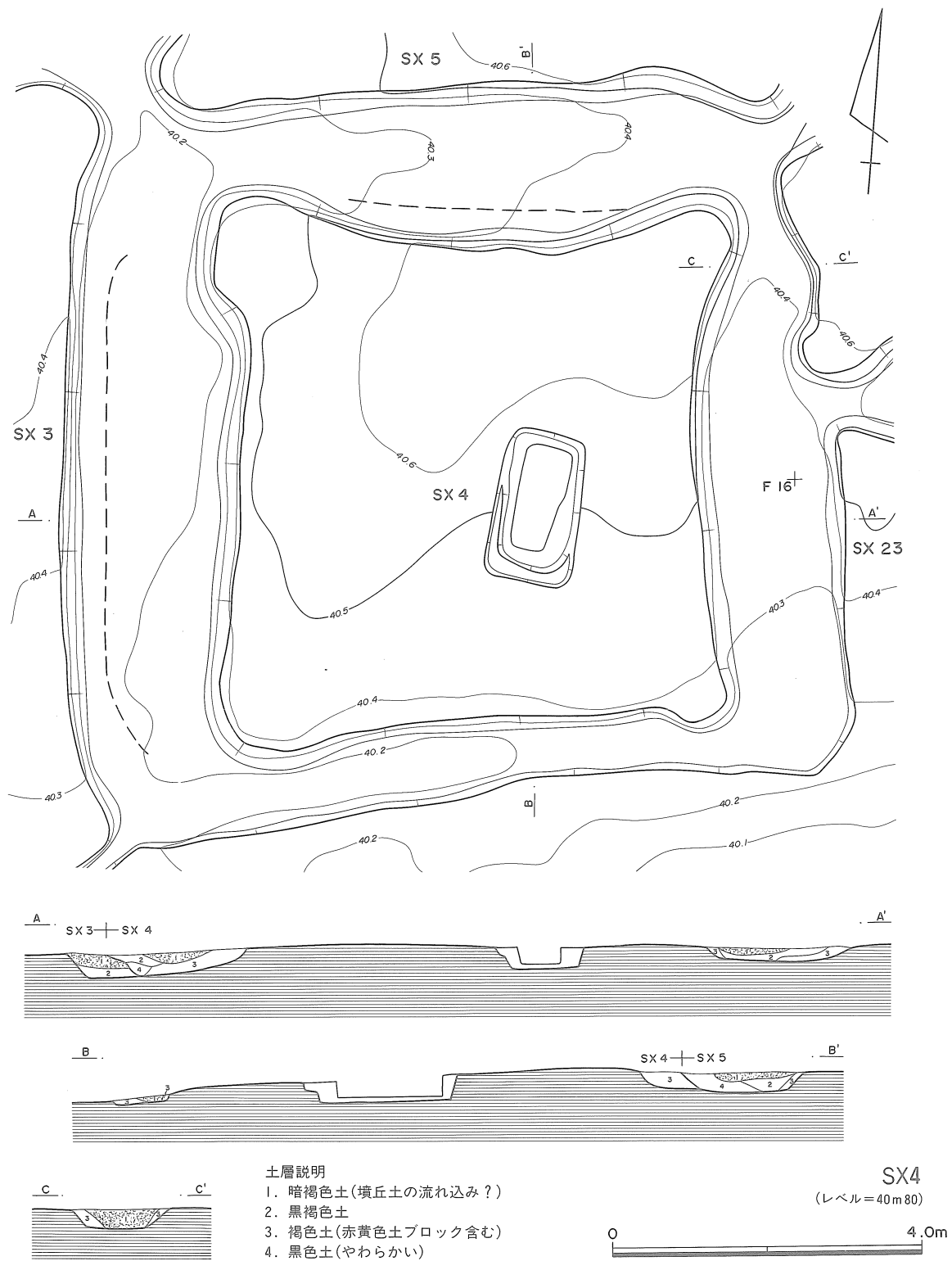


第28図 SX 1 実測図

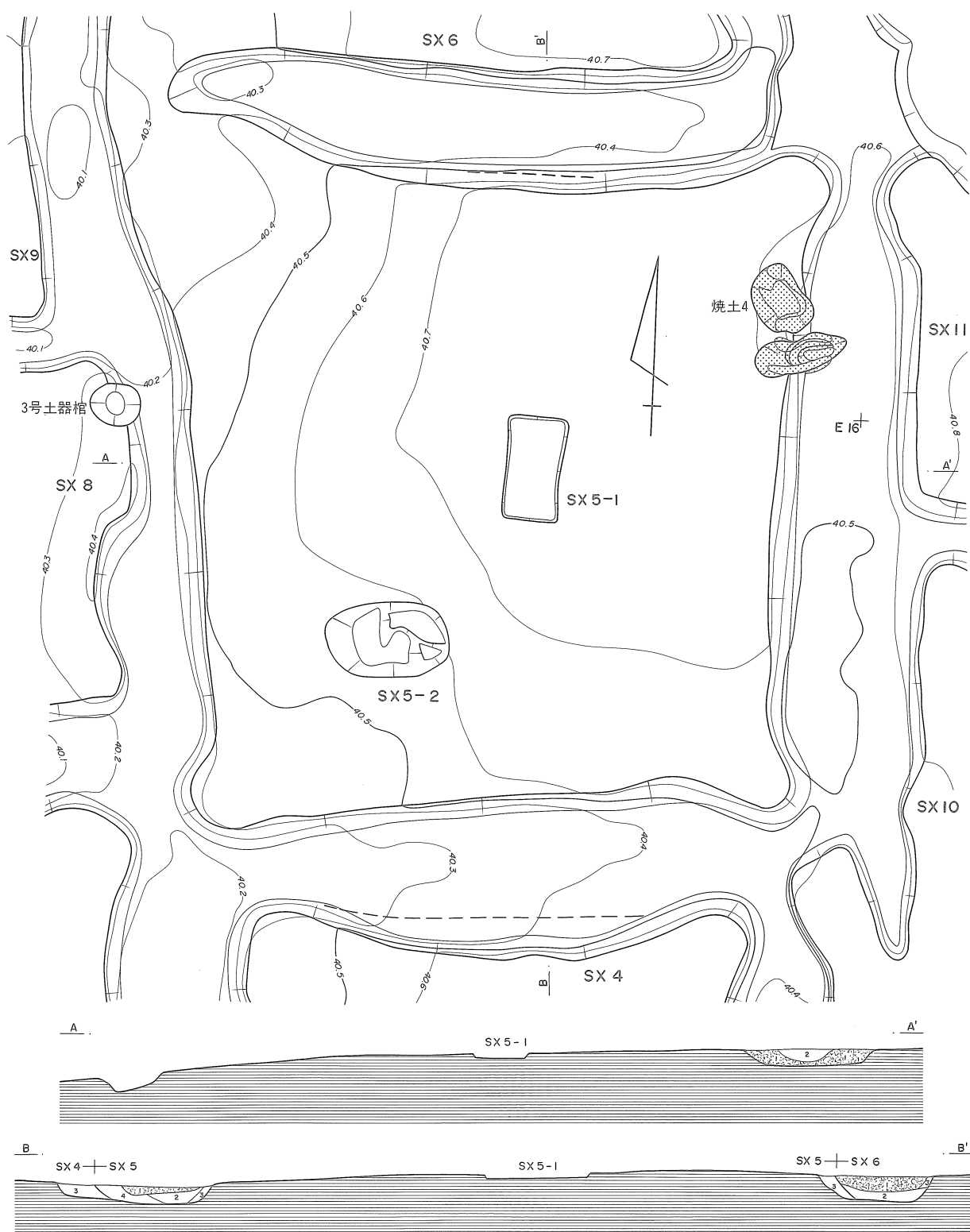


第29図 SX 2・SX 7実測図





第31図 SX4実測図



土層説明

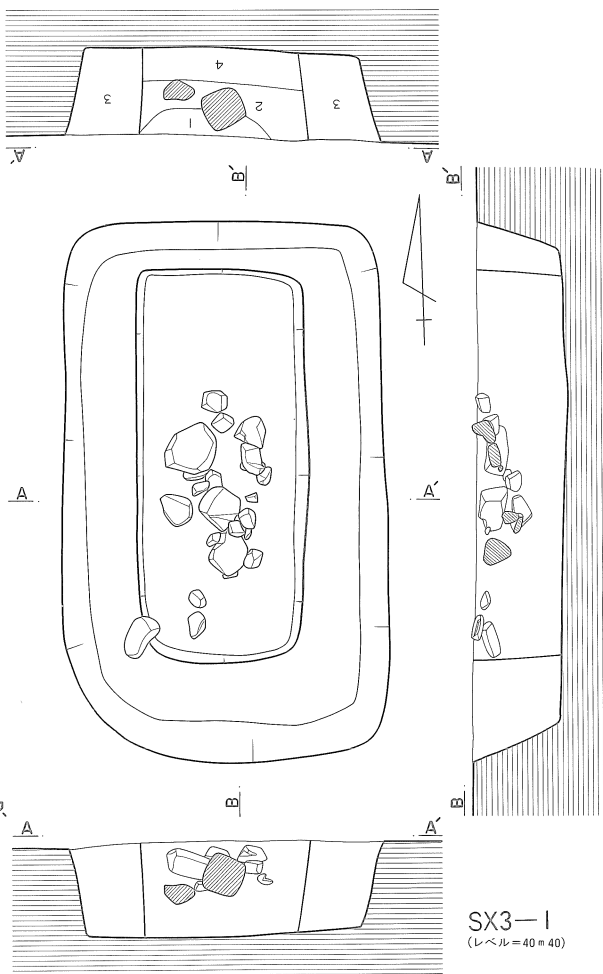
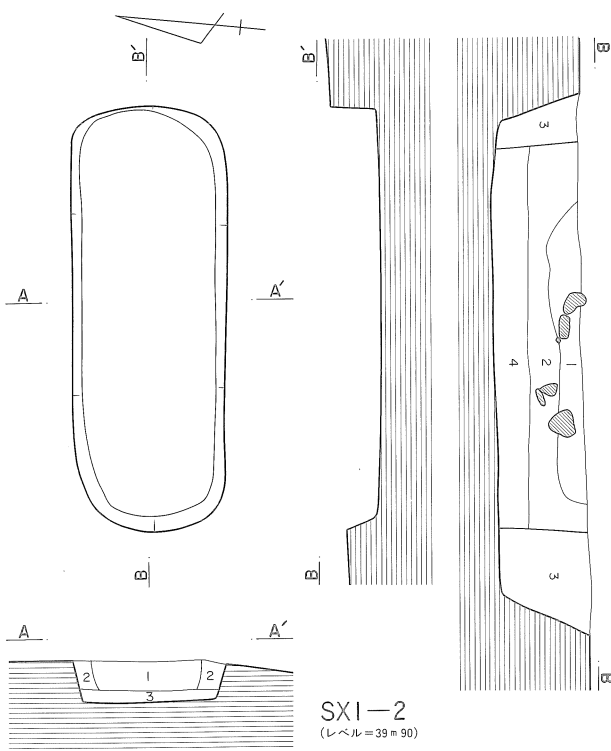
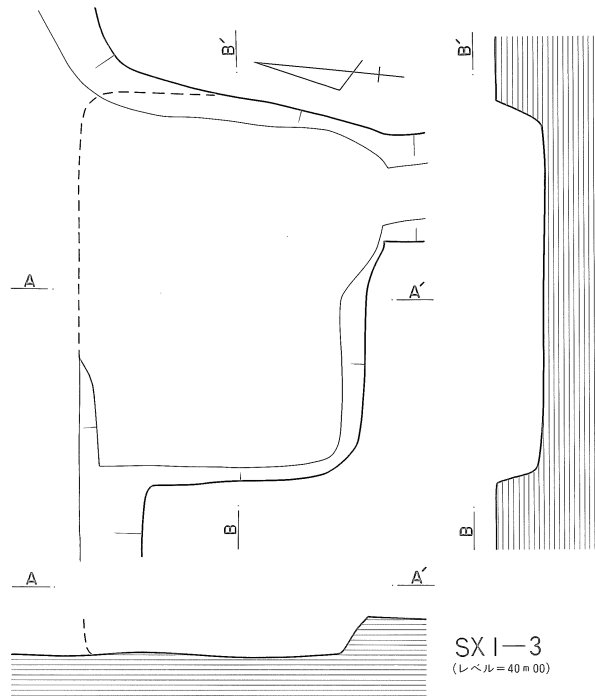
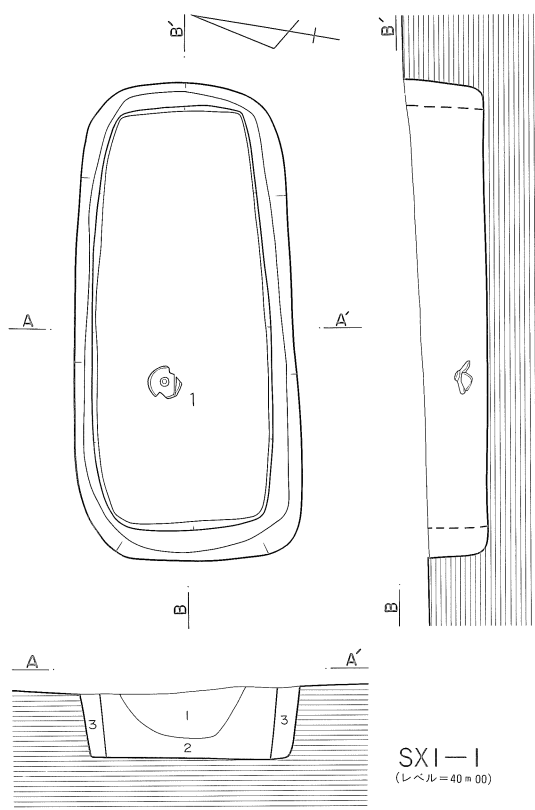
1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
2. 黒褐色土
3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)
4. 黒褐色土(暗褐色土ブロック多く含む)

SX 5

(レベル=41m00)

0 4.0m

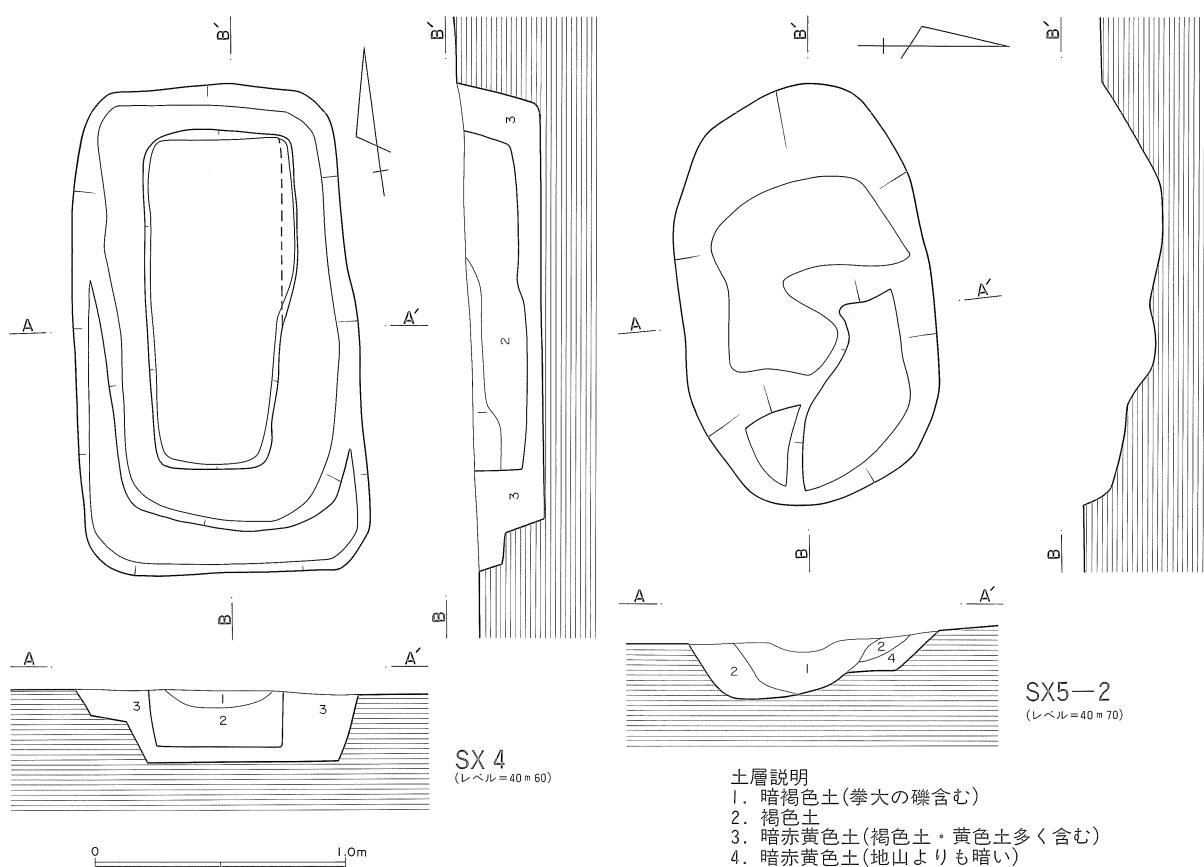
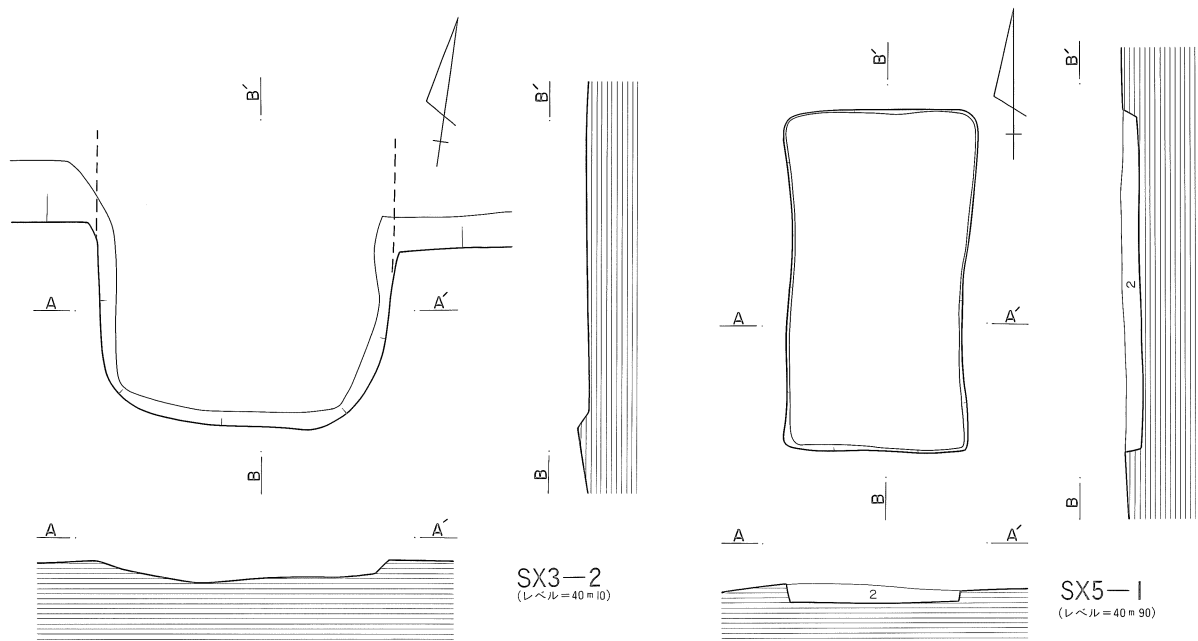
第32図 SX 5 実測図



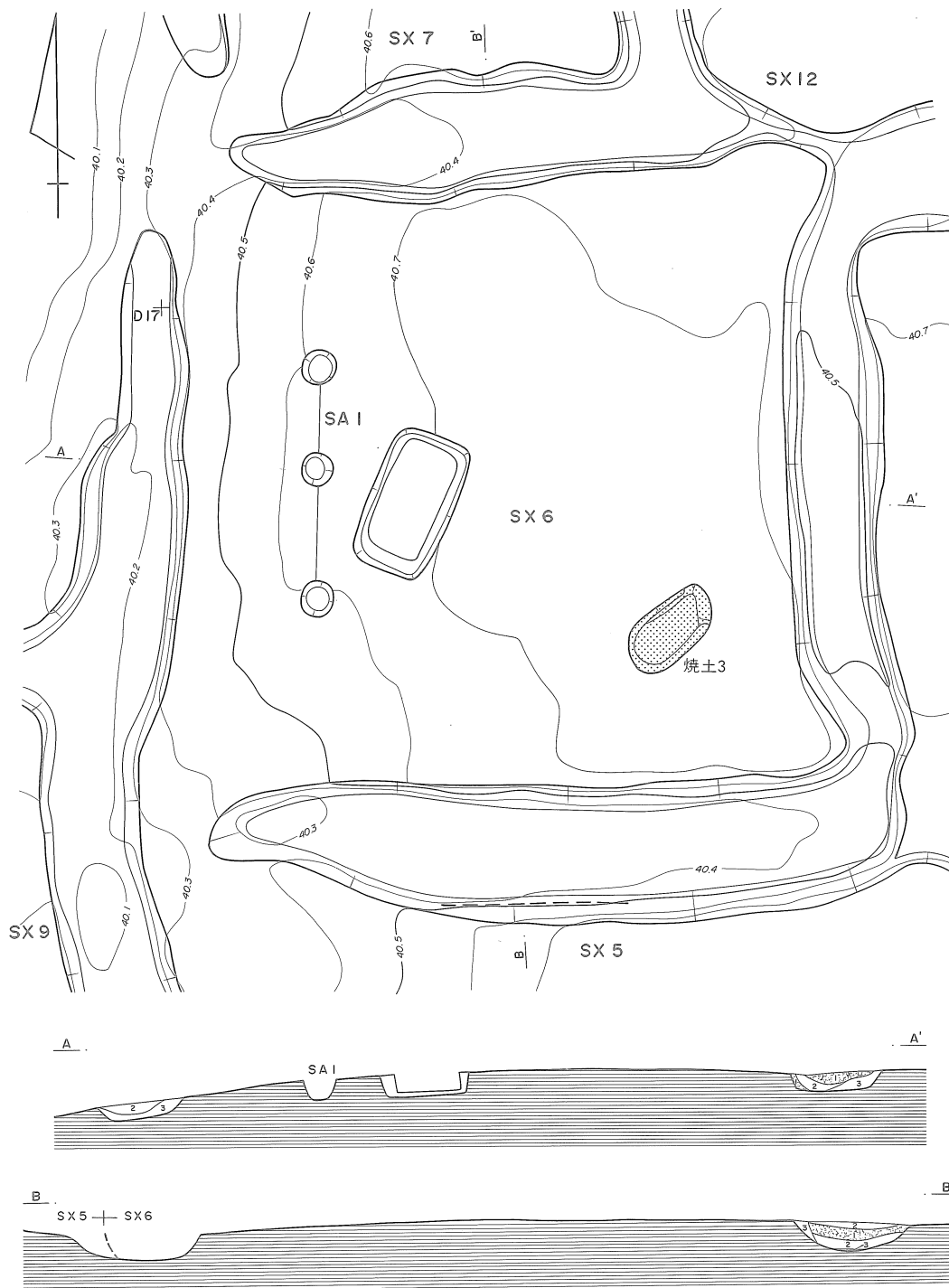
- 土層説明
 1. 暗褐色土(拳大の礫含む)
 2. 褐色土
 3. 暗赤黄色土(褐色土・黄色土多く含む)
 4. 暗赤黄色土(地山よりも暗い)

0 1.0m

第33図 SX1-1～3・SX3-1主体部実測図



第34図 SX3-2・SX4・SX5-1・2主体部実測図

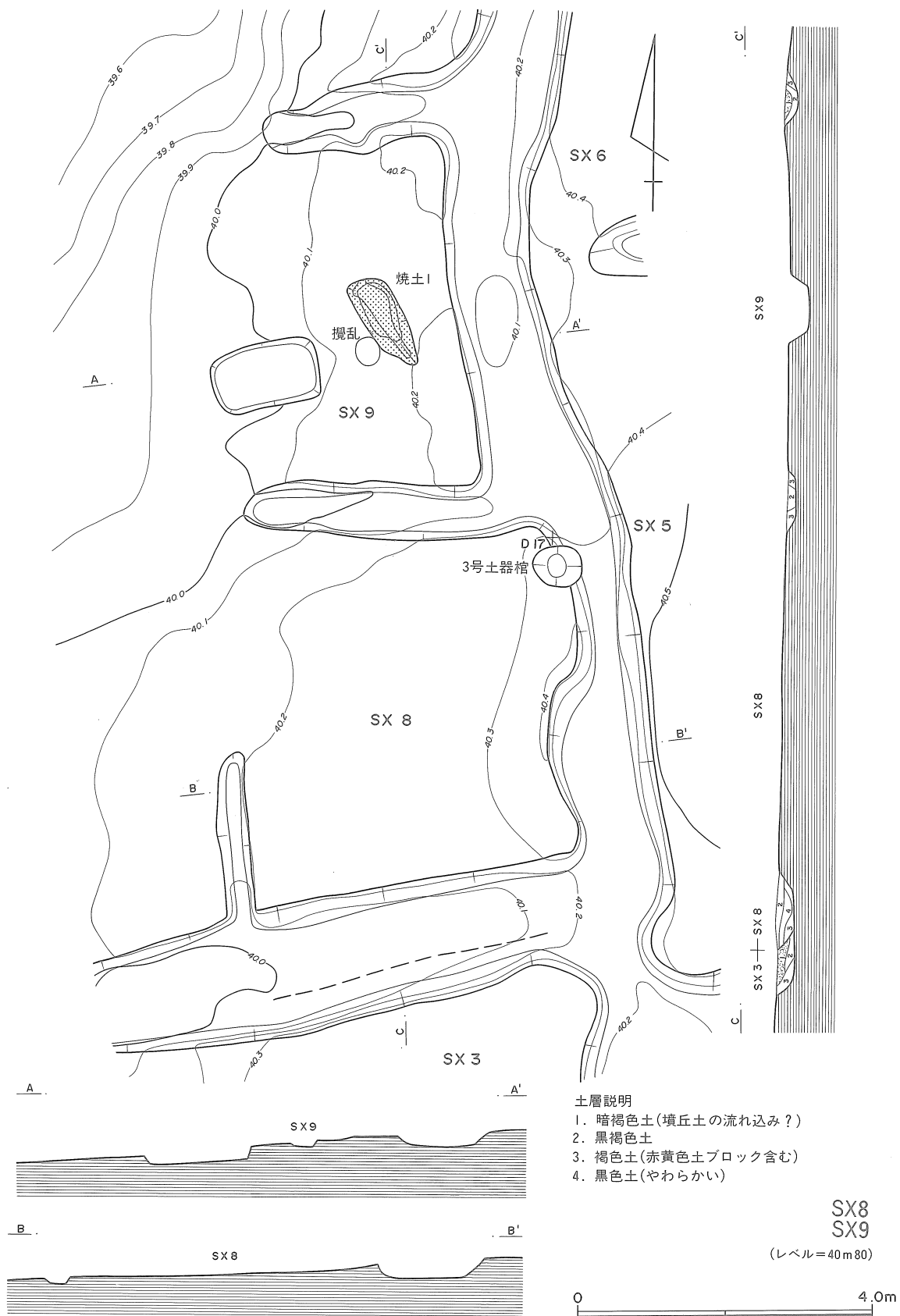


- 土層説明
1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
 2. 黒褐色土
 3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)

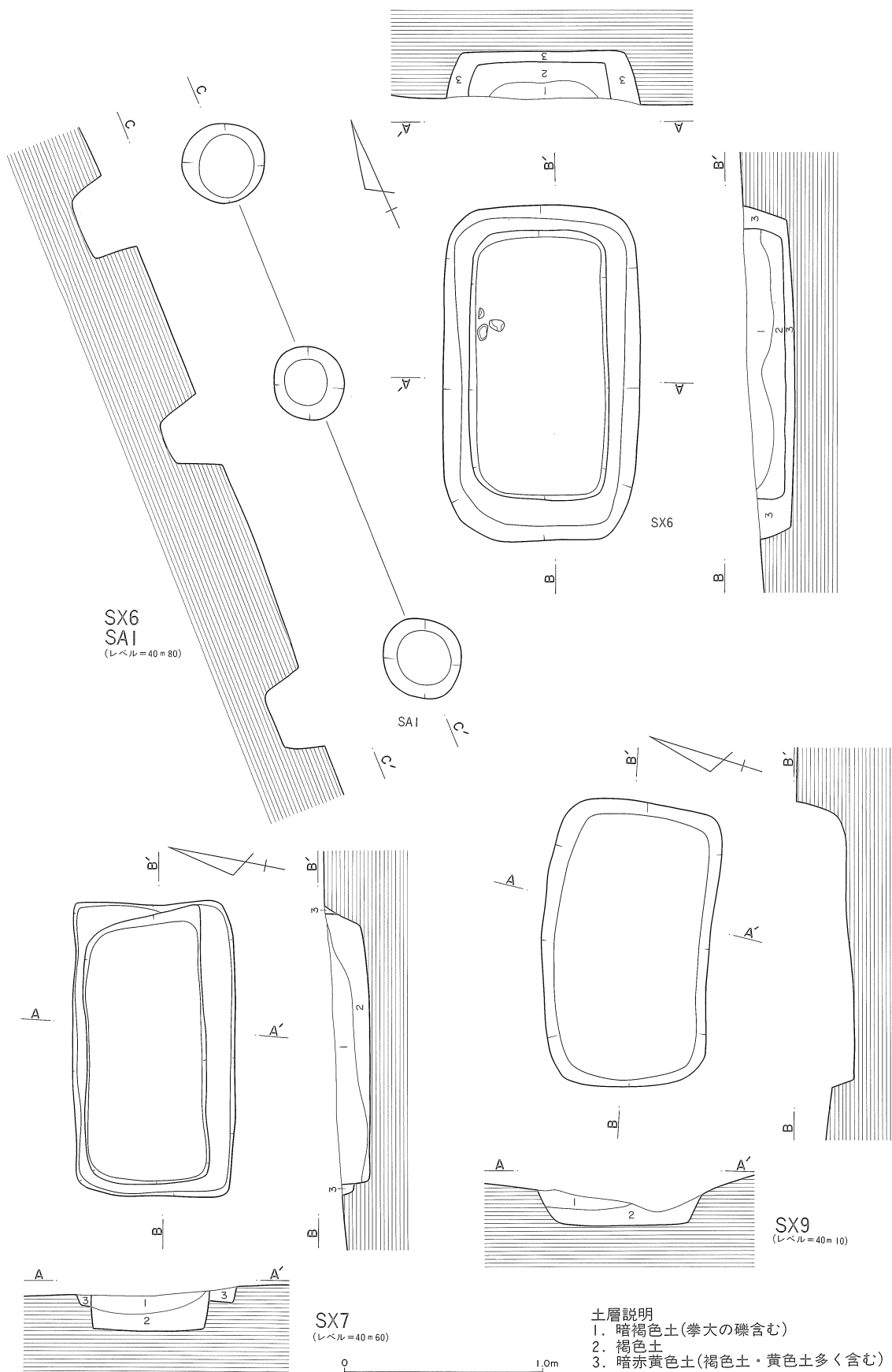
SX6
(レベル=41m00)

0 4.0m

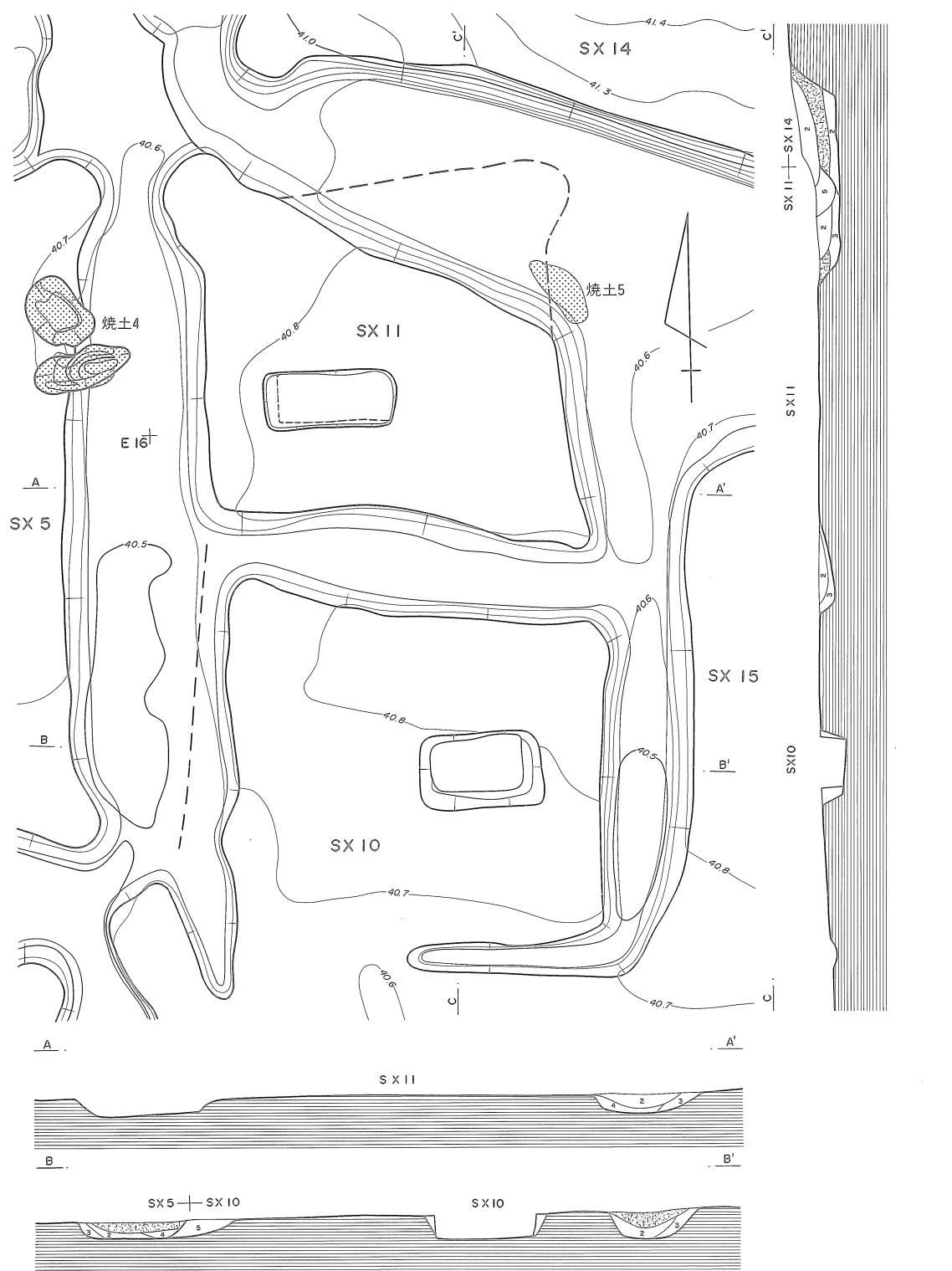
第35図 SX6実測図



第36図 SX 8・SX 9実測図



第37図 SX 6・SX 7・SX 9 主体部・SA 1 実測図

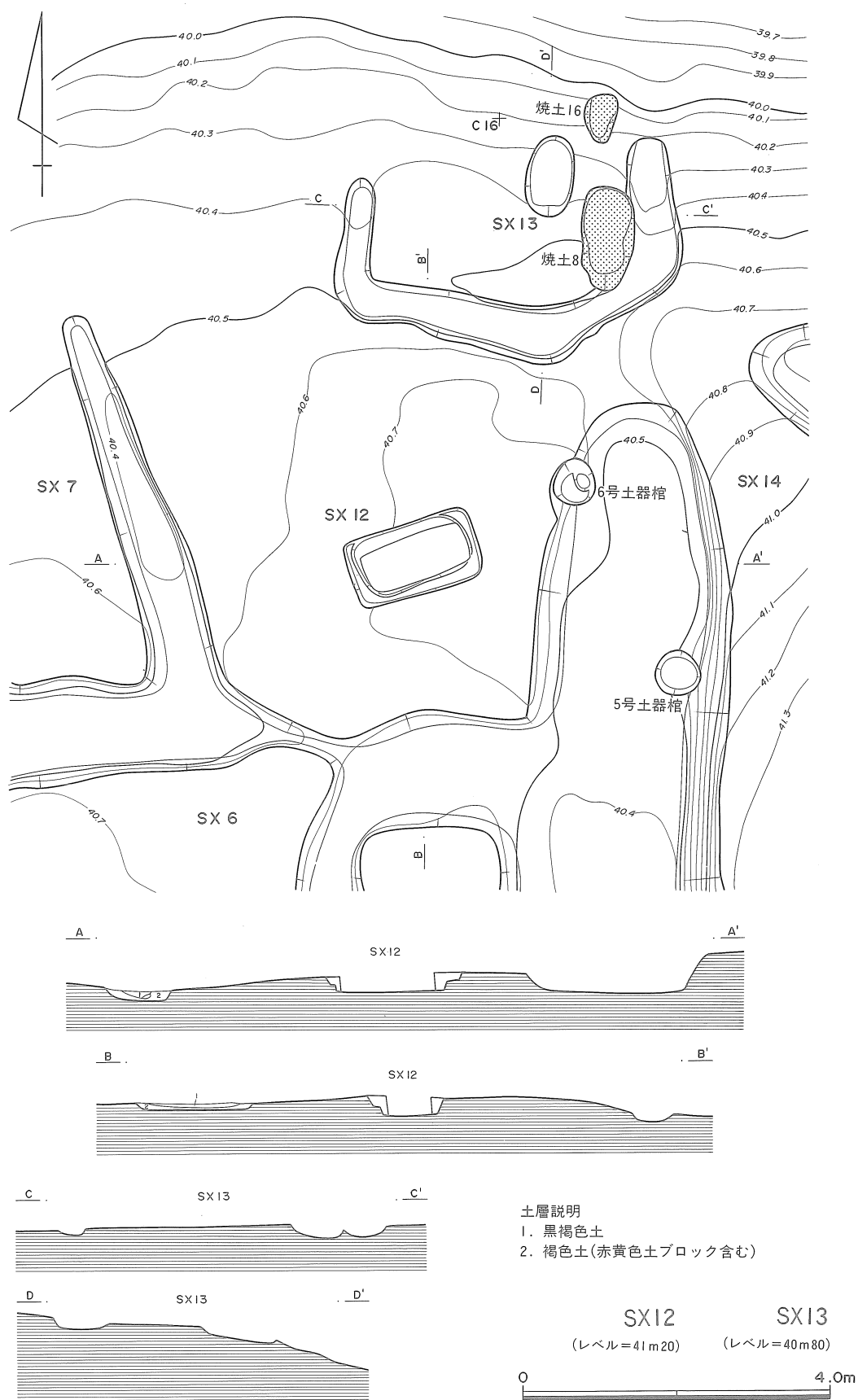


- 土層説明
1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
 2. 黒褐色土
 3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)
 4. 黒褐色土(暗褐色土ブロック多く含む)
 5. 黒色土(やわらかい)

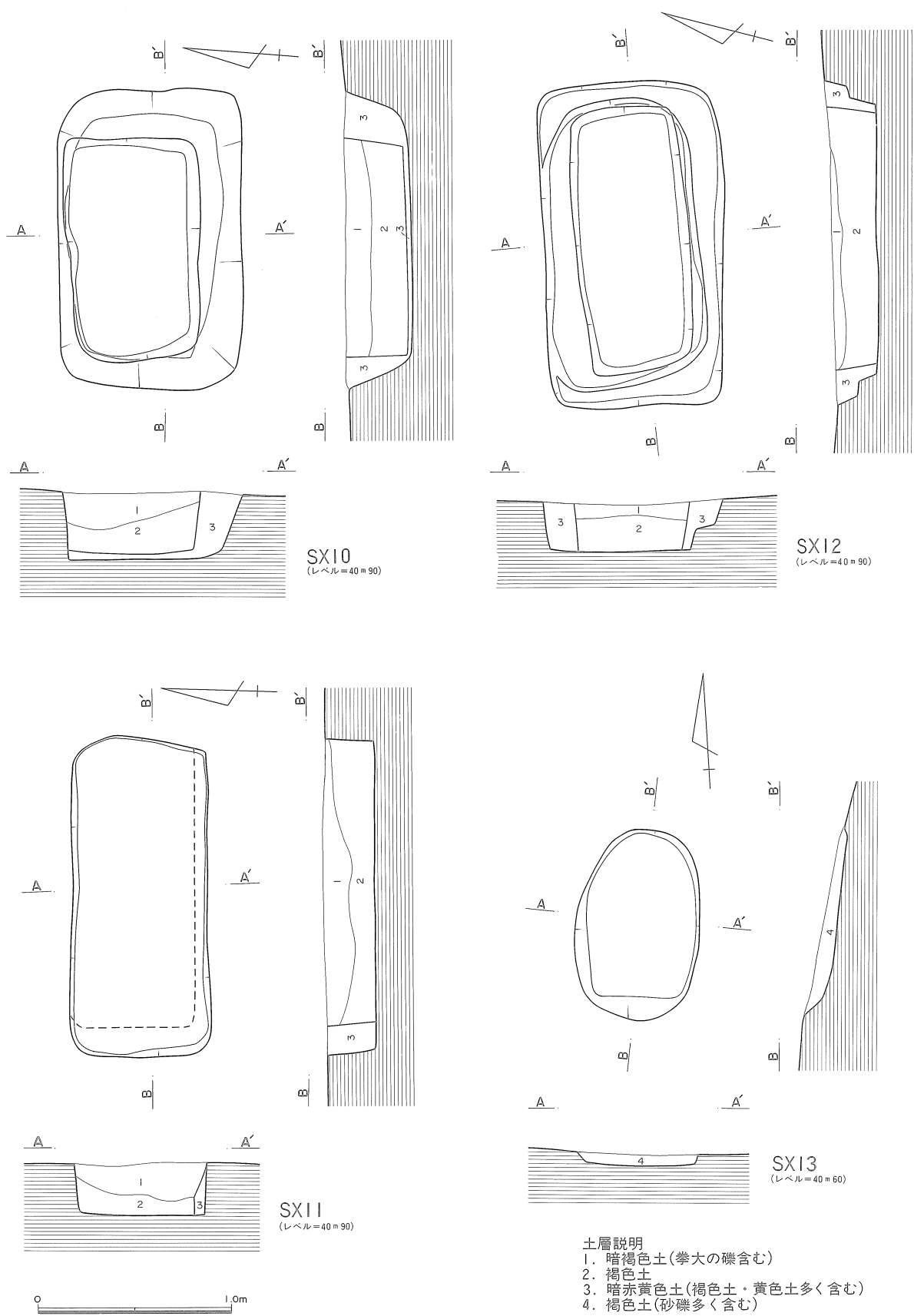
SX10
SX11
(レベル=41m40)

0 4.0m

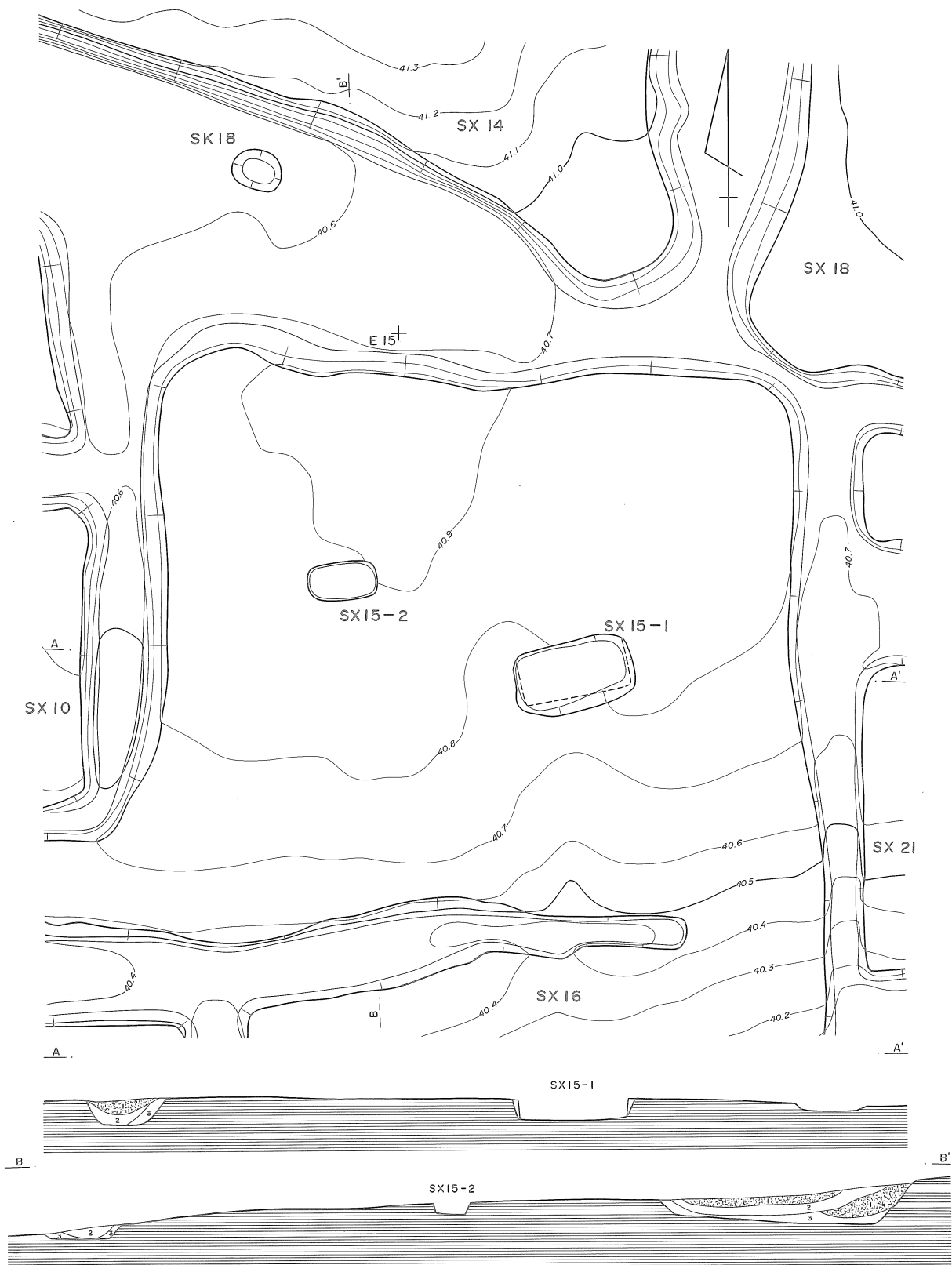
第38図 SX10・SX11実測図



第39図 SX12・SX13実測図



第40図 SX10～SX13主体部実測図



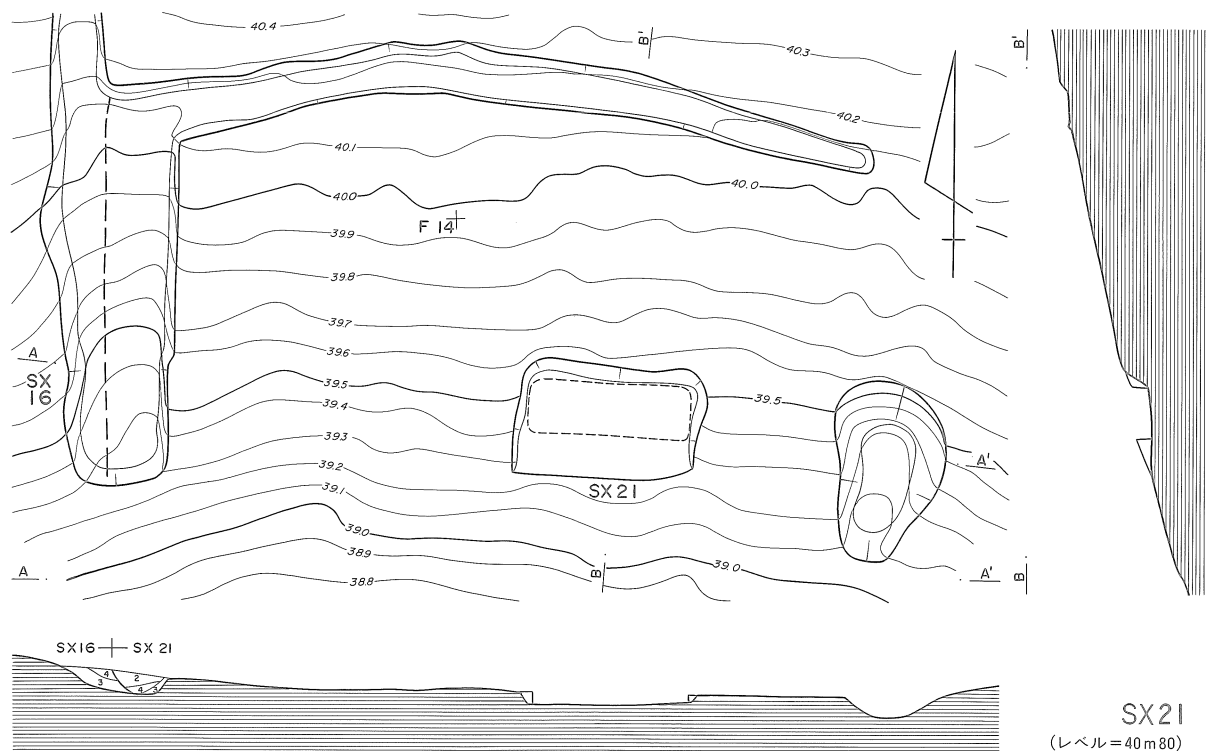
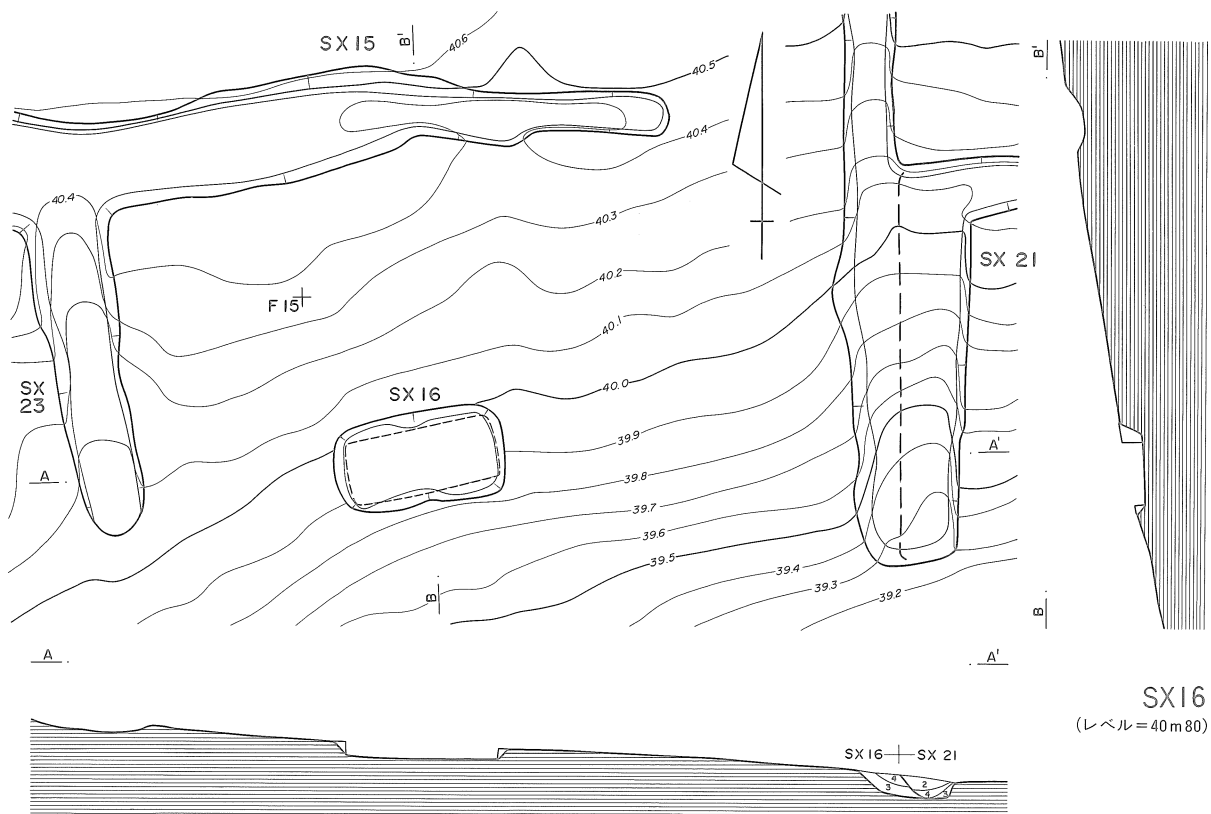
土層説明

1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
2. 黒褐色土
3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)

SX 15
(レベル=41m40)

0 4.0m

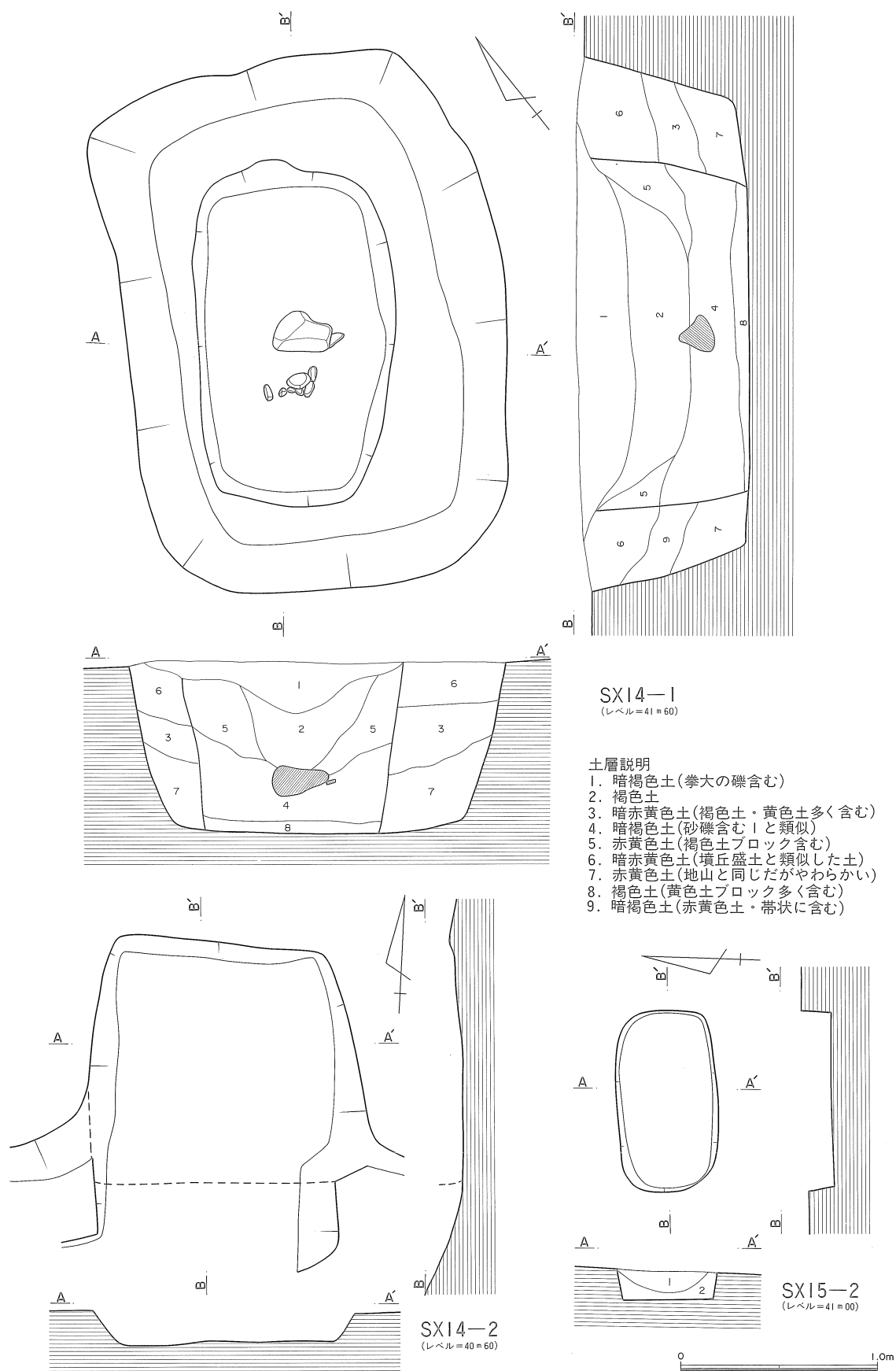
第42図 SX 15実測図



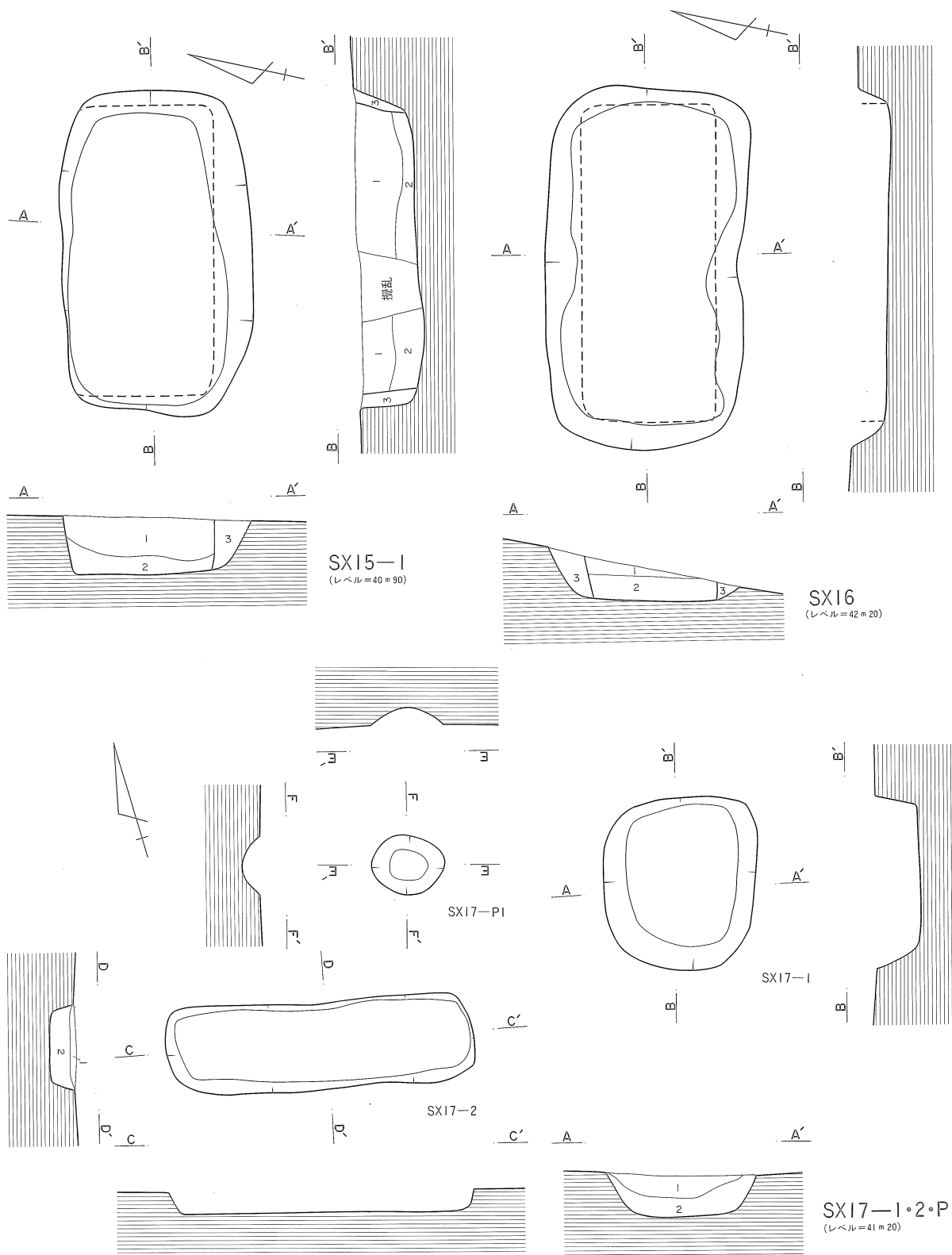
- 土層説明
1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み? 砂礫多く含む)
 2. 黒褐色土
 3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)
 4. 黒褐色土(暗褐色土ブロック・砂礫多く含む)

0 4.0m

第43図 SX16・SX21実測図

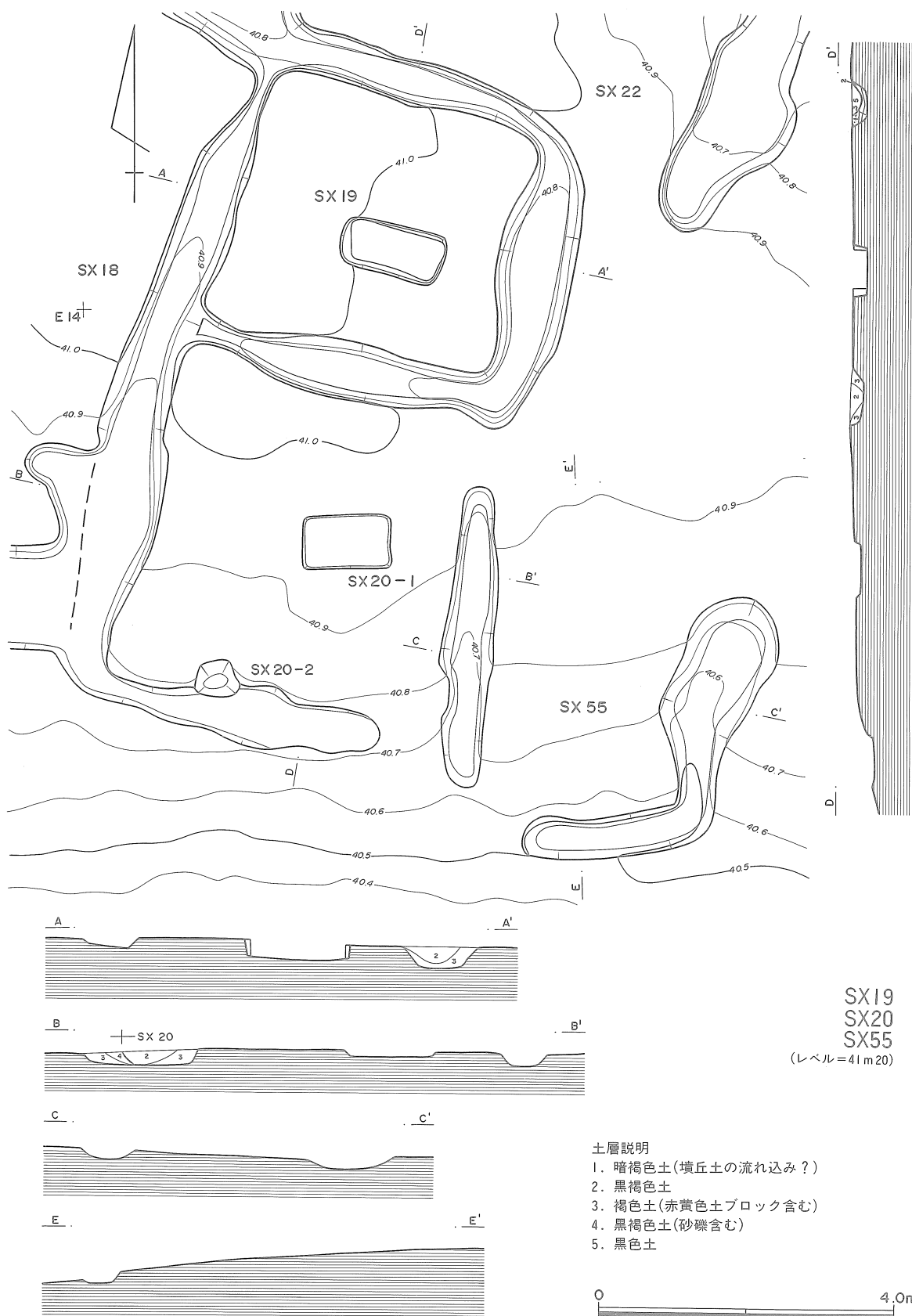


第45図 SX14-1・2・SX15-2主体部実測図

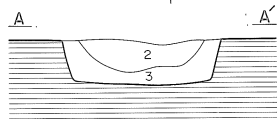
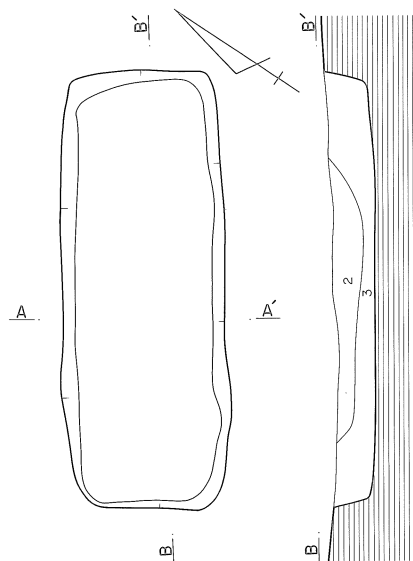


土層説明
 1. 暗褐色土(拳大の礫含む)
 2. 褐色土
 3. 暗赤黄色土(褐色土・黄色土多く含む)

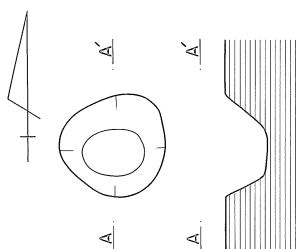
第46図 SX15-1・SX16・SX17-1～3 主体部実測図



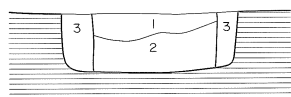
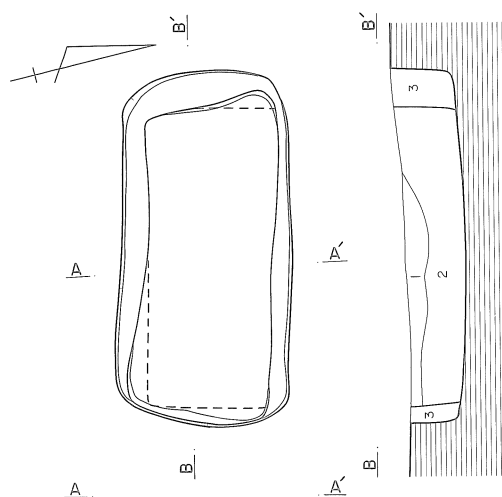
第47図 SX19・SX20・SX55実測図



SX18—1
(レベル=41 m 10)



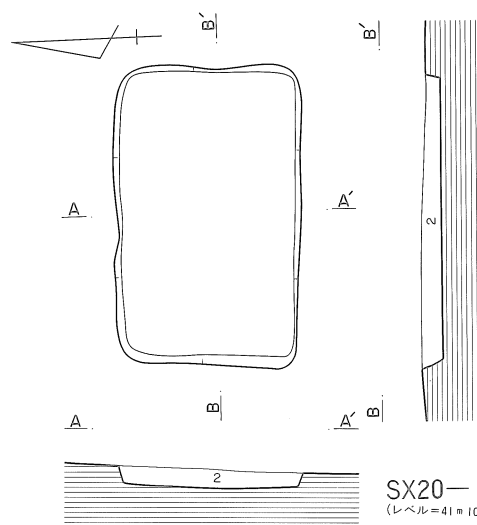
SX18—PI
(レベル=41 m 10)



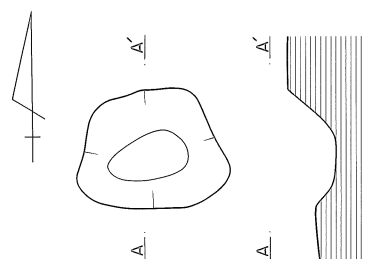
SX19
(レベル=41 m 10)

土層説明

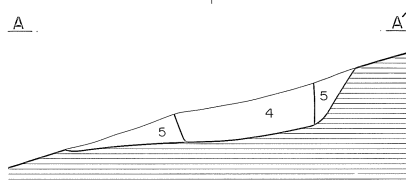
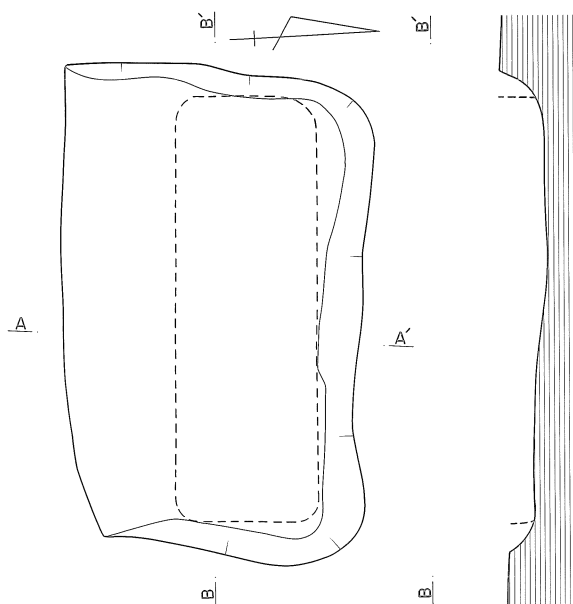
1. 暗褐色土(拳大の礫含む)
2. 褐色土
3. 暗赤黄色土(褐色土・黄色土多く含む)
4. 黒褐色土(砂礫多く含む)
5. 褐色土(砂礫多く含む)



SX20—1
(レベル=41 m 10)



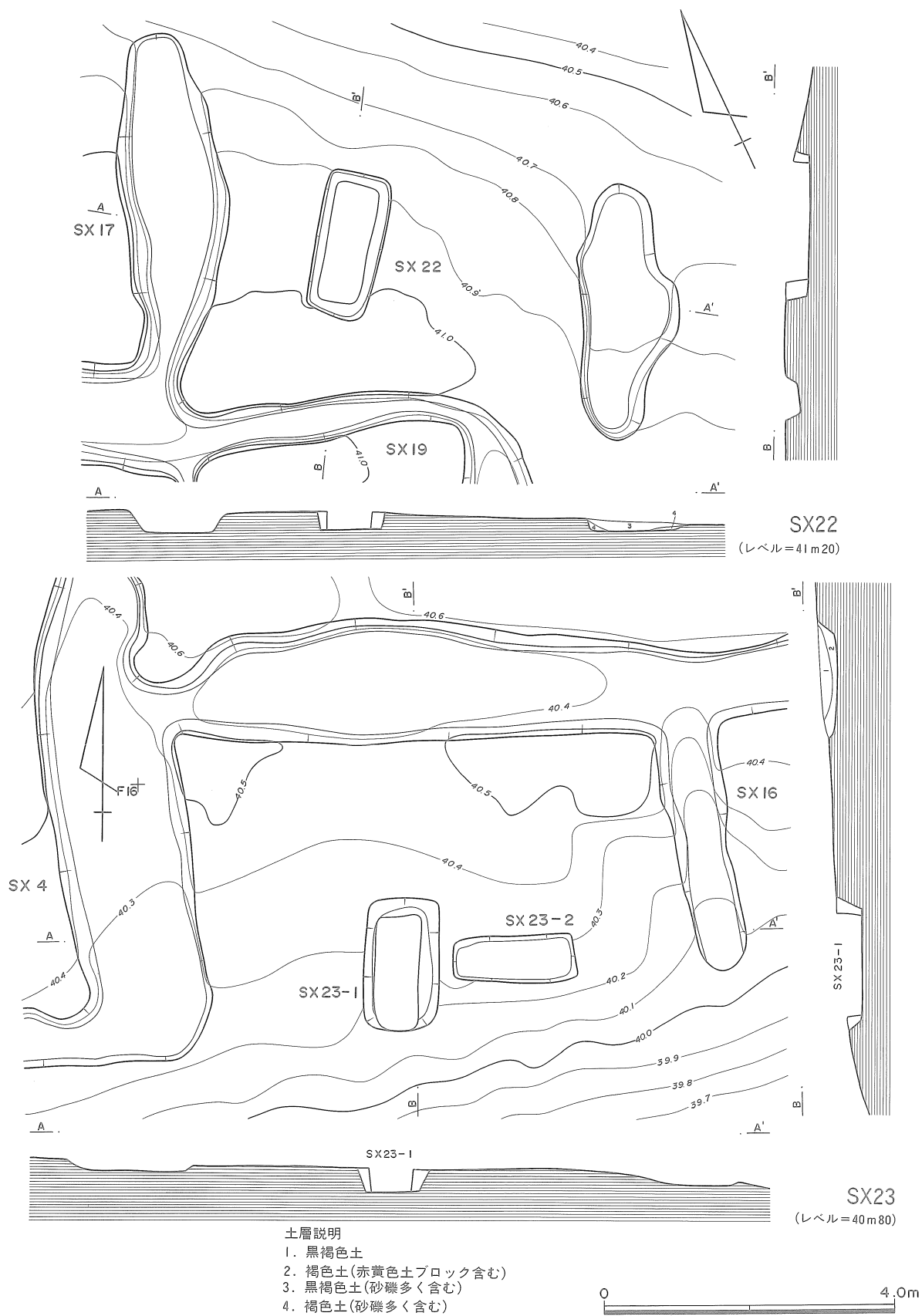
SX20—2
(レベル=40 m 90)

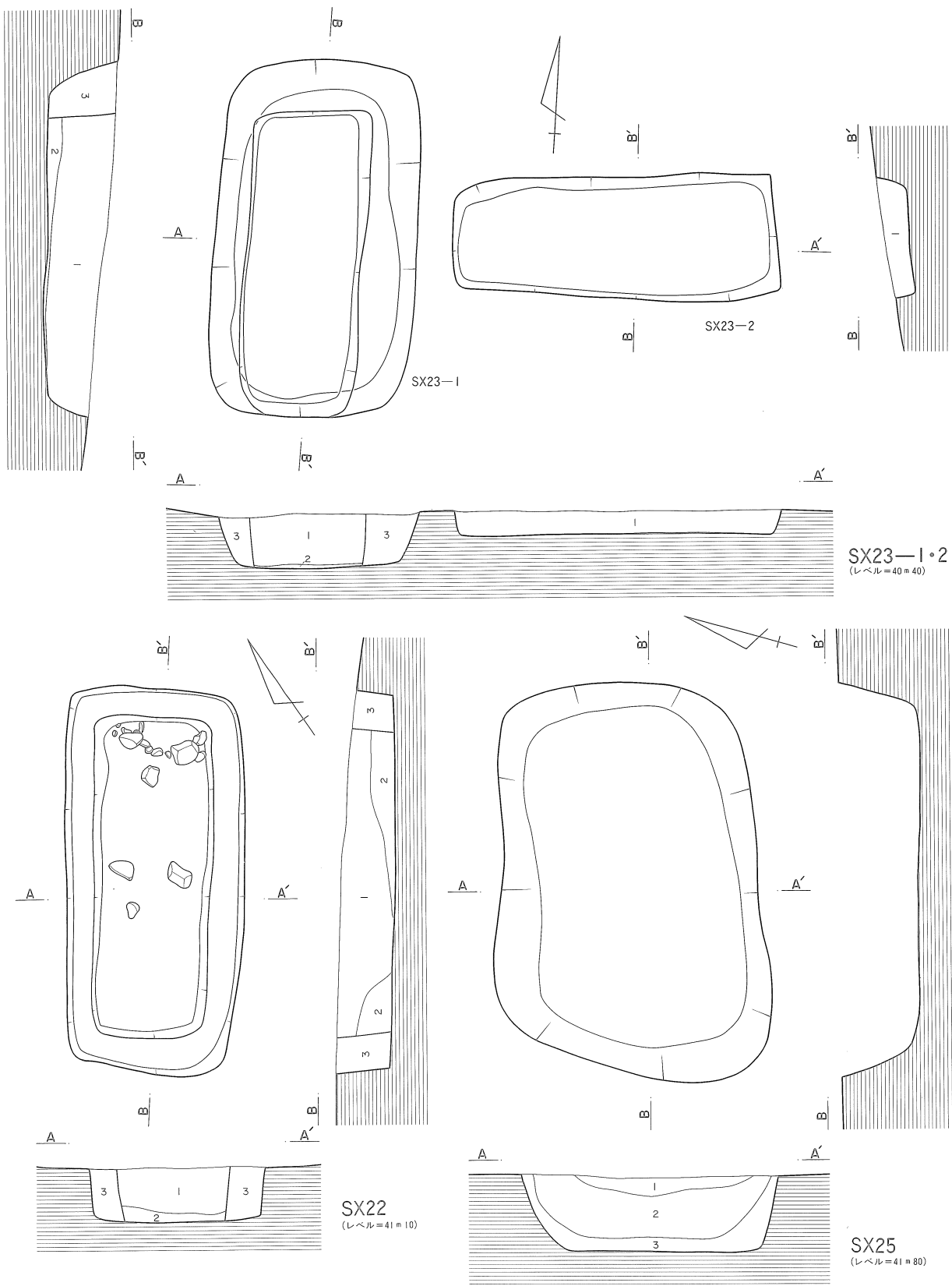


SX21
(レベル=39 m 70)

0 1.0m

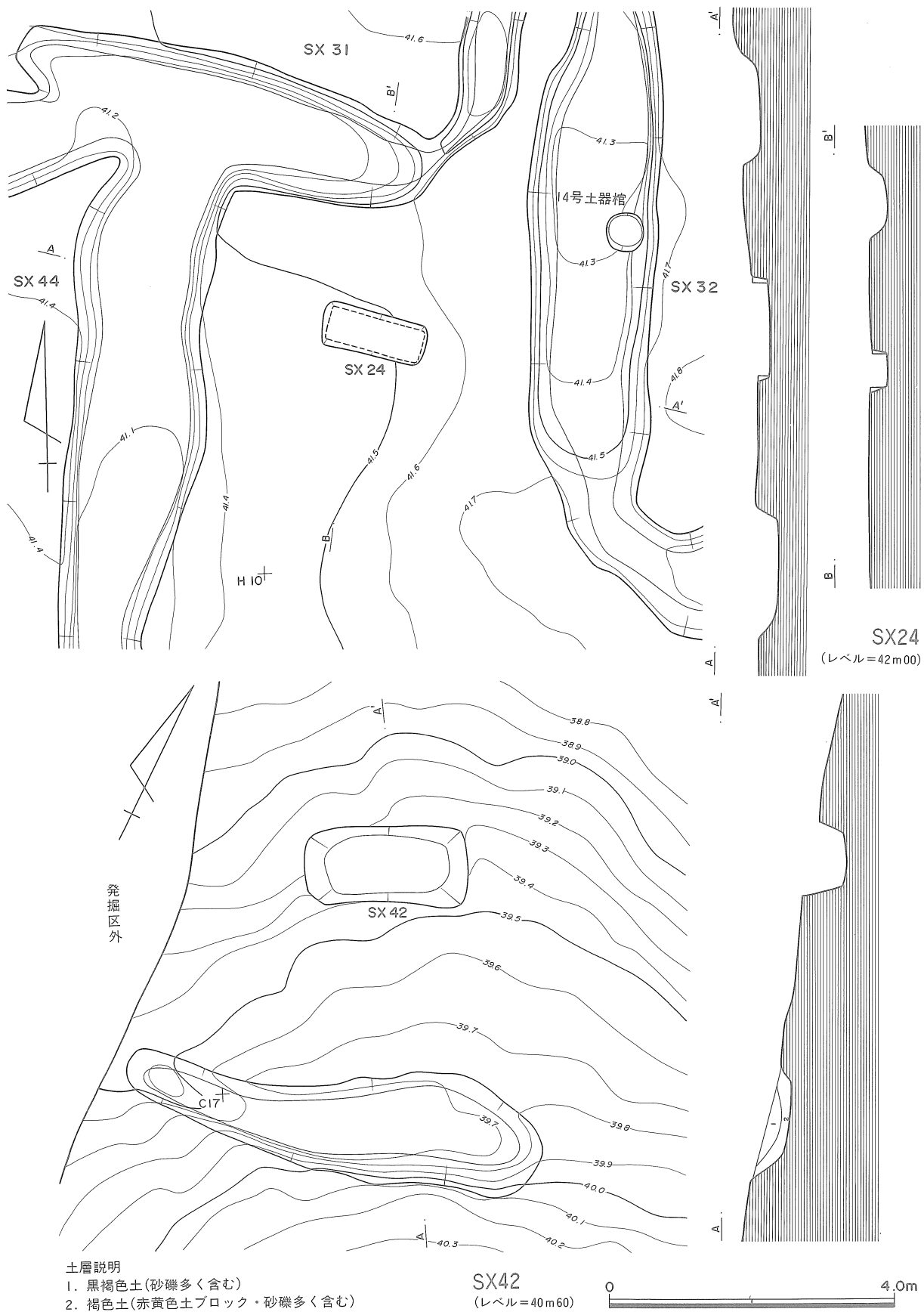
第48図 SX18—1・2・SX19・SX20—1・2・SX21主体部実測図



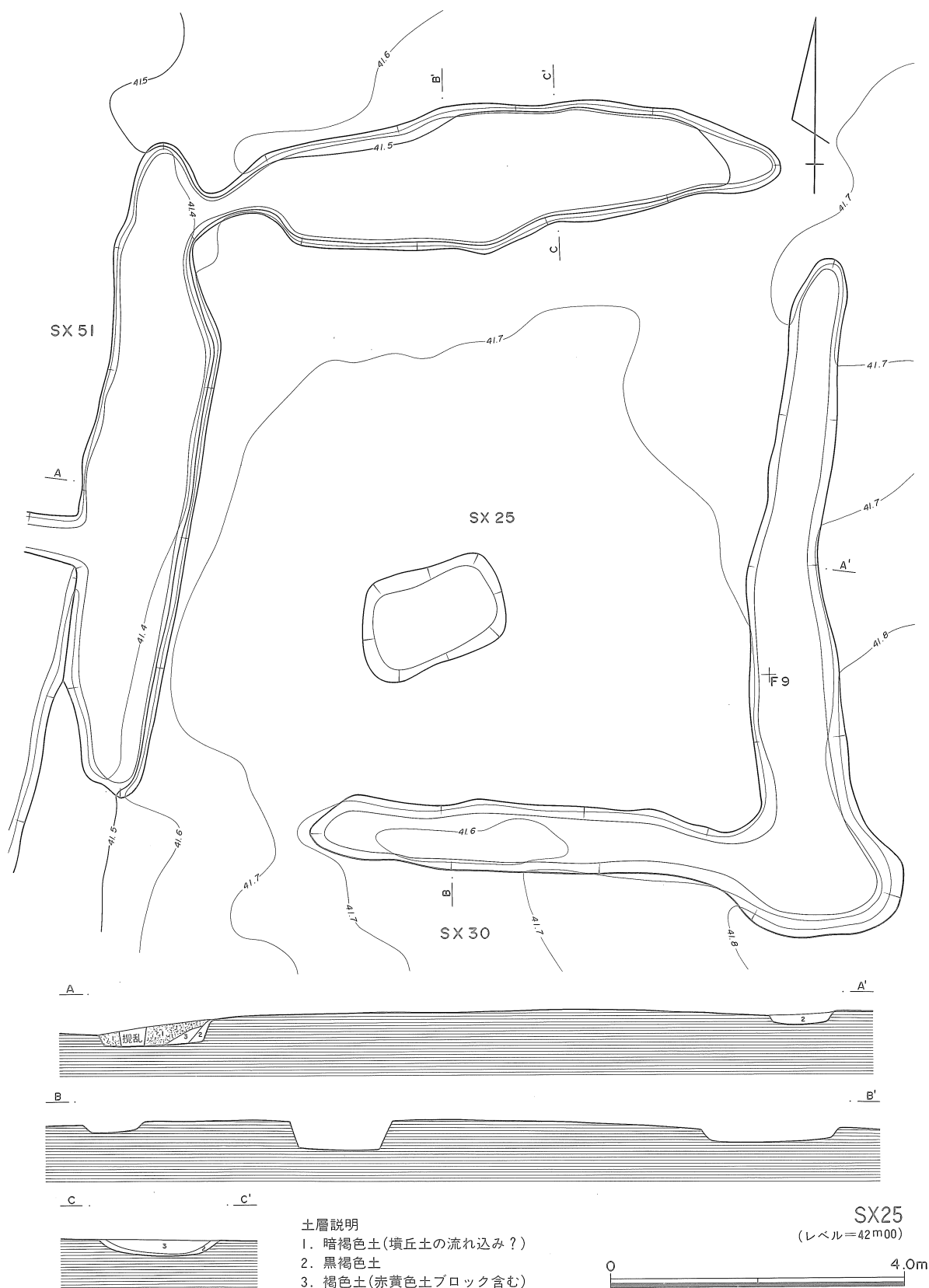


土層説明
 1. 暗褐色土(拳大の礫含む)
 2. 褐色土
 3. 暗赤黄色土(褐色土・黄色土多く含む)

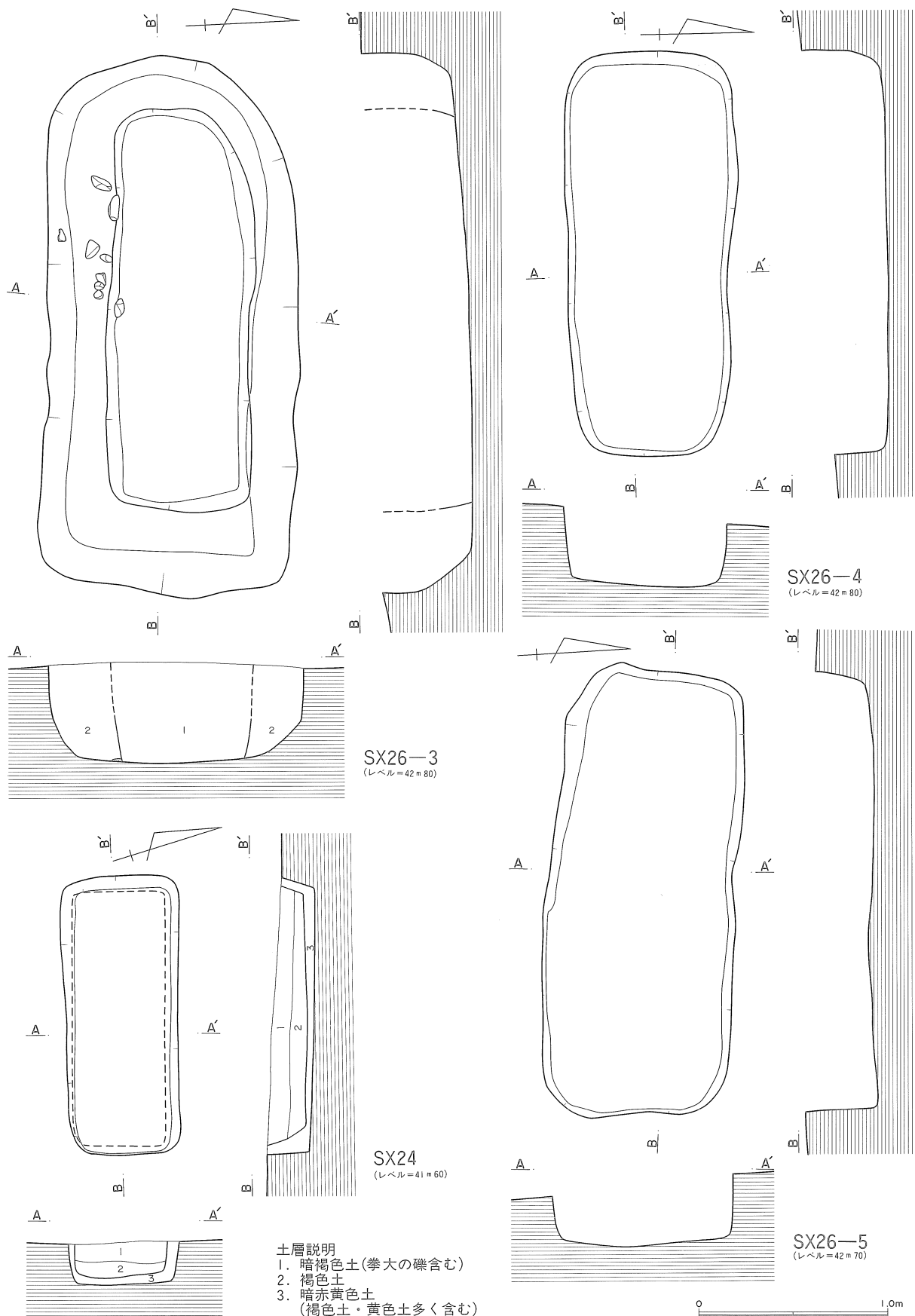
第50図 SX22・SX23—1・2・SX25主体部実測図



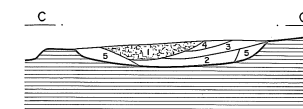
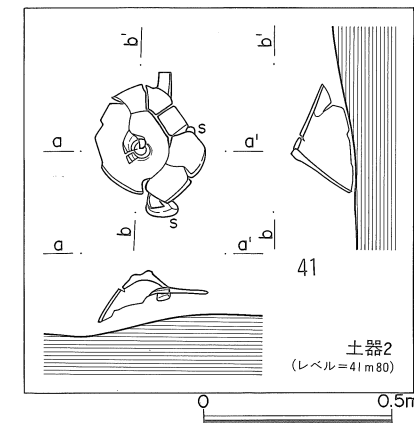
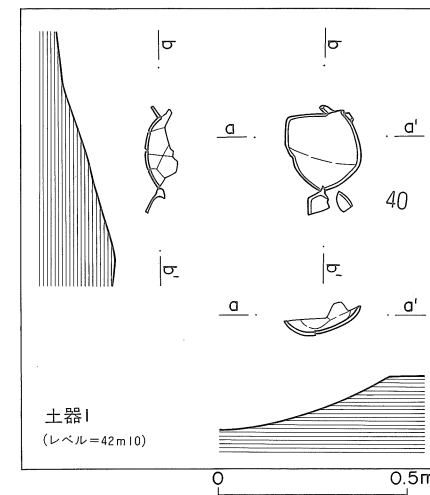
第51図 SX24・SX42実測図



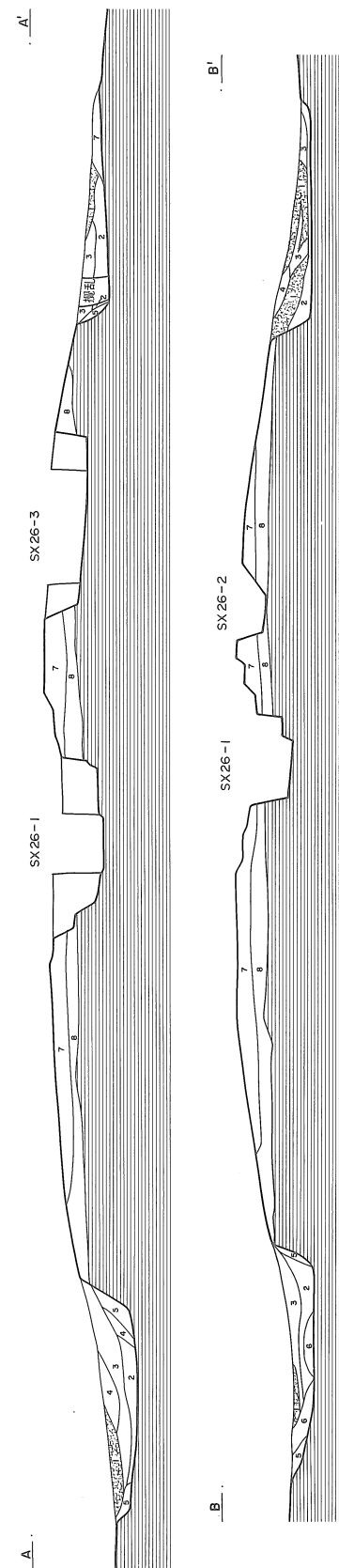
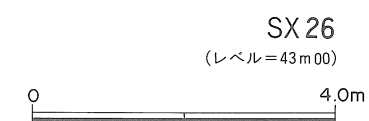
第52図 SX 25実測図



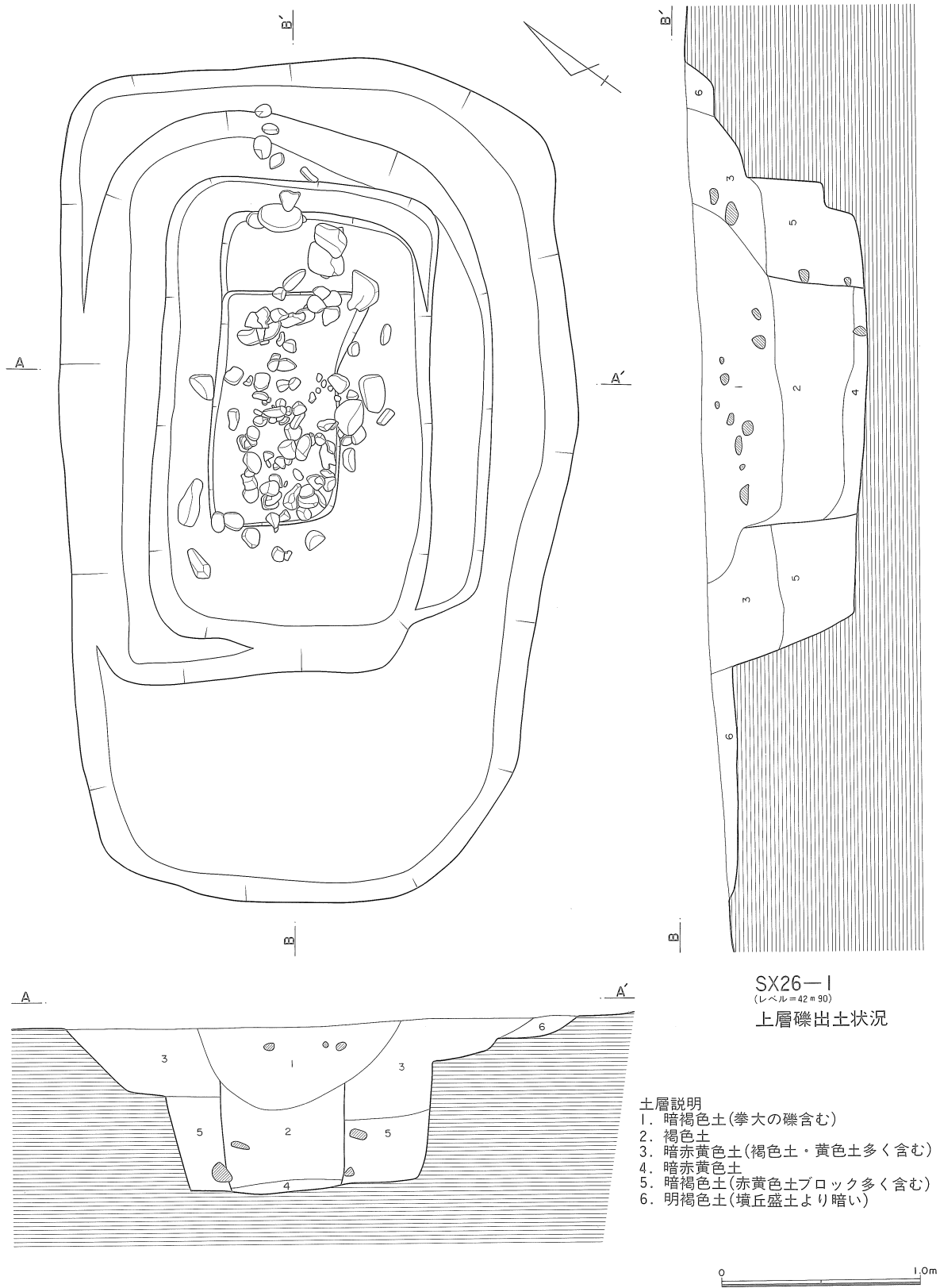
第53図 SX24・SX26—3～5 主体部実測図



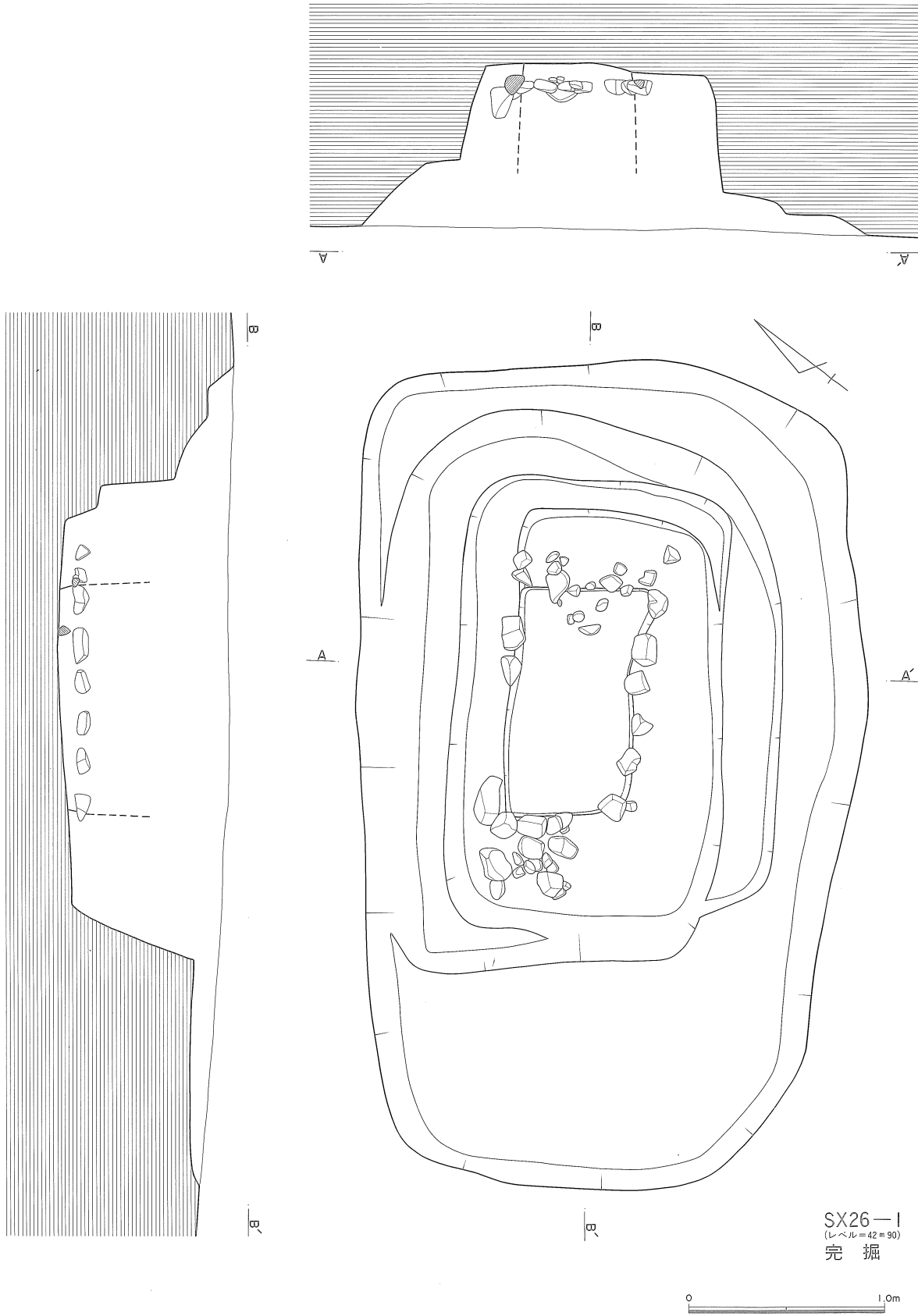
- 土層説明
1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
 2. 黒褐色土
 3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)
 4. 黒褐色土(暗褐色土ブロック多く含む)
 5. 黒色土(やわらかい)
 6. 明褐色土
 7. 褐色土(赤黄色土ブロック多く含む)
 8. 黒色土(しまっている弥生時代表土)



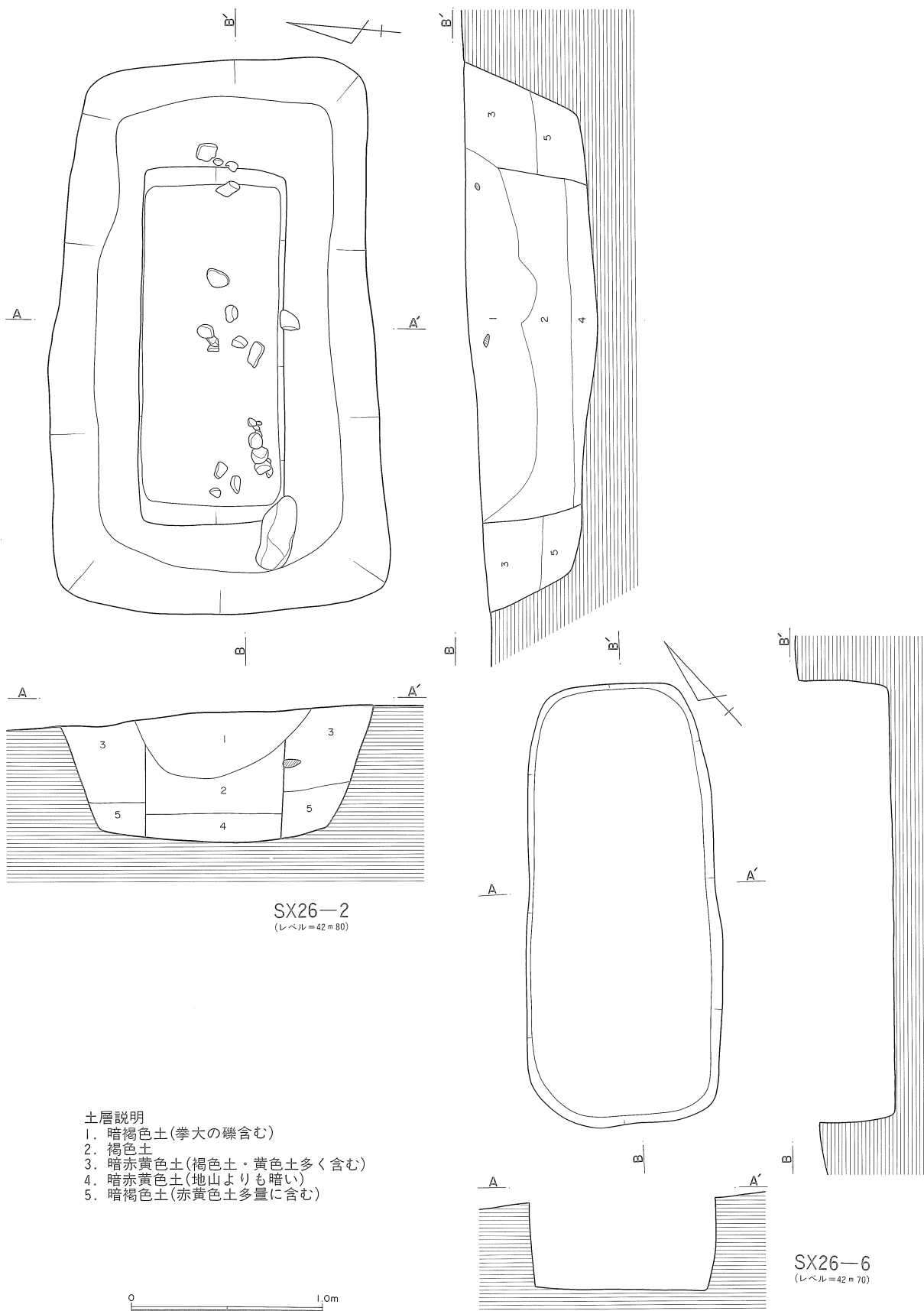
第54図 SX 26実測図



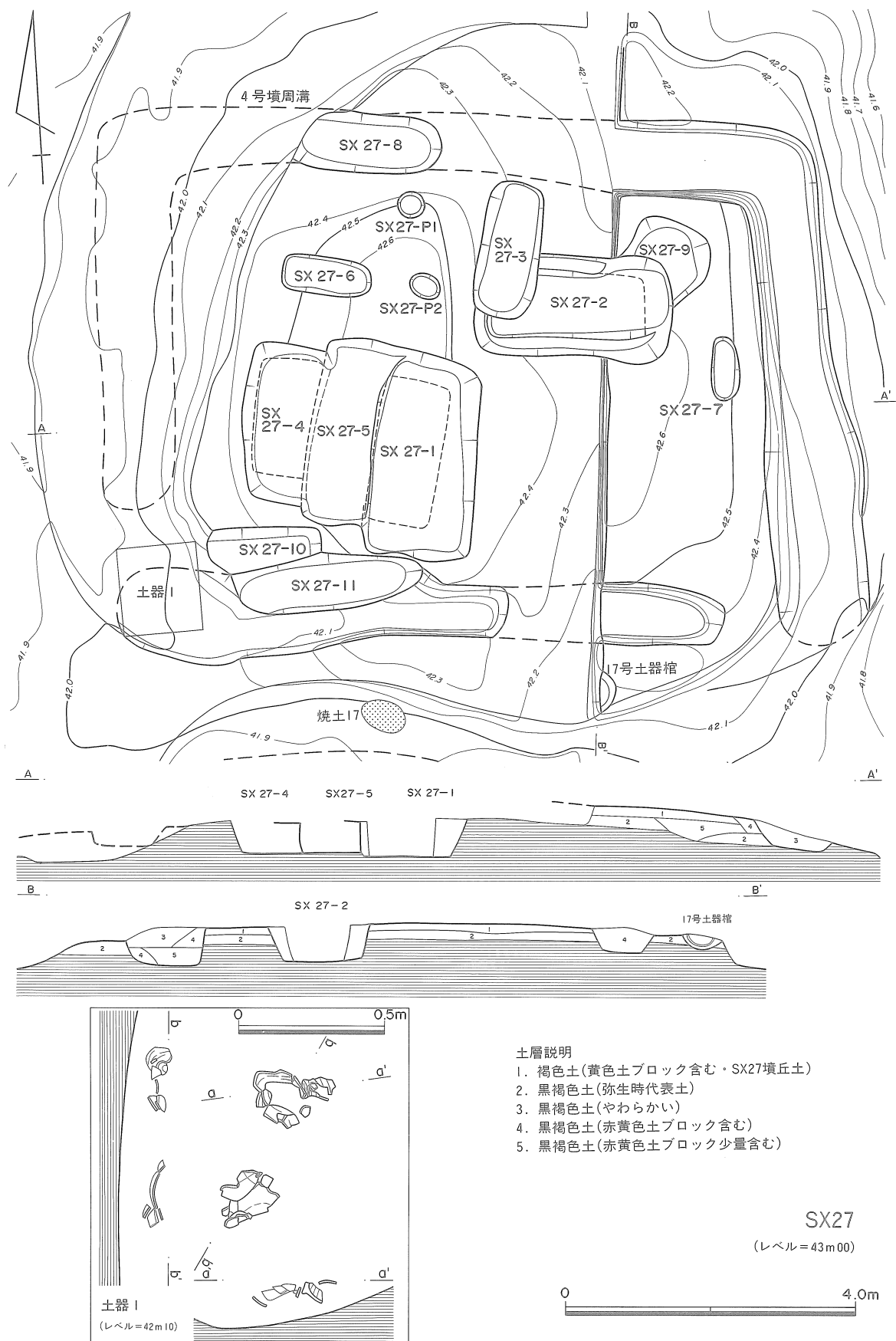
第55図 SX26-1 主体部上層礫出土状況実測図

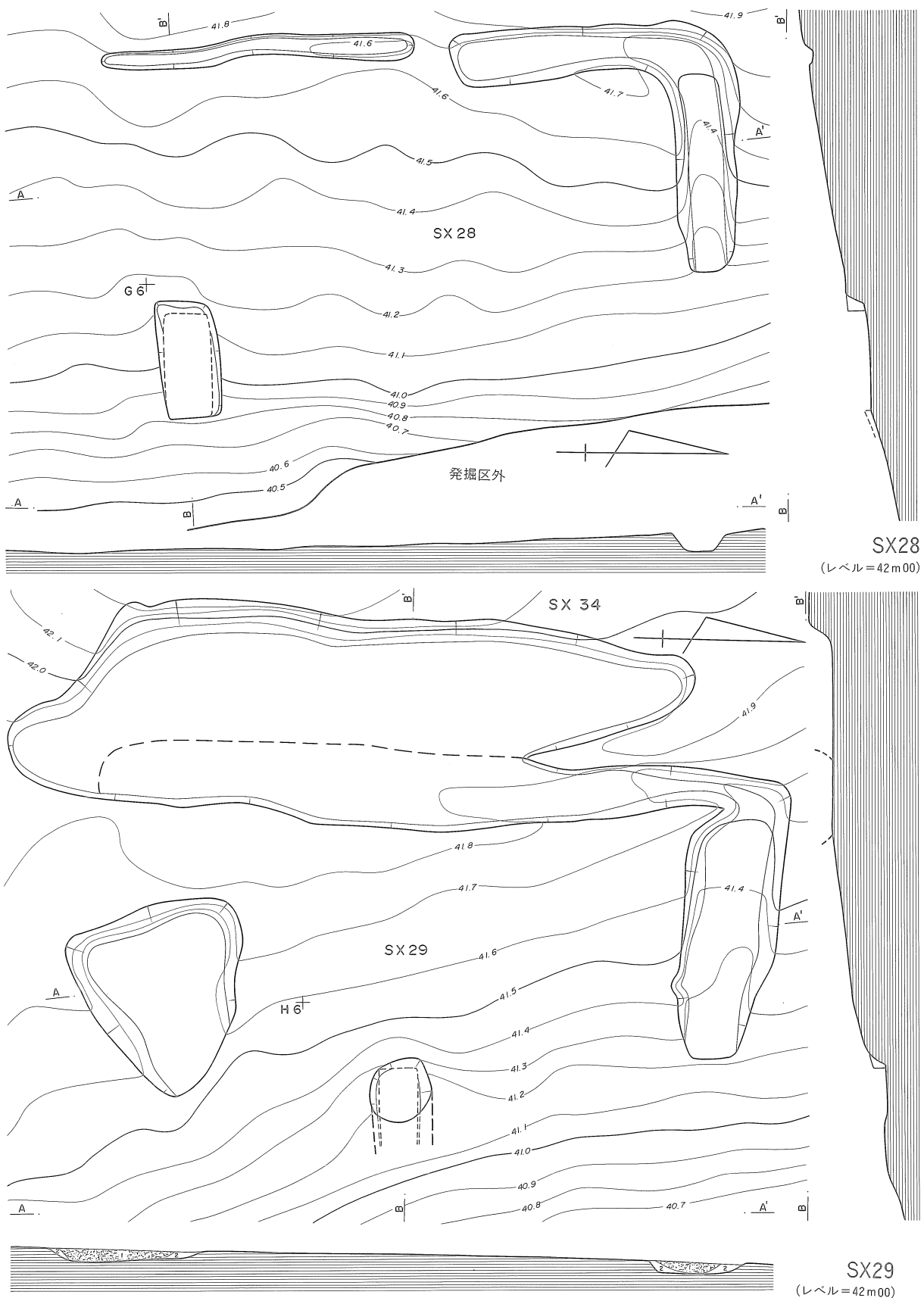


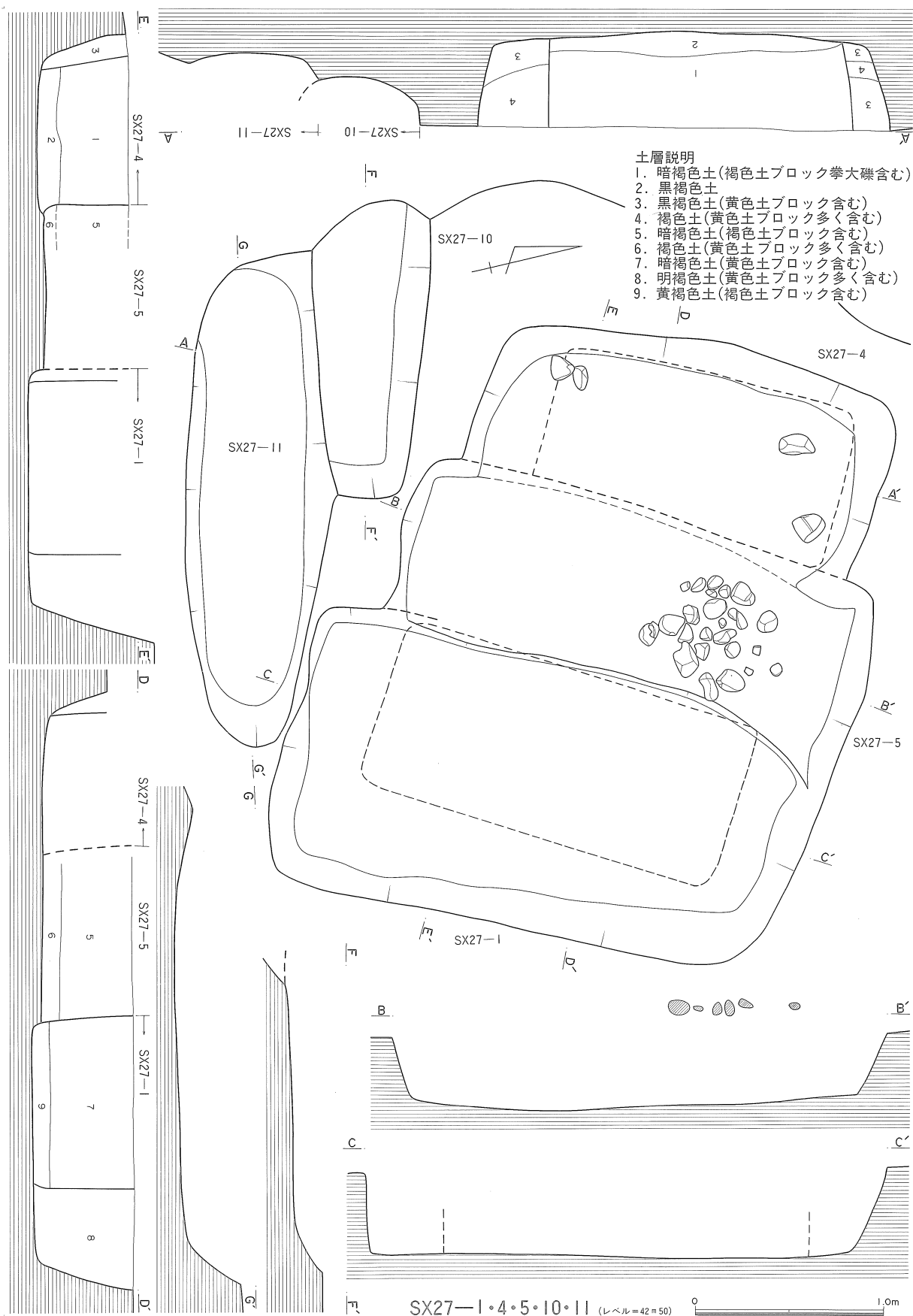
第56図 SX26-1 主体部実測図

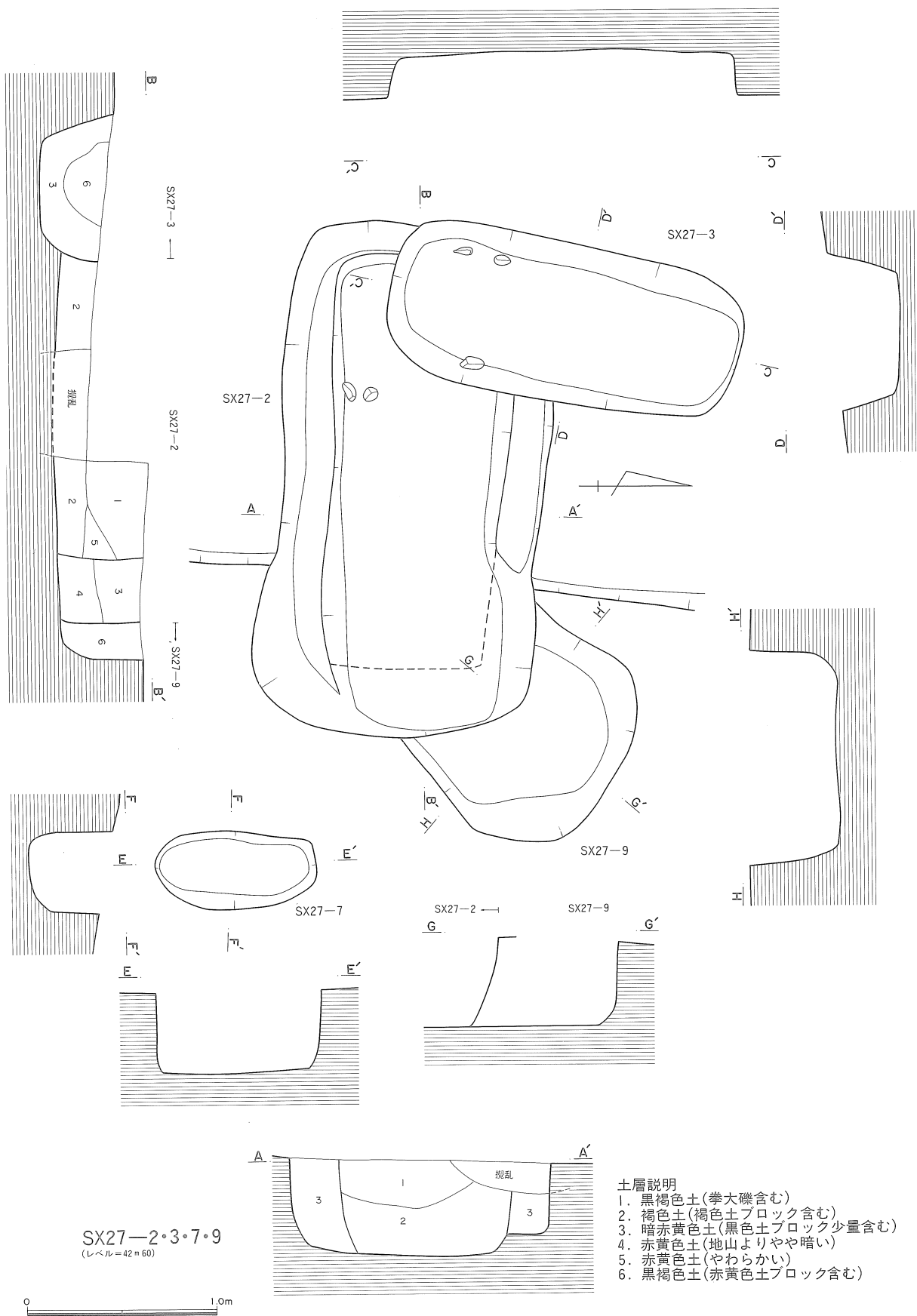


第57図 SX26—2・6 主体部実測図

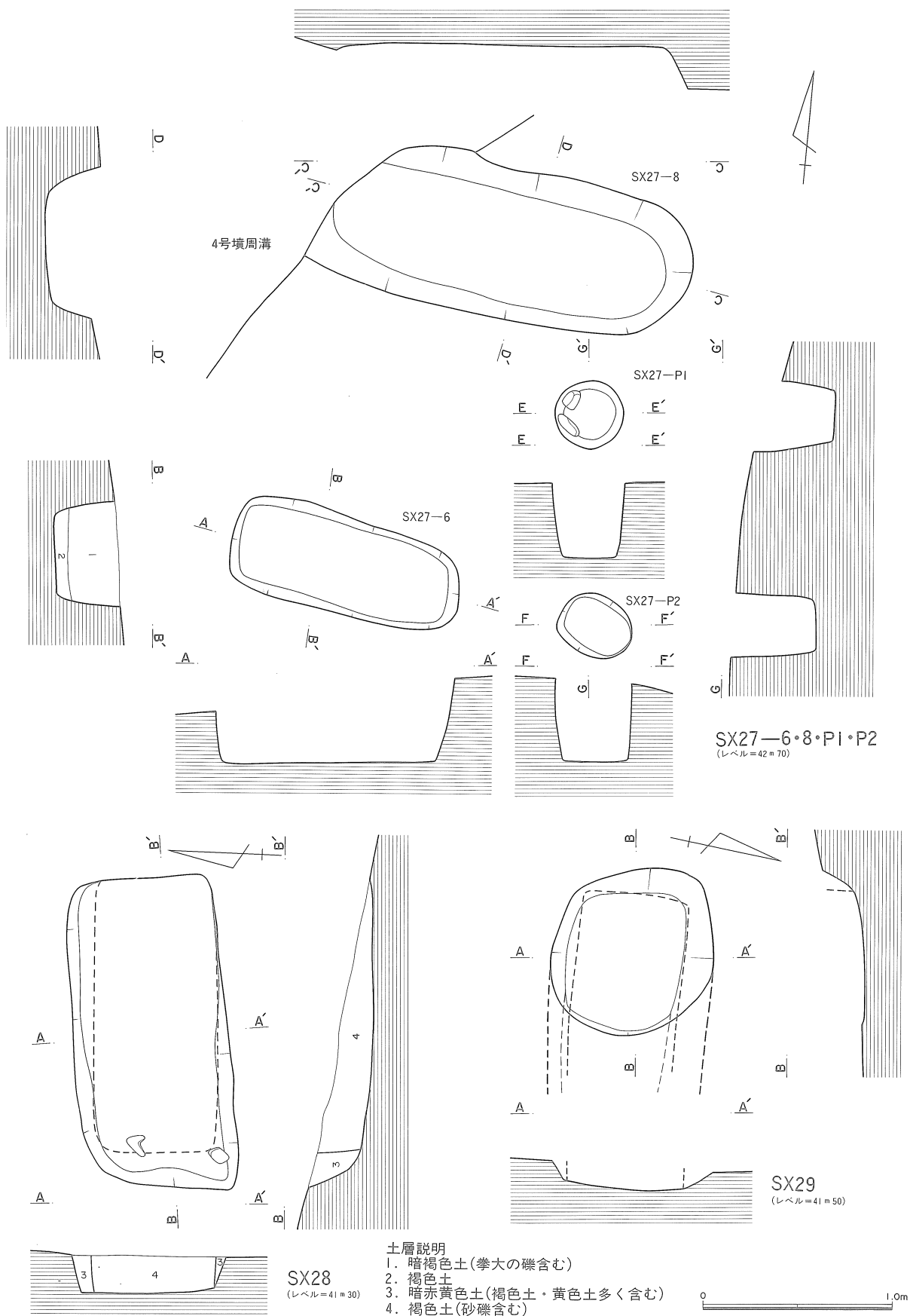




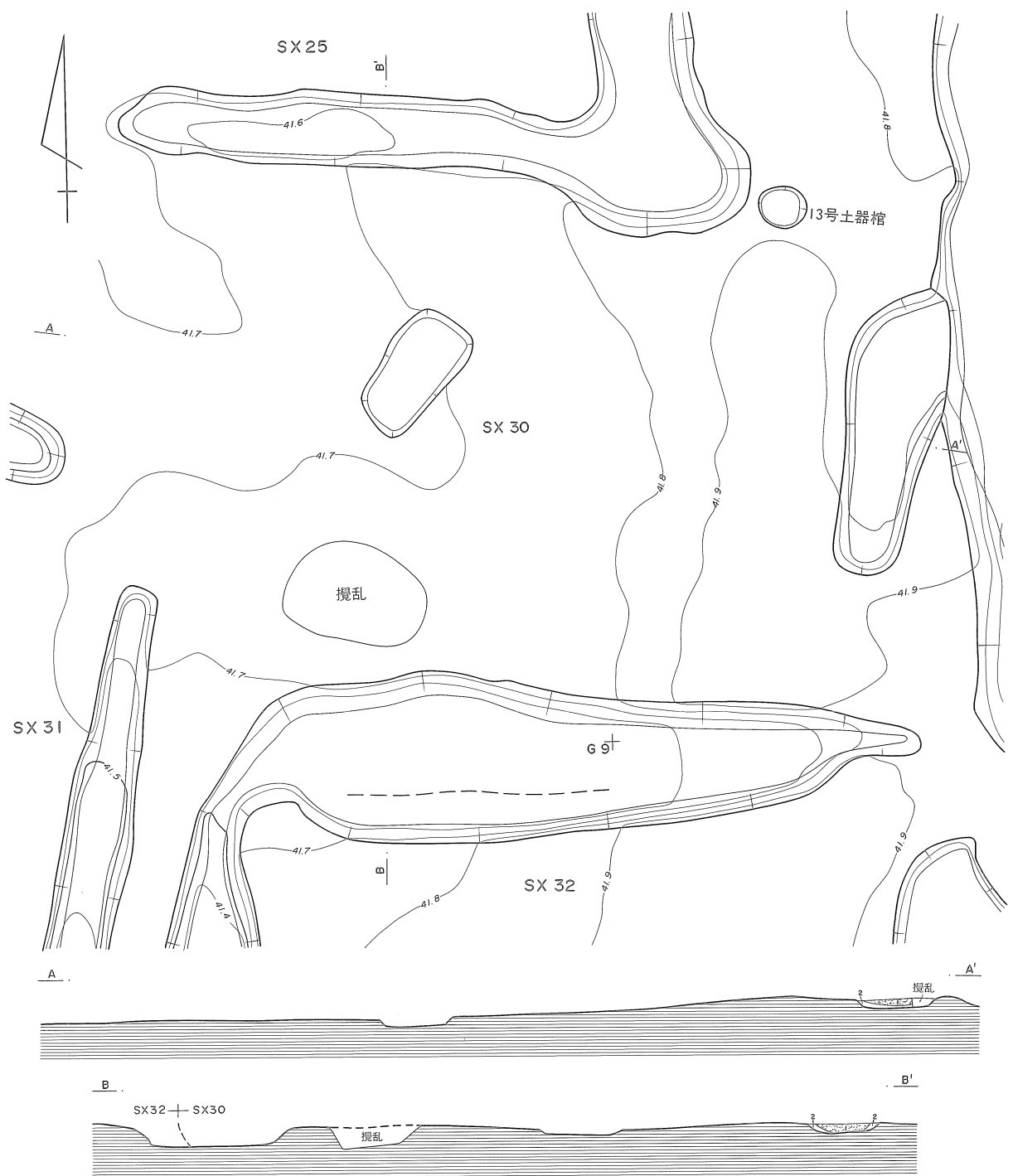




第61図 SX27-2・3・7・9主体部実測図



第62図 SX27-6・8・P1・P2・SX28・SX29主体部実測図

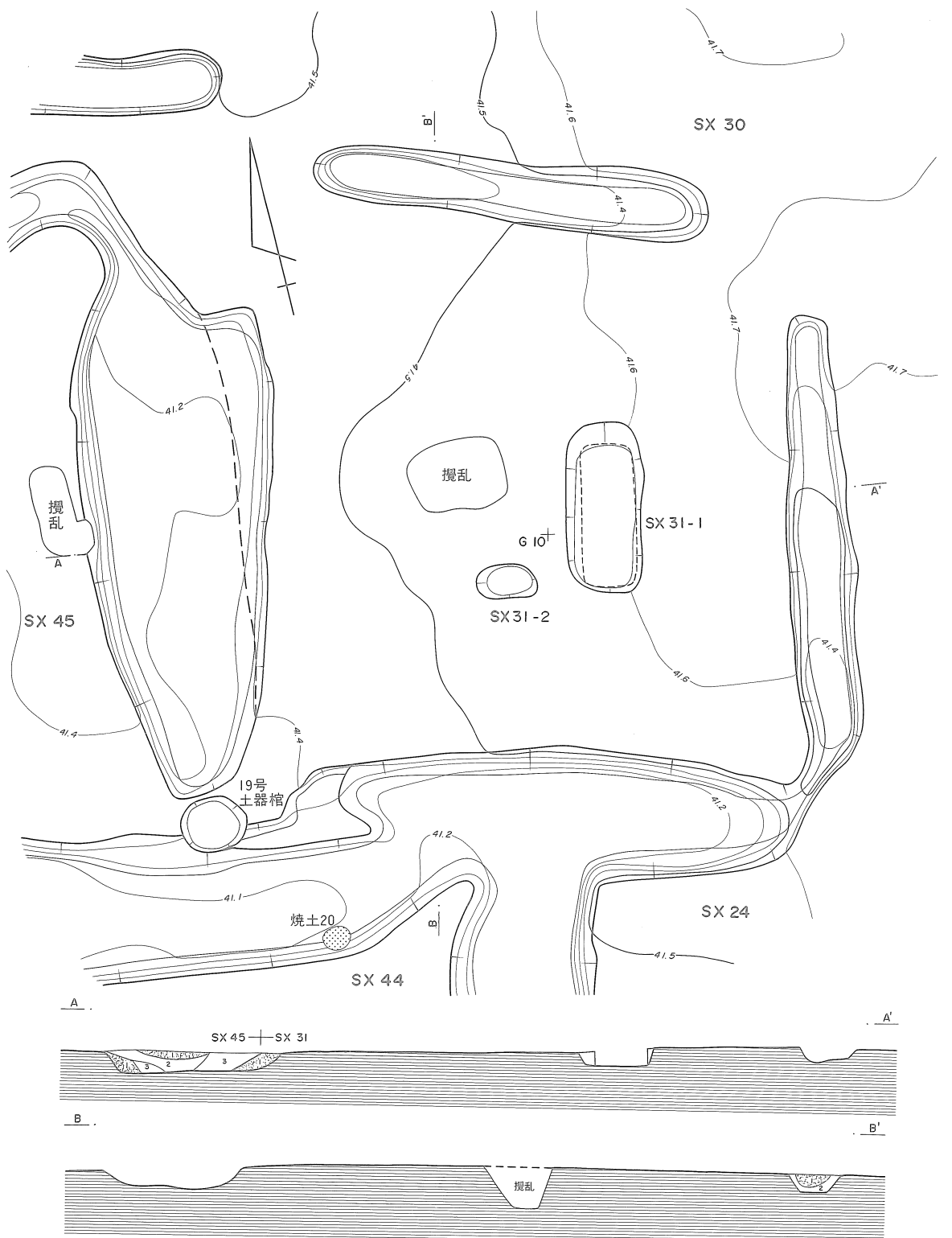


- 土層説明
 1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
 2. 黒褐色土

SX30
 (レベル=42m20)

0 4.0m

第63図 SX30実測図

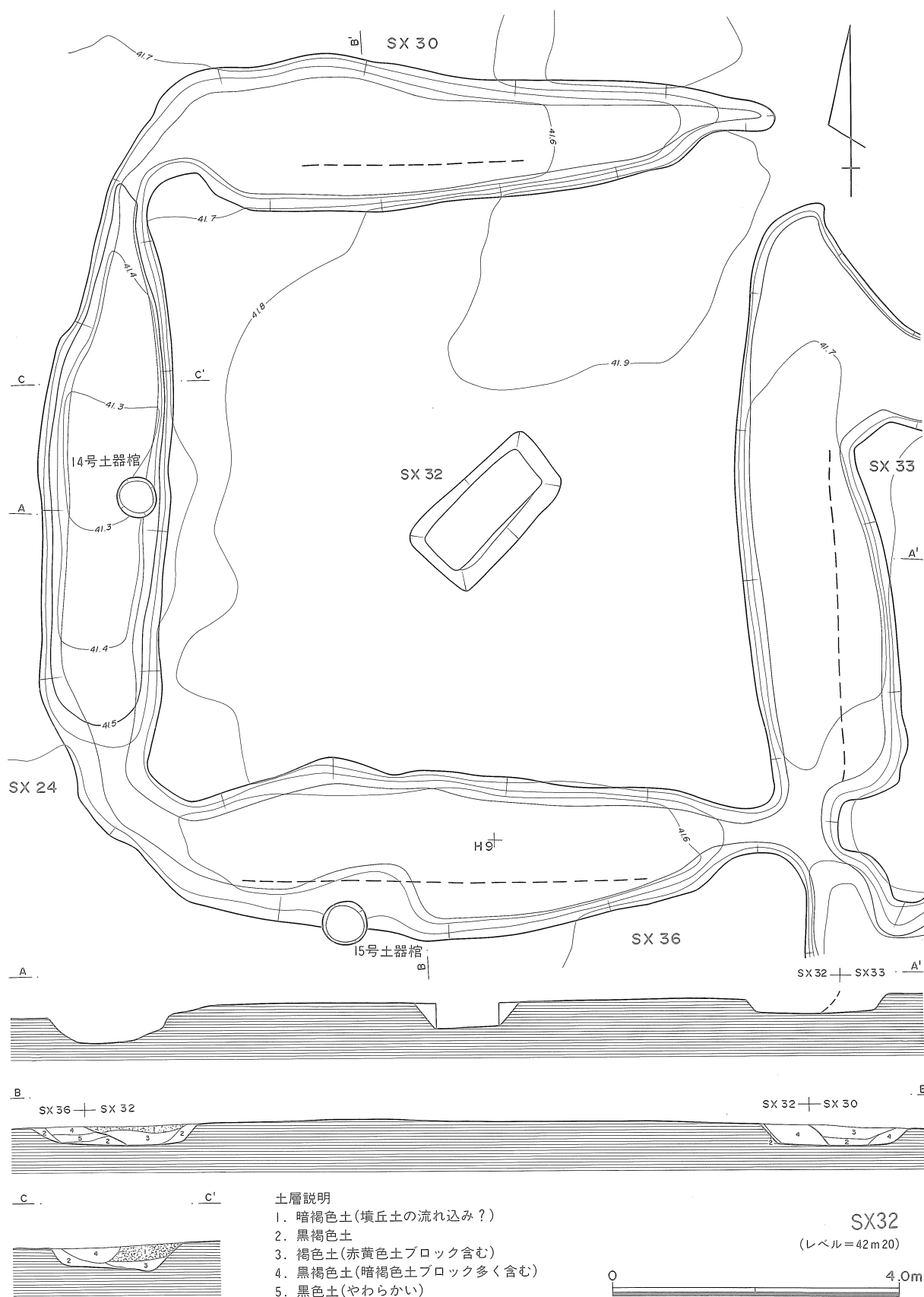


- 土層説明
1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
 2. 黒褐色土
 3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)

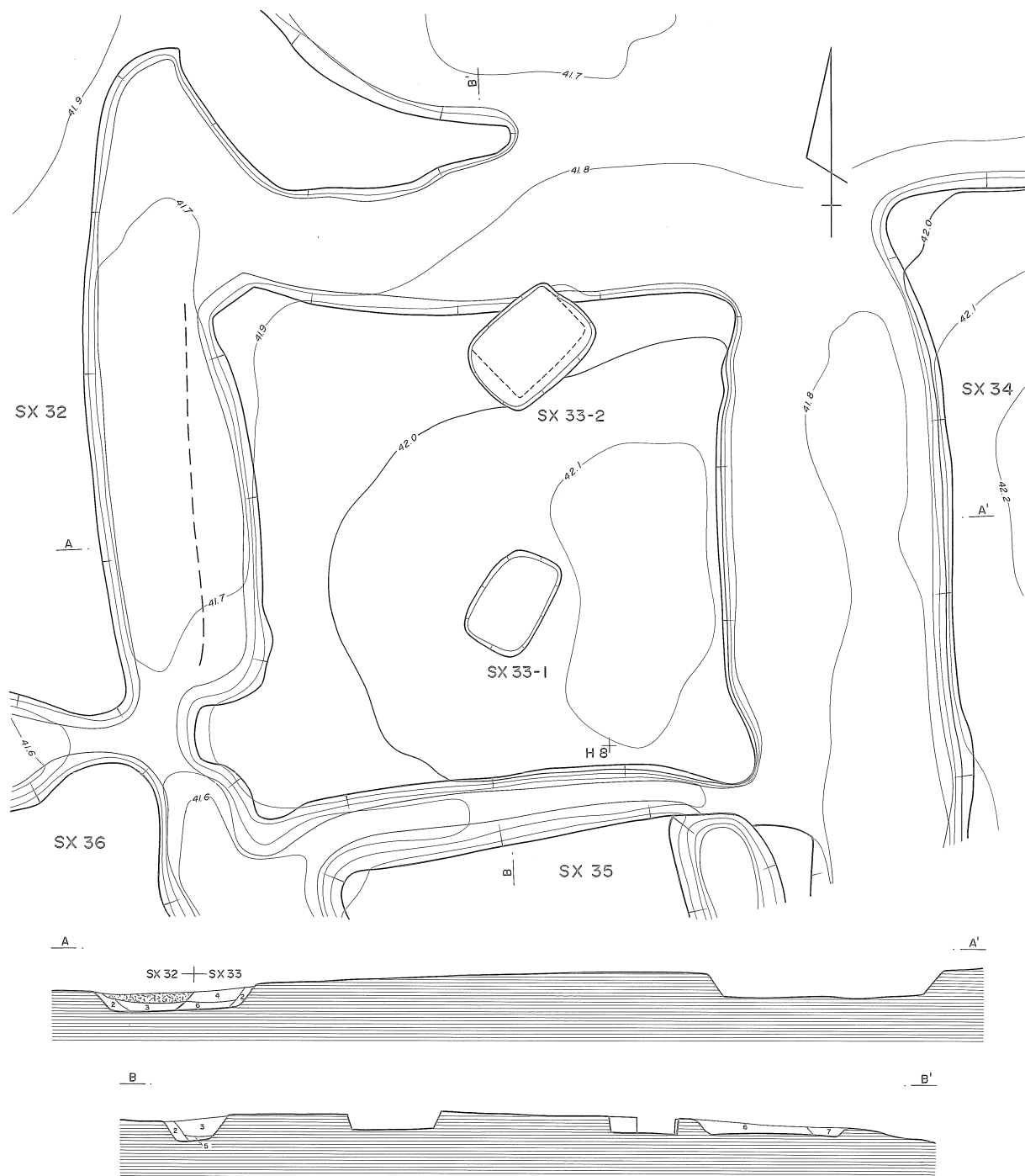
SX31
(レベル=42m00)

0 4.0m

第64図 SX31実測図



第65図 SX 32実測図



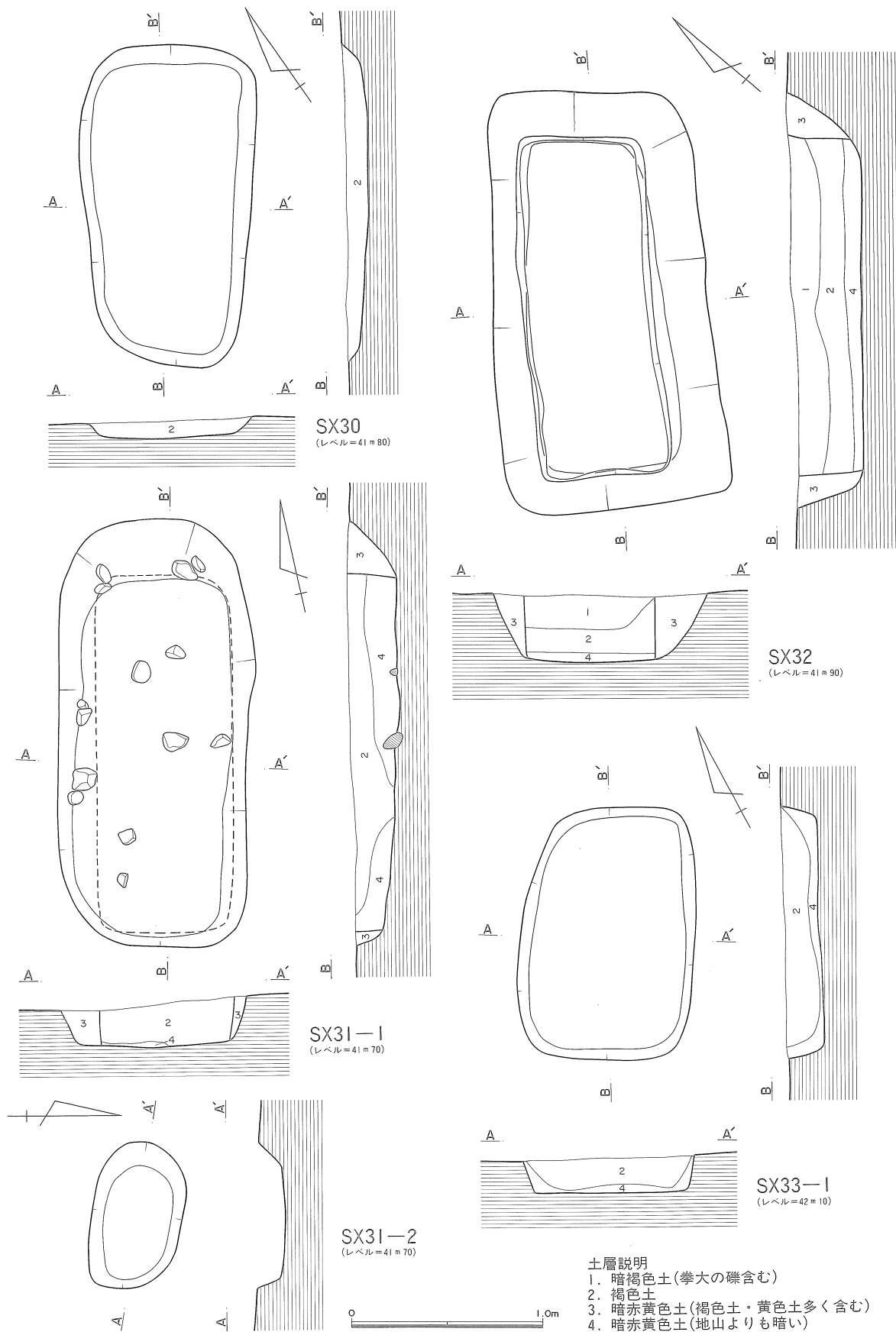
土層説明

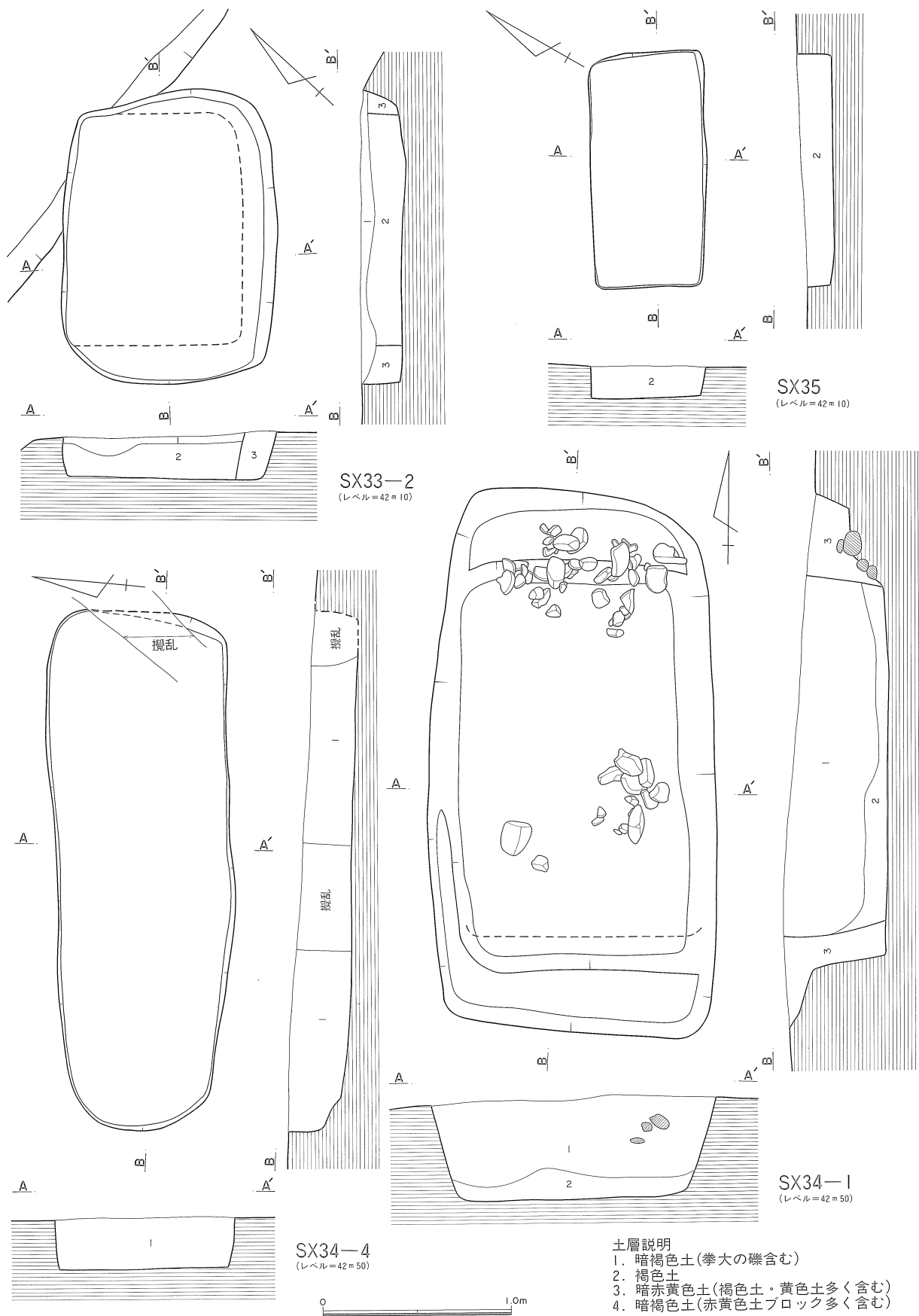
1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
2. 黒褐色土
3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)
4. 黒褐色土(暗褐色土ブロック多く含む)
5. 黒色土(やわらかい)
6. 明褐色土
7. 明褐色土(砂礫多く含む)

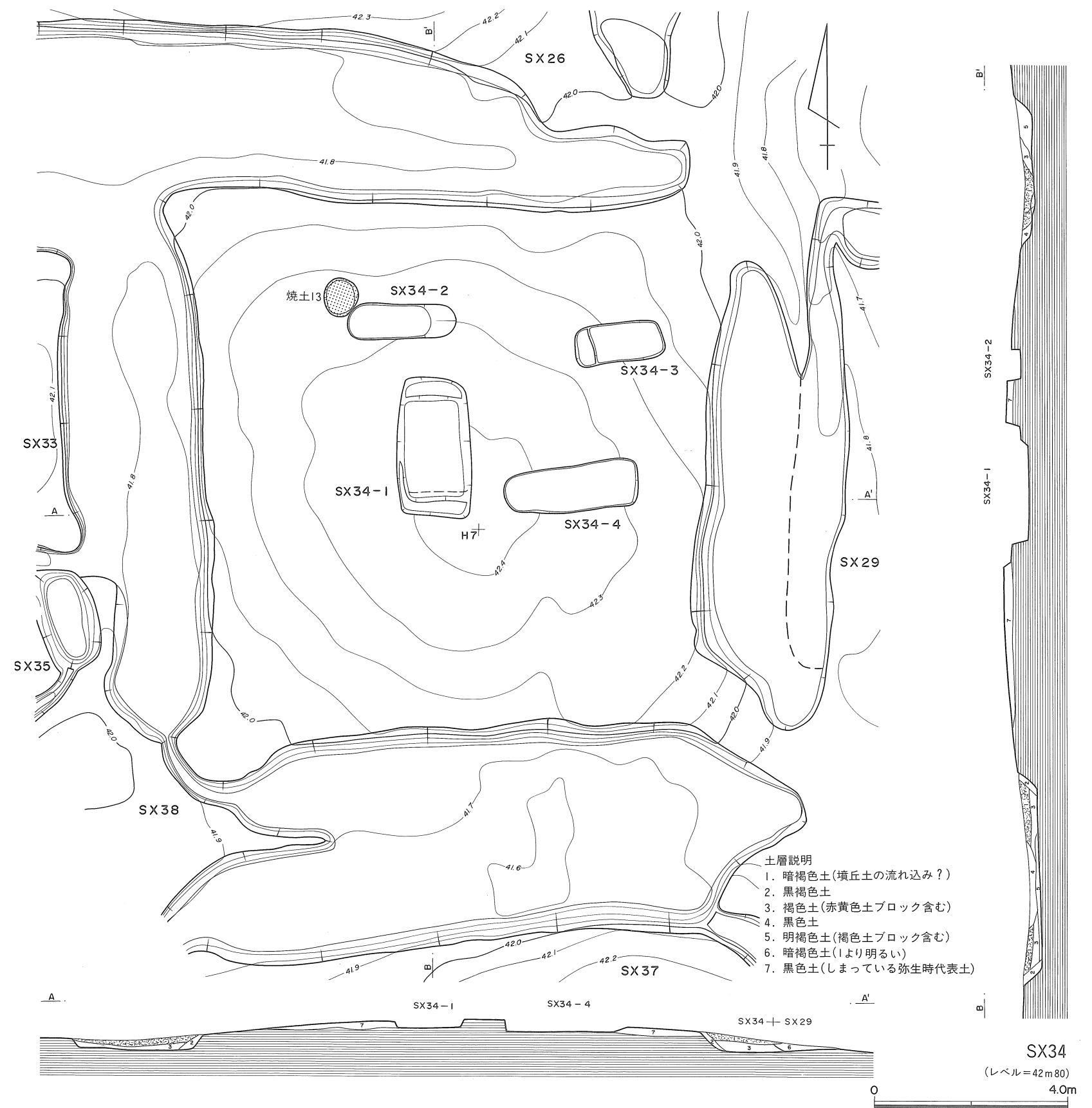
SX33
(レベル=42m40)

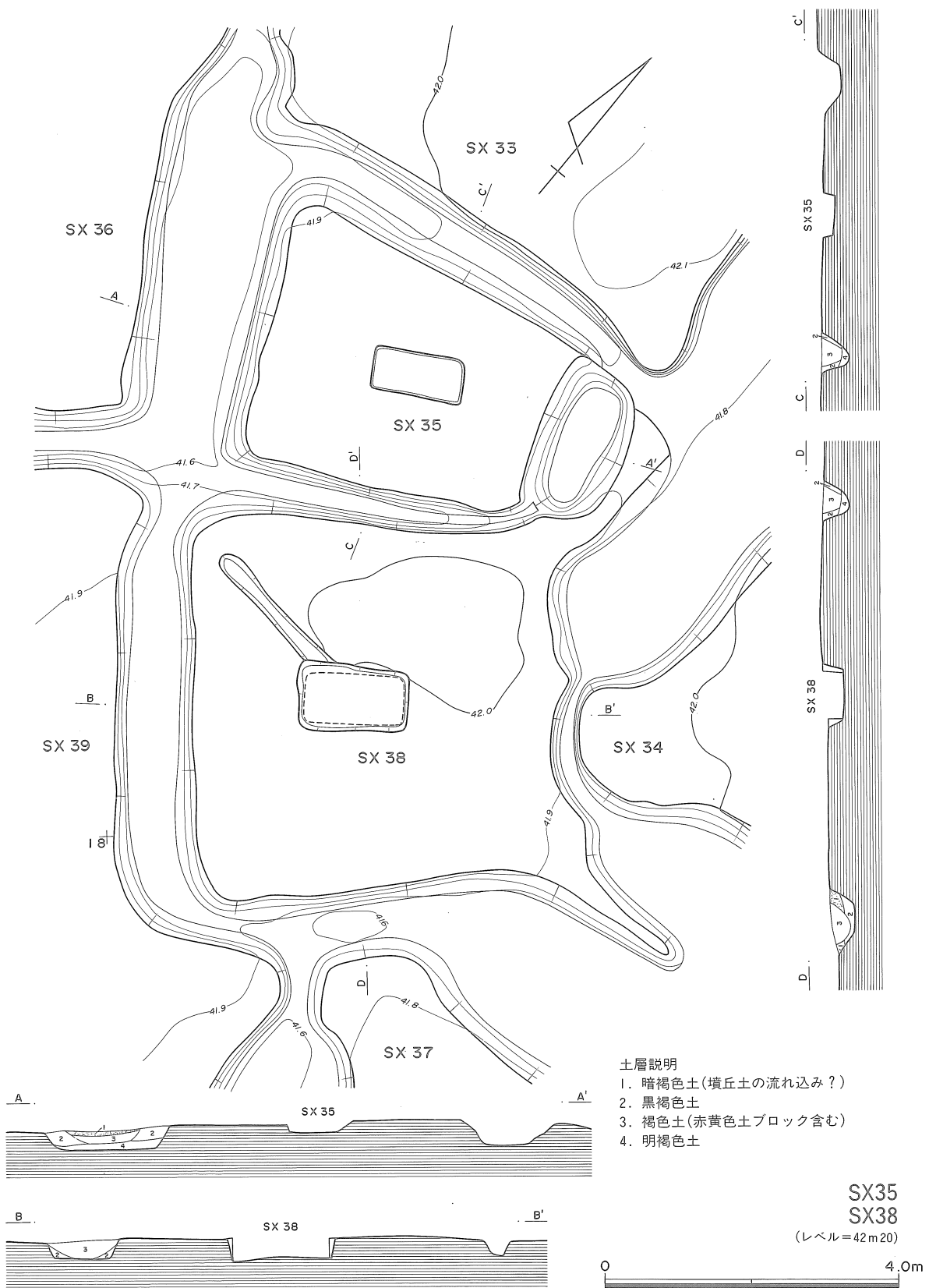
0 4.0m

第66図 SX33実測図

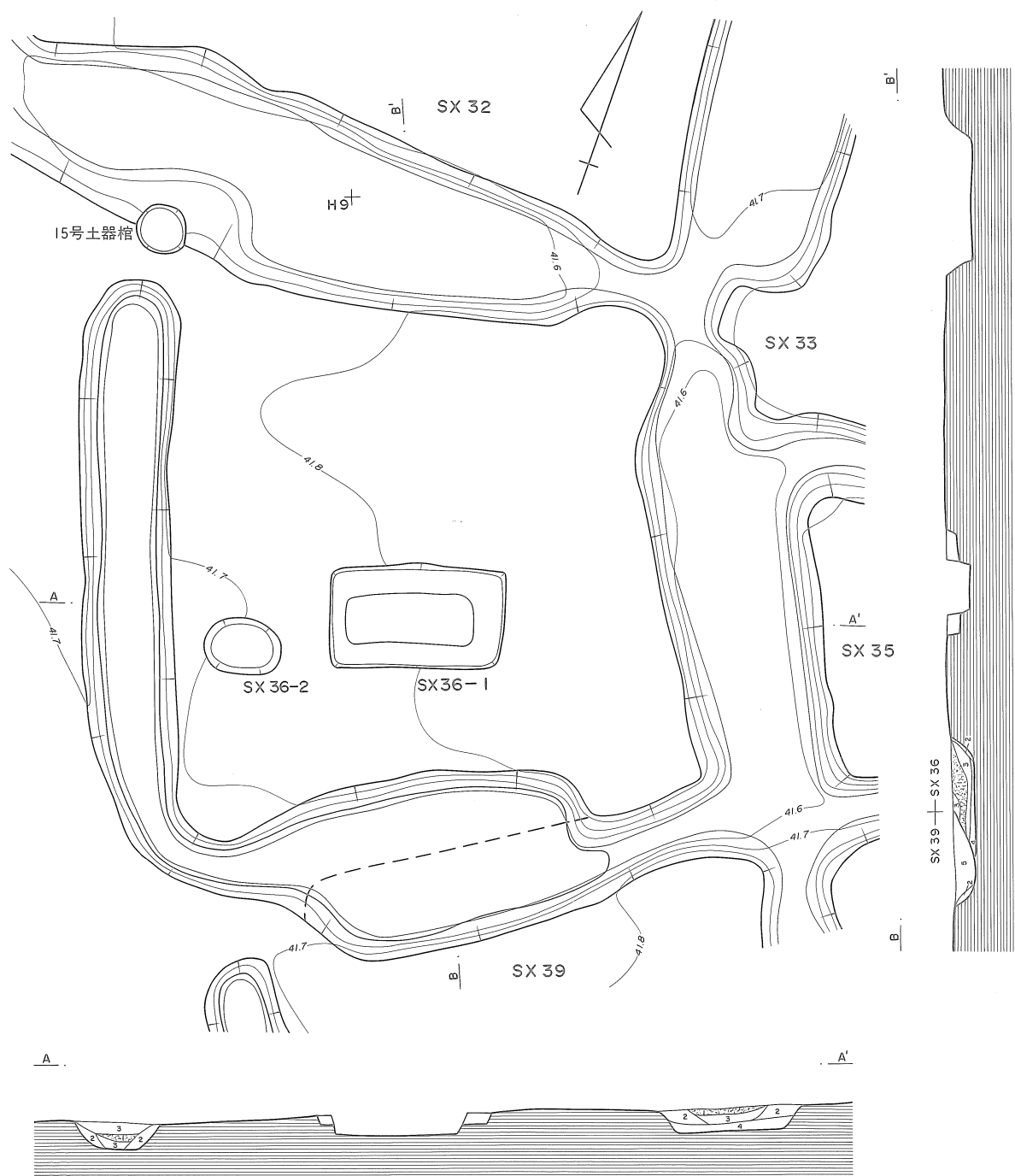








第70図 SX35・SX38実測図

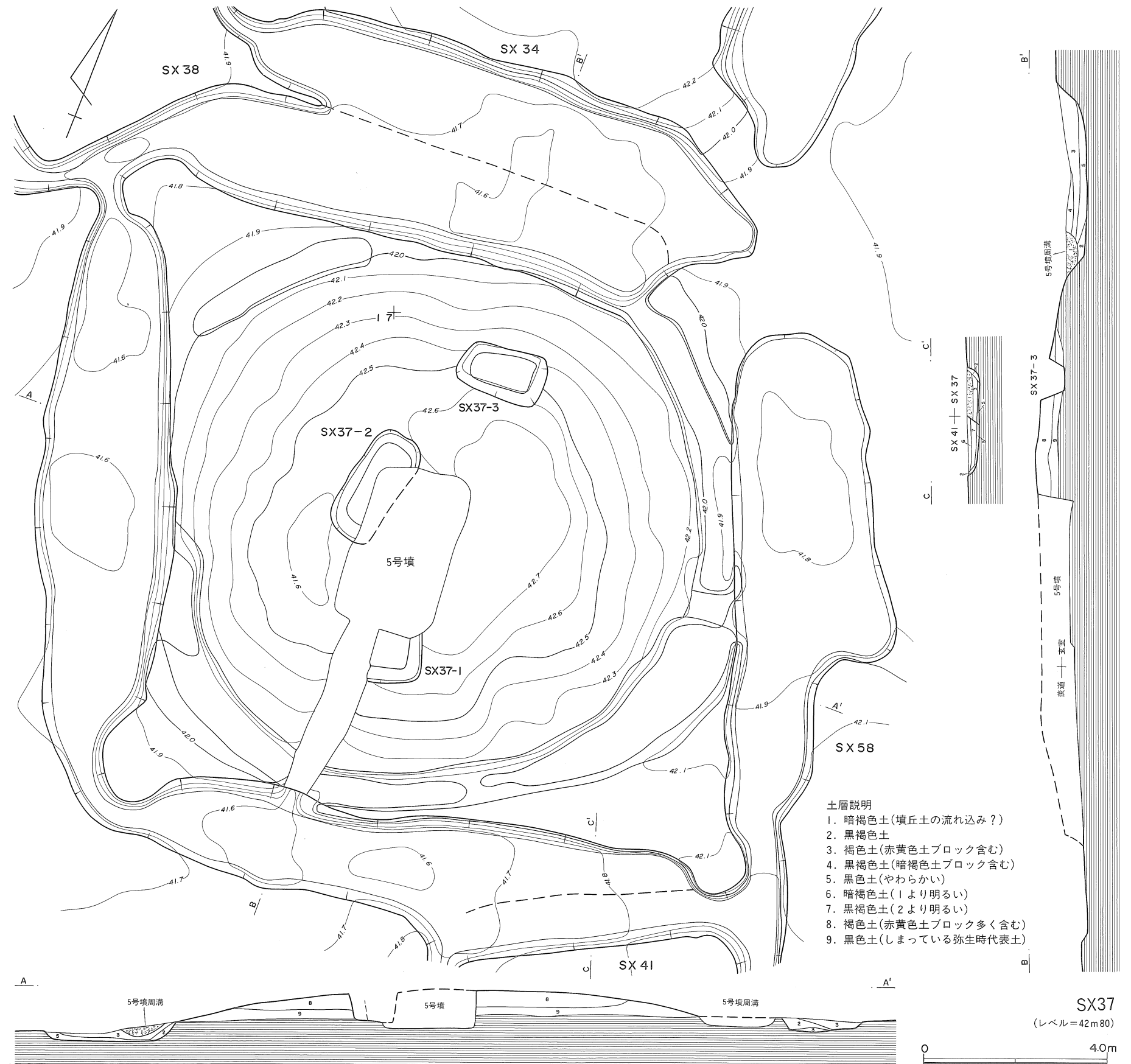


- 土層説明
1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
 2. 黒褐色土
 3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)
 4. 明褐色土
 5. 黒褐色土(褐色土ブロック含む)

SX36
(レベル=42m40)

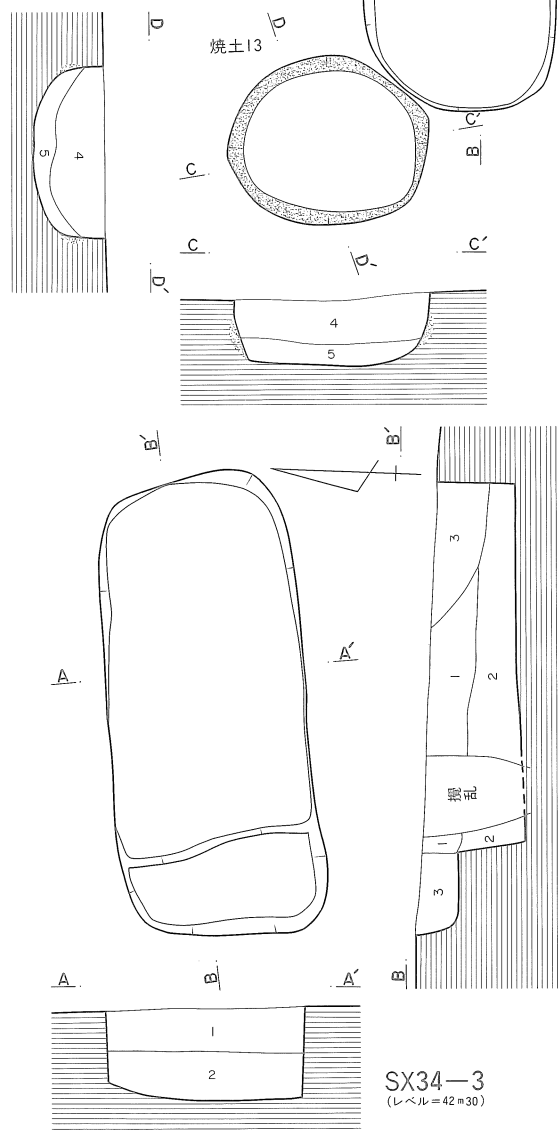
0 4.0m

第71図 SX36実測図



第72図 SX37実測図

SX34-2
焼土13
(レベル=42 m 40)

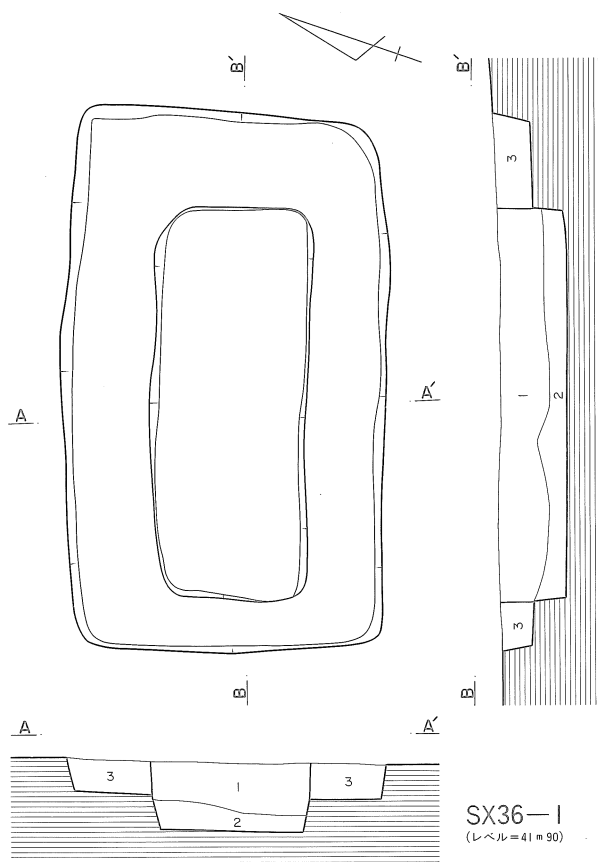


SX34-3
(レベル=42 m 30)

■ 良く焼けている範囲

- 土層説明
1. 暗褐色土(拳大の礫含む)
 2. 褐色土(黄色土ブロック多く含む)
 3. 暗赤黄色土(褐色土・黄色土多く含む)
 4. 褐色土(焼土粒子少量含む)
 5. 明褐色土(焼土粒子少量含む)
 6. 暗褐色土(赤黄色土ブロック多く含む)

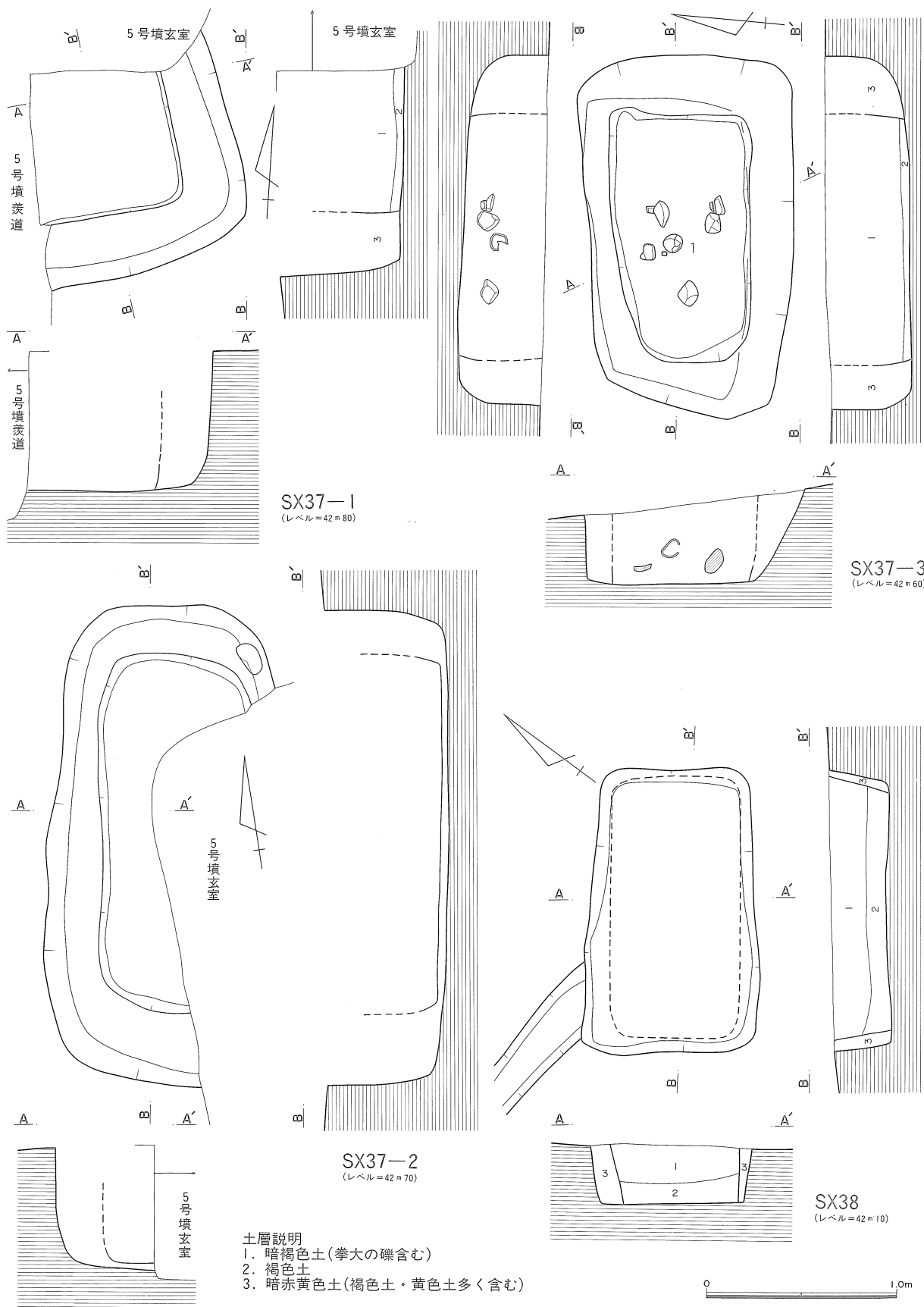
SX36-2
(レベル=41 m 80)



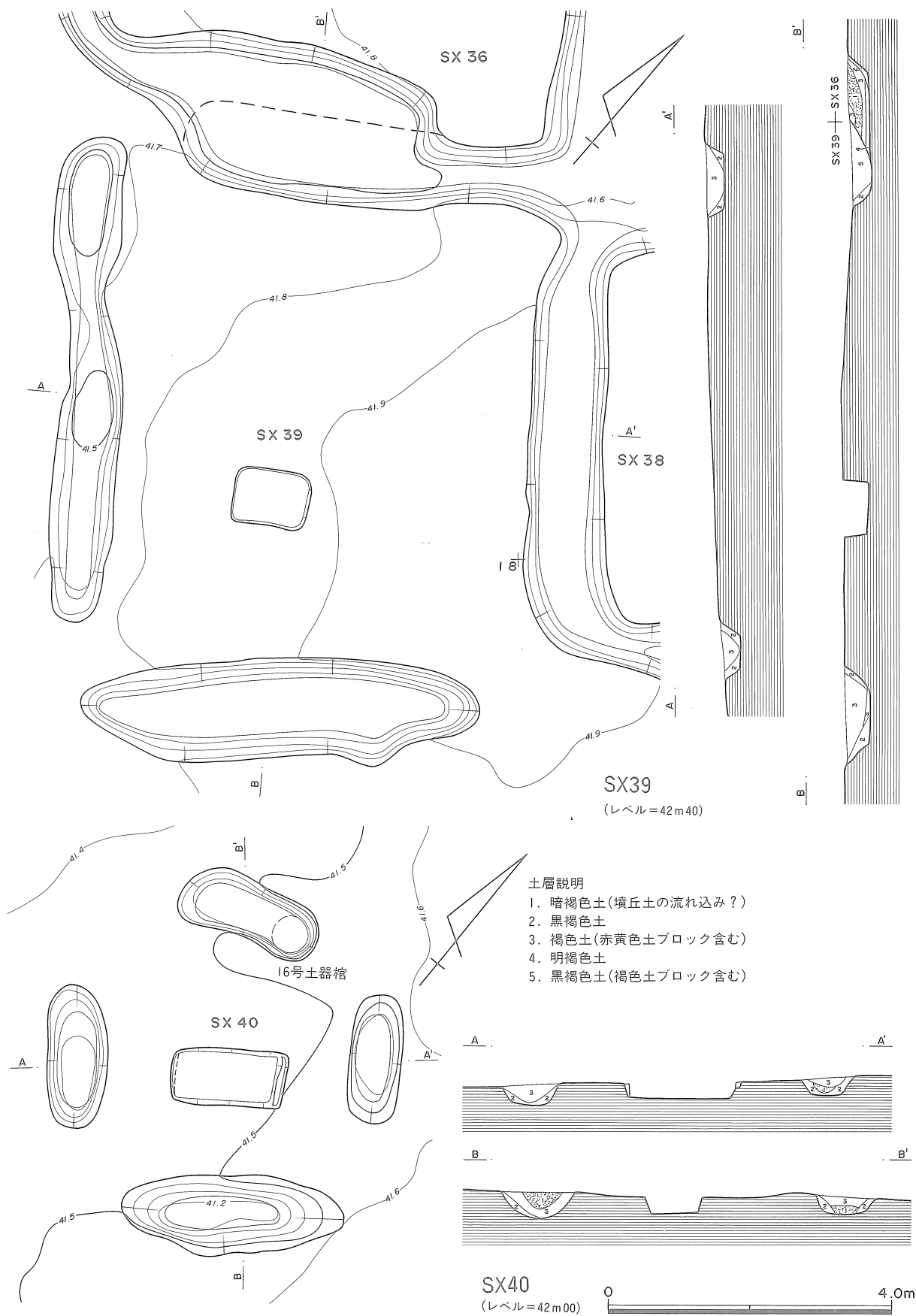
SX36-1
(レベル=41 m 90)

0 1.0m

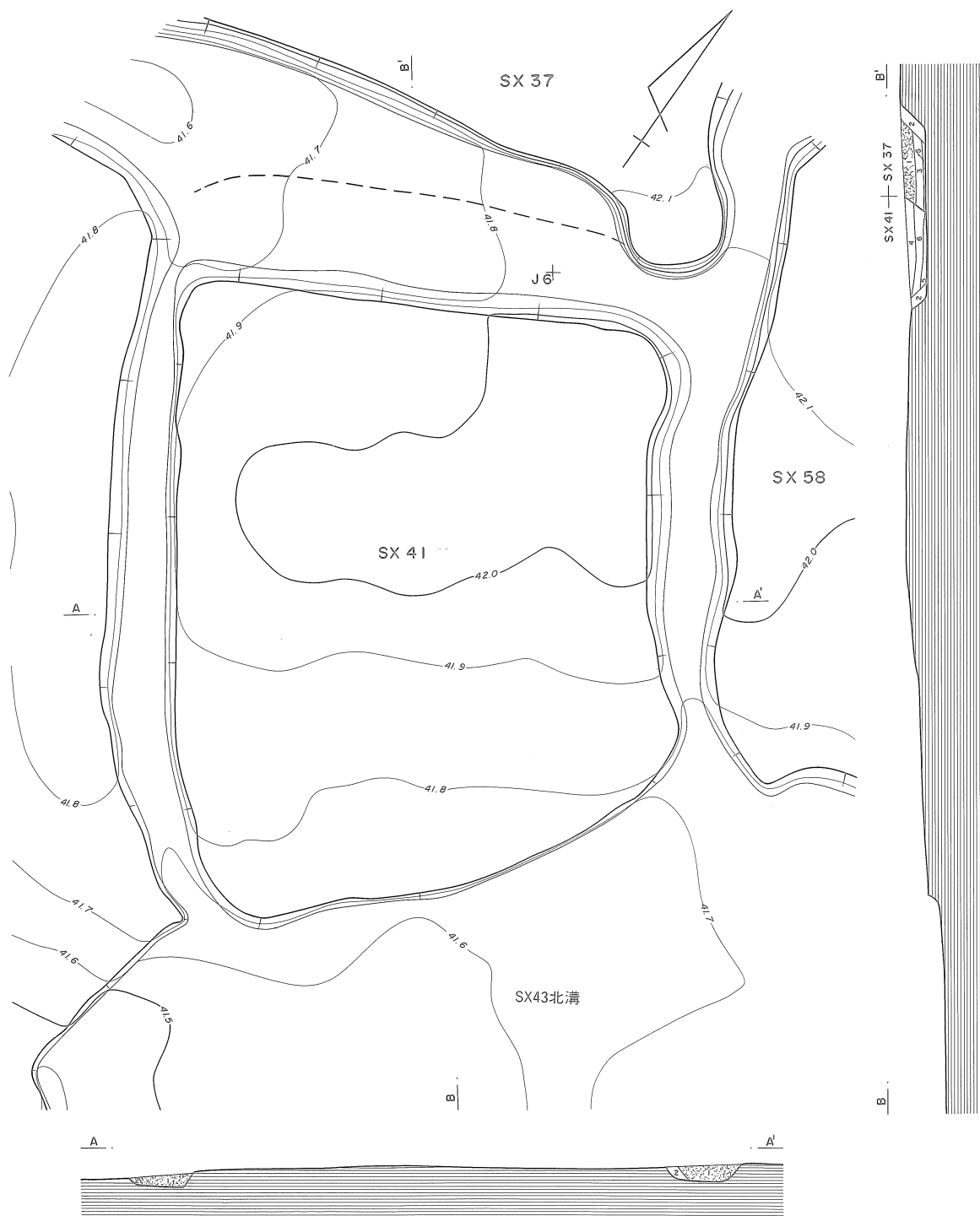
第73図 SX34-2・3・SX36-1・2主体部・焼土13実測図



第74図 SX37-1 ~ 3・SX38主体部実測図



第75図 SX39・SX40実測図



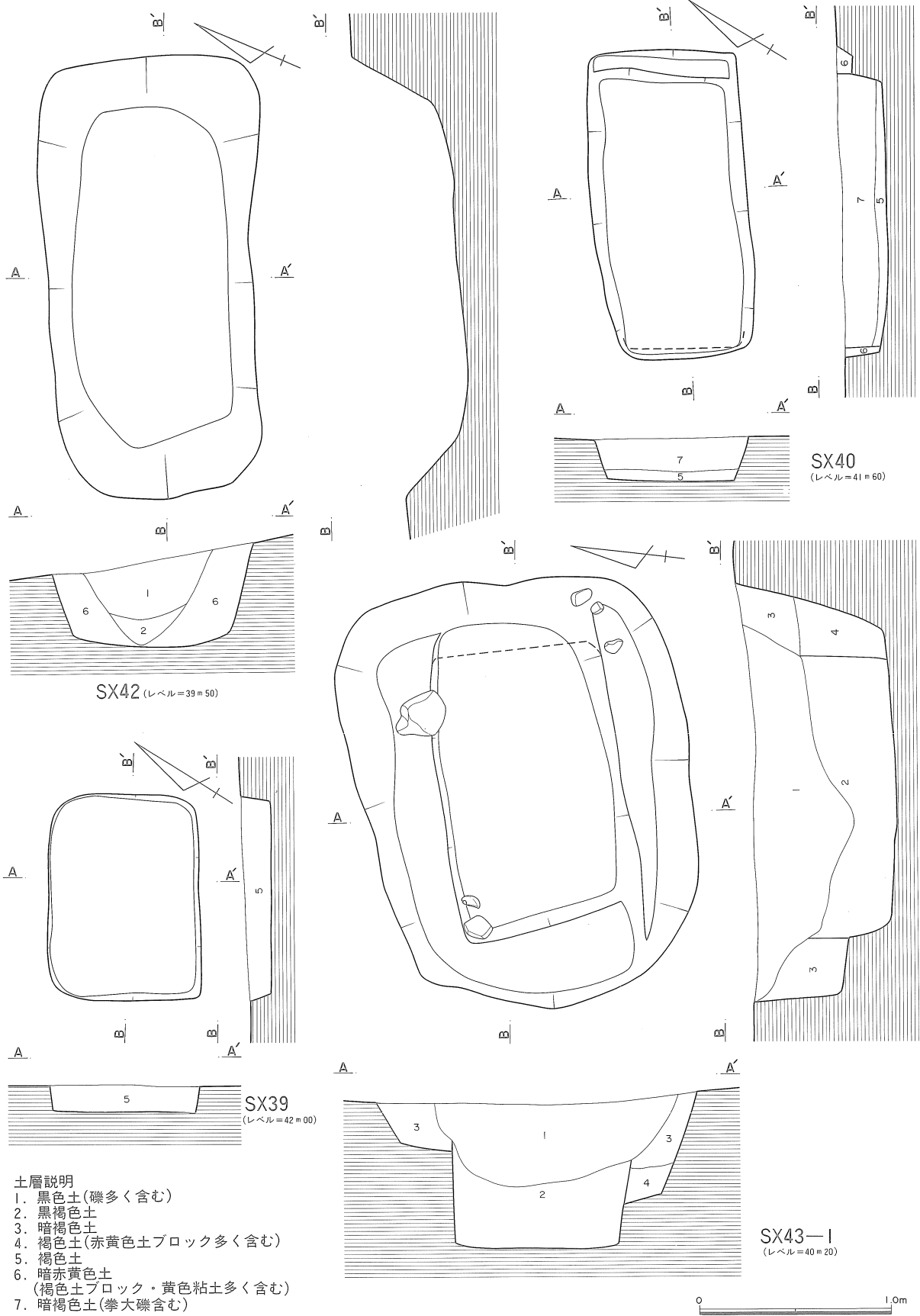
土層説明

1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
2. 黒褐色土
3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)
4. 暗褐色土(1より暗い)
5. 黒色土
6. 明褐色土

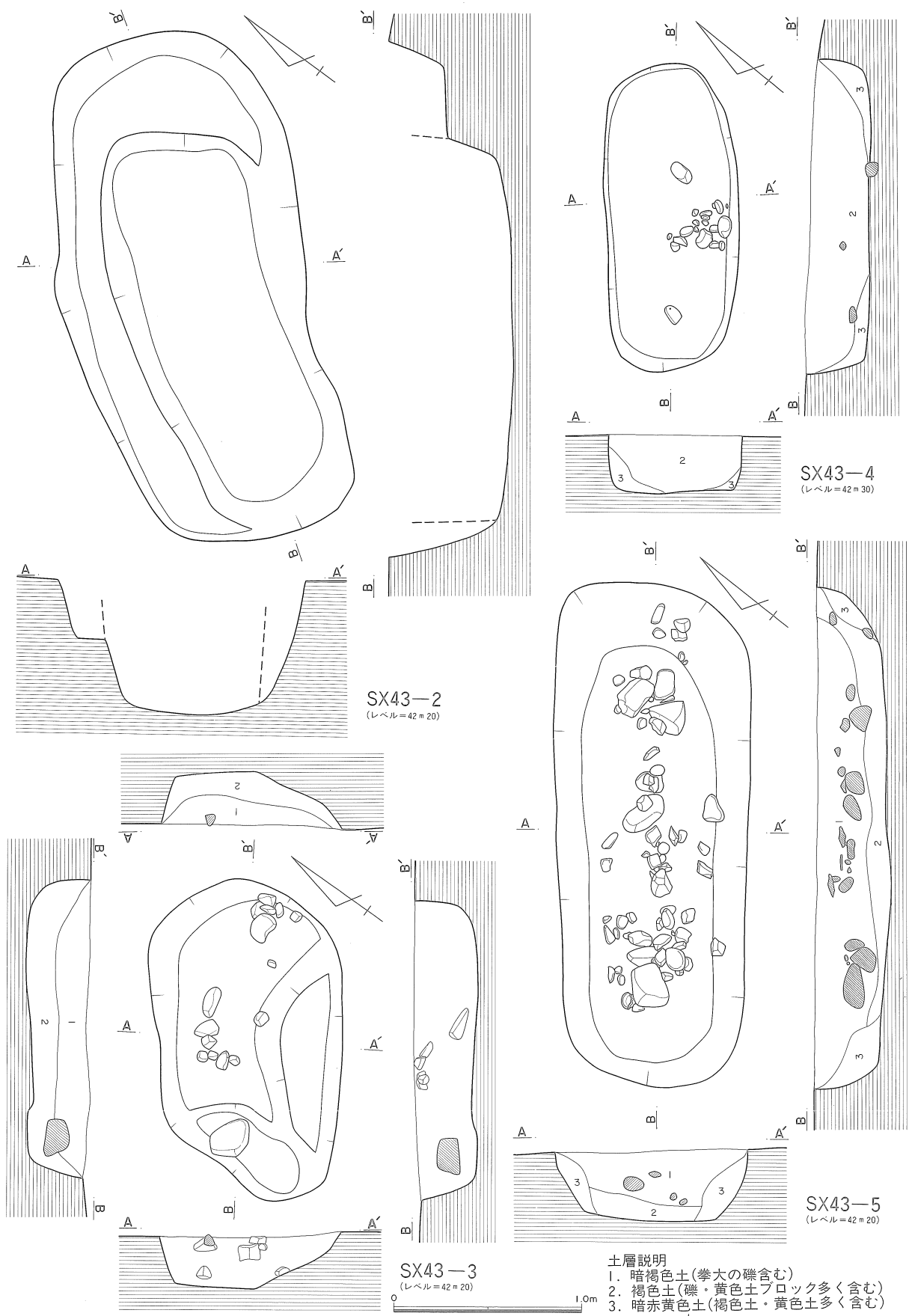
SX41
(レベル=42m20)

0 4.0m

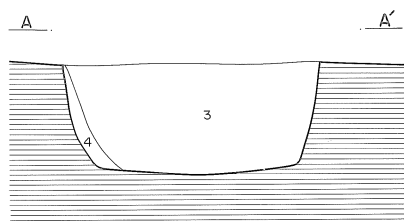
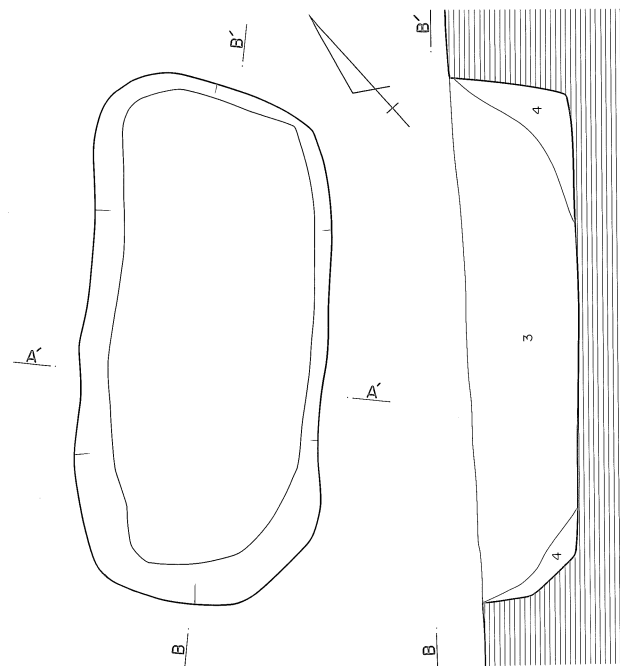
第76図 SX41実測図



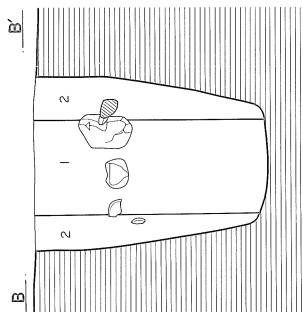
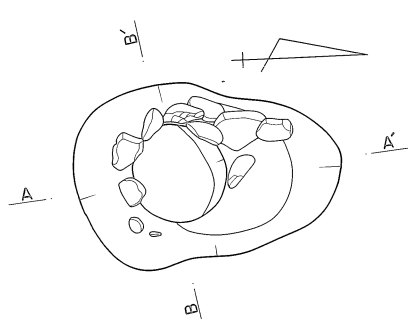
第78図 SX39・SX40・SX42・SX43—1 主体部実測図



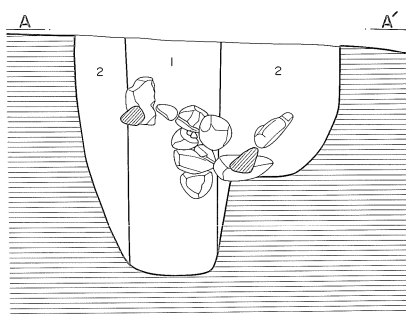
第79図 SX43-2～5 主体部実測図



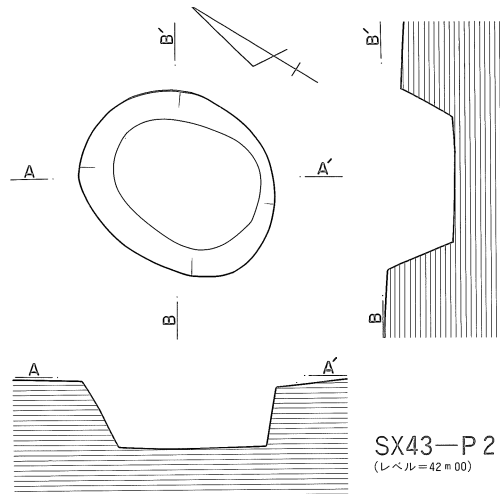
SX43—6
(レベル=42 m 10)



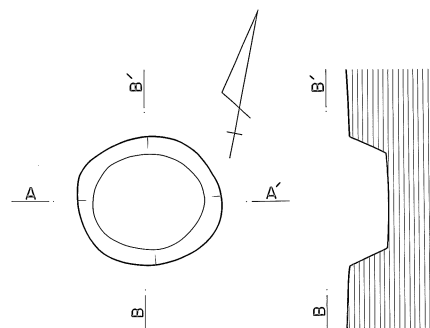
SX43—P1
(レベル=42 m 20)



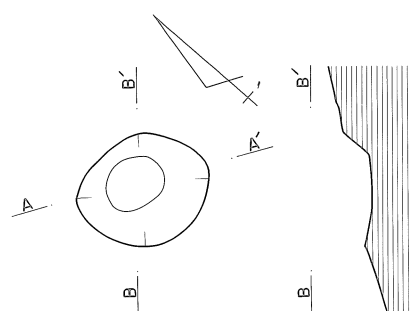
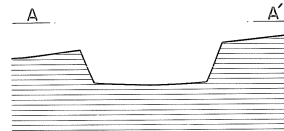
- 土層説明
 1. 黒色土(やわらかい層)
 2. 褐色土(かたくしまった土)
 3. 褐色土(黄色土ブロック多く含む)
 4. 赤黄色土(地山より暗い)



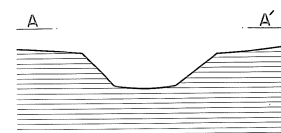
SX43—P2
(レベル=42 m 00)



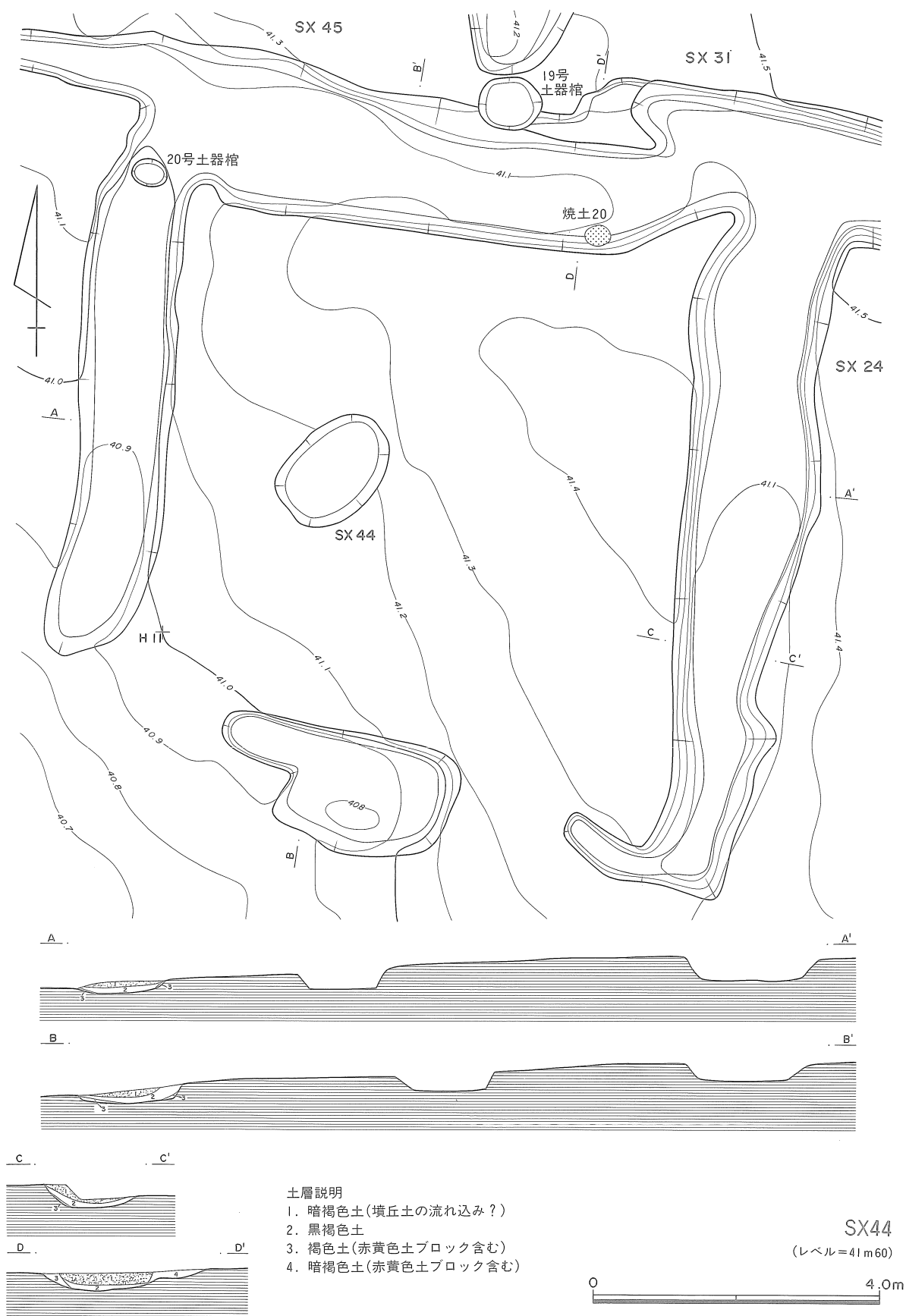
SX43—P3
(レベル=42 m 10)



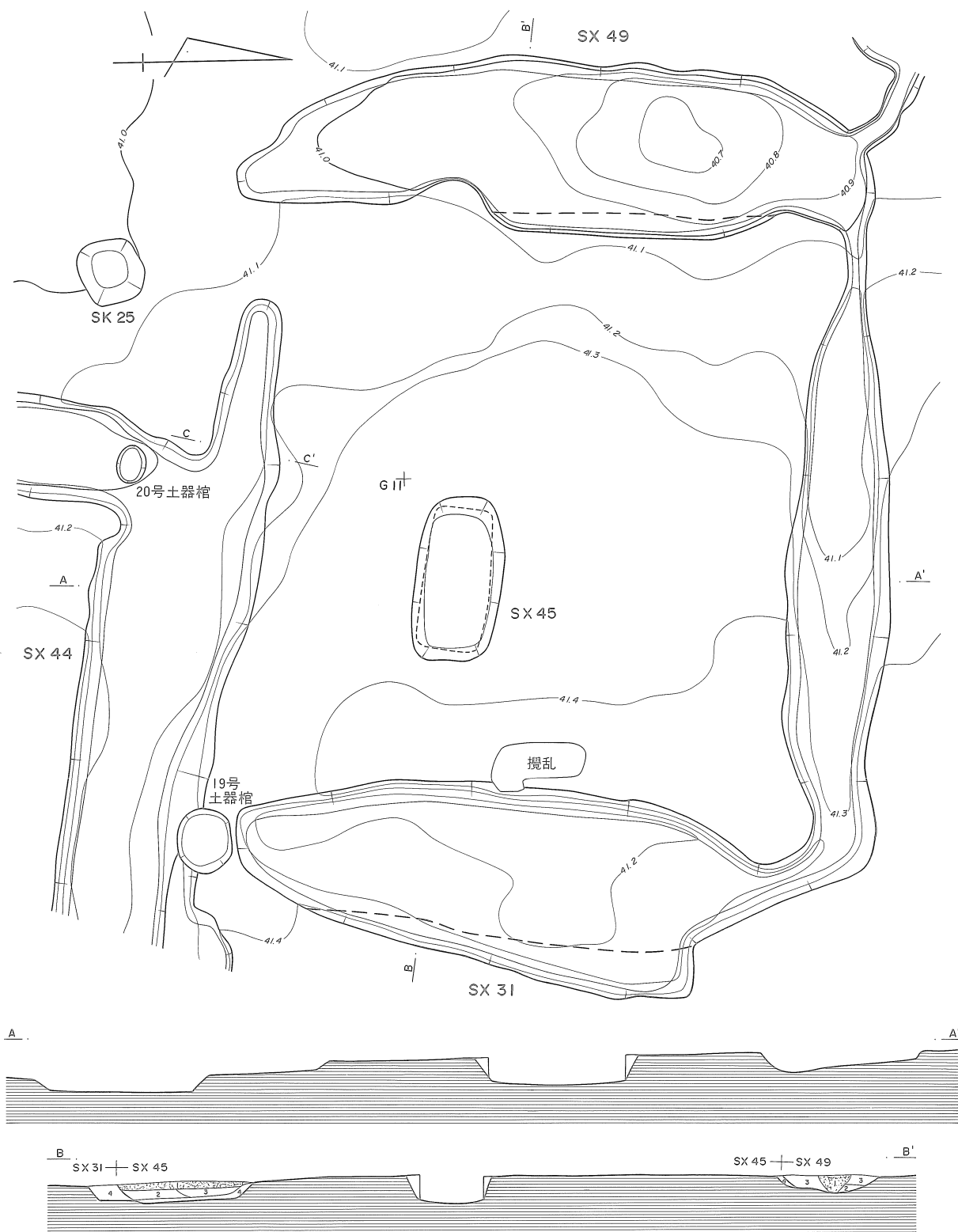
SX43—P4
(レベル=41 m 30)



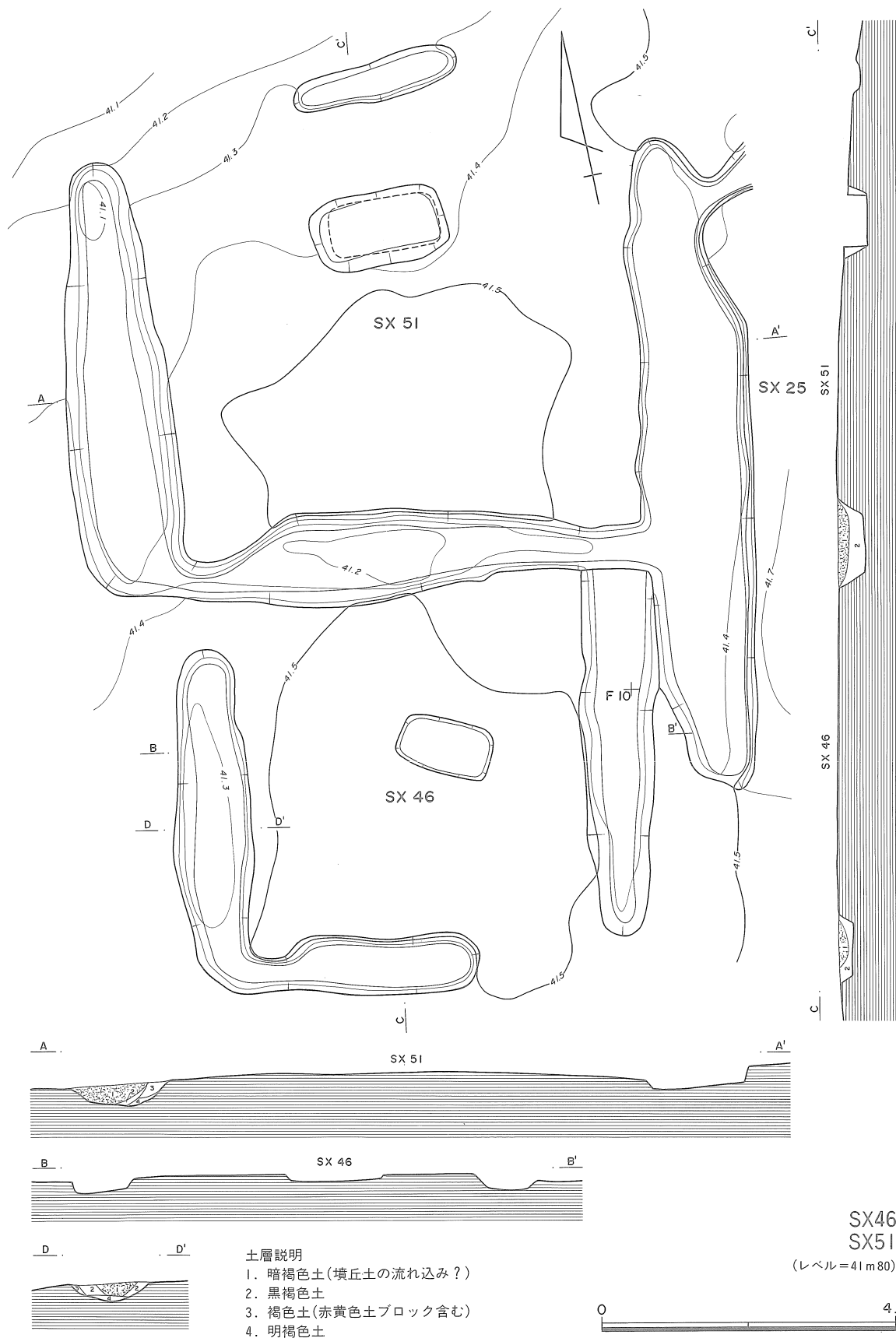
第80図 SX43—6～9・P1主体部実測図



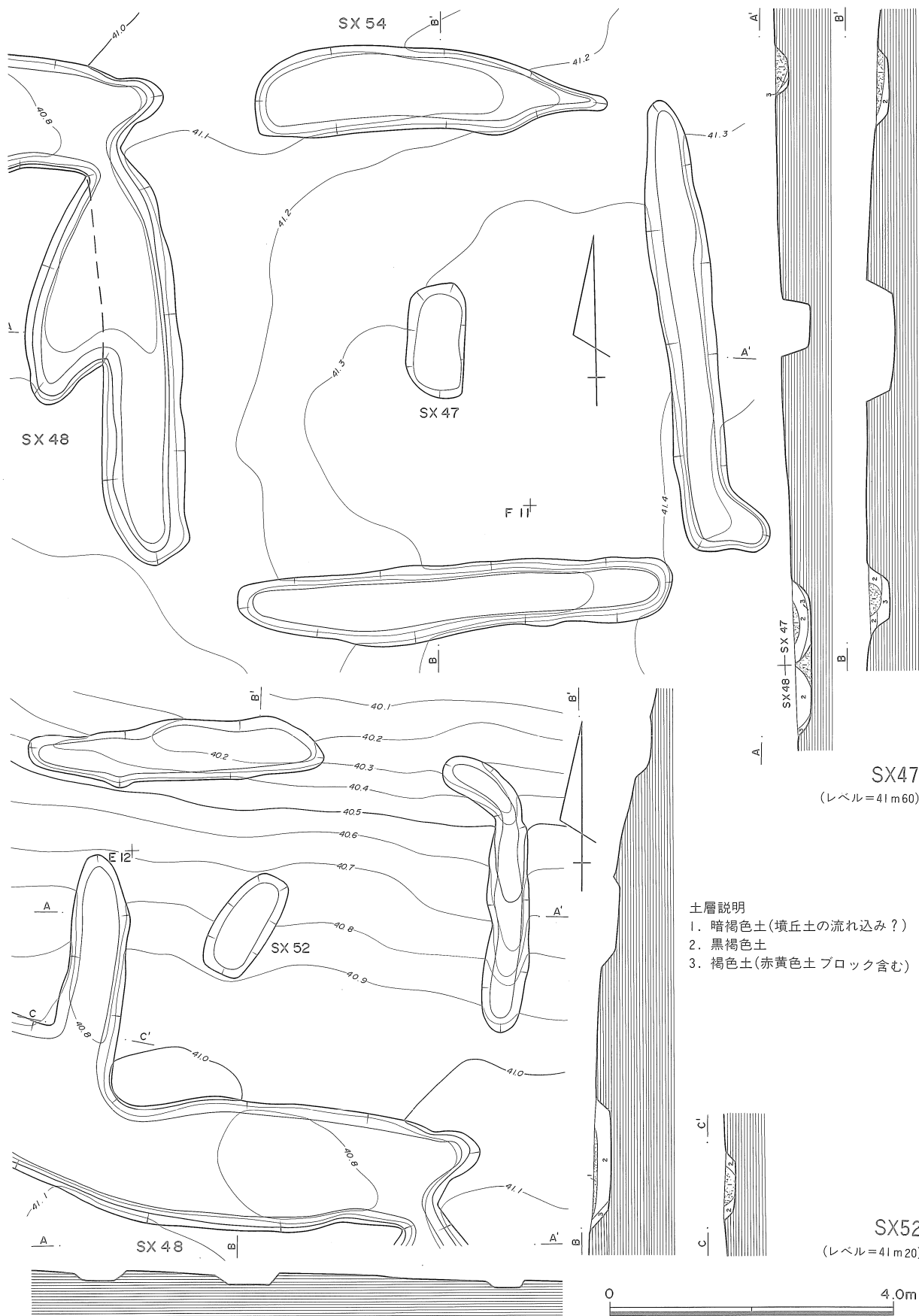
第81図 SX44実測図

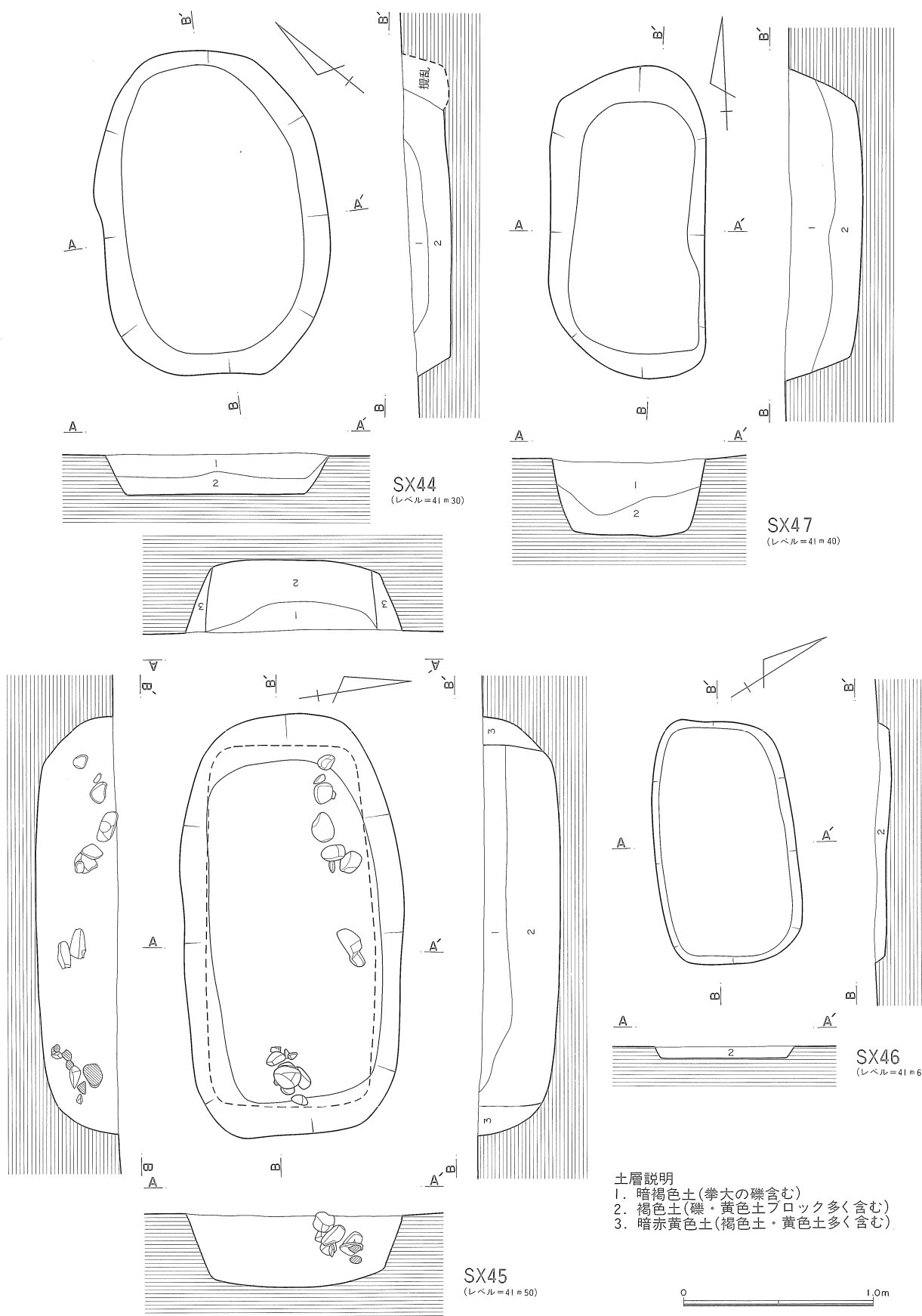


第82図 SX 45実測図

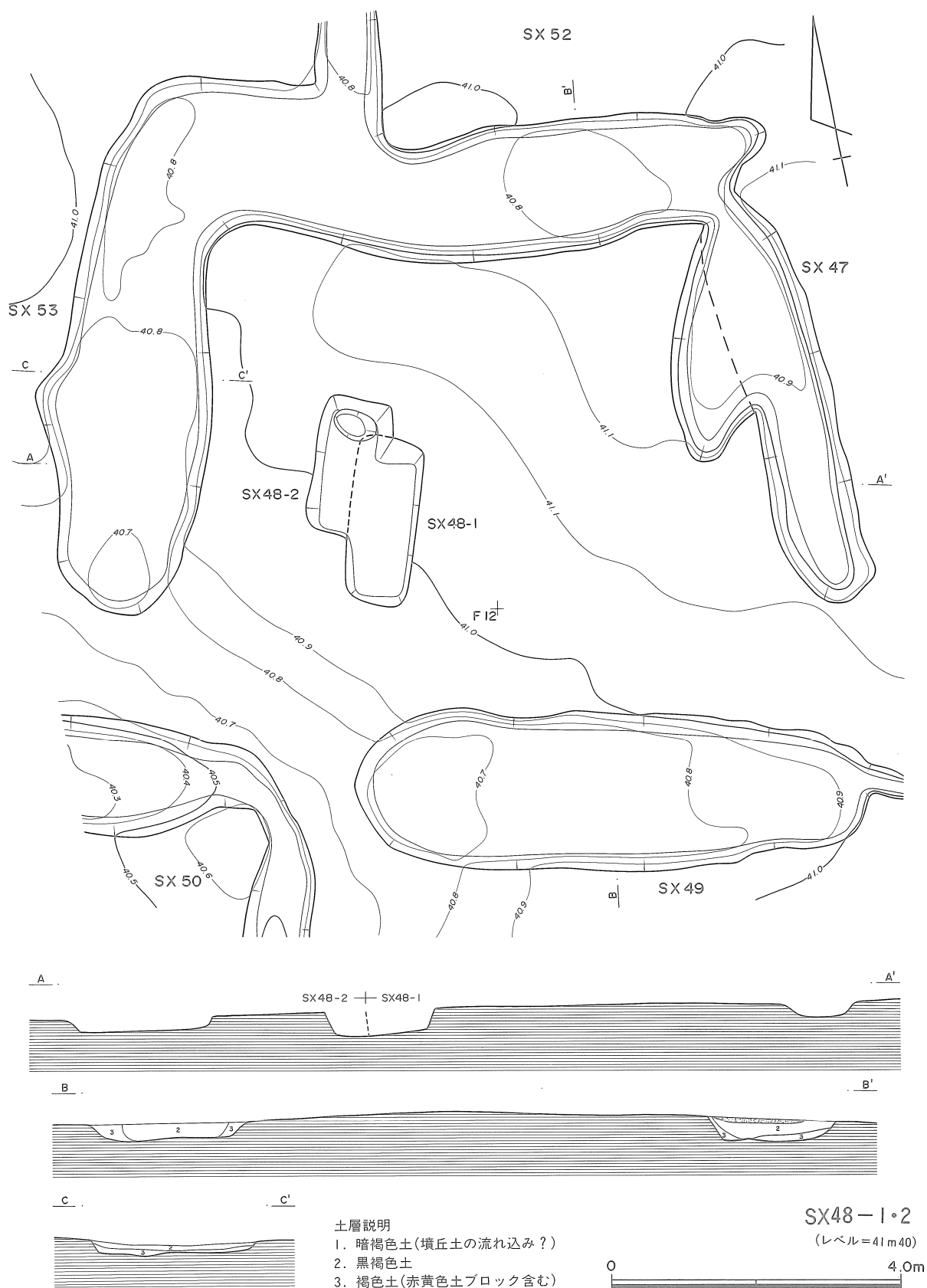


第83図 SX 46・SX 51実測図

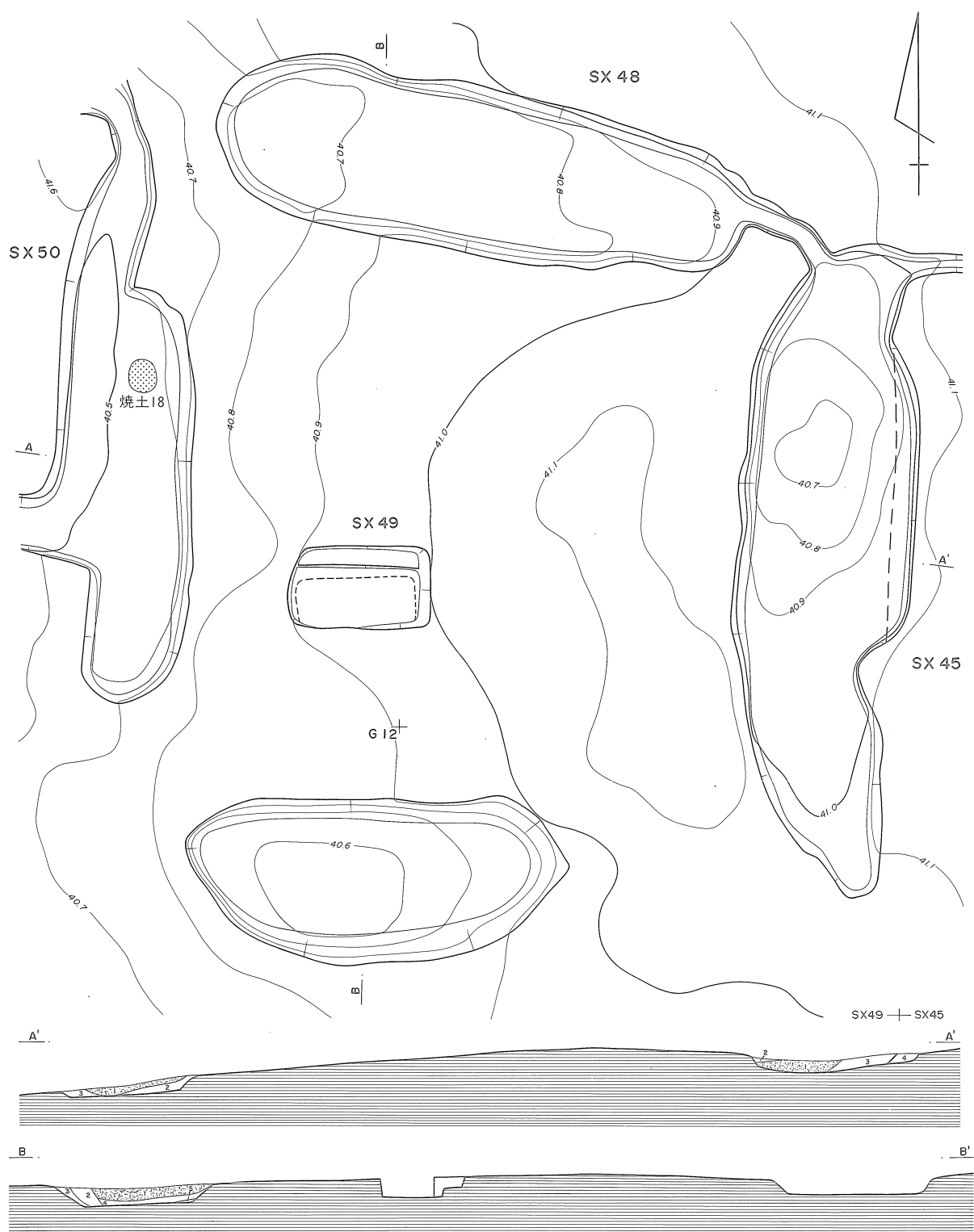




第85図 SX44～SX47主体部実測図



第86図 SX48実測図

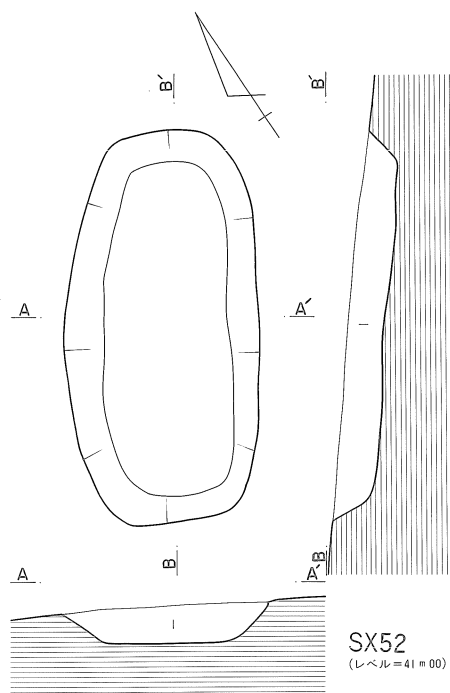
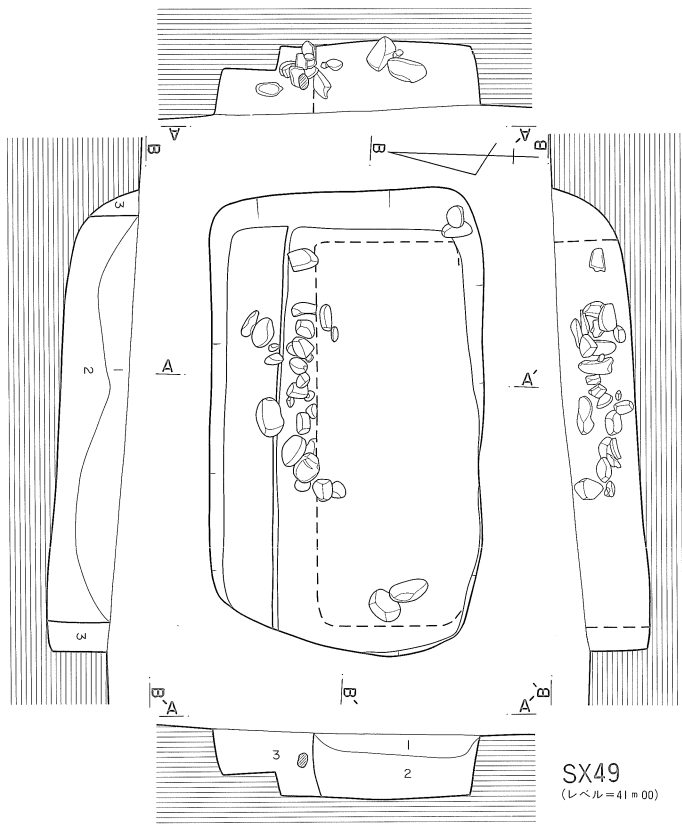
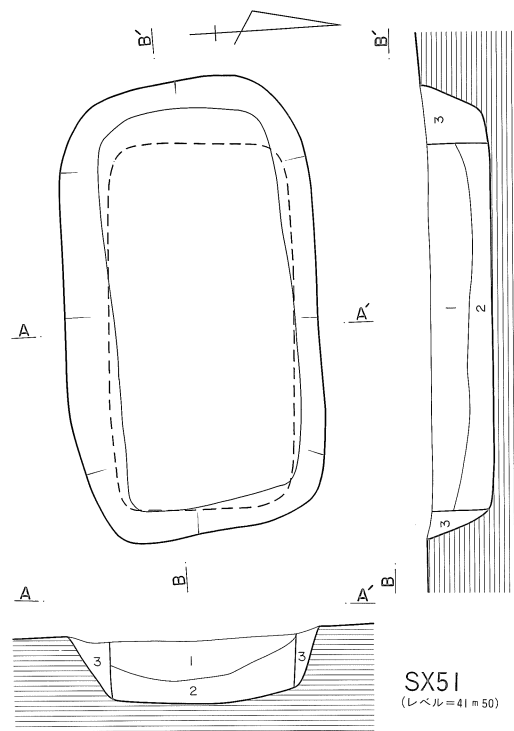
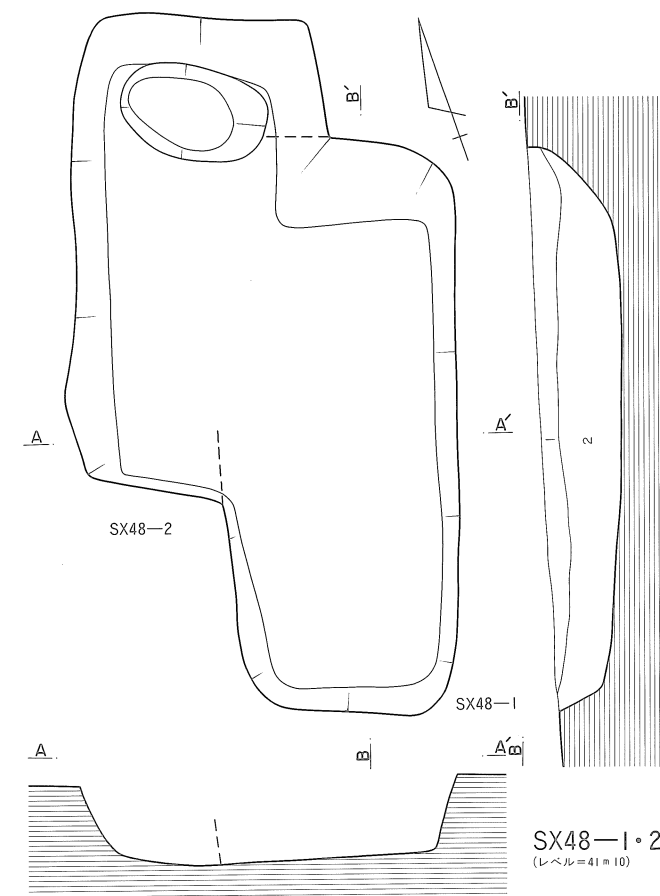


- 土層説明
1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
 2. 黒褐色土
 3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)
 4. 黒褐色土(暗褐色土ブロック多く含む)
 5. 赤黄色土

SX49
(レベル=41 m20)

0 4.0m

第87図 SX49実測図

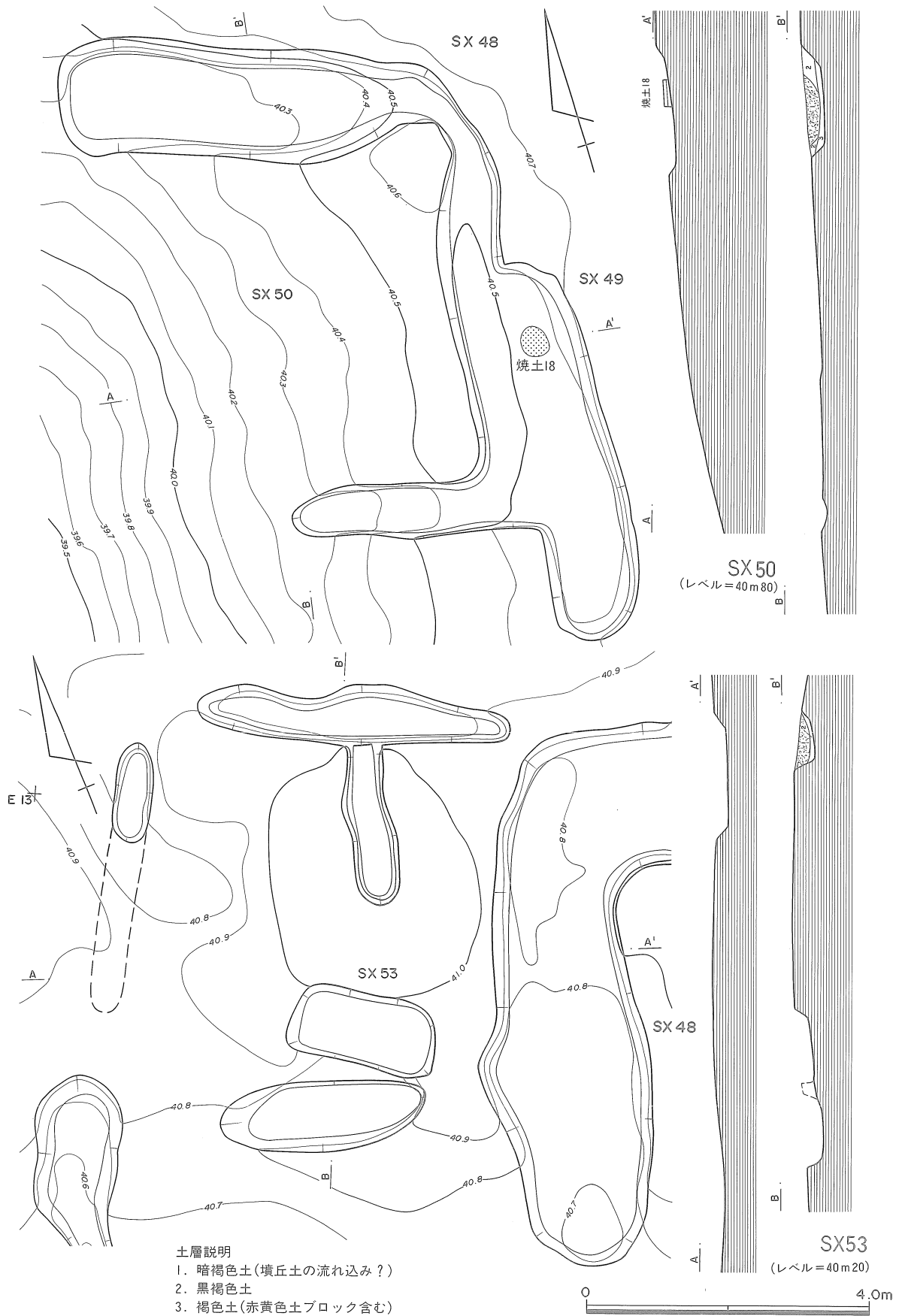


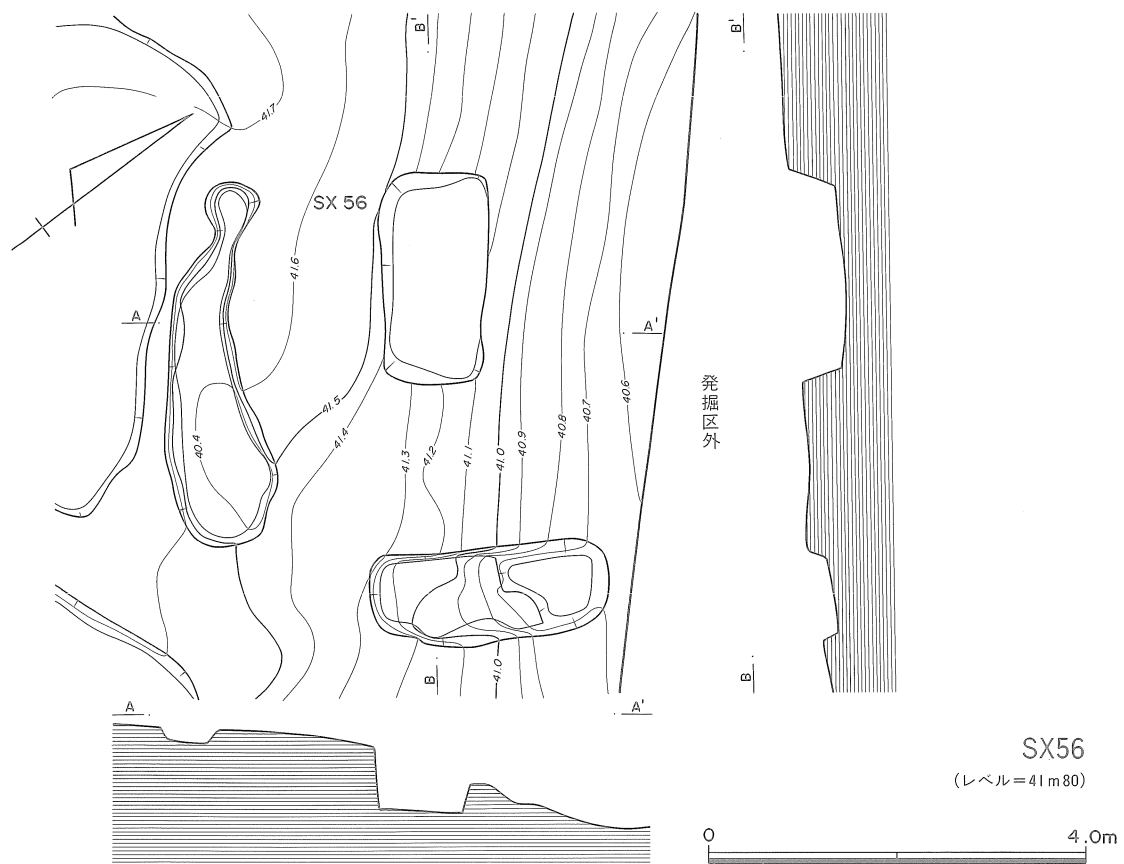
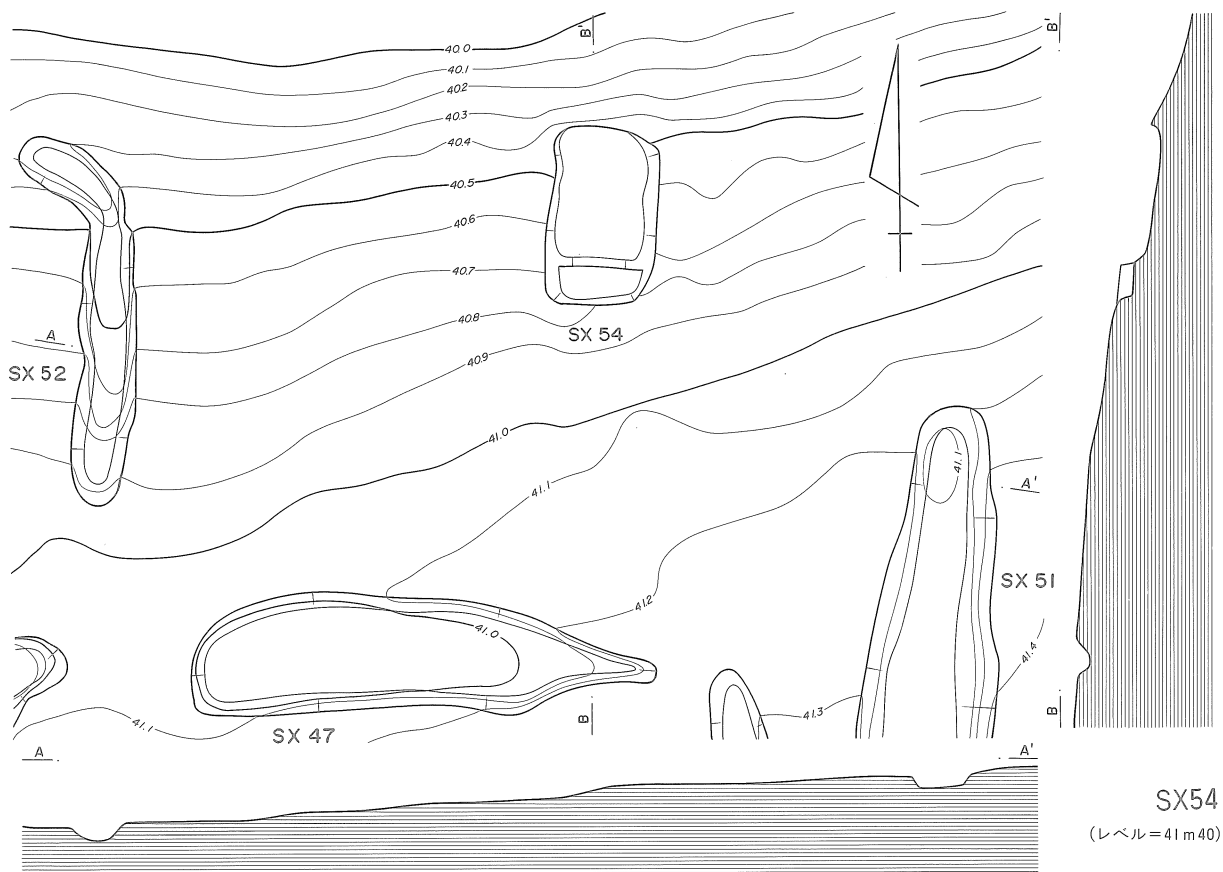
土層説明

1. 暗褐色土(拳大の礫含む)
2. 褐色土
3. 暗赤黄色土(褐色土・黄色土多く含む)
4. 褐色土(砂礫多く含む)

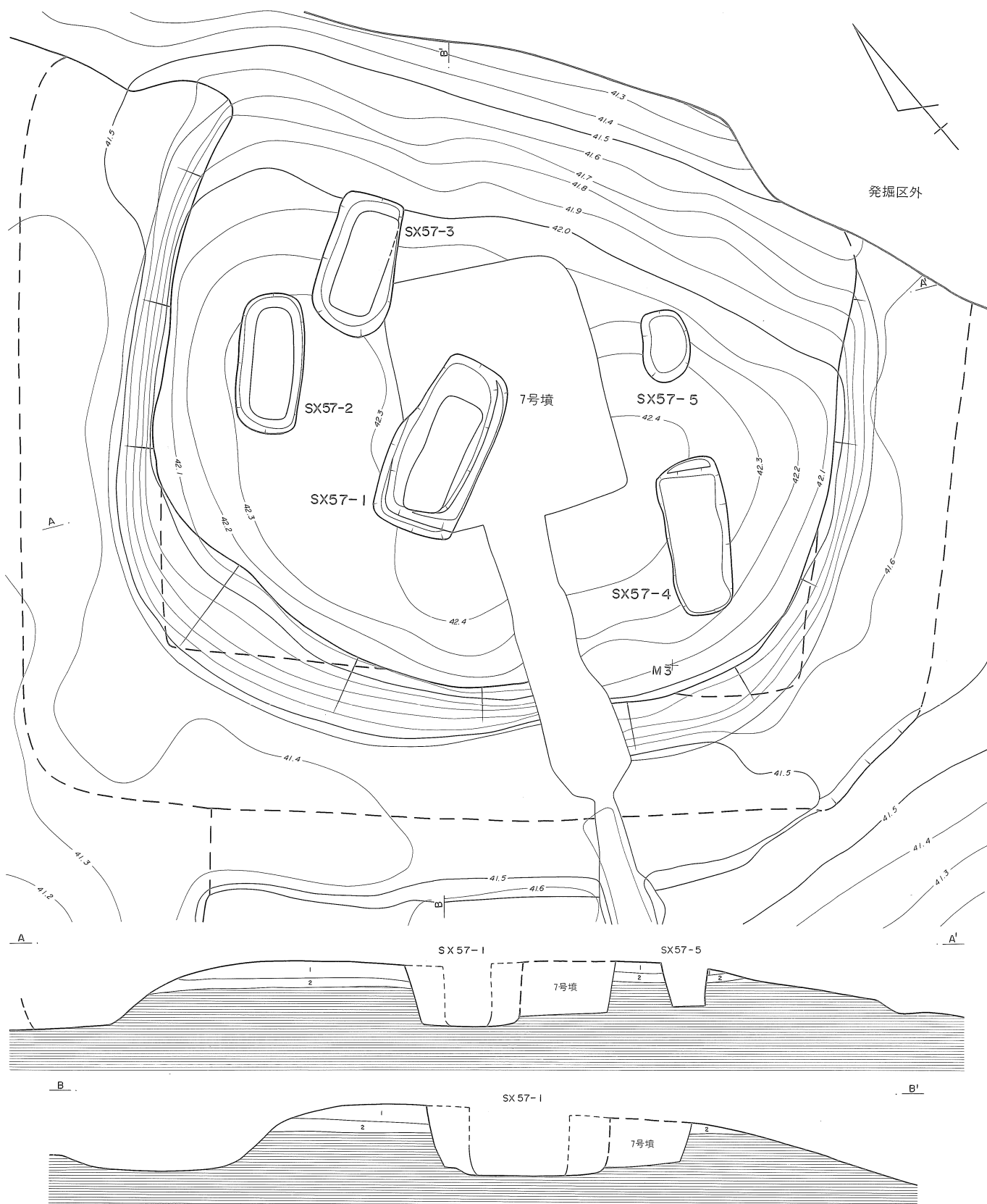
0 1.0m

第88図 SX48-1・2・SX49・SX51・SX52主体部実測図





第90図 SX54・SX56実測図



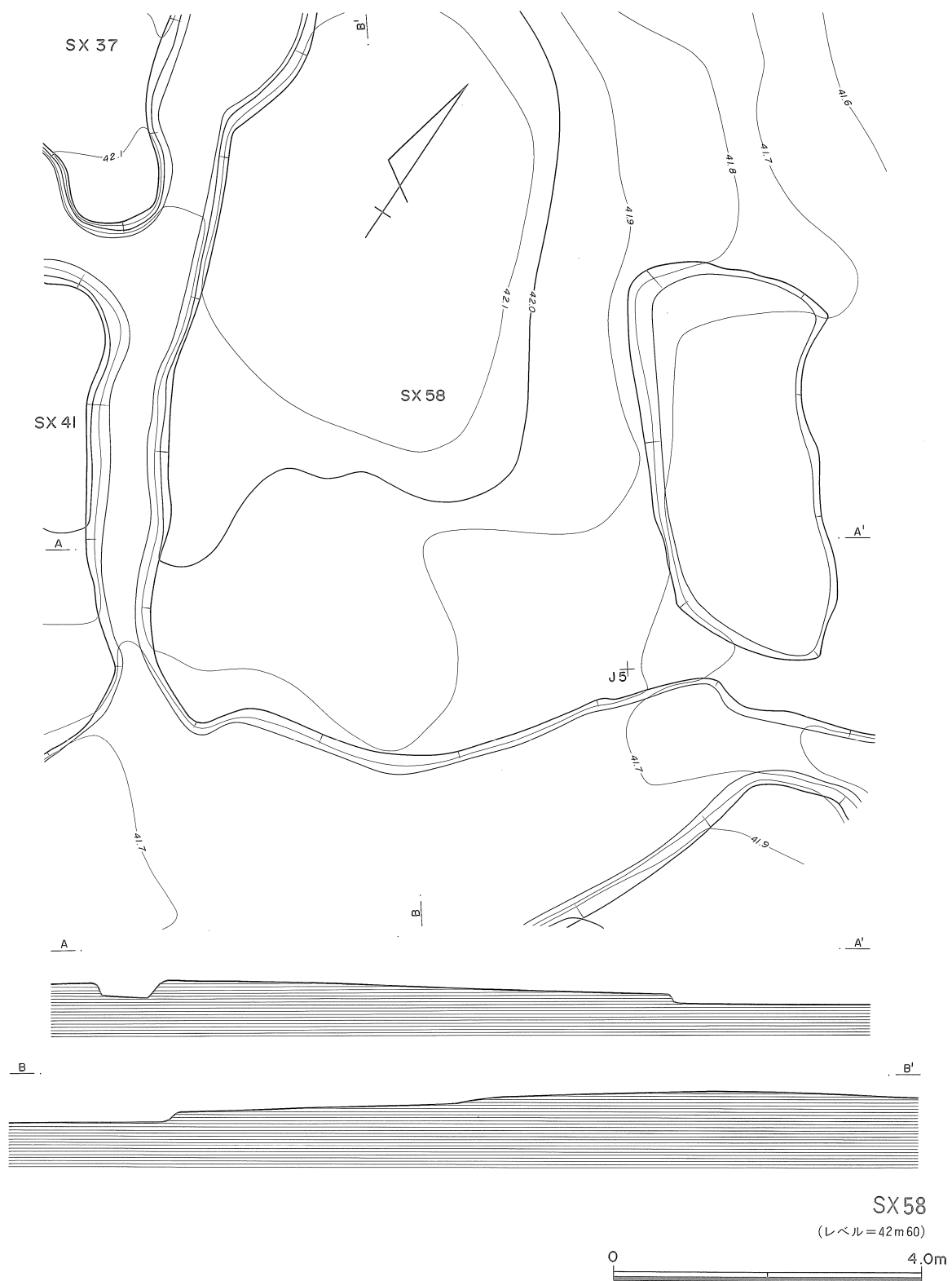
土層説明

1. 褐色土(赤黄色土ブロック多く含む)
2. 黒色土(しまっている弥生時代表土)

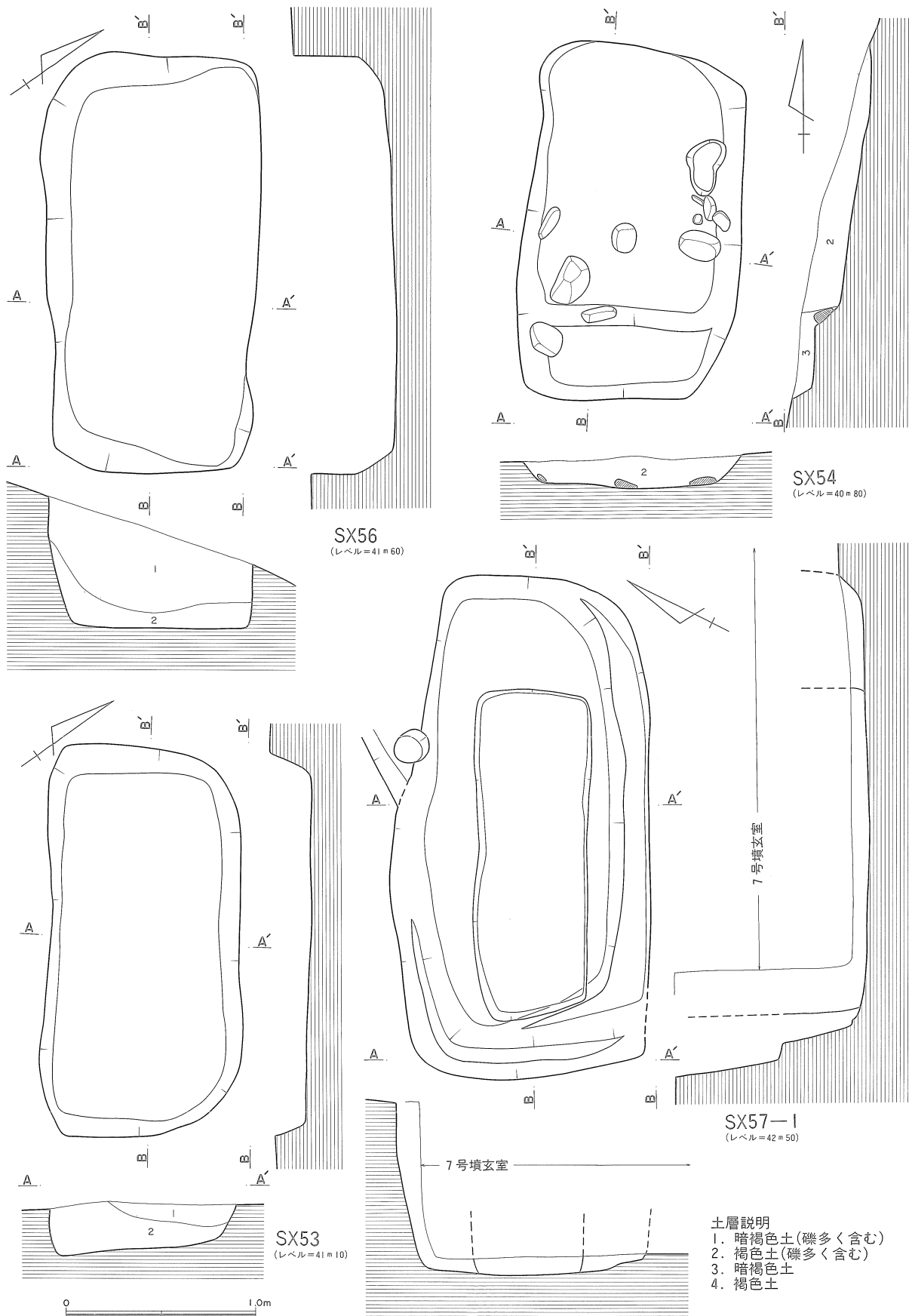
SX57
(レベル=42m60)

0 4.0m

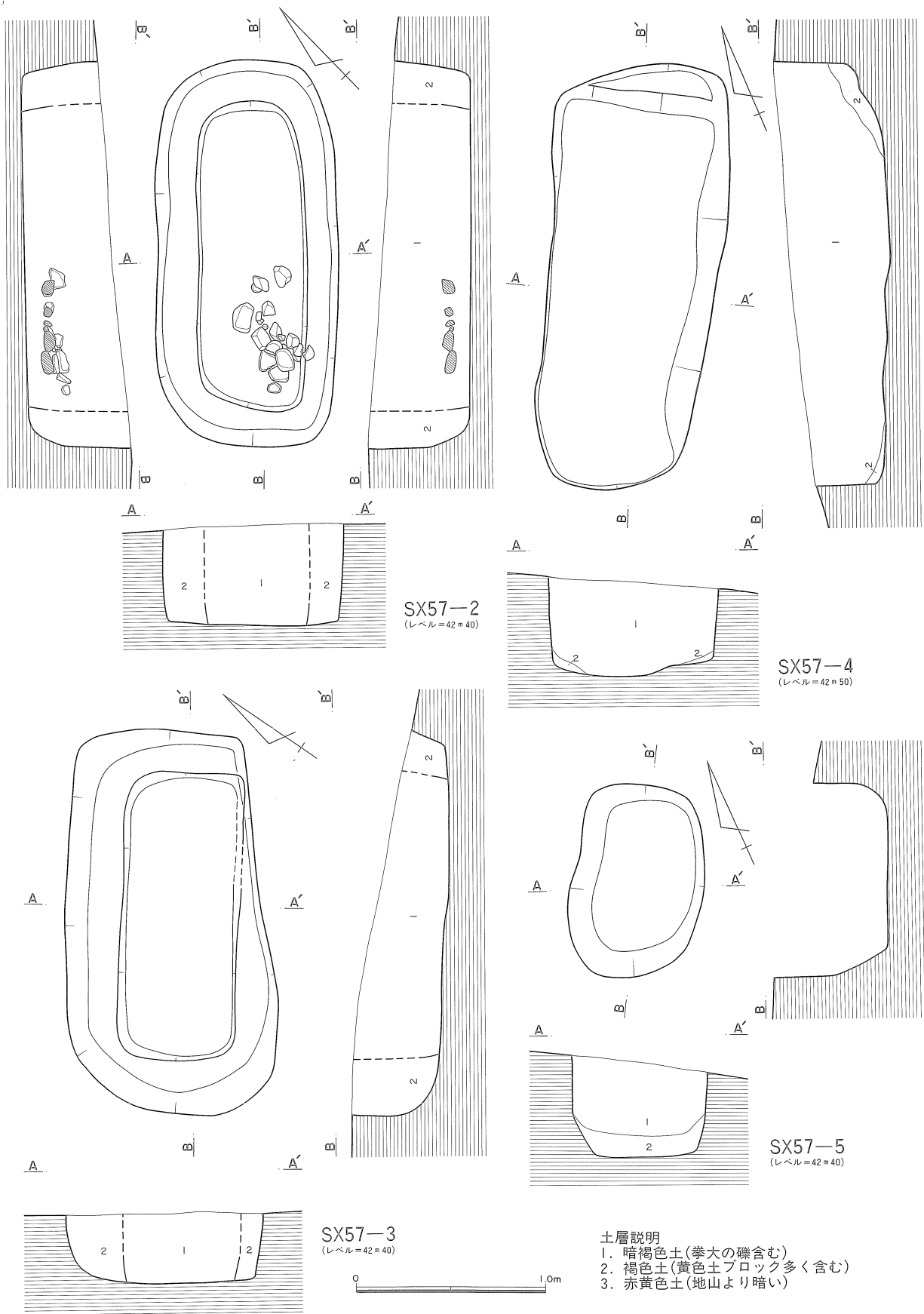
第91図 SX57実測図



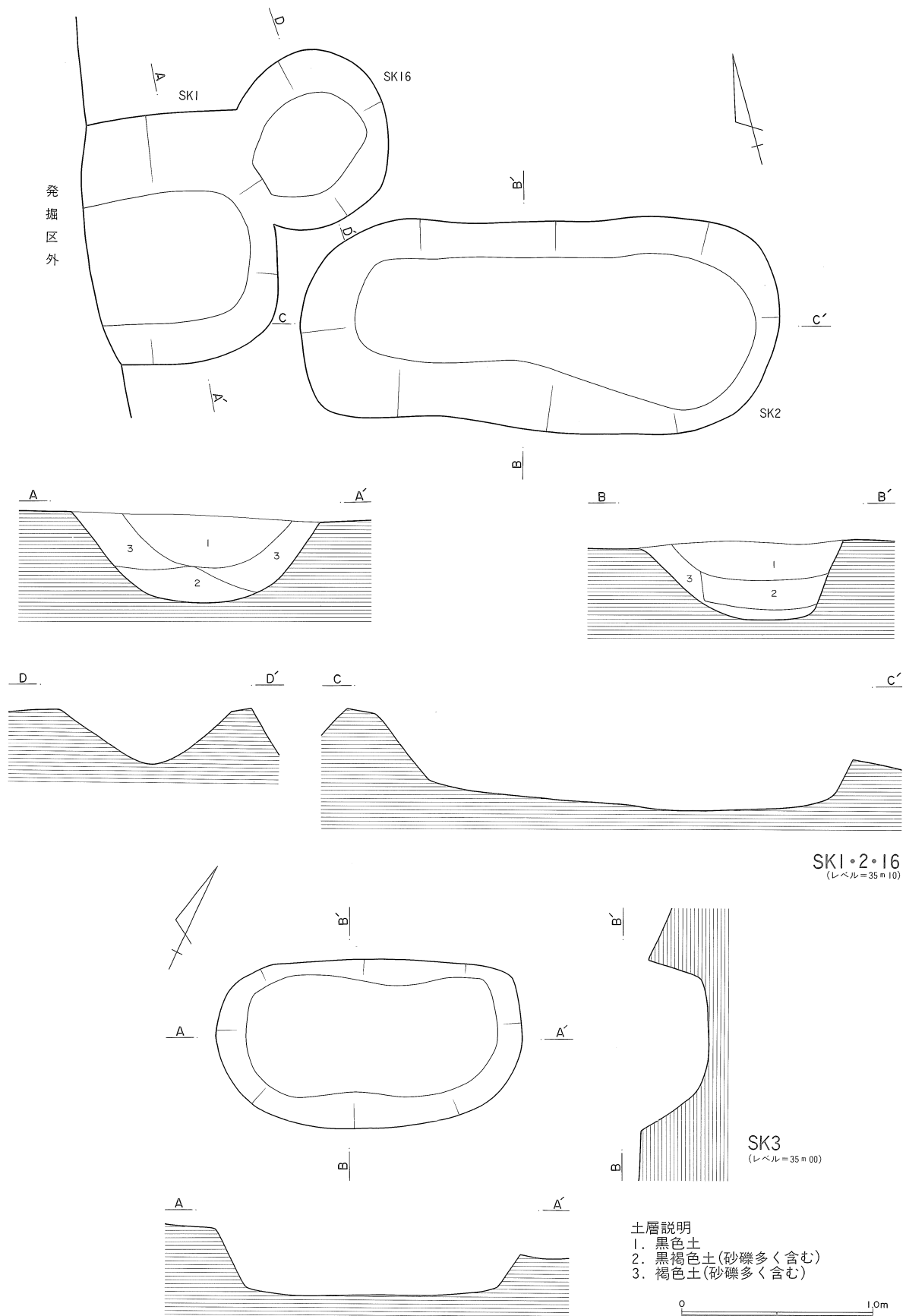
第92図 SX58実測図



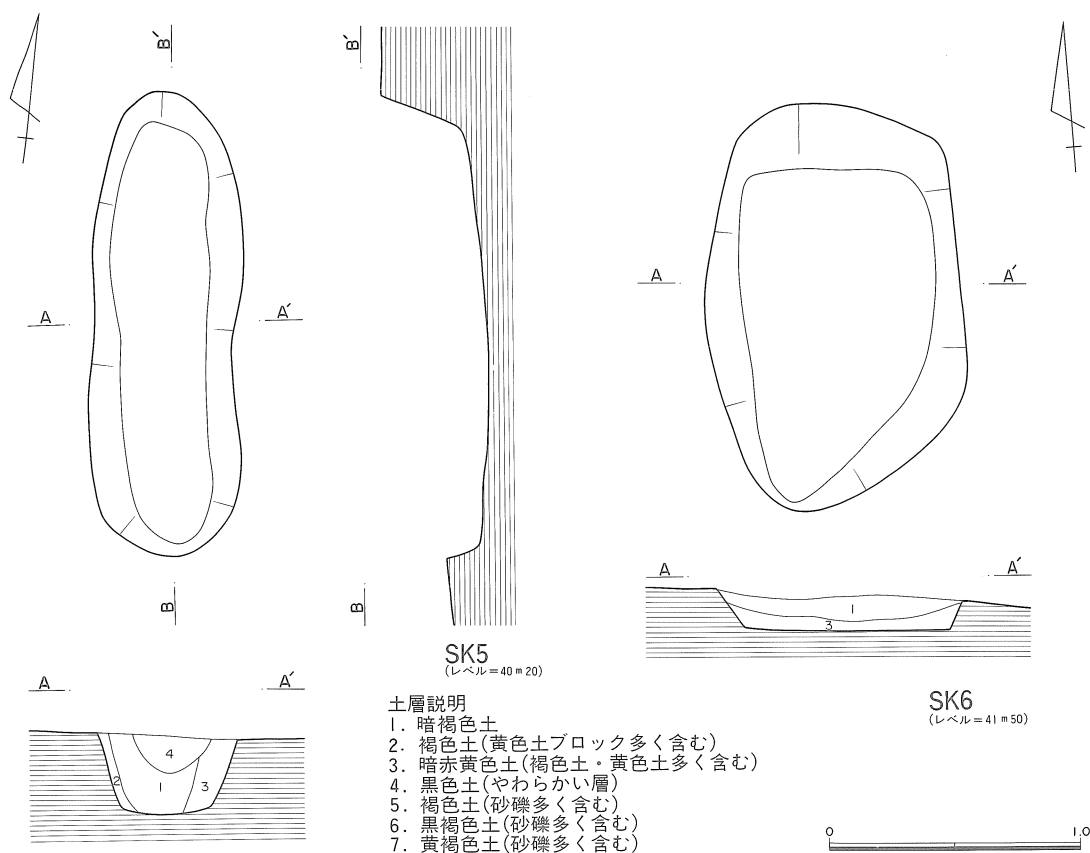
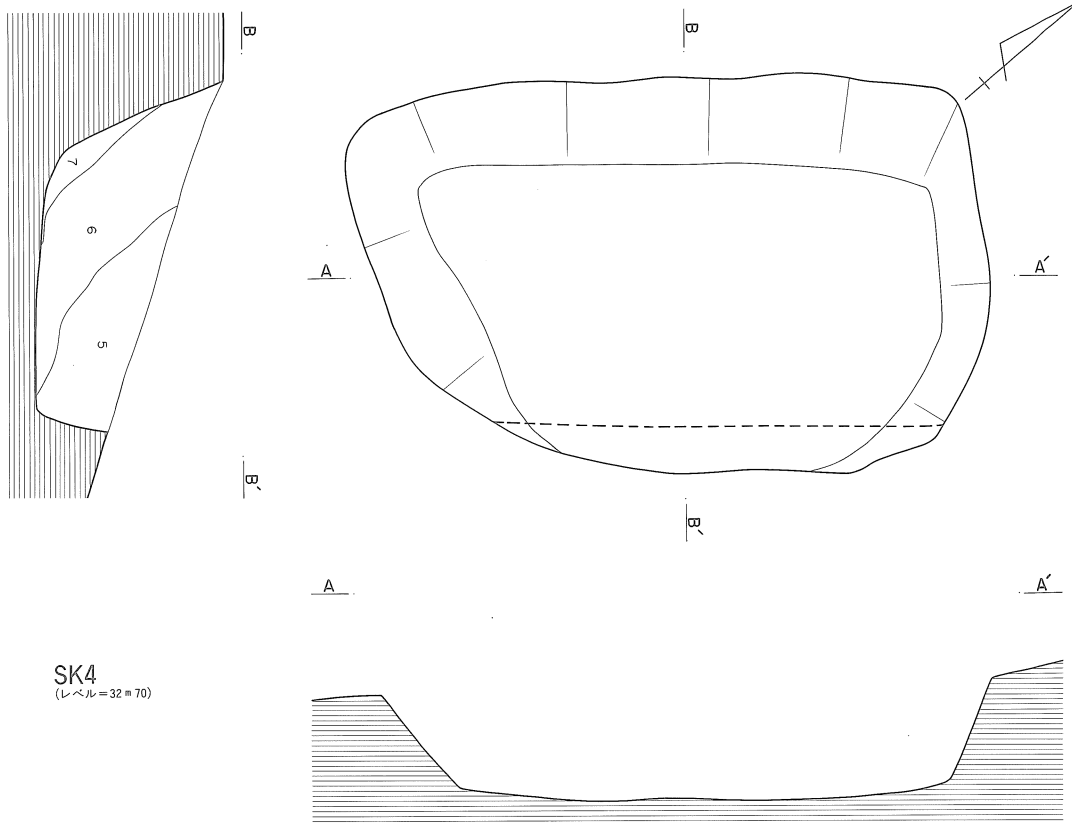
第93図 SX53・SX54・SX56・SX57-1 主体部実測図



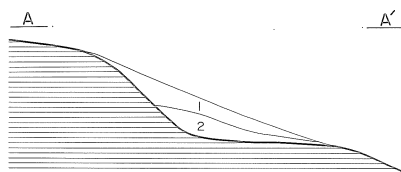
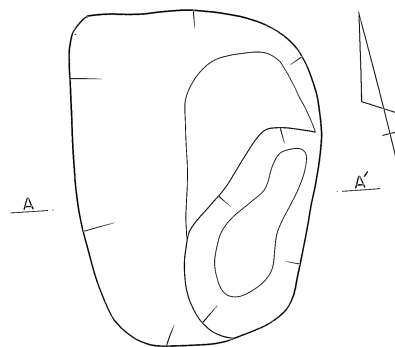
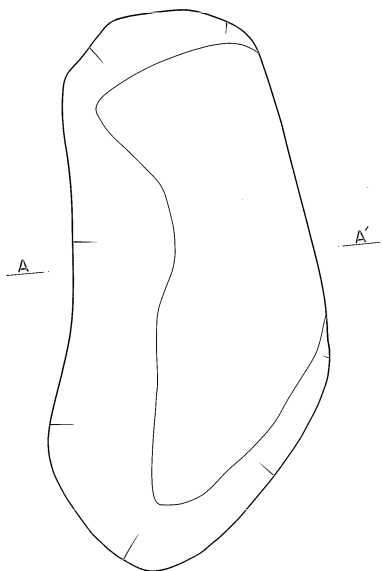
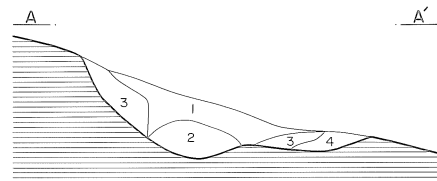
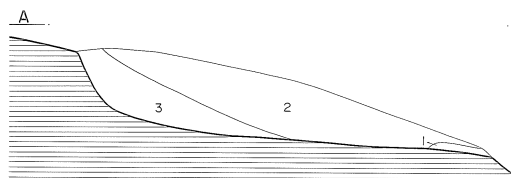
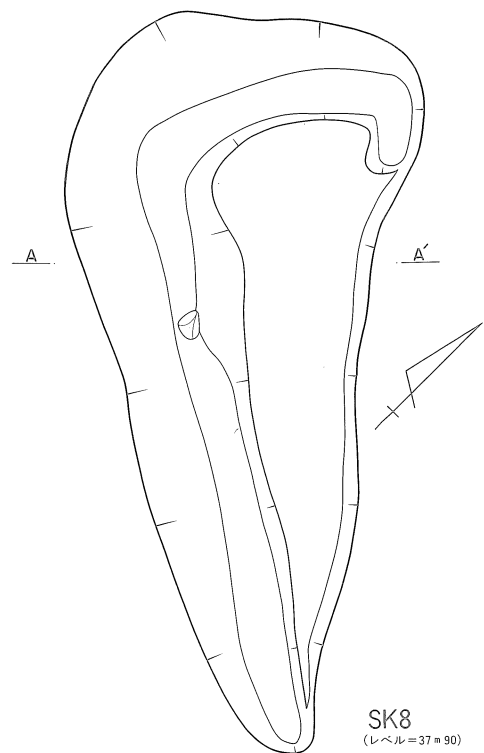
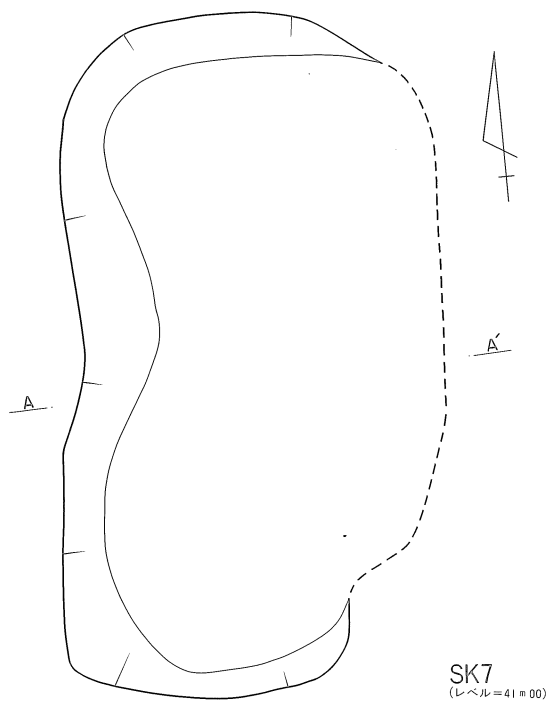
第94図 SX57-2～5 主体部実測図



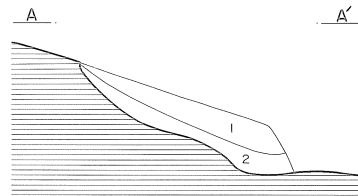
第95図 SK 1～SK 3・SK16実測図



第96図 SK 4 ~SK 6 実測図



SK10
(レベル=40 m 80)

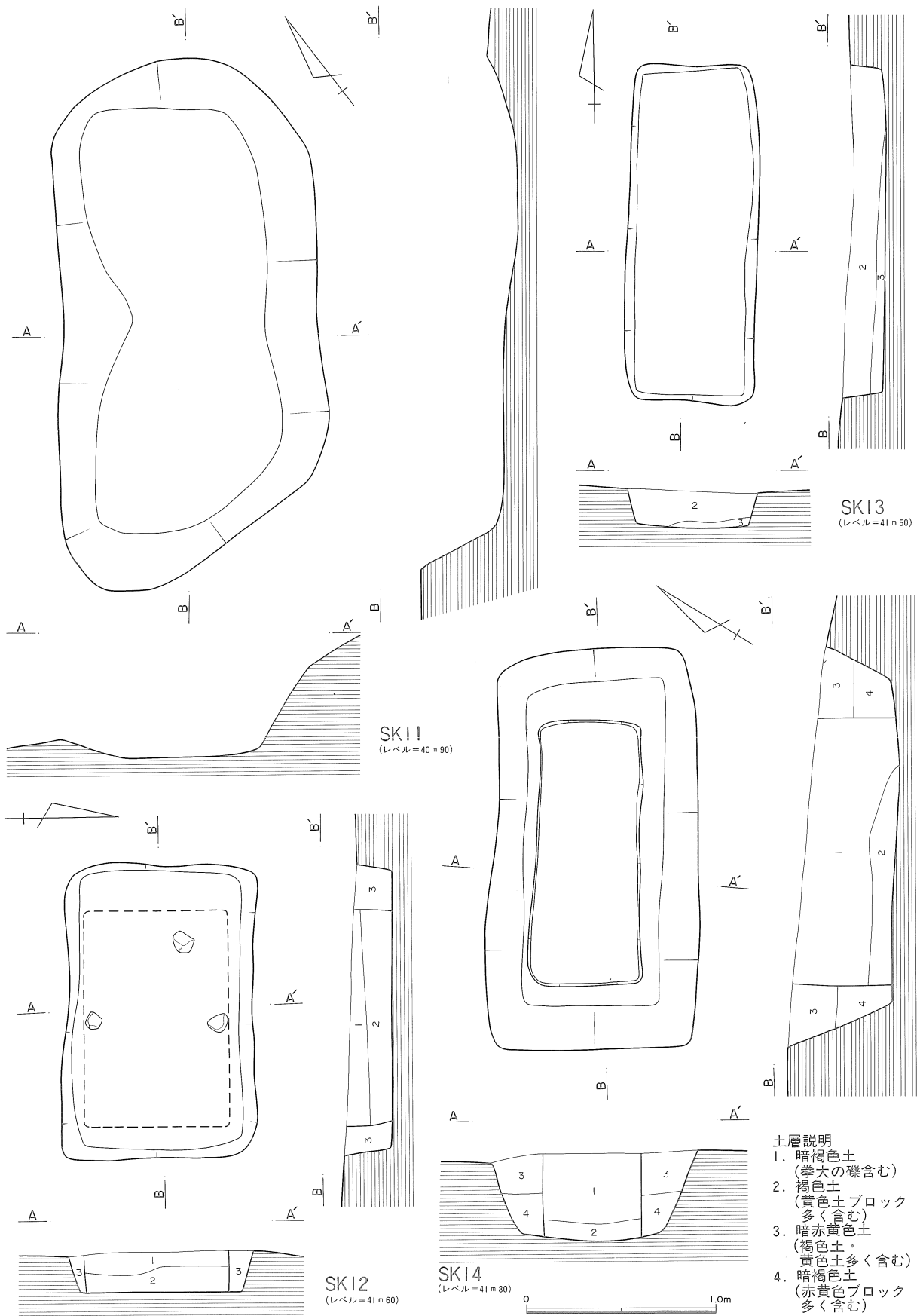


SK9
(レベル=40 m 70)

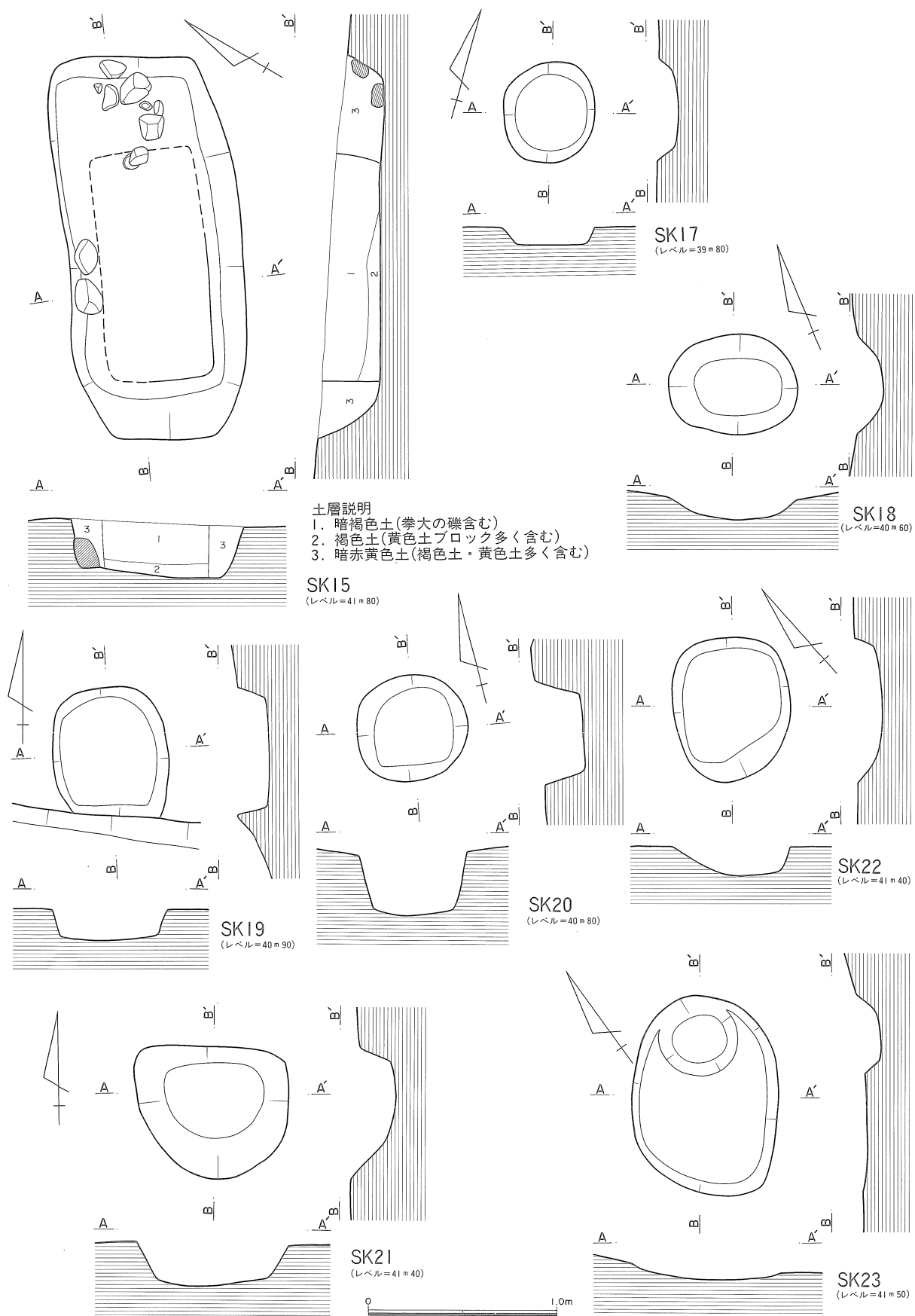
- 土層説明
 1. 黒色土(砂礫多く含む)
 2. 黒褐色土(砂礫多く含む)
 3. 暗褐色土(砂礫多く含む)

0 1.0m

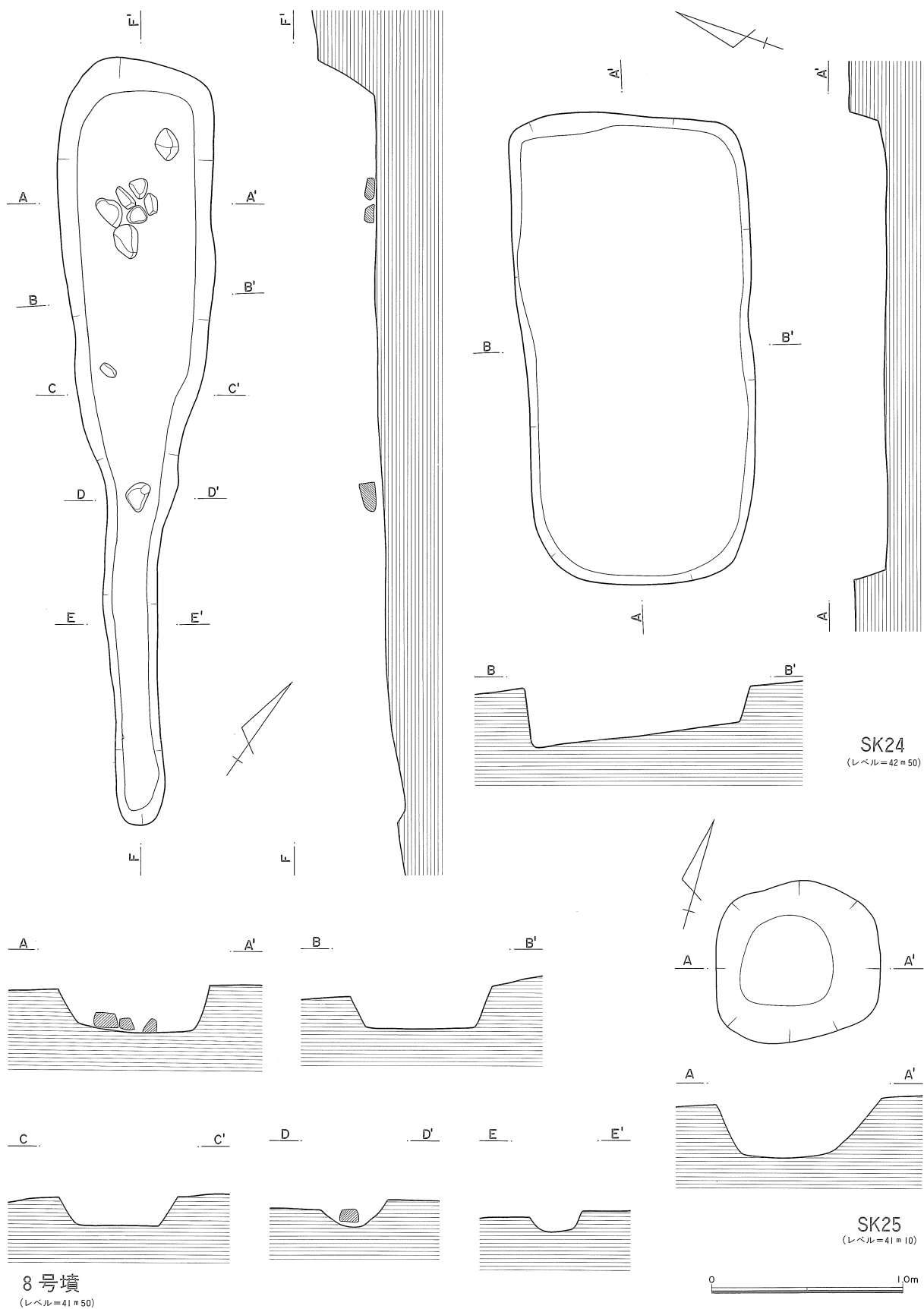
第97図 SK 7～SK 10実測図



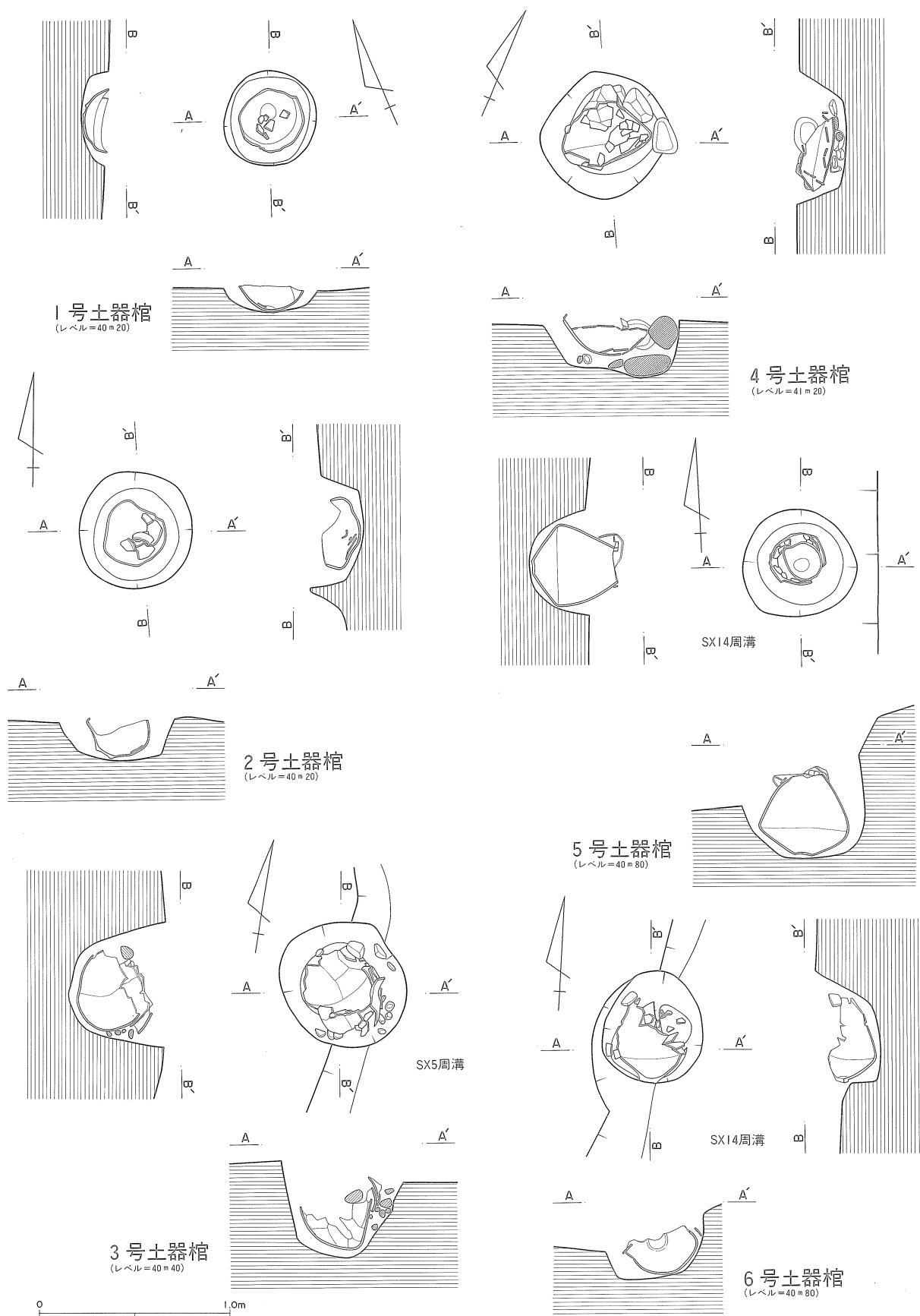
第98図 SK11～SK14実測図



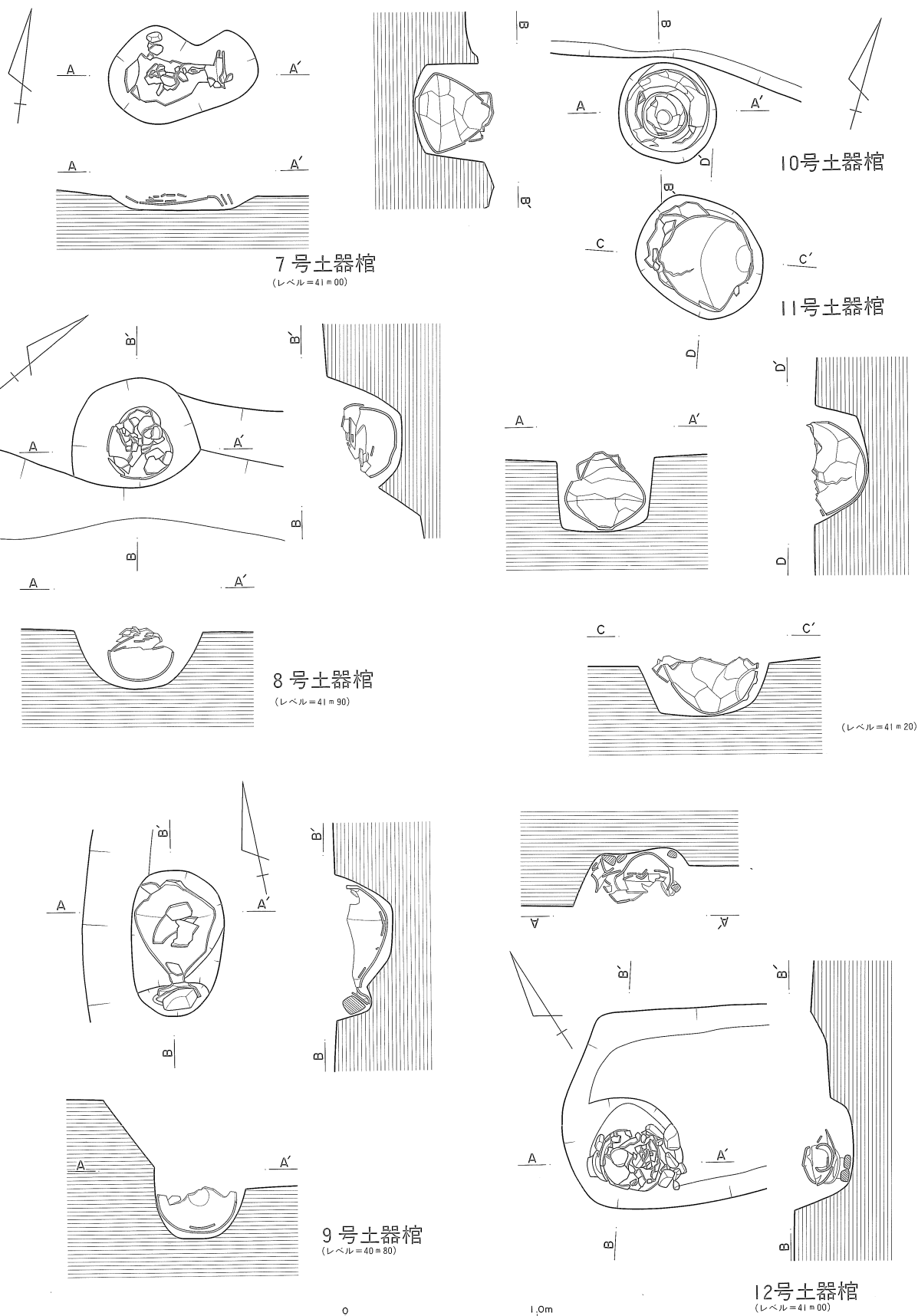
第99図 SK15・SK17～SK23実測図



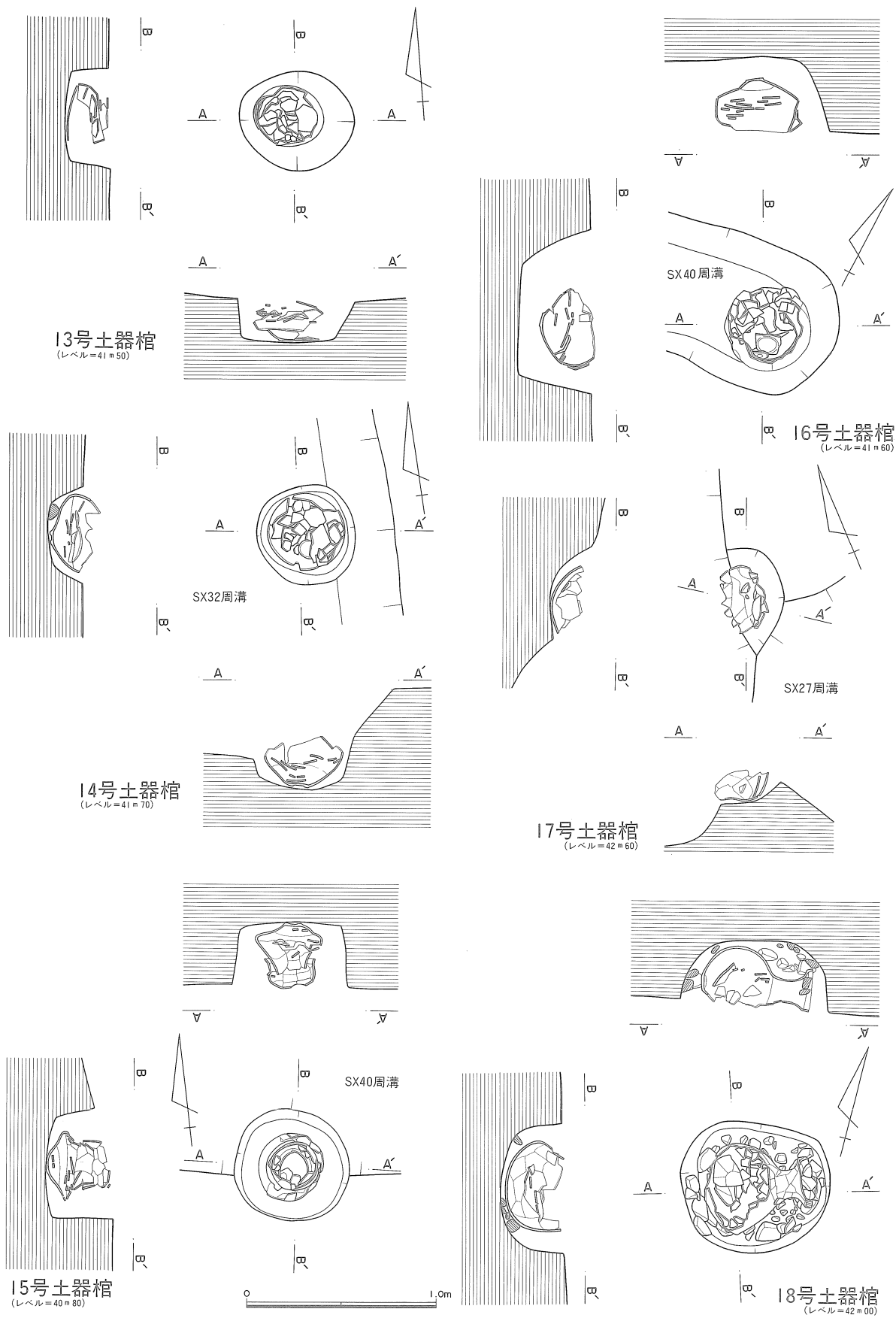
第100図 SK24・SK25・8号墳実測図



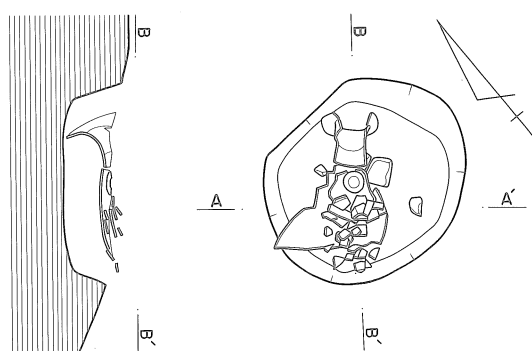
第101図 1～6号土器棺実測図



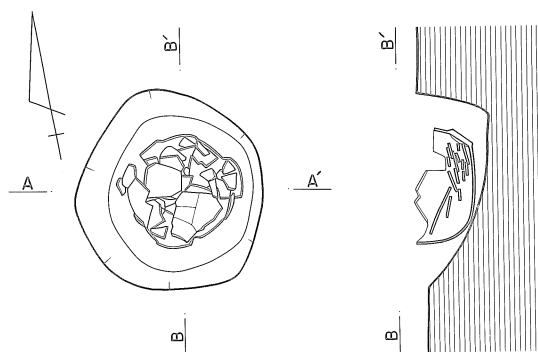
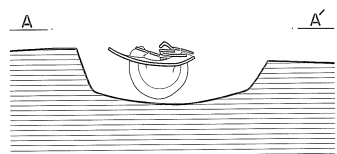
第102図 7～12号土器棺実測図



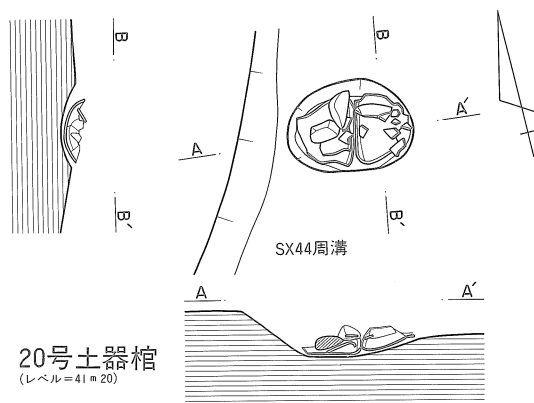
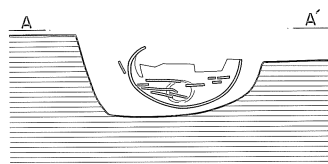
第103図 13～18号土器棺実測図



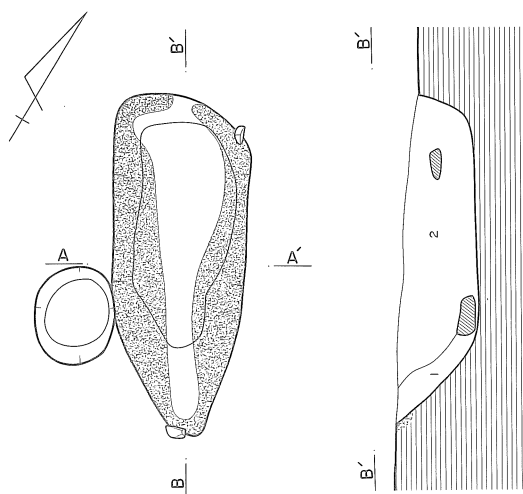
19号土器棺
(レベル=41 m 40)



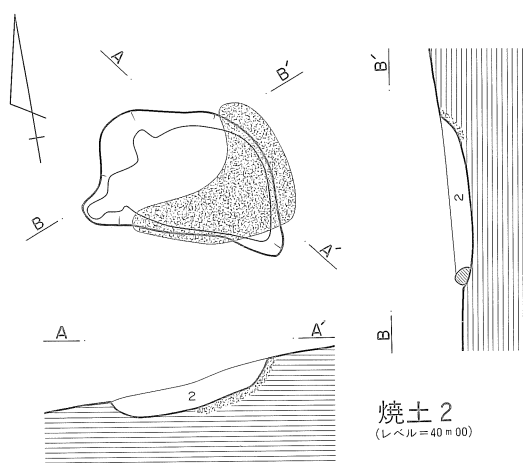
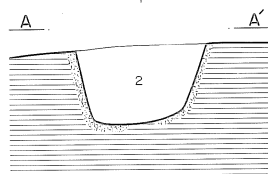
21号土器棺
(レベル=41 m 20)



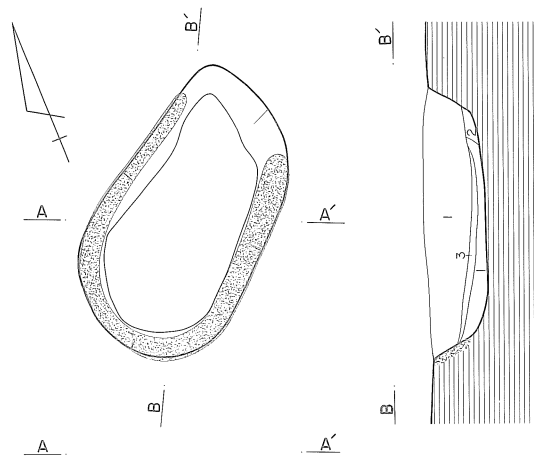
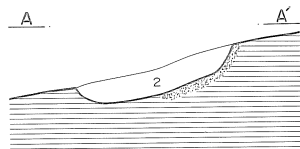
20号土器棺
(レベル=41 m 20)



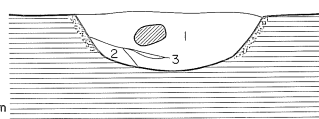
焼土1
(レベル=41 m 30)



焼土2
(レベル=40 m 00)



焼土3
(レベル=40 m 90)



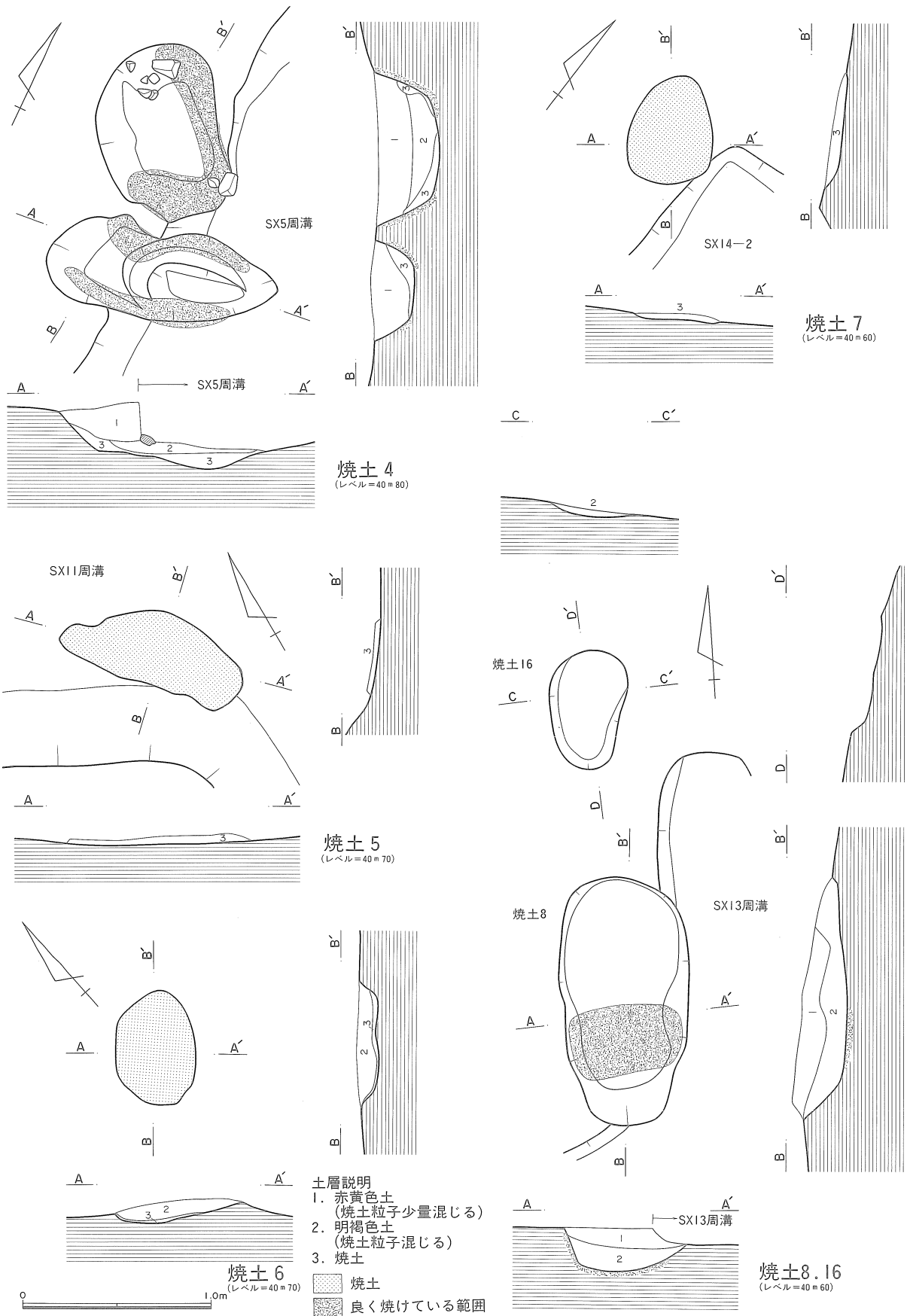
土層説明

1. 赤黄色土(焼土粒子少量混じる)
2. 明褐色土(焼土粒子混じる)
3. 焼土

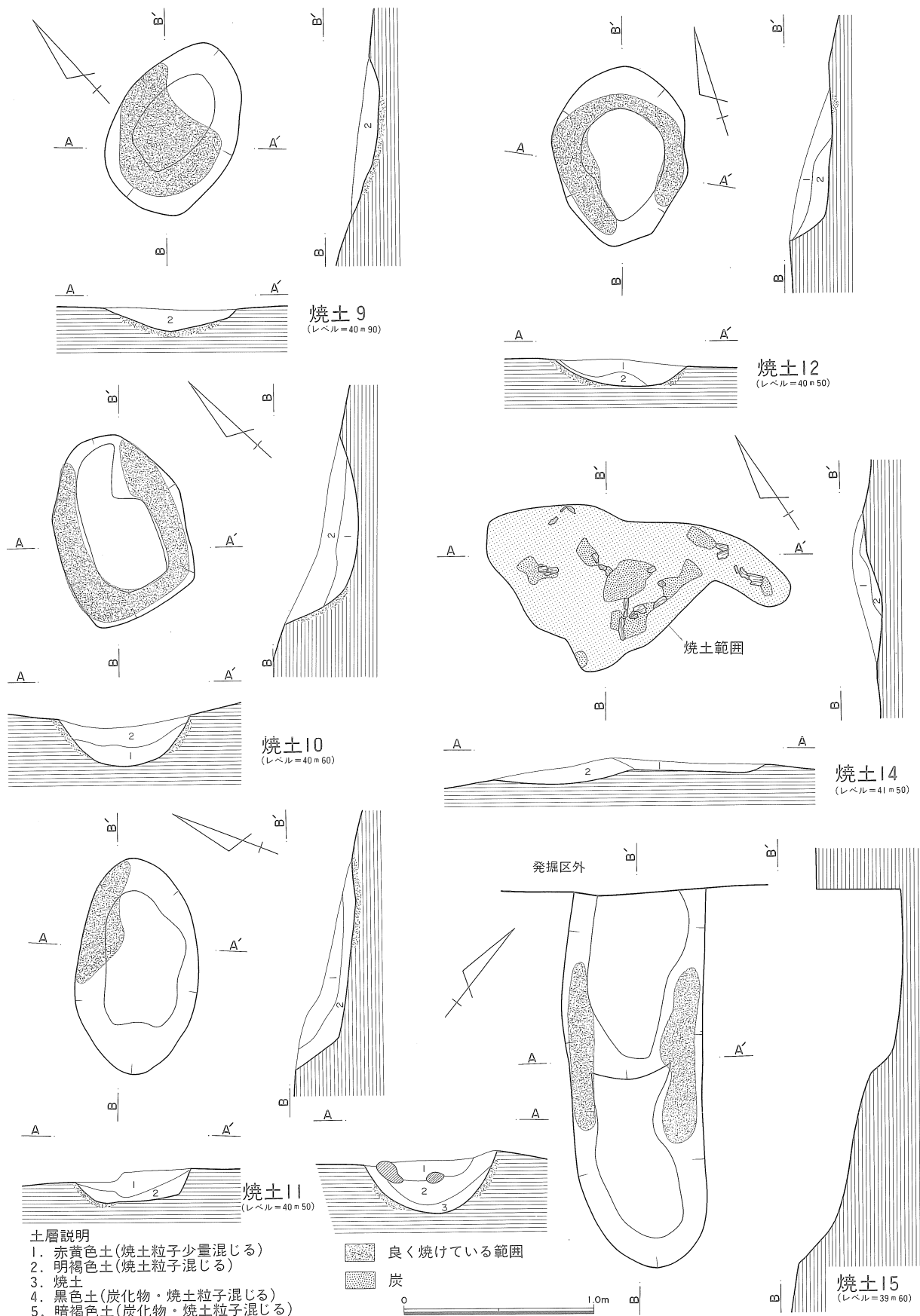
よく焼けている範囲

0 1.0m

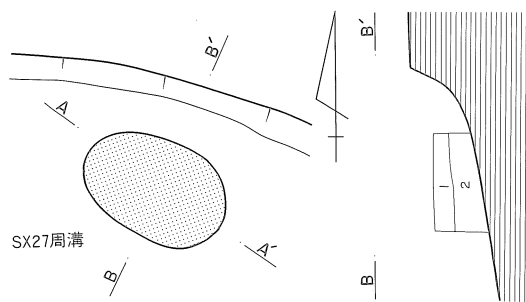
第104図 19～21号土器棺・焼土1～3実測図



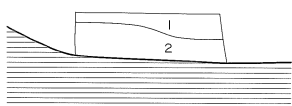
第105図 焼土 4 ~ 8・16実測図



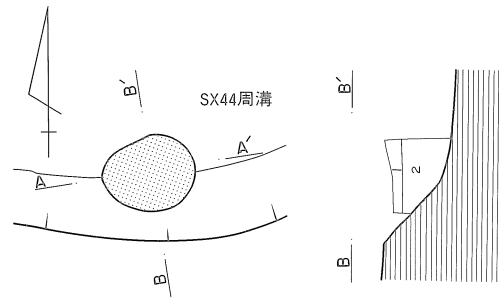
第106図 焼土 9 ~ 12・14・15実測図



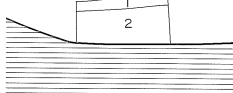
A A'



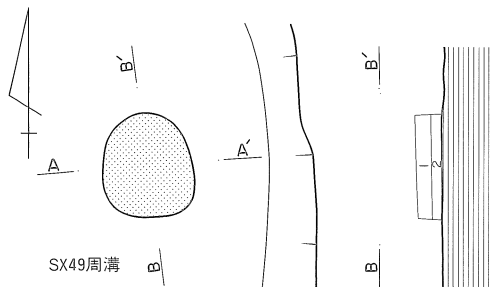
焼土17
(レベル=42 m 40)



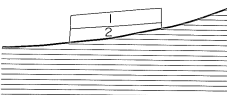
A A'



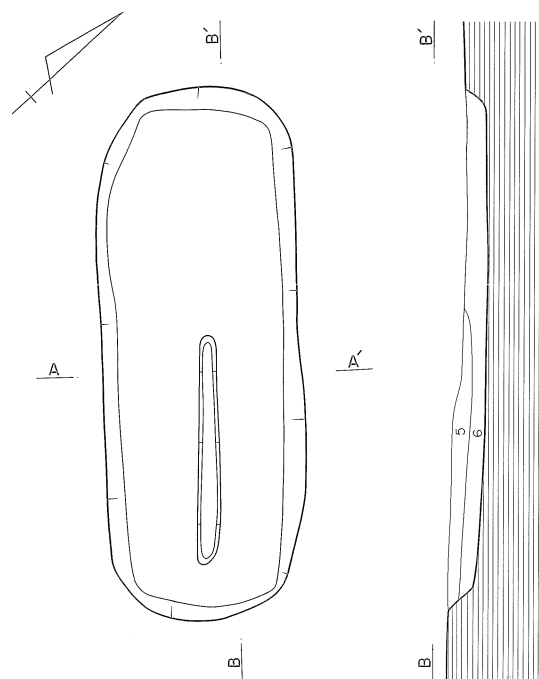
焼土20
(レベル=41 m 50)



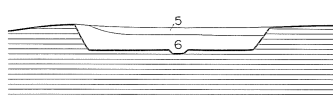
A A'



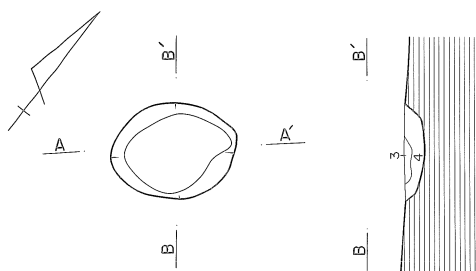
焼土18
(レベル=40 m 80)



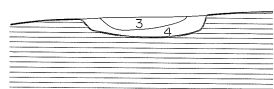
A A'



1号窯
(レベル=39 m 70)



A A'



焼土19
(レベル=41 m 60)

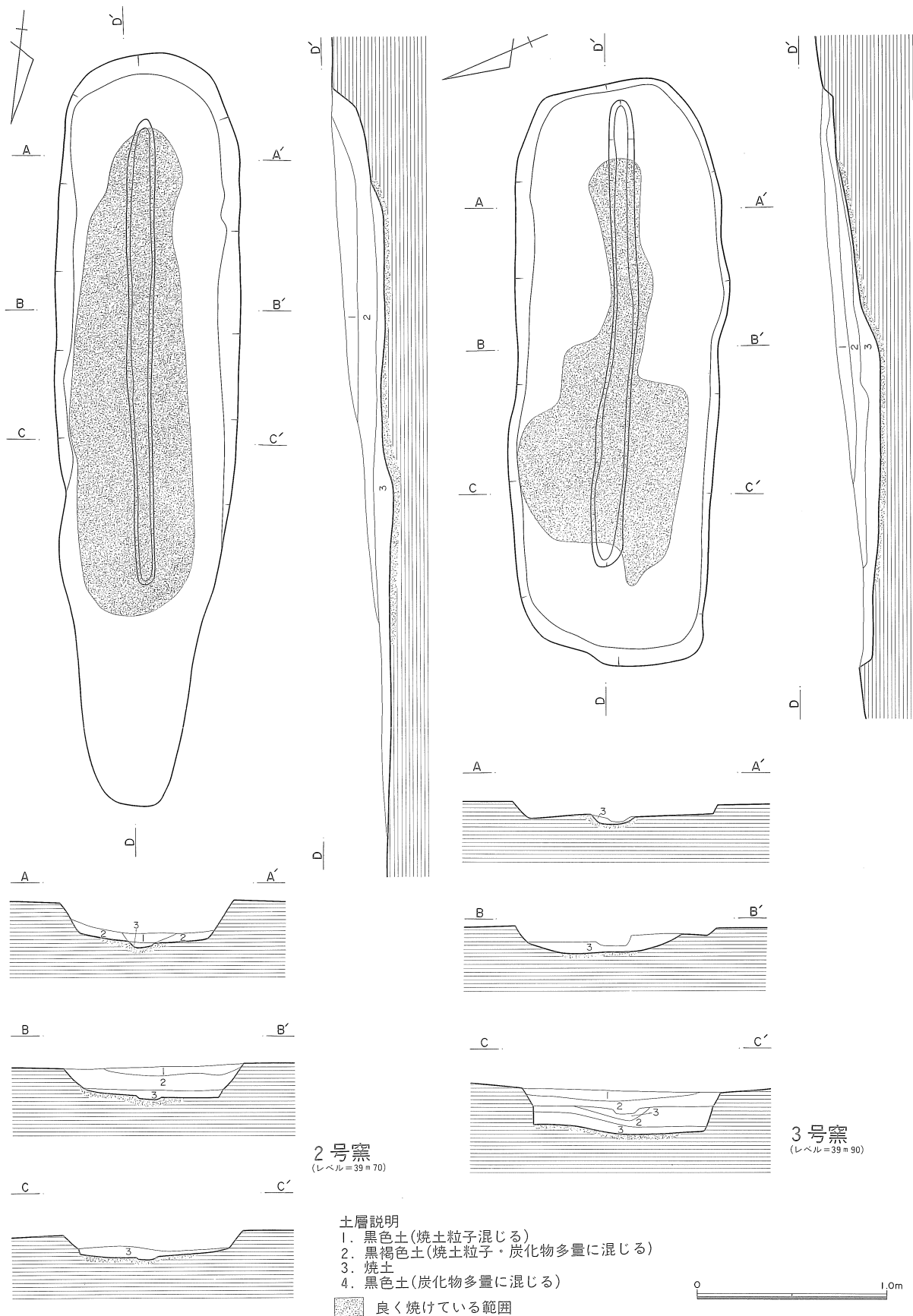
土層説明

1. 黒色土(焼土粒子混じる)
2. 黒色土(周溝土)
3. 赤黄色土(焼土粒子少量混じる)
4. 明褐色土(焼土粒子混じる)
5. 黒色土(焼土粒子混じる)
6. 黒褐色土(焼土粒子・炭化物多量に混じる)

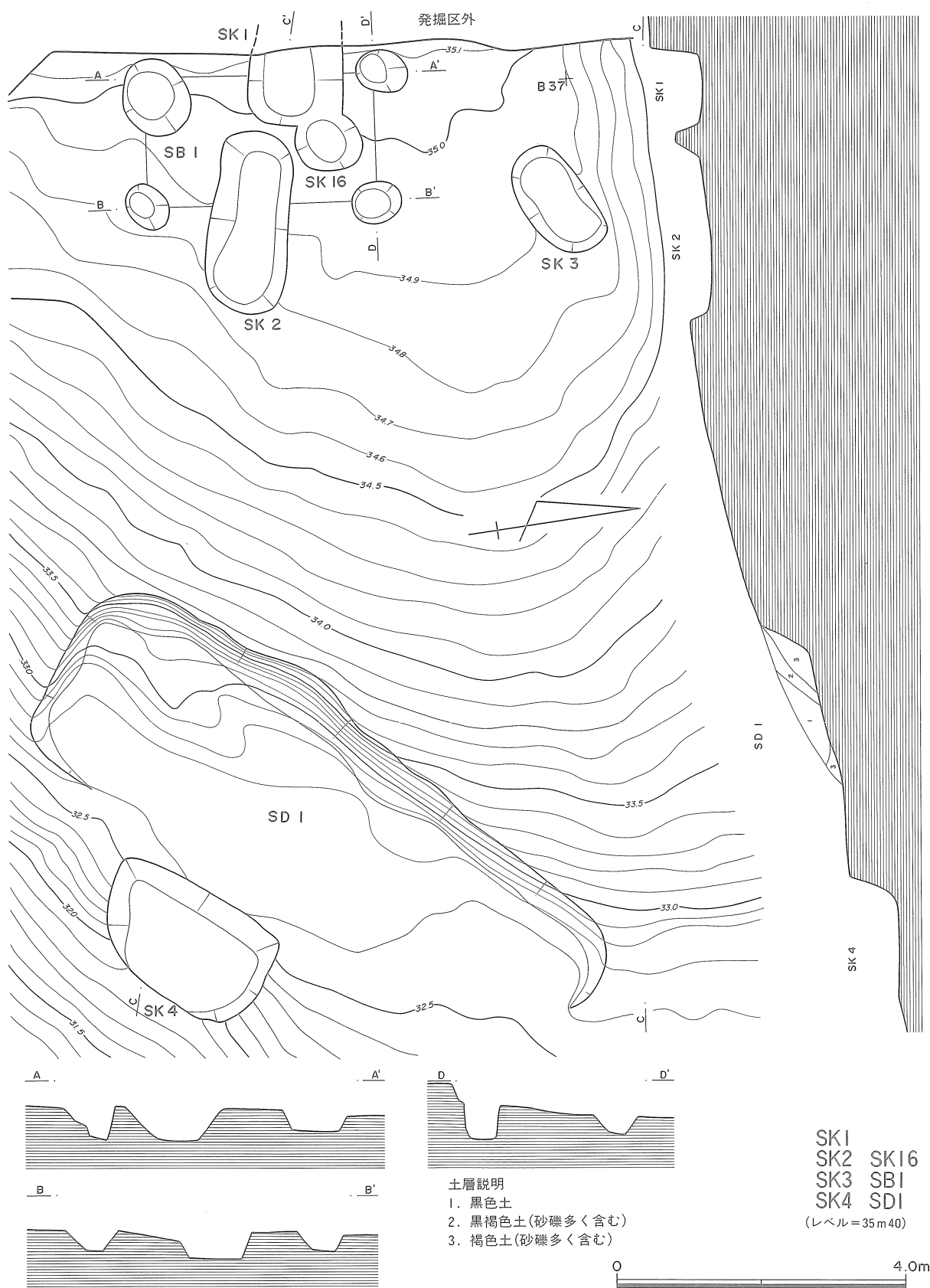
良く焼けている範囲
 焼土

0 1.0m

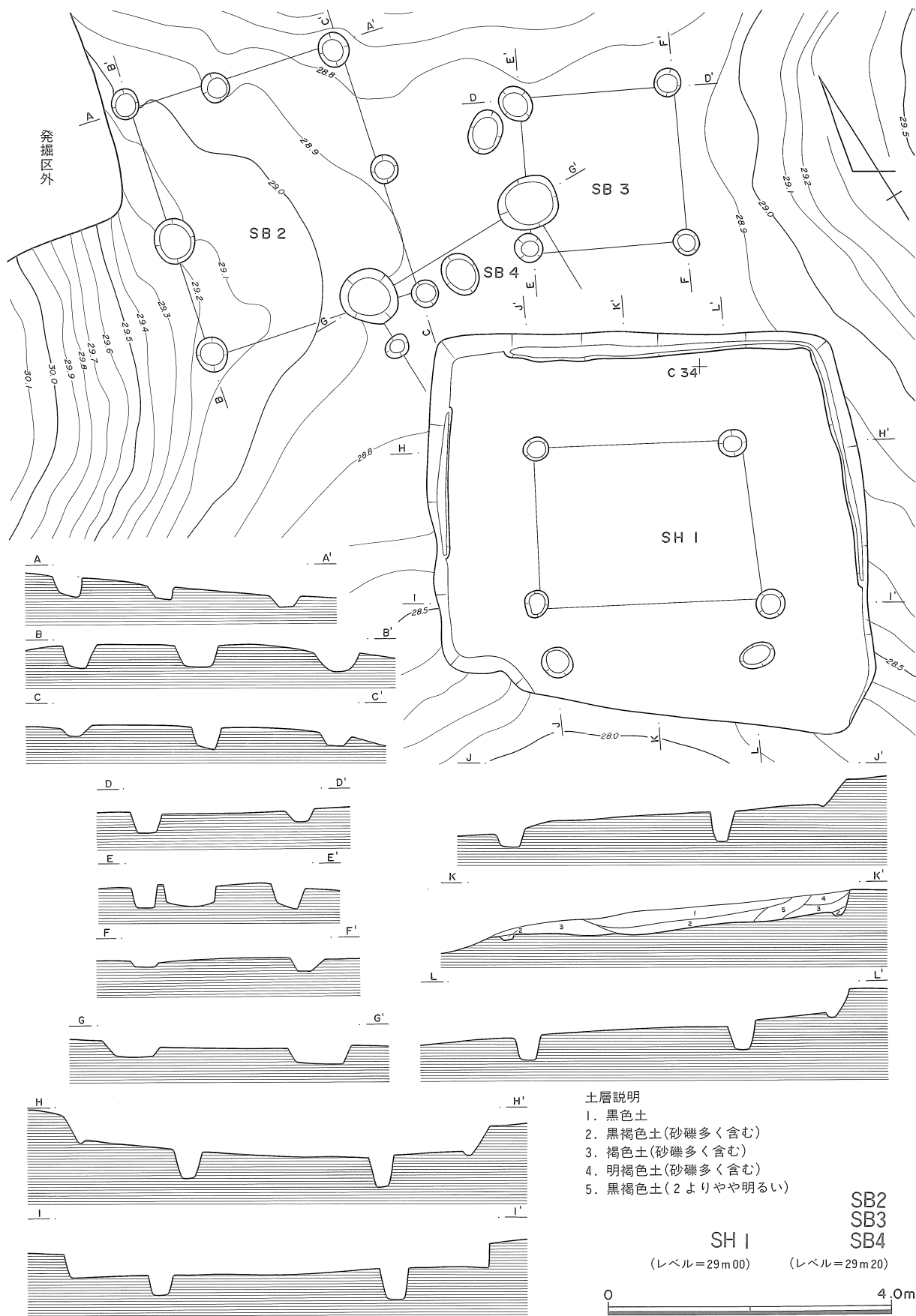
第107図 焼土17~20・1号窯実測図



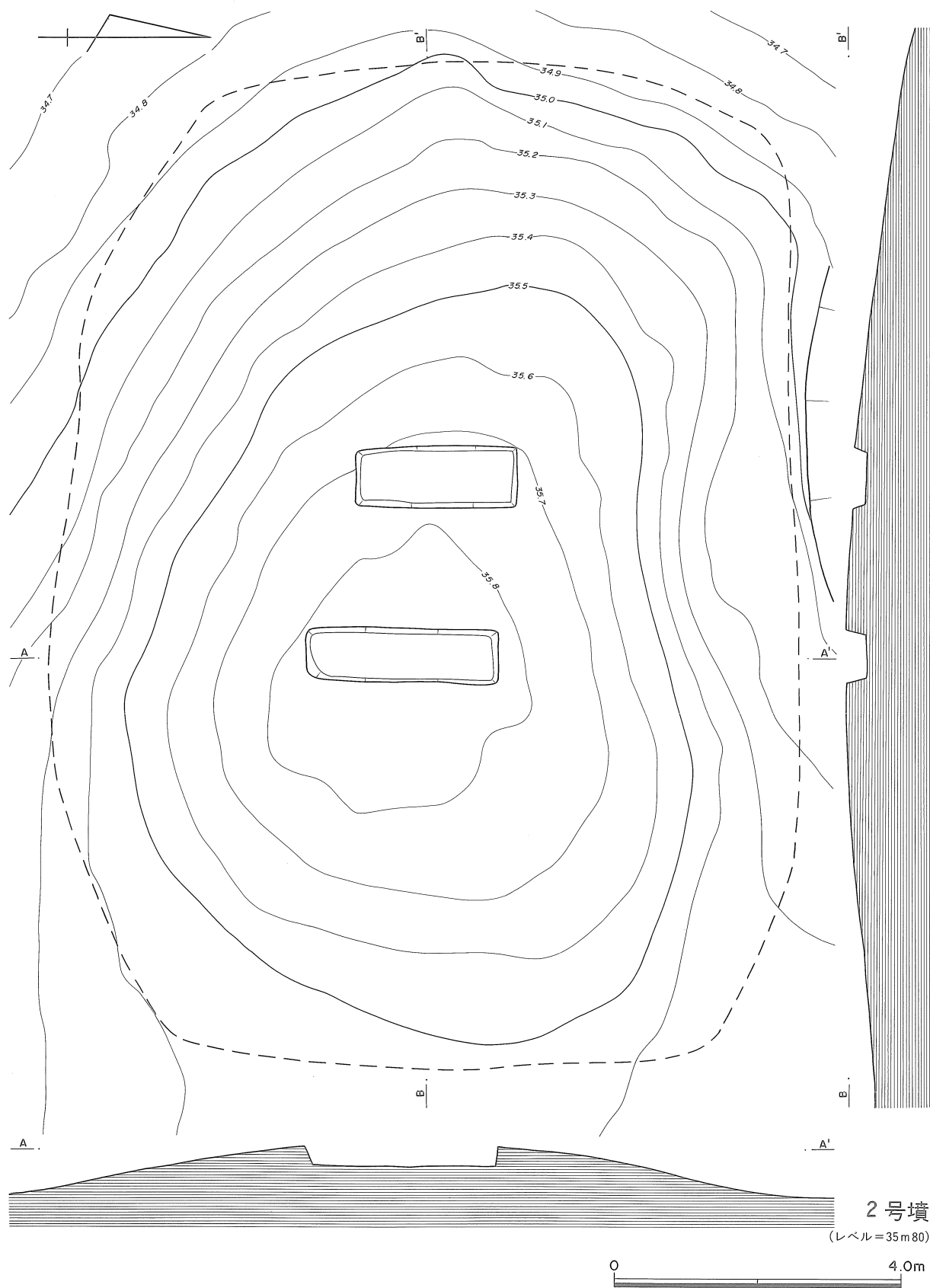
第108図 2・3号窯実測図



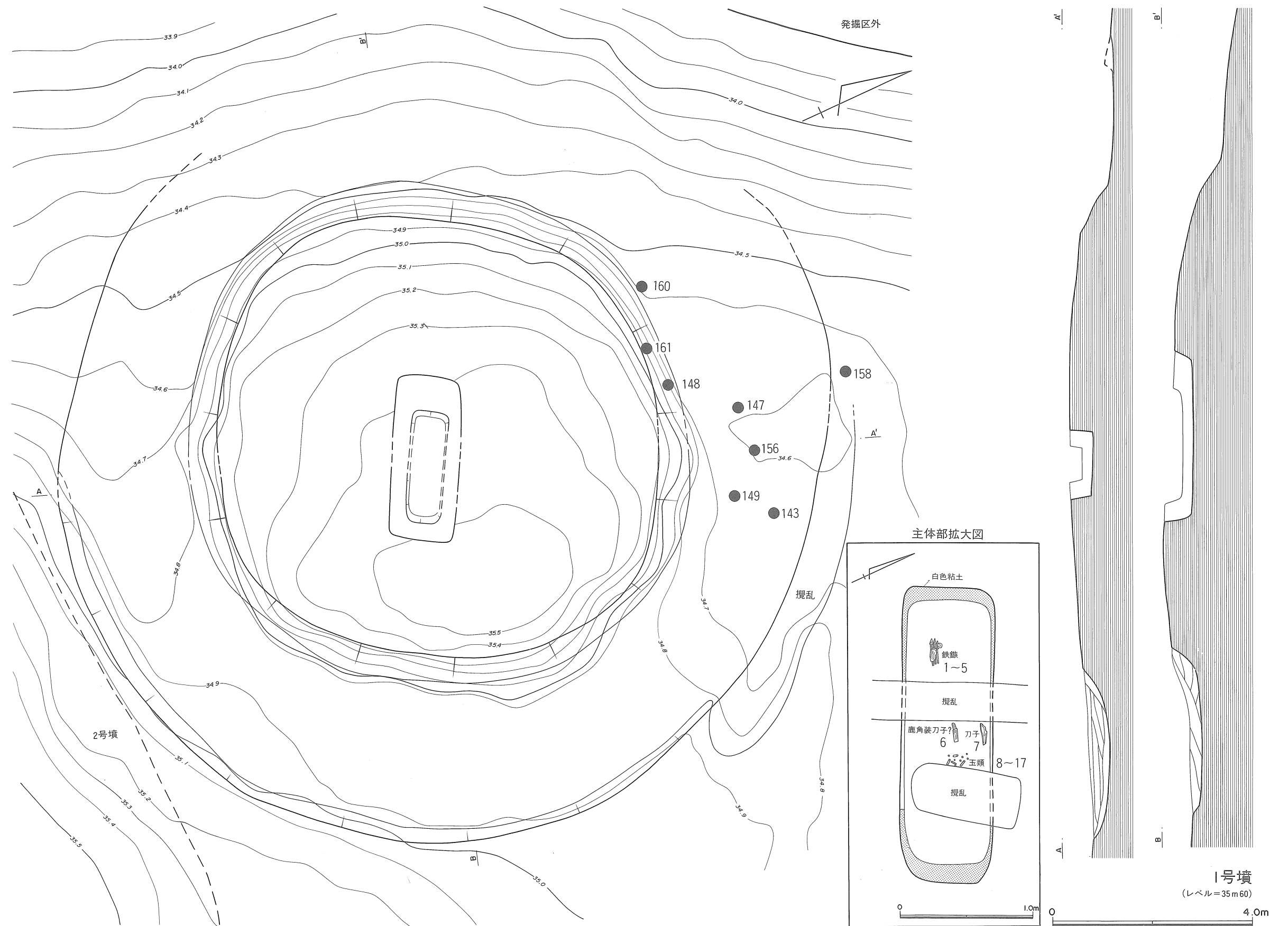
第109図 1地点西端SK 1～SK 4・SK 16・SB 1・SD 1実測図



第110図 1地点西端SB 2～SB 4・SH 1実測図



第111図 2号墳墳丘実測図

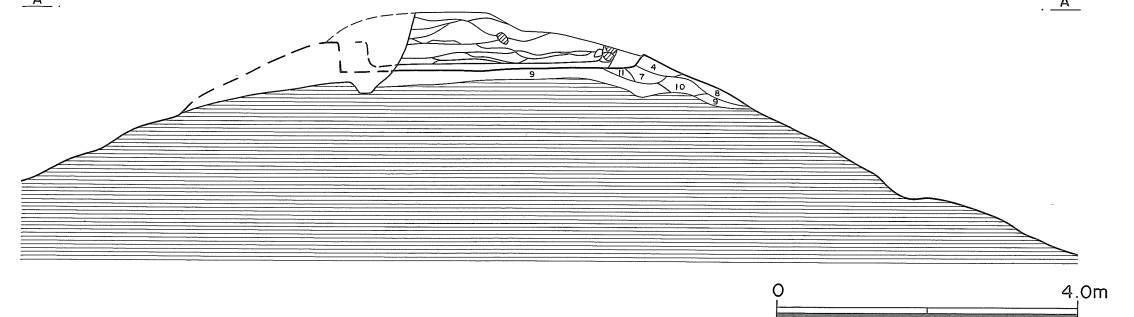


第112図 1号墳墳丘・主体部実測図

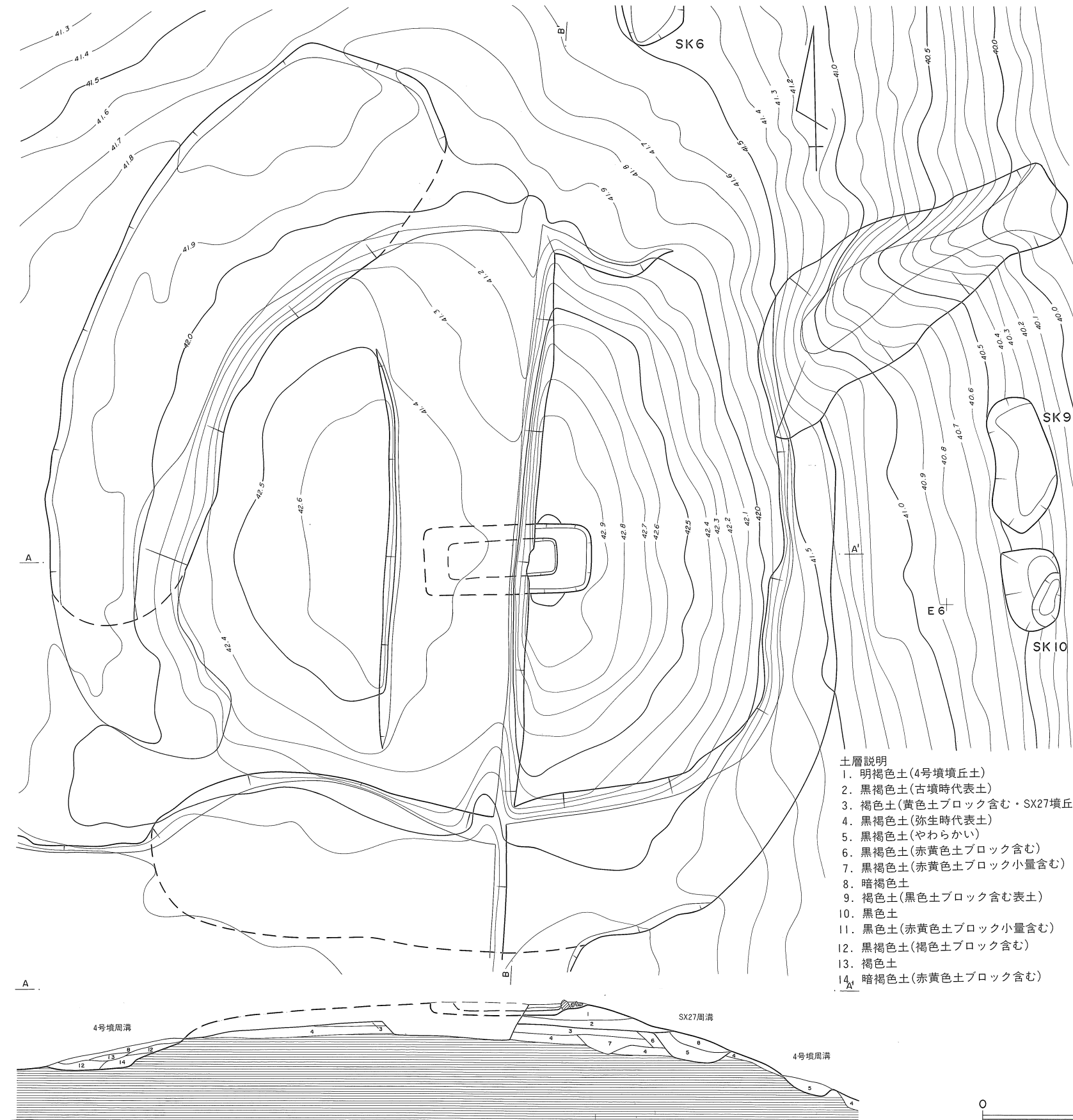


3号墳
(レベル=42m60)

- 土層説明
1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
 2. 黒褐色土
 3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)
 4. 褐色土(やわらかい)
 5. 赤黄色土(地山より暗い)
 6. 明褐色土
 7. 暗褐色土(砂礫多く含む)
 8. 褐色土(砂礫多く含む)
 9. 黒褐色土(土器含む古墳時代表土)
 10. 暗褐色土(やわらかい)
 11. 暗褐色土(砂礫ほとんど含まない)



第113図 3号墳墳丘実測図

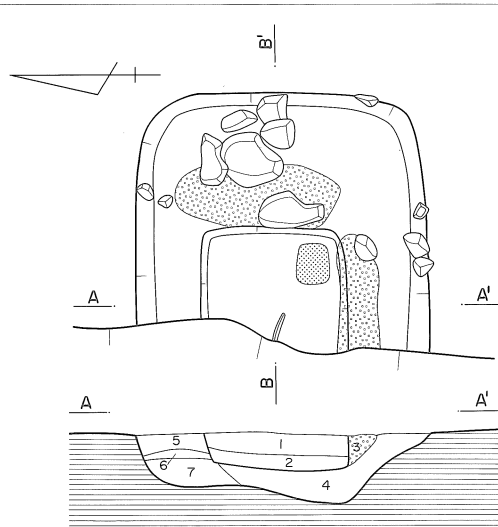
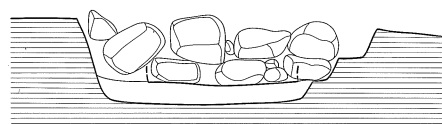
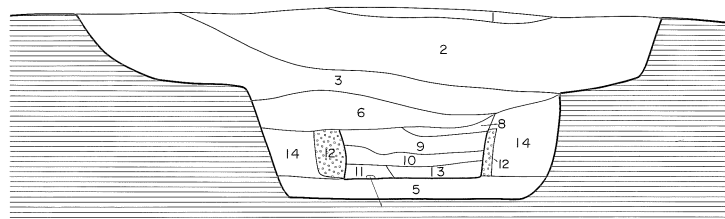
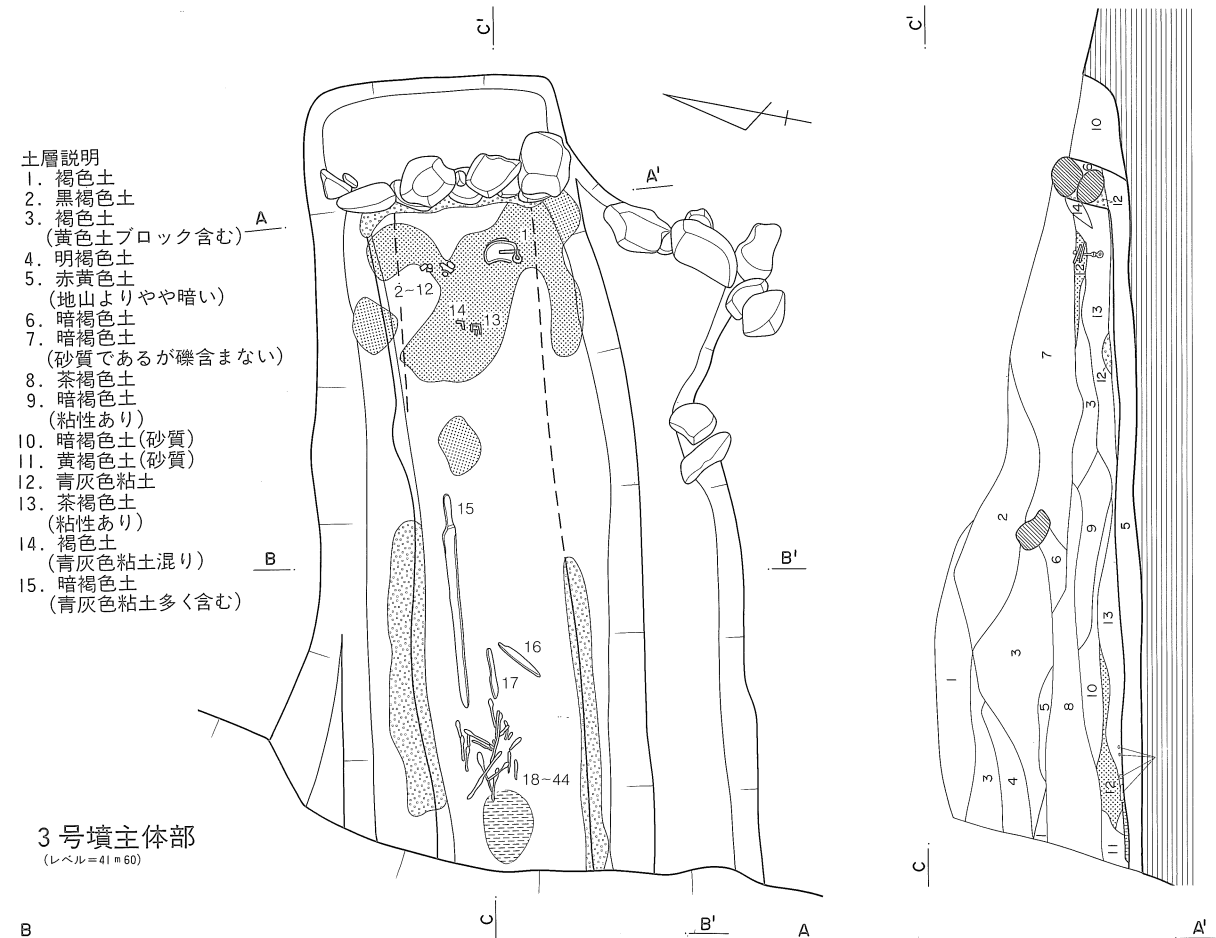


第114図 4号墳墳丘実測図

- 土層説明
1. 褐色土
 2. 黒褐色土
 3. 褐色土
(黄土ブロック含む)
 4. 明褐色土
 5. 赤黄土
(地山よりやや暗い)
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
(砂質であるが礫含まない)
 8. 茶褐色土
 9. 暗褐色土
(粘性あり)
 10. 暗褐色土(砂質)
 11. 黄褐色土(砂質)
 12. 青灰色粘土
 13. 茶褐色土
(粘性あり)
 14. 褐色土
(青灰色粘土混り)
 15. 暗褐色土
(青灰色粘土多く含む)

3号墳主体部

(レベル=41~60)



4号墳主体部

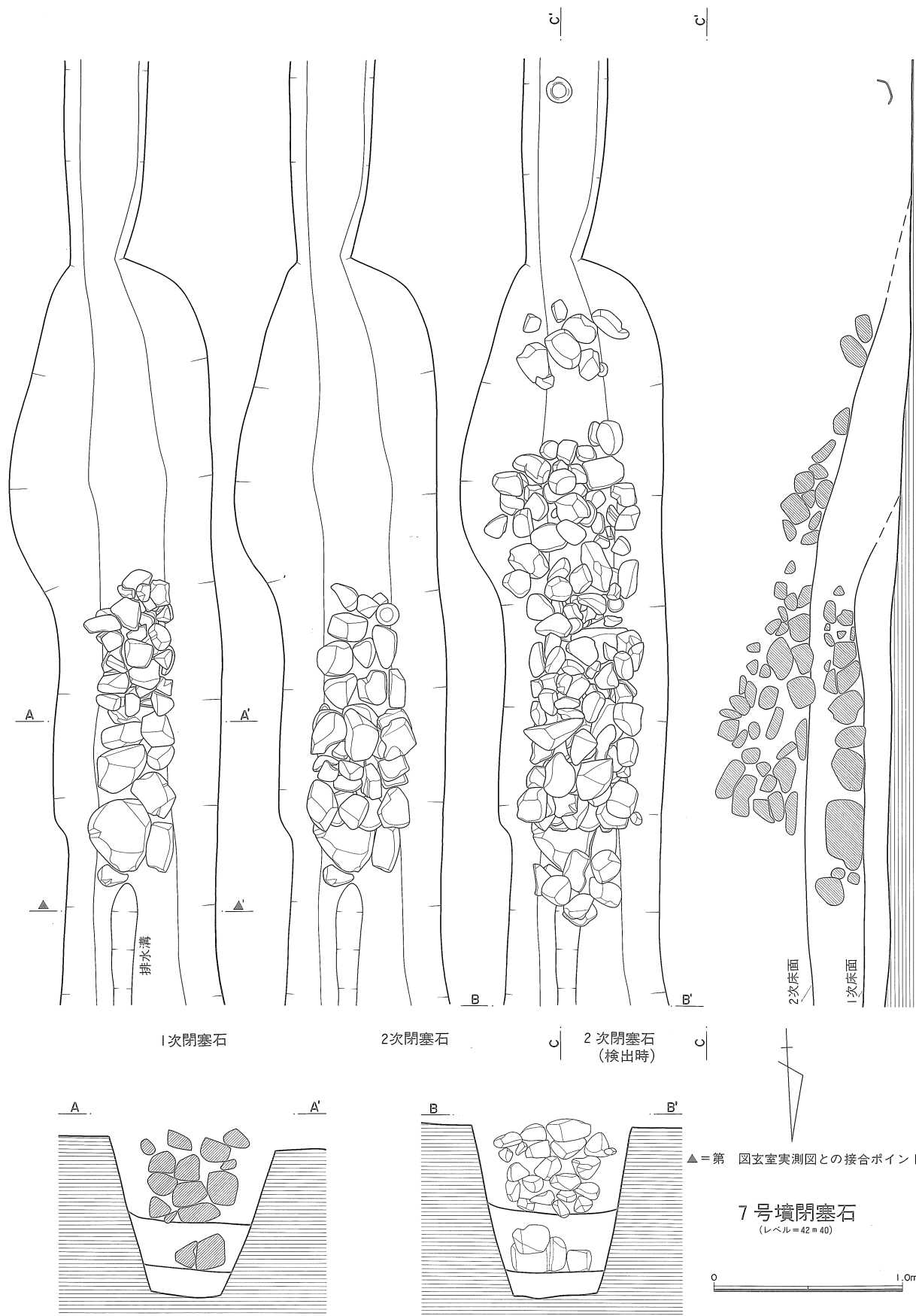
(レベル=43m 10)

- 土層説明
1. 暗褐色土
 2. 褐色土
 3. 青灰色粘土
 4. 明褐色土
 5. 明褐色土(粘性がある)
 6. 褐色土
 7. 暗褐色土(砂礫少量含む)

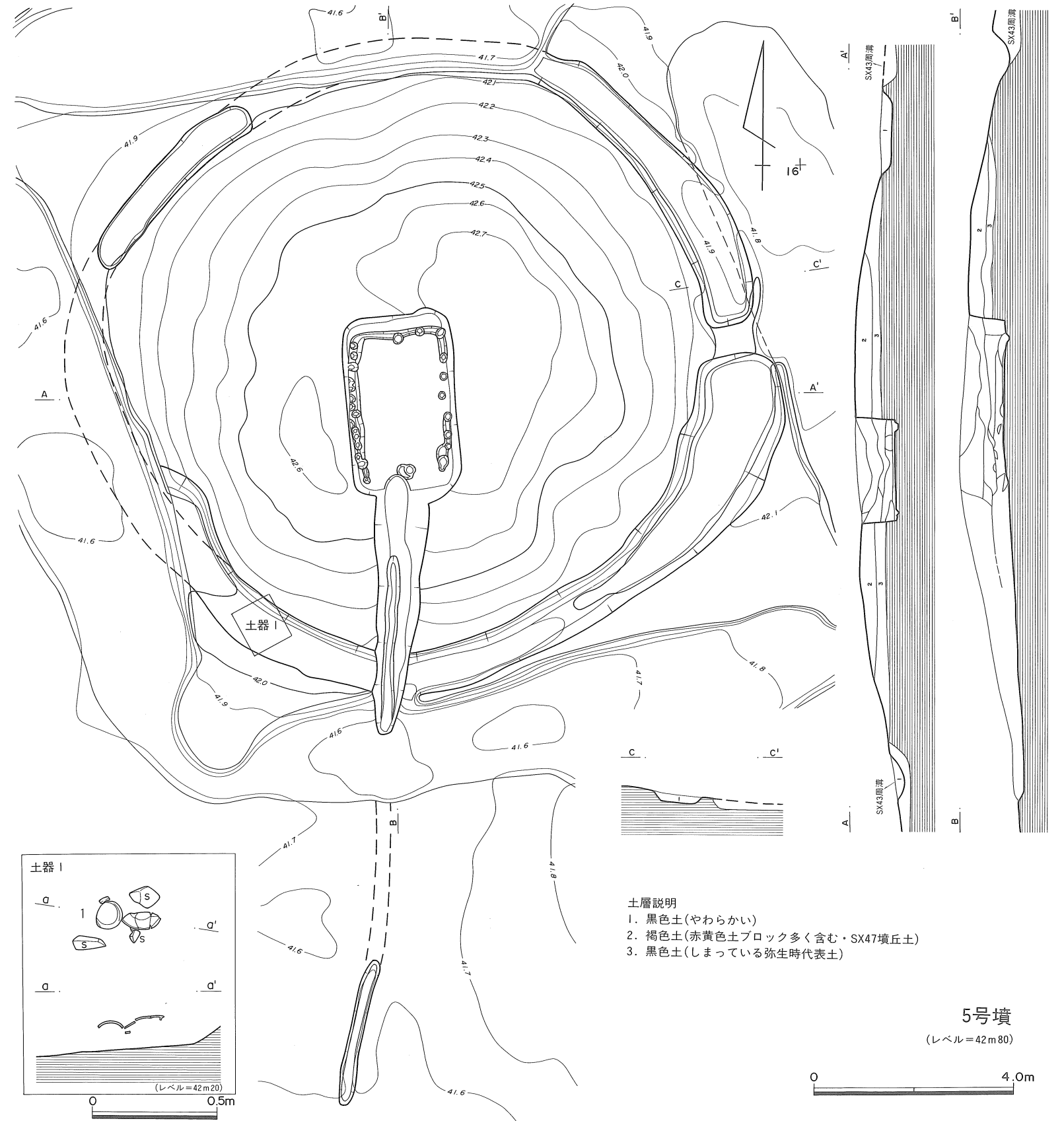
- 青灰色粘土(棺上層)
- 青灰色粘土
(小口・側面部分)
- 赤色顔料範囲

0 1.0m

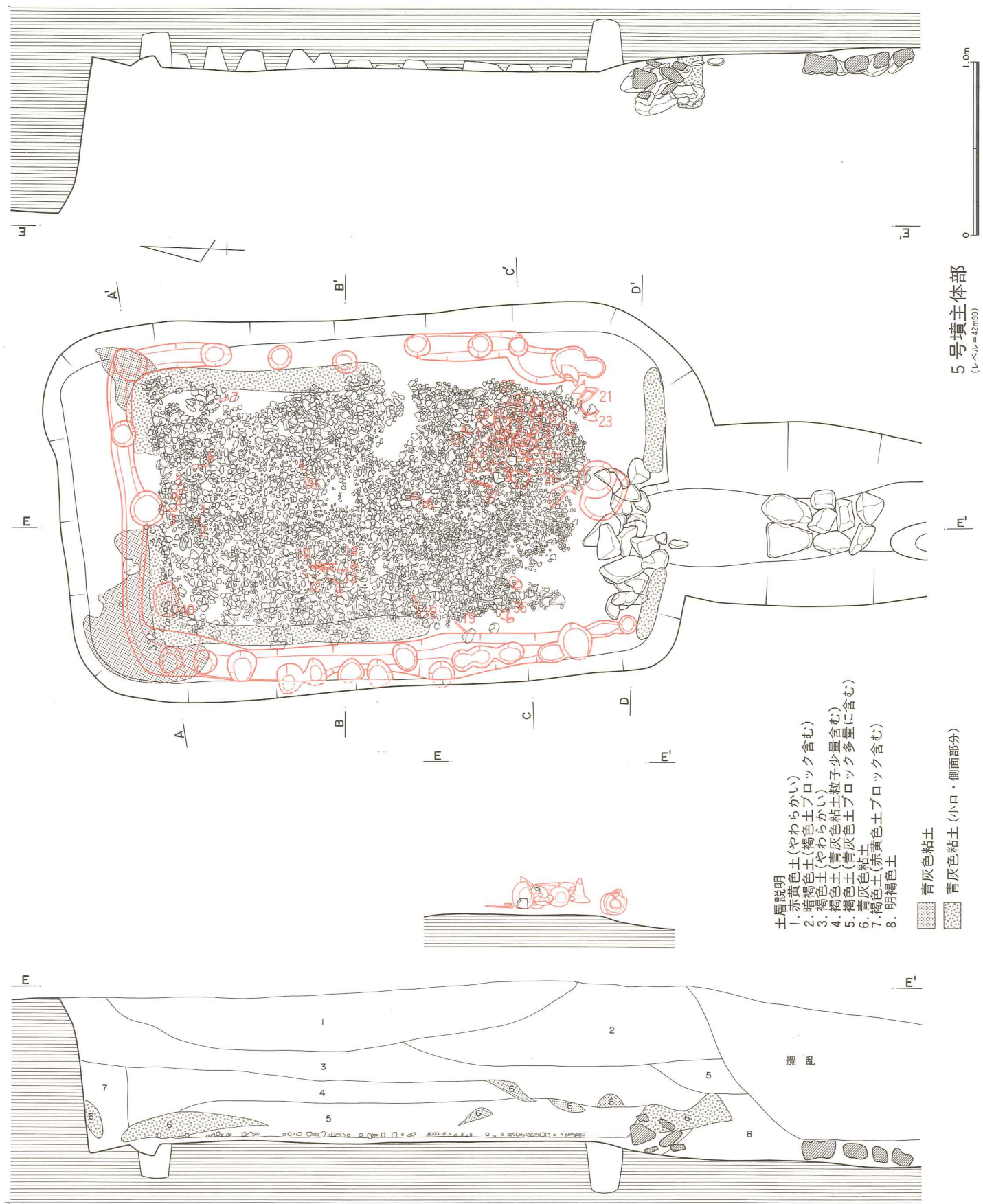
第115図 3号墳・4号墳主体部実測図



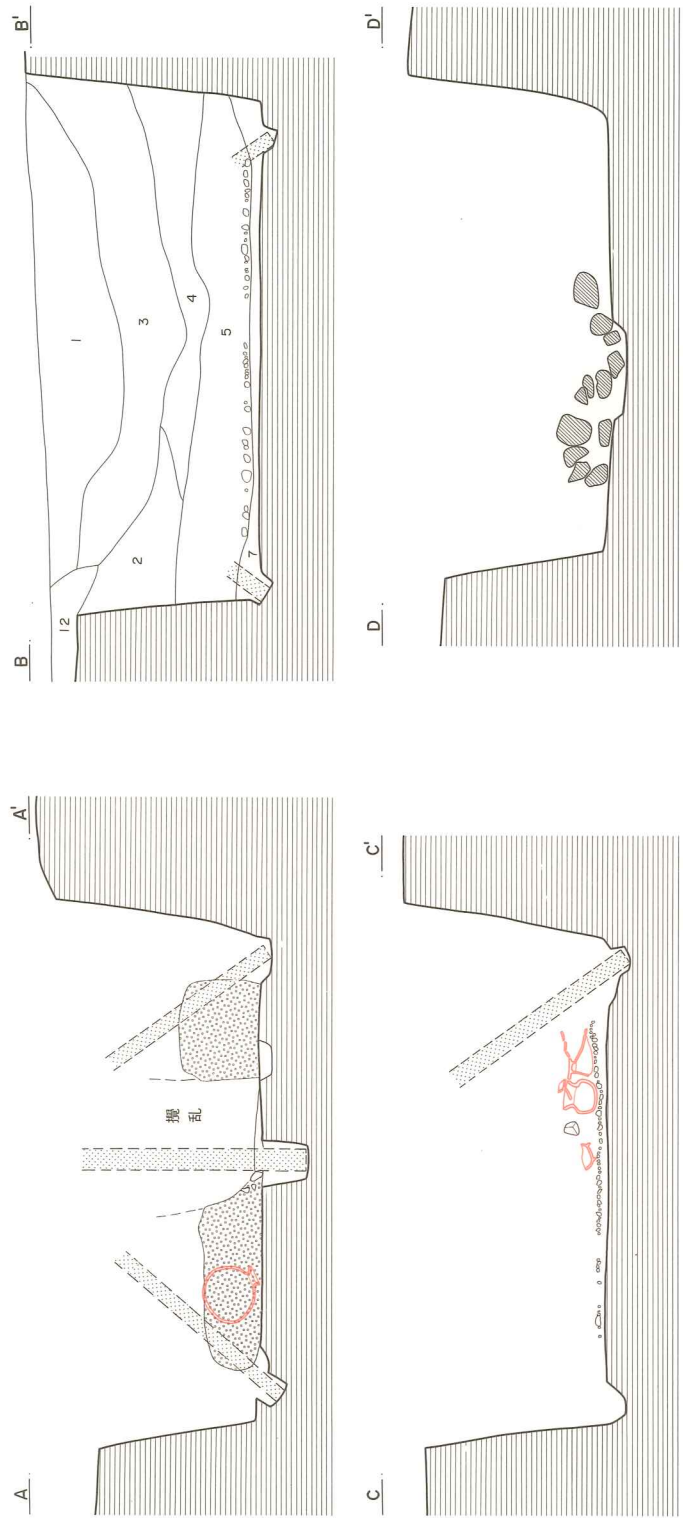
第116図 7号墳閉塞石実測図

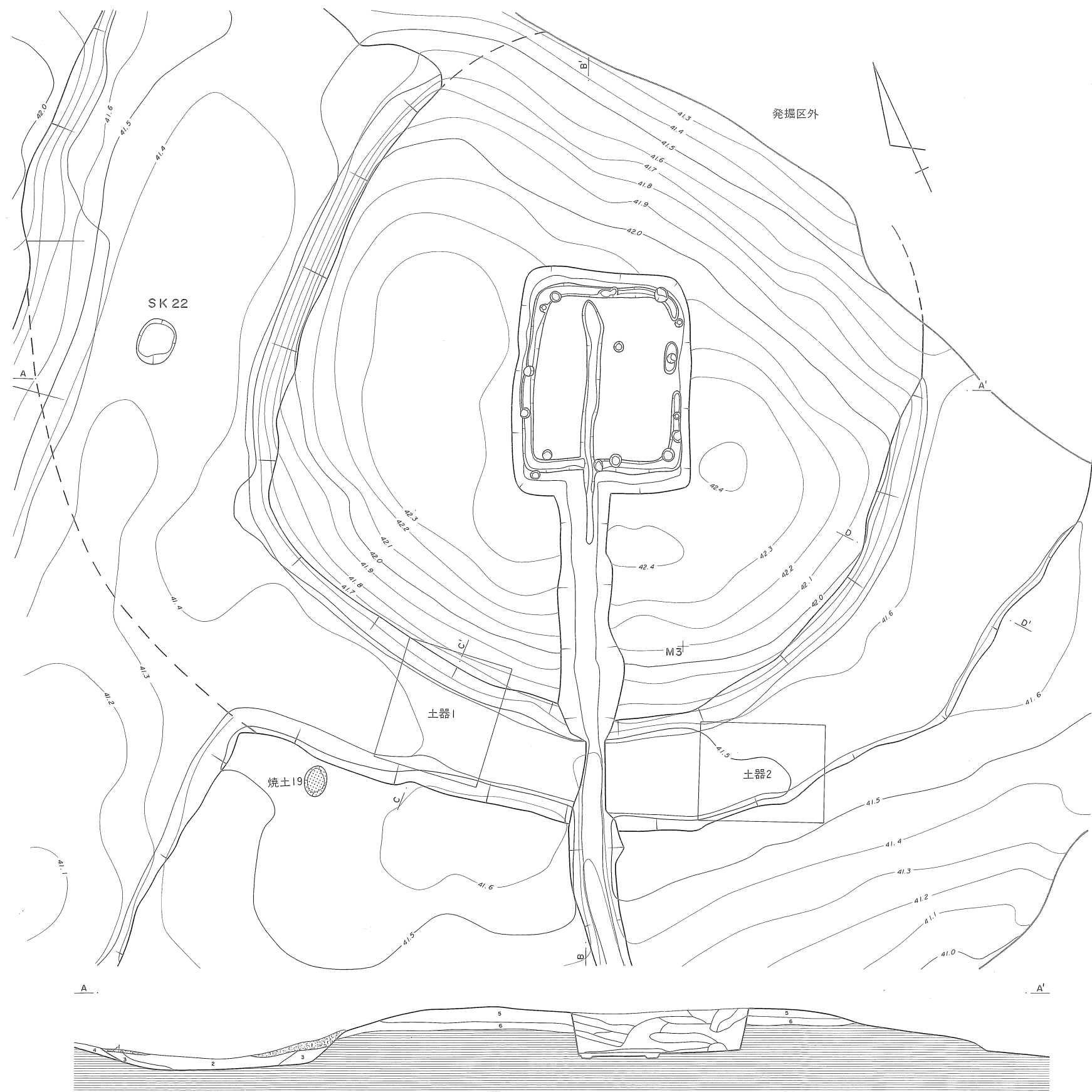


第117図 5号墳墳丘実測図



第118図 5号墳主体部実測図

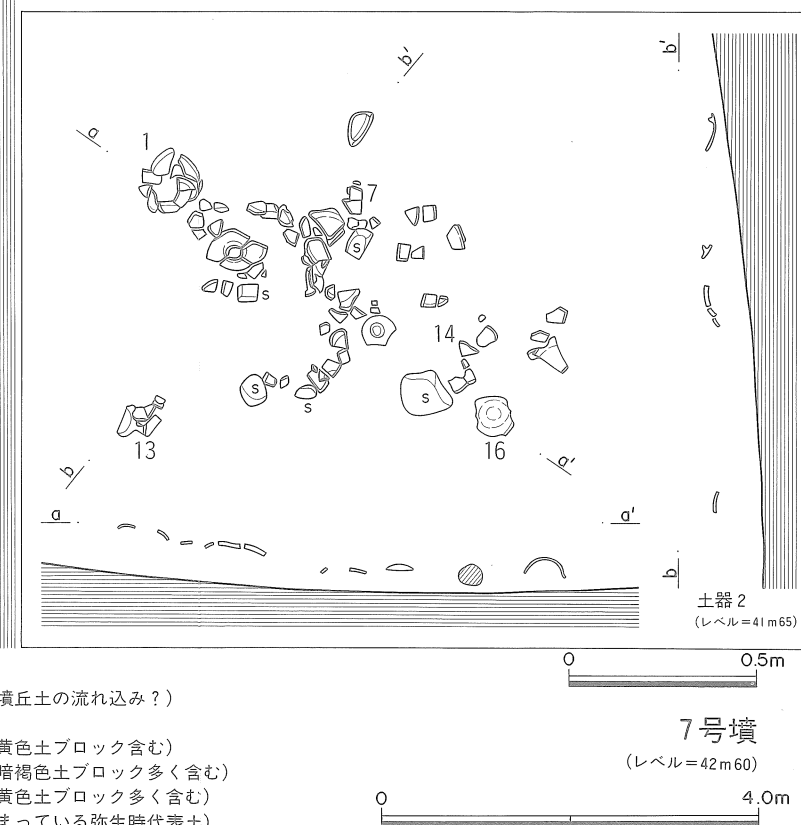
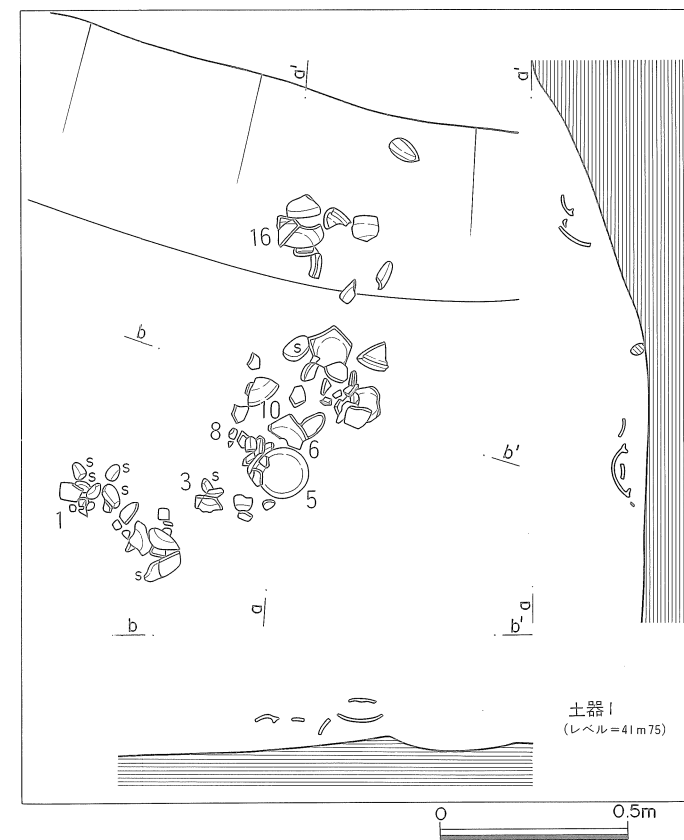


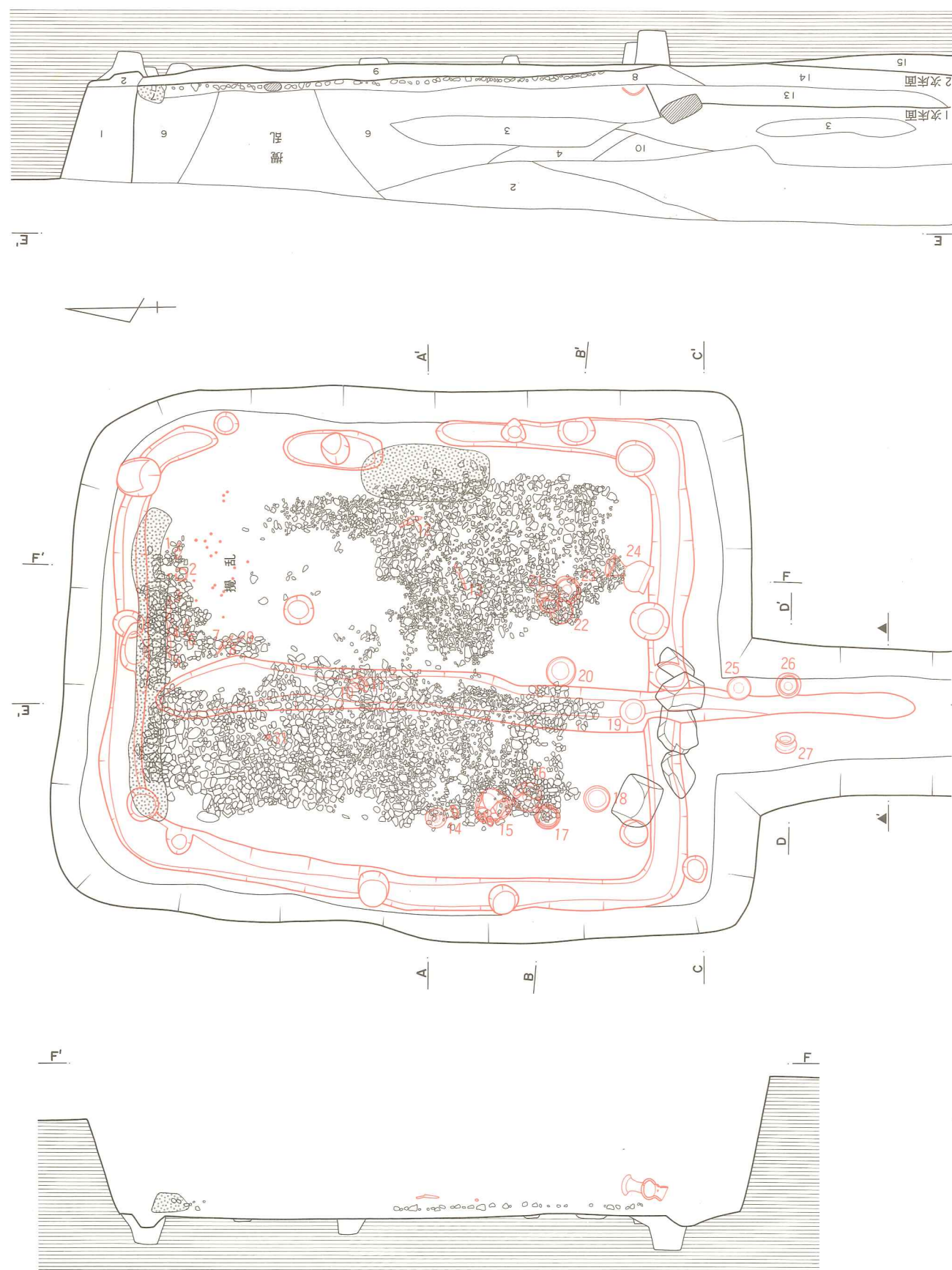


第119図 7号墳墳丘実測図

土層説明

1. 暗褐色土(墳丘土の流れ込み?)
2. 黒褐色土
3. 褐色土(赤黄色土ブロック含む)
4. 黒褐色土(暗褐色土ブロック多く含む)
5. 褐色土(赤黄色土ブロック多く含む)
6. 黒色土(しまっている弥生時代表土)





第120図 7号墳主体部実測図

▲=第 図閉塞石実測図との接合ポイント

青灰色粘土

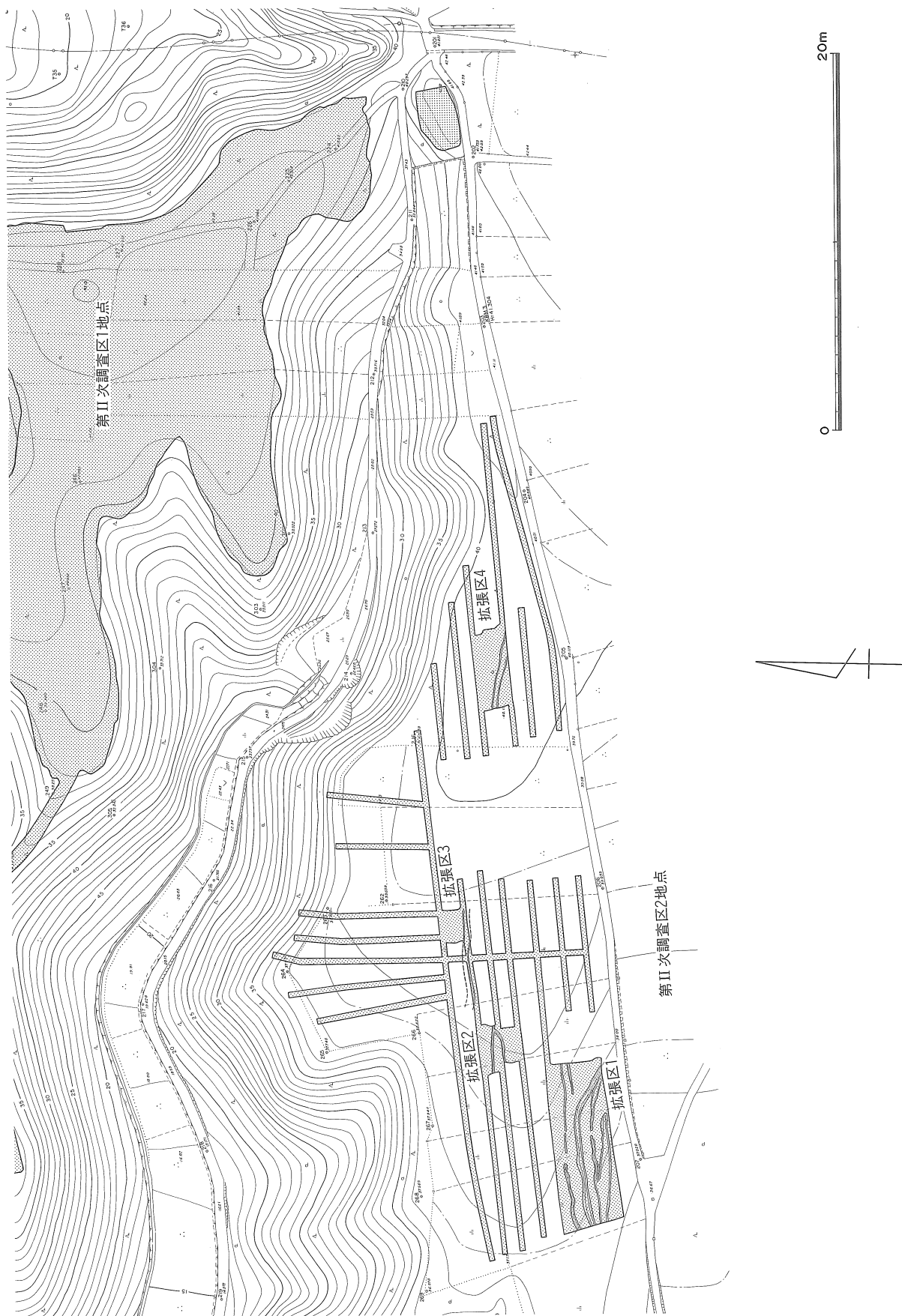
土層説明

1. 暗褐色土 (やわらかい)
2. 暗褐色土 (赤黄色土ブロック 少量含む)
3. 褐色土 (赤黄色土ブロック 多量に含む)
4. 赤黄色土 (赤黄色土ブロック 少量含む)
5. 褐色土 (赤黄色土ブロック 少量含む)
6. 暗褐色土 (赤黄色土ブロック 少量含む)
7. 青灰色粘土 (やわらかい)
8. 明褐色土 (赤黄色土ブロック 少量含む)
9. 褐色土 (赤黄色土ブロック 少量含む)
10. 褐色土 (赤黄色土含む)
11. 暗褐色土 (やわらかい)
12. 暗褐色土 (やわらかい)
13. 黒褐色土 (赤黄色土ブロック 少量含む)
14. 黒褐色土 (赤黄色土ブロック 少量含む)
15. 黒褐色土 (赤黄色土ブロック 少量含む)

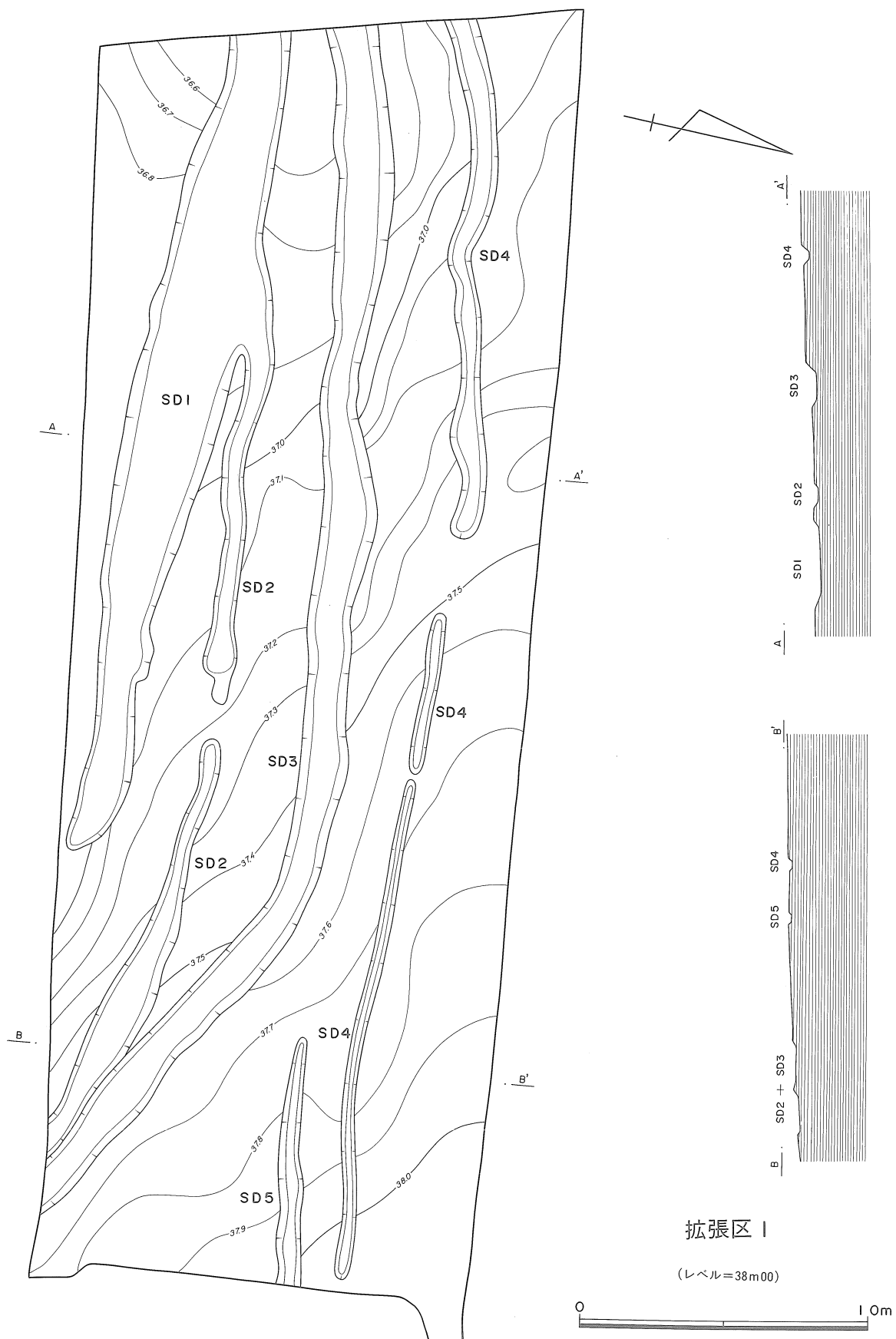
7号墳主体部

(スケール=42m 40)

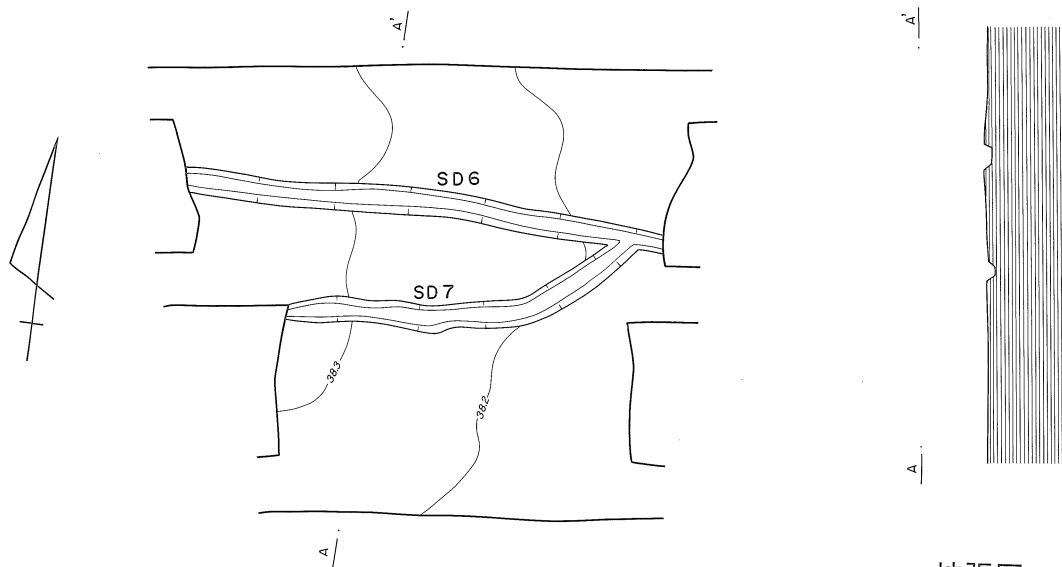
0 1.0m



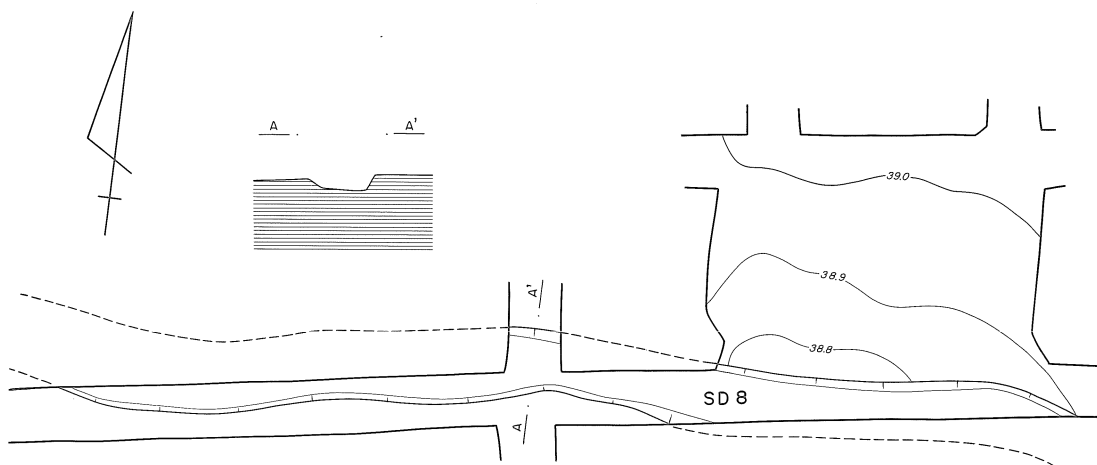
第121図 2 地点全体図



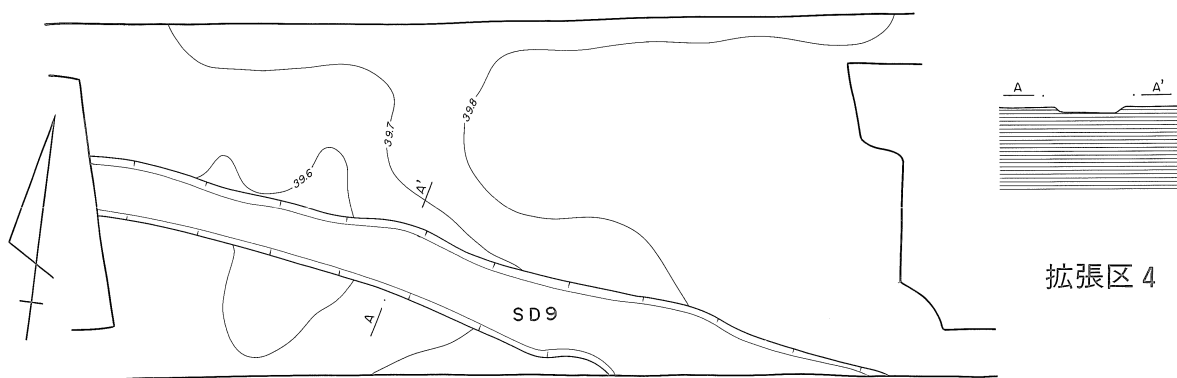
第122図 2地点SD 1～SD 5実測図



拡張区 2



拡張区 3



拡張区 4

(レベル=40m00)



第123図 2地点SD6～SD9実測図

第3章 遺物

第1節 弥生時代の遺物

i) 土器

今回の調査では主に弥生時代後期の遺物が方形周溝墓中から出土したが、中期の遺物も若干であるが出土しているので、中期の土器と後期前半・後半、土器棺について分別して説明を加えたい。

中期の土器 中期に該当すると思われる土器は16の甕形土器、97の壺形土器の2点であった。16は中期後半に該当する白岩式の外面刷毛目、内面指などで調整調整の平底甕である。97は中期中頃に該当する嶺田式の細頸の壺形土器である。中期の土器は方形周溝墓から出土しているが、数も少なく小破片であるため、今回検出の方形周溝墓とは直接関係ない遺物と考えられる。

後期前半の土器 後期前半と思われる土器は壺形土器で1・5・23・27・30・31・34・61・76・141・143、高坏の42・75、甕形土器の44がある。壺形土器は2・3のように細頸となり、2・30・31のように胴部上半に櫛状工具で格子目や縦方向の文様を施すものがあり、胴部下半にも縄文を残す61なども見られた。底部は3・5・34・73などが湾曲したあげ底となり後期前半の特徴を示す。口縁は単純で外反する23があるが、後期前半の折返口縁については見いだせなかった。

高坏は42・75の単純口縁で短い鰐状口縁となるものがある。75は口縁端部に縄文を施している。

甕形土器は44のように外彎して立ち上がるものがある。

以上は後期の土器を大きく前半・後半2期に区分する立場（袋井市教育委員会 1991）から、菊川式前半に該当するものである。

後期後半の土器 古い要素をもつものと新しい要素をもつものがある。古い要素を持つものは壺形土器で7・22・24・26・28・29・52・55・56・69・74・77～80・83・100、高坏では14・40・41・66・90・98・105、鉢形土器では68、甕形土器では17・43・45・47である。

壺形土器は有段にならない1段の羽状刺突文の7・28・56、羽状にならないで斜行刺突と横位刺突の組み合わせになる78・79、大きいモチーフの波状文と横線文になる69などが特徴的文様になる。形態は胴部再大径がある部分が屈曲するようにならず、やや丸い造りとなる77～80・83が該当する。折返口縁についてはまだ折返部の指頭圧をあまり残さない22・52、頸部が細い受口状口縁になる100、口縁端部の造りがしっかりしており羽状刺突文と棒状浮文が施された2重口縁になる24がある。

高坏は坏部が深く口縁の折返に指頭をあまり残さず刻みも下端に施す40・66・90・98と、鉢状の坏部で坏部の深い41の2種類がある。坏部と脚部の接合文様は有段の羽状文にならない14・40、多条の横位刺突文になる105などが特徴的文様である。

鉢形土器の68は口縁部の屈曲が明確で口縁の刷毛目が斜行であり、古い要素を残している。

甕形土器は口縁が少し外反し口縁端部に面を残す45・47などが特徴的である。なお、西遠江に特徴的な脚部との接合部に補強帯をもつ50なども後期後半の古い段階に属すると思われる。

後期後半でも新しい要素を持つものとして壺形土器では6・8・9・20・21・25・51・53・54・57・81・82・89・96・101があり、その他の器種については明確に本段階のものは抽出できなかった。壺形土器としては後半の新段階の特徴的文様として有段羽状刺突文になる25・57・82・101がある。折返口縁で縦位の刺突文が施される20、折返部に指頭圧痕を残す6・21・53・89は後半新段階の特徴である。また、胴部も明確に屈曲する形態変化した9・54・101も後半新段階の特徴である。

以上のように弥生時代後期の土器を2時期、3つの段階に分別してみた。ちなみに、指標となる他遺跡の代表資料をあげるならば、後期前半では鶴松遺跡1・3次調査SD1（袋井市教育委員会 1983・1987）、後期後半古段階は堀越ジョウヤマ遺跡SD1（袋井市教育委員会 1991）、権現山遺跡第4号住居（袋井市教育委員会 1990）、後期後半新段階は土橋遺跡SK77出土の資料（袋井市教育委員会 1985）があげられる。

土器棺については大形の土器を利用しているため、通常集落で使用している中・小形土器の編年要素で直接時期決定するわけにはいかないが胴部の形態で分類してみたい。胴部があまり張らない（A類）105・106・108・111～113・116・118・123、胴部がやや張り屈曲が見られるようになる（B類）109・110・114・120、胴部がよく張り屈曲が明瞭に見られ胴部上半に丸みがある（C類）107・115・117・119・121・122・124の3種類に分類できる。これに文様の要素を見てみると、後期前半によく見られる肩部の三角突帯文の施されたものは111・112・123に見られる。また、同様に後期前半の特徴として胴部上半に櫛状工具にて格子目文様を施したものとして118がある。118の蓋に使われている甕形土器も口縁が短く外反する特徴から、後期前半に該当するものと考えられる。よってA類については後期前半の特徴を含むものが存在することから、後期前半の土器棺と判断したい。

B類の土器棺については、文様のあるものは少ないが110の口縁を見るかぎり、後期後半の新段階までは降らないだろう。114の蓋は胴部上半全面に縄文を施す壺形土器と思われ後期前半の特徴を示す要素がある。しかしながら胴部の張りが強くなる形態的特徴は後期後半段階になってからの特徴と思われ、本報告ではB類を後期後半古段階に編年しておきたい。

C類の土器棺については、121・124など有段化した羽状刺突文の施されたものがあること、胴部の張りが強く屈曲し、胴部上半と肩部にかけて丸みのある形態的特徴は、後期後半新段階の壺形土器によく見られる特徴である。よってC類の土器棺については、後期後半新段階に編年する。

ii) 玉類

方形周溝墓の主体部からガラス製の小玉が出土している。いずれも直径2～3mmに満たない非常に小形の玉であるが、252・266だけは直径4mm程度になるやや大きめの小玉である。色調は弥生時代の小玉に特徴的なスカイブルー色を呈するもののほか、紺色のものもSX57第2主体部から少なからず出土している。ガラスの質としては気泡が多く入るものがあり、たいへんもろく壊れ易いものを多く含む。気泡の形状からみて、管切り技法によるものと考えられる（小瀬康行 1987）。

iii) 弥生時代以前の遺物

方形周溝墓の旧表土、方形周溝墓の周溝、古墳の周溝、SB4の柱穴等から縄文時代に属すると思われる土器、石器が出土していることから、少ないながらも第1次発掘調査区～第2次発掘調査区1地点の全面にわたって出土したことがわかる。

土器はSB4の柱穴とSH1の埋土から130・142、SX26の旧表土から19の縄文時代中期後半と思われる土器が出土している。前者は里木Ⅱ式、後者は曽利系に属するものであろう。

石器は方形周溝墓の周溝や主体部、1号墳の周溝から285～288の石鏃、289の石錘、290のスクレイパーのほか、頁岩・黒曜石製の剥片が出土している。石鏃は286～288の1gを切る小形のものと、285の重量のあるものがある。基部を浅く挟む285・286と大きく挟む287、挟みを入れない三角形になる288の3種類の無茎式石鏃が見られた。石錘は53gを測るさして大きくないものである。スクレイパーは両側面に微細な剥離を施し刃部を形成しており、サイドスクレイパーに属する。

第2節 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物については竪穴住居（SH1）のものと古墳から出土したものがあるので、土師器については住居跡出土のものをその年代から古式土師器、古墳出土のものを土師器として報告する。

i) 古式土師器

高坏、埴、壺形土器、甕形土器が出土した。

高坏は全体形のわかるものはないが、坏部が屈曲して口縁が大きく広がり脚部も大きく開く形態のものが想定される。調整は指頭などで荒いみがきであり粗雑な調整である。

125～129は小形の埴で、丸底の125・127、小さい平底の126・128・129がある。器壁の厚さは一定ではなく、全体的な造り調整とも粗雑な製品である。

壺形土器は131～133の底部のみの出土で全体形のわかるものはないが、指頭圧痕や指頭などの観察されるものが多く、粗雑な調整の製品である。

甕形土器については口縁が小さく外反し長胴の形態をなす138、比較的低い台部の140、肉厚の口縁となる137がある。甕形土器も138の口縁に接合痕を残したり、140の台部の調整に指頭などを施すなど、やはり調整手法が粗雑な製品である。

以上の特徴からSH1出土の古式土師器は、かつて試みた当地域の古式土師器の編年から見ると、Ⅱ期新段階（C類S字甕新相平行、松井一明 1990）に該当する資料である。

ii) 須恵器

古墳出土の須恵器は坏身、坏蓋、広口埴、フラスコ瓶、提瓶、壺類、倭瓶などが出土した。

坏身・坏蓋 古手の坏身・坏蓋は1号墳周溝内から出土している。1号墳出土坏身を分類すると、最大径15cm前後を測り口縁が大きく立ち上がり口唇部に形骸化した面をもつ（A類）152～154、底部のヘラ削りの範囲が縮小し口縁の立ち上がりが内向し小さくなり口唇端部に形骸化した面をもつ（B1類）155と、面をもたない（B2類）156～158に分類される。

坏身A類に対応する坏蓋は、口縁端部にやや形骸化した面を作り稜が明瞭な（坏蓋A類）147、坏身B類の坏蓋は口縁が短く稜もやや形骸化のきざしが見えおそらく口縁端部にもほとんど面のない（坏蓋B類）148・149が該当すると思われる。

次の段階の坏身は7号墳から多く出土している。5号墳出土のものも含めて分類した。坏身は最大径15～14cmになるものを坏身C類とし、さらに法量のまとまりで細分すると15cm前後になる206をC1類、最大径14.5cm前後になる202・204・205をC2類、最大径14cm前後になる203・207～211・215・217・218・220・222～224をC3類に分類しえた。次に坏身の最大径13.5～13cmになる212・213・216・221を坏身D類とした。

坏蓋と坏身の対応関係を法量で求めると、坏身C1類に対応する坏蓋は口径14cm前後の188（坏蓋C1類）、坏身C2類に対応する坏蓋は口径13.5cm前後の175・189～191・196・200（坏蓋C2類）、坏身C3類に対応する坏蓋は口径13cm前後の192～194（坏蓋C3類）となる。同じく坏身D類に対応する坏蓋は、口径12cm前後になる195・197・201（坏蓋D類）が該当するであろう。

中央が窪んだ大形のつまみのつく198・199については、おそらく高坏の蓋になると思われる。

以上の坏身・蓋について遠江考古学研究会須恵器編年を一部手直した浜松市の報告書で示されている須恵器編年（浜松市教育委員会 1988、以下遠江須恵器編年と呼ぶ）に照らし合わせると、坏身・蓋A類はⅡ期段階（MT15＝6世紀前葉）、坏身・蓋B類はⅢ期前段階（TK10～MT85＝6世紀中葉）、坏身・蓋C類はⅢ期中段階でも新様相（TK43＝6世紀後葉）、坏身・蓋D類は編年Ⅲ期後段階

(TK209=6世紀末葉)に該当すると思われる。

他に坏としては225の口径12.5cmになる平底の有蓋坏があり、おそらく遠江須恵器編年Ⅳ期後半段階(7世紀第3四半期)に編年される製品であろう。

埴 埴は226～228の短頸埴3点が出土した。226は直立した口縁で深い作り、228は小さく外反した口縁で浅い作りのものである。226のほうが一般的な作りで、どちらも遠江須恵器編年Ⅲ期中～後段階に該当するものと思われる。227についてはひさご形の上下2重になる特殊な形態の埴になると思われ、調整技術も底部調整も手持へら削りである。口縁も長く広がるように立ち上がり、他の2点の埴と著しく異なる形態である。該当時期は他の2点と同じ時期になると思われる。

壺・瓶類 瓶類としては、フラスコ瓶の祖形になると思われる177・230、提瓶の178、提瓶と同形態であるが吊手がない提瓶である223がある。230の瓶は横から見ると提瓶のように胴部がやや扁平な形態をなし、7世紀代に盛行する大形のフラスコ瓶と比較すると明らかに先行する型式で、提瓶から型式変化しフラスコ瓶が生まれたことを物語る資料であろう。時期は遠江須恵器編年Ⅲ期中～後段階に該当すると思われる。178の提瓶は吊手が鉤状に変化したもので、全面かき目調整が施されている。223は叩き目が側面に残されるもので、横から見ると楕円形の胴部をもつものである。吊手がつかない提瓶はこの胴部形態のものが多く、明らかに吊手の付く提瓶とは側面形態上の違いが認められるため、フラスコ瓶の出現などに関連した動きのなかで捉えられる提瓶かもしれない。どちらも形態的特徴から、遠江須恵器編年Ⅲ中～後段階に該当すると思われる。

壺は依壺の160、広口の小形壺の176・229、甕形の壺になる165が出土した。160の依壺はあまり扁平な胴部にならないもので叩き目をかき目で消す調整をとる。依壺のなかでは古い要素をもつもので遠江須恵器編年Ⅲ期中～後段階に編年しうるものと思われる。176は口縁が内彎するように立ち上がりやや肩の張る形態のもので、遠江須恵器編年Ⅲ期後段階に多いようである。229は外反する口縁をもち口縁と胴部の高さが同じ比率になる広口壺で、底部は手持へら削り調整が施され、227の2重の短頸埴と同様に遠江では類例は少ない。遠江須恵器編年Ⅲ中～後段階に該当すると思われる。165は胴部に疑似格子目叩きがみられ内面にも青海波文が明瞭に残されている。口縁の立ち上がりの作り出しは甘い。時期は遠江須恵器編年Ⅱ～Ⅲ期前段階に該当するものと思われる。

iii) 土師器

古墳出土の土師器は、坏、高坏、壺類が出土した。

坏・高坏 坏は232の口径13cmを測る底が平らな形態のものが出土した。口径が小さくなっているものでおそらく、遠江須恵器編年Ⅲ期後段階に該当するものと考えられる。

高坏は脚部が短く大きく開き坏部も屈曲して口縁が大きく開く(A類)162～164・170～174、長脚化した脚部で大きく開き、坏部も屈曲して口縁が大きく開く(B類)183～187・236～238、短脚で口縁が短く外反する(C類)180～182の3種類がある。A類は遠江須恵器編年Ⅱ～Ⅲ期前段階、B・C類は遠江須恵器編年Ⅲ期後段階に該当すると思われる。

壺類 壺類は口縁が直線的に立ち上り丸底の179・235と脚付の234、広口で口縁がくの字に短く開き球形の胴部を持ち折返口縁になる161と、単純口縁の167・168が出土している。前者は遠江須恵器編年Ⅲ期後段階、後者は遠江須恵器編年Ⅱ～Ⅲ期前段階に該当すると思われる。

その他の土器 159は1号墳周溝出土の渥美・湖西産の12世紀末に編年される山茶碗である。146は2地点SD1出土の大形甕の破片である。浅い叩き目と浅い青海波文をなで消していることが観察されたので、7世紀～8世紀代に該当するものと思われる。

iv) 鉄製品

鉄製品は木棺直葬墳と横穴式木室墳のいずれからも出土しているので、本項目でまとめて報告したい。出土した鉄製品は馬具、直刀、鉄鏃があるが、馬具・直刀は3号墳のみの出土であった。なお、鉄釧については装身具に含めて報告する。

馬具 馬具は面繫部分に使われる18の鉄製楕円形鏡板付轡、23・24の金銅装で中心が方形の金具を使い4つの方形足金具がつく辻金具2組、および28・29の鉸具がある。轡の鏡板下端の切れ込みは小さい特徴があり、この特徴は雲座D1号墳出土轡の鏡板に類似するが形骸化した飾鉾の表現はない（松井一明 1994）。立聞きには長方形の鉤金具がつけられ、革を巻き付けたような痕跡が観察された。銜通す鏡板の穴部外側に小さな長方形の鉄板を鉾で留め、鏡板が銜から脱落することを防いでいる。銜は2連式で左右長さが異なり断面形態は方形気味である。引手は鏡板の外側に楕円気味の環状遊環により銜と連結され、引手の先端には丸い形態で別造りの引手壺がつけられている。引手壺の形態も雲座D1号墳のものに類似している。

25は鉄製素環の雲珠で金銅装の4本鉾の方形の足金具がつく。19～22の3本鉾の方形の足金具も雲珠に関連したものであろう。26・27は通例杏葉の金銅装鉤金具になると思われるものだが、杏葉は出土しなかった。おそらく、杏葉自体取り外されて副装されたか、有機質の例えば革製の杏葉などが存在すると鉤金具しか残らないと思われる。今回出土した27の鉤金具を観察すると、杏葉を取り外した形跡はないので、後者の革製？の杏葉を想定しておきたい。

さて、今回出土した鉄製楕円形鏡板付轡の年代と馬具の組み合わせを検討してみたい。鉄製楕円形鏡板付轡は袋井市だけでも愛野向山B12号墳（轡+鉄製素環辻金具+鉄製素環雲珠+鉄製剣菱形杏葉？+木芯鉄板張輪鐙、松井一明 1994）、石ノ形古墳（轡+鉄製十字辻金具、袋井市教育委員会 1994、以上5世紀後半）、井守塚1号墳（轡+金銅装伏鉢辻金具、大谷純仁他 1965）、雲座D1号墳（轡+鉄製伏鉢辻金具、以上6世紀前～中葉）に次いで5例目の出土である。なかでも遠江須恵器編年Ⅱ～Ⅲ期前段階に該当すると思われる雲座D1号墳のものと形態的類似点が多いこと、4号墳にともなった須恵器が遠江須恵器編年Ⅱ～Ⅲ期前段階のものとされることから、高尾向山4号墳の馬具については遠江須恵器編年Ⅱ～Ⅲ期前段階に該当するものと考えられる。

次に馬具の組み合わせを検討してみると、轡と辻金具の面繫関連の馬具のみの組み合わせになる出土例は石ノ形古墳、井守塚1号墳、雲座D1号墳、面繫関連馬具と雲珠・杏葉等の尻繫関連の馬具も含むものは愛野向山B12号墳と高尾向山4号墳である。さらに、どの古墳からも鞍金具を伴うものはなく、鐙の出土例も愛野向山B12号墳1例のみであることから、鉄製楕円形鏡板付轡を出土した古墳については、全部の組み合わせをもつ馬具を出土した古墳はないことになる。このことは、高尾向山4号墳の鉤金具の検討から革製？杏葉が予測されたように、有機質（革あるいは木製か？）の材料で造られた鞍や鐙の存在を考慮にいれる必要がある。

なお、馬具とやや離れた位置ではあるが、馬具と同じレベル（木棺蓋上に置かれたもの）で60・61の鋸状の形態をなした鉄製品が出土している。木に打ち込まれる部分の断面形態が扁平で通常の鋸と比べると強度が足りない形態であること、出土状態が馬具と類似すること、出土個数が2個と少ないこと、付着している木目方向から、通常想定される木棺に使われる鋸とは異なるものであろう。馬具に関連するものなら先に想定した有機質の材料からなる鞍や鐙の金具、馬具でないとすると何らかの容器の補強金具になるのであろうか、類例がないため明らかにしえない。

直刀 30は全長129cmを測る大振りの直刀で、片関造りである。柄の造りは木質のうえに植物の皮が巻かれたもので、鞘との境にも革製？と思われる有機質のものが巻かれた部分が確認された。目釘穴は2箇所木質の目釘が確認された。鞘は木質のものであるが、鞘口・鞘尻の部分がどのように処理

されていたかは明らかでない。

刀子 全長20～18cmの比較的大振りの製品である6・7・58・59・87と、全長15～10cmの小形の製品になる88・102～105がある。何れも両関造りで、大形の製品のうち6・59の柄は鹿角装、小形の製品のうち88と102の柄には鉄製の責金具がつけられている。大形品は87を除いて遠江須恵器編年Ⅱ～Ⅲ期前段階、小形品は遠江須恵器編年Ⅲ期中～後段階に属するものである。

鉄鏃 平根式のものとは尖根式のもの2種類に大別される。

平根式のは篋被部の造りで分類すると台形となる1、四角に収まる73・75・93～98・101が認められた。71・72・74も後者の篋被部になると考えられる。関部の造りから逆刺となる1・73・93・94、逆刺とならない72・74・75・95～98・101、関部を削ぎ落としたような71の3種類が見られた。また、5は全体形はわからないが、薄手の実用品とは思えない大形鉄鏃になると思われる。木棺直葬墳出土のものの篋被部は台形、横穴式木室出土のものの篋被部は四角形になるようである。前者と大形鉄鏃は遠江須恵器編年Ⅱ～Ⅲ期前段階、後者は遠江須恵器編年Ⅲ期中～後半段階に該当する。

尖根式のは篋被部の造りで分類すると台形になる2～4・31～57と、棘篋被となる76・77・80・82・83・85・100の2種類が認められた。78・79・84も後者の篋被部になると考えられる。関部の造りからは逆刺となる2～4・31～57、逆刺とならない76～78・80・82～85・99・100、関部を造り出さない84、片関になる79の4種類が見られた。とくに31～57の一群の尖根鏃は片丸造りで片側にもう一つ逆刺の入る規格品であり、5世紀後半から特徴的に見られる型式の長頸鏃である。愛野向山B12号墳でも同種の鉄鏃が多量に出土しているが、頸部の長さは本例のほうがより短いものである。木棺直葬墳出土のものの篋被部は台形、横穴式木室出土のものの篋被部は棘篋被になるようである。前者は遠江須恵器編年Ⅱ～Ⅲ期前段階、後者は遠江須恵器編年Ⅲ期中～後半段階に該当する。

Ⅴ) 装身具・砥石

装身具としては耳環、鉄釧、玉類が出土した。その他の遺物としては砥石が出土した。

耳環・鉄釧 107は直径3cmを測るやや大形の銀装耳環である。残存状況は銀装部分が腐食しており悪い。鉄釧は直径5.7cmを測るもので、断面形態は丸く接合箇所が1箇所認められることから、太さ3mm程度の鉄線を折り曲げて造られていることがわかる。

玉類 玉類は木棺直葬墳から8～11の凝灰岩製管玉、12～17のガラス小玉、62～69の滑石製臼玉、横穴式木室墳からは89・90の質の悪い碧玉製勾玉、108～111の土製算盤玉と112～162の土製丸玉が出土した。管玉はいずれも表面の風化が激しい凝灰岩を使っており、片側穿孔と両側穿孔の製品がある。滑石製臼玉は径6mmと径4mmの2種類がある。勾玉はいずれも穿孔予定の部分がある程度窪ませた後に穿孔する特徴的な技術で造られている。土製算盤玉は径1.4mmになる大形のものと、径1mmになる小形のものがある。土製丸玉は径8mm前後に統一されて造られているが、厚みに4～7mmのばらつきがある。

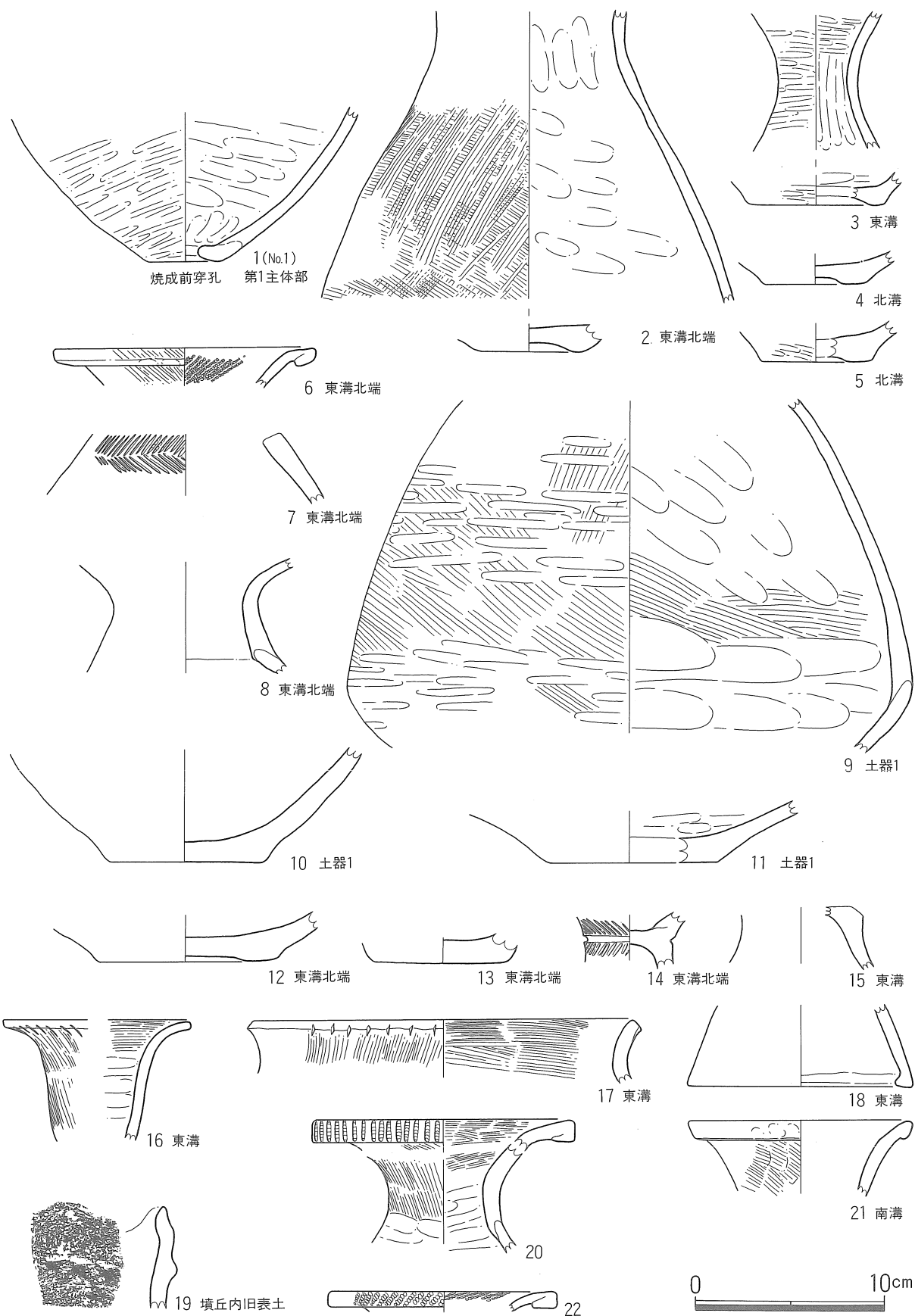
砥石 砥石は91・92の手持の鉄製品用砥石2点が横穴式木室墳から出土している。いずれも小形のものでよく使い込まれており、とくに92は懸垂のための穿孔がなされ穿孔部分で破損している。

【 参考文献 】

袋井市教育委員会 1983 『鶴松遺跡Ⅲ』

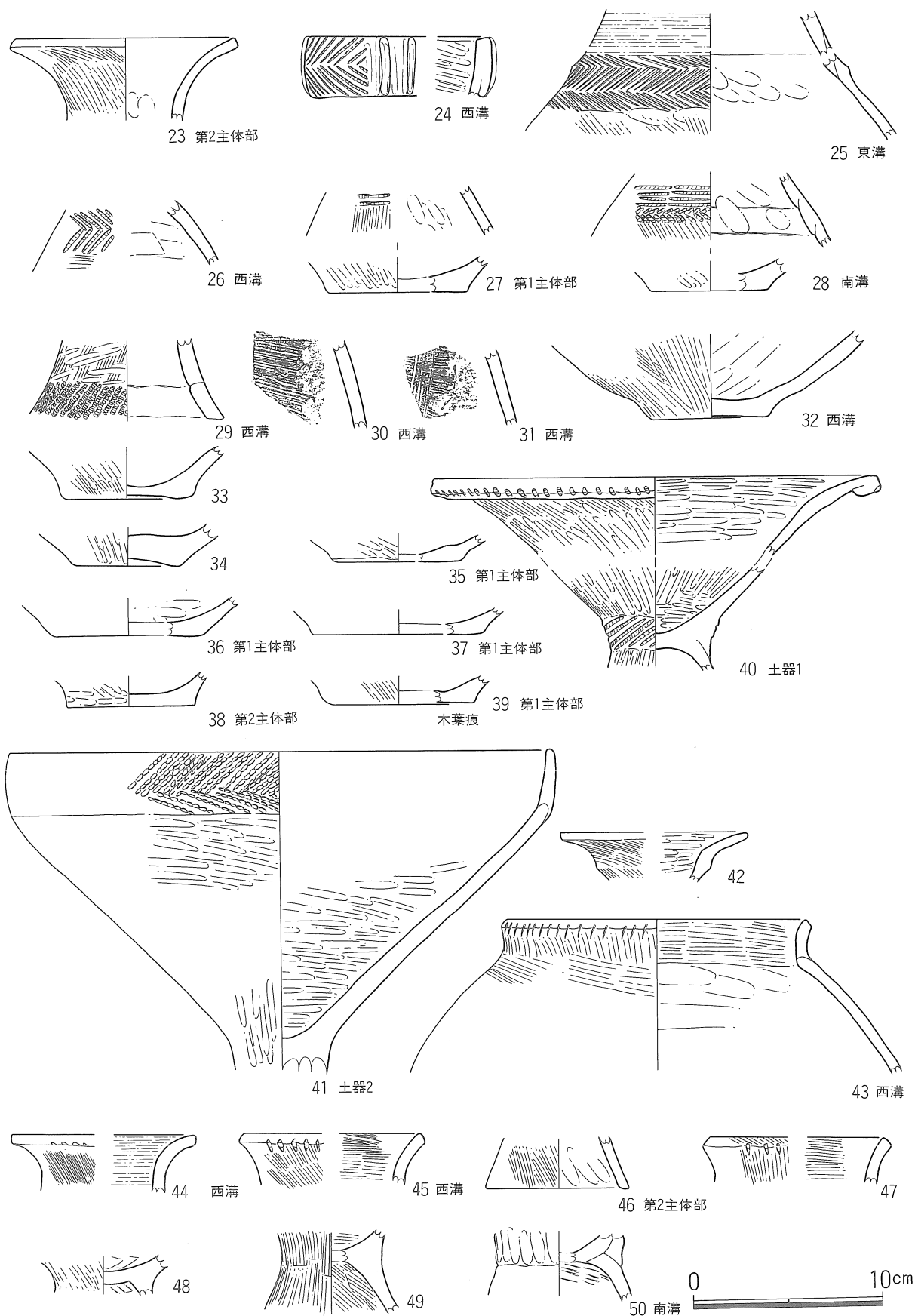
袋井市教育委員会 1985 『土橋遺跡』

袋井市教育委員会 1987 『鶴松遺跡Ⅱ』



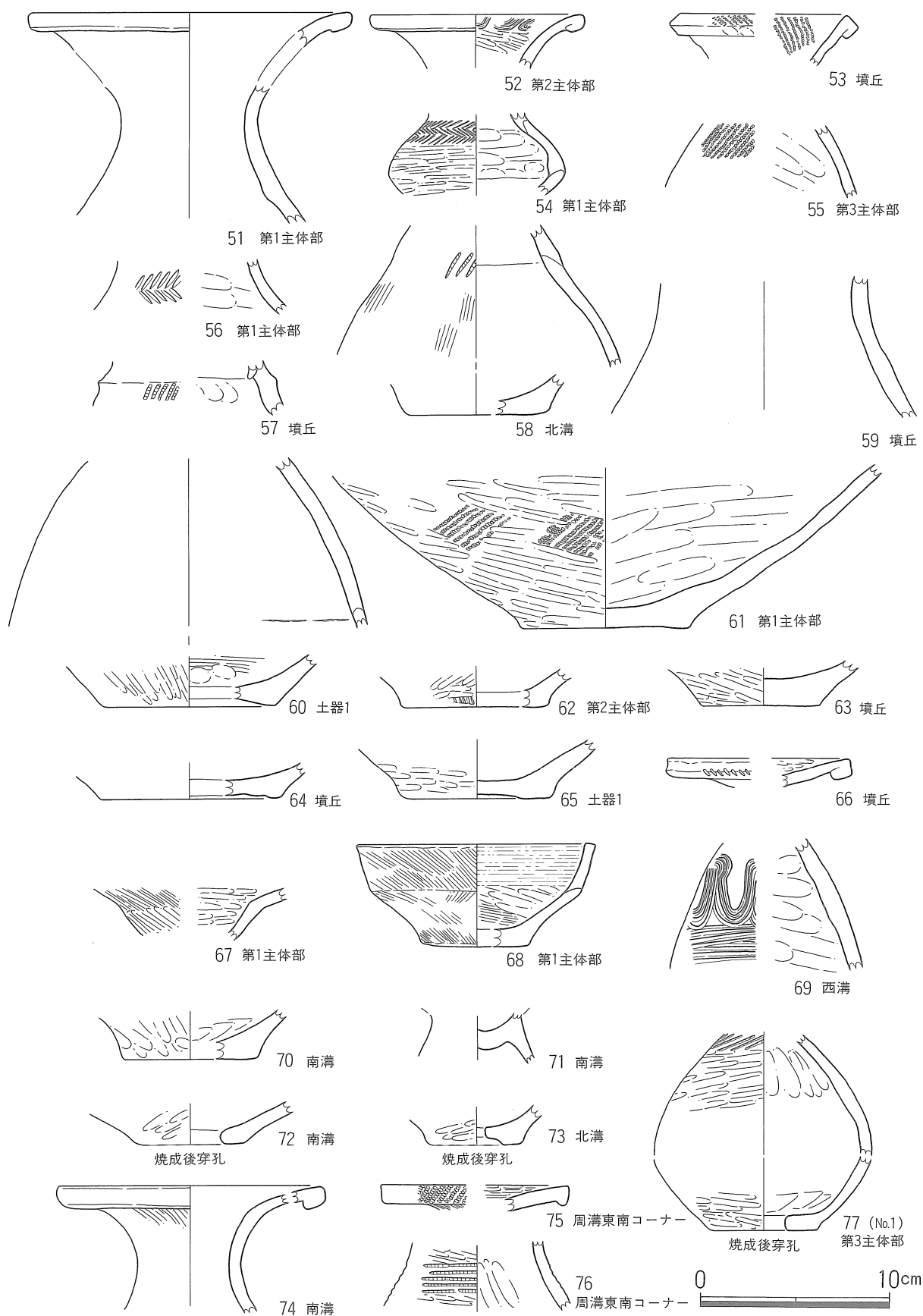
第124図 土器実測図 (1)

(1 = SX 1 2 = SX 4 3 ~ 5 = SX 6 6 ~ 18 = SX 14 19 ~ 22 = SX 26)



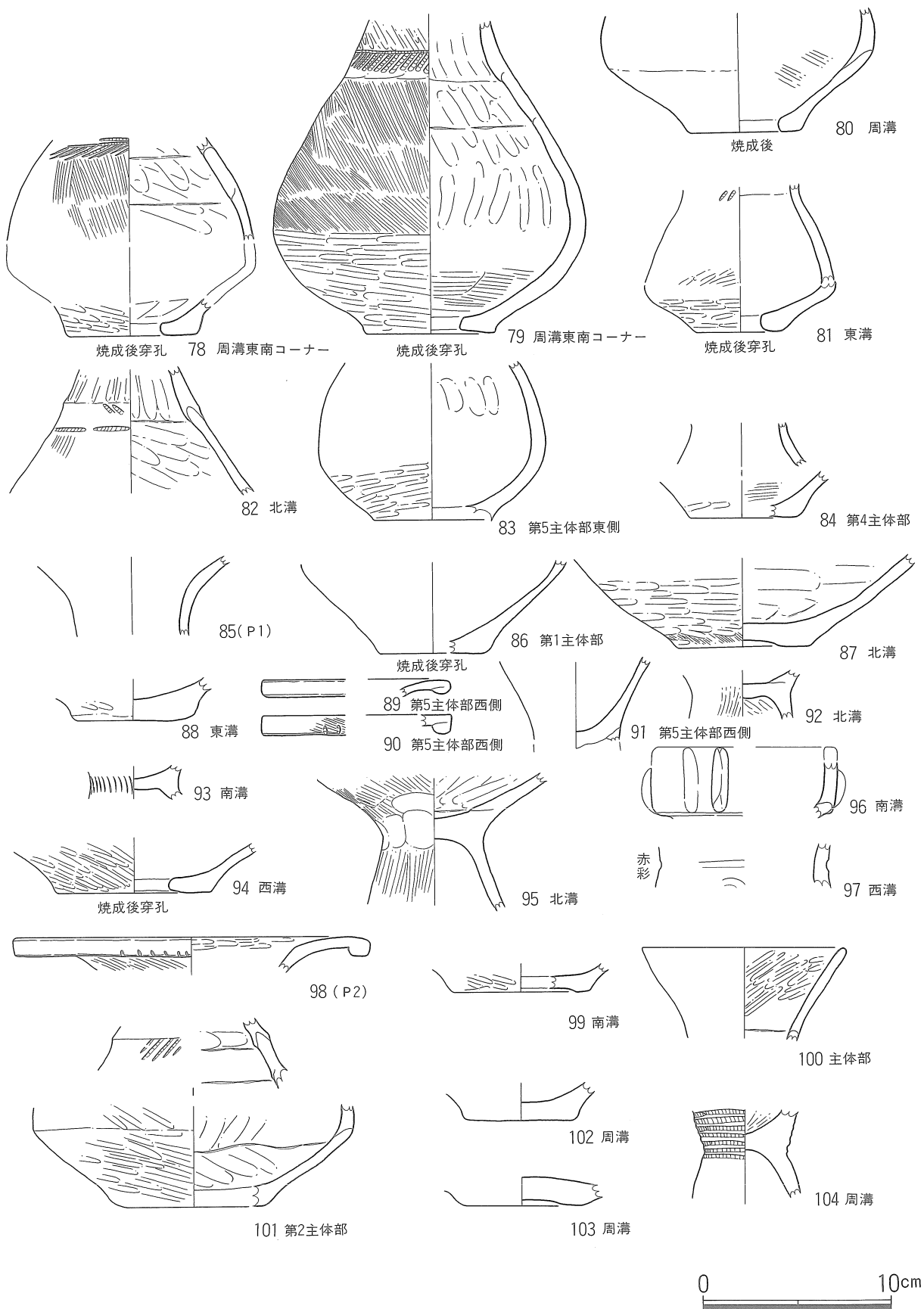
第125図 土器実測図(2)

(23~50 = S X 26)



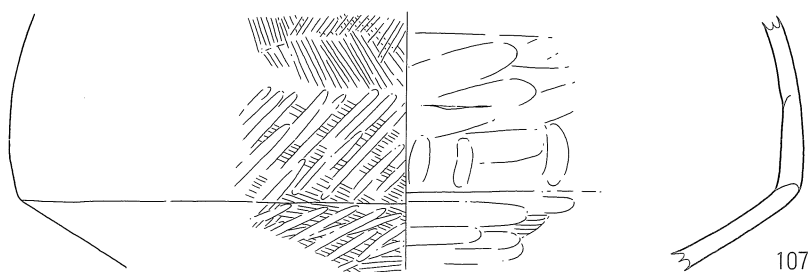
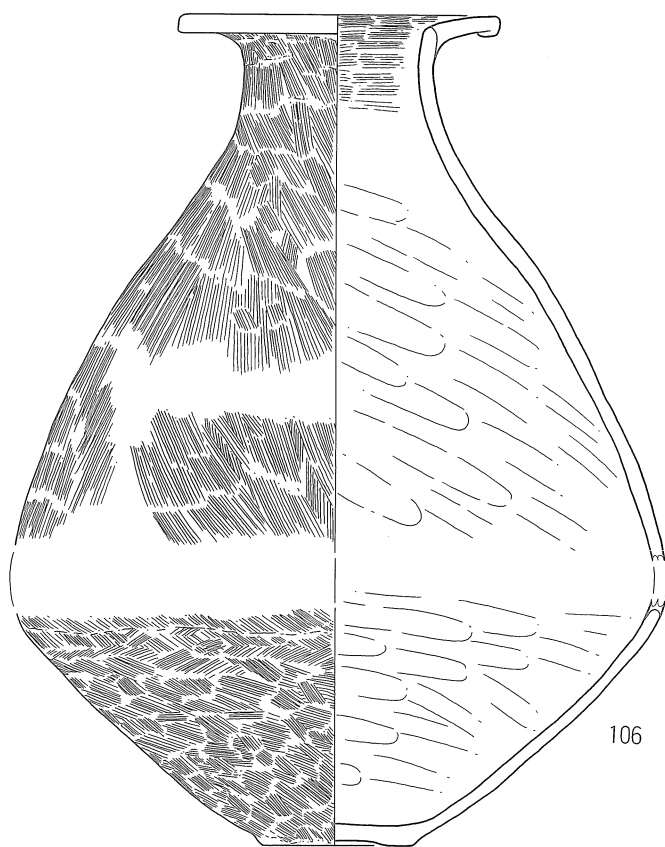
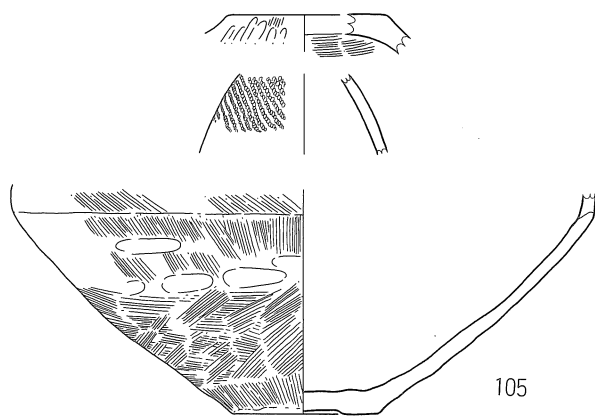
第126図 土器実測図(3)

(51~68 = S X 27 69~71 = S X 34 72・73 = S X 35 74~77 = S X 37)



第127図 土器実測図 (4)

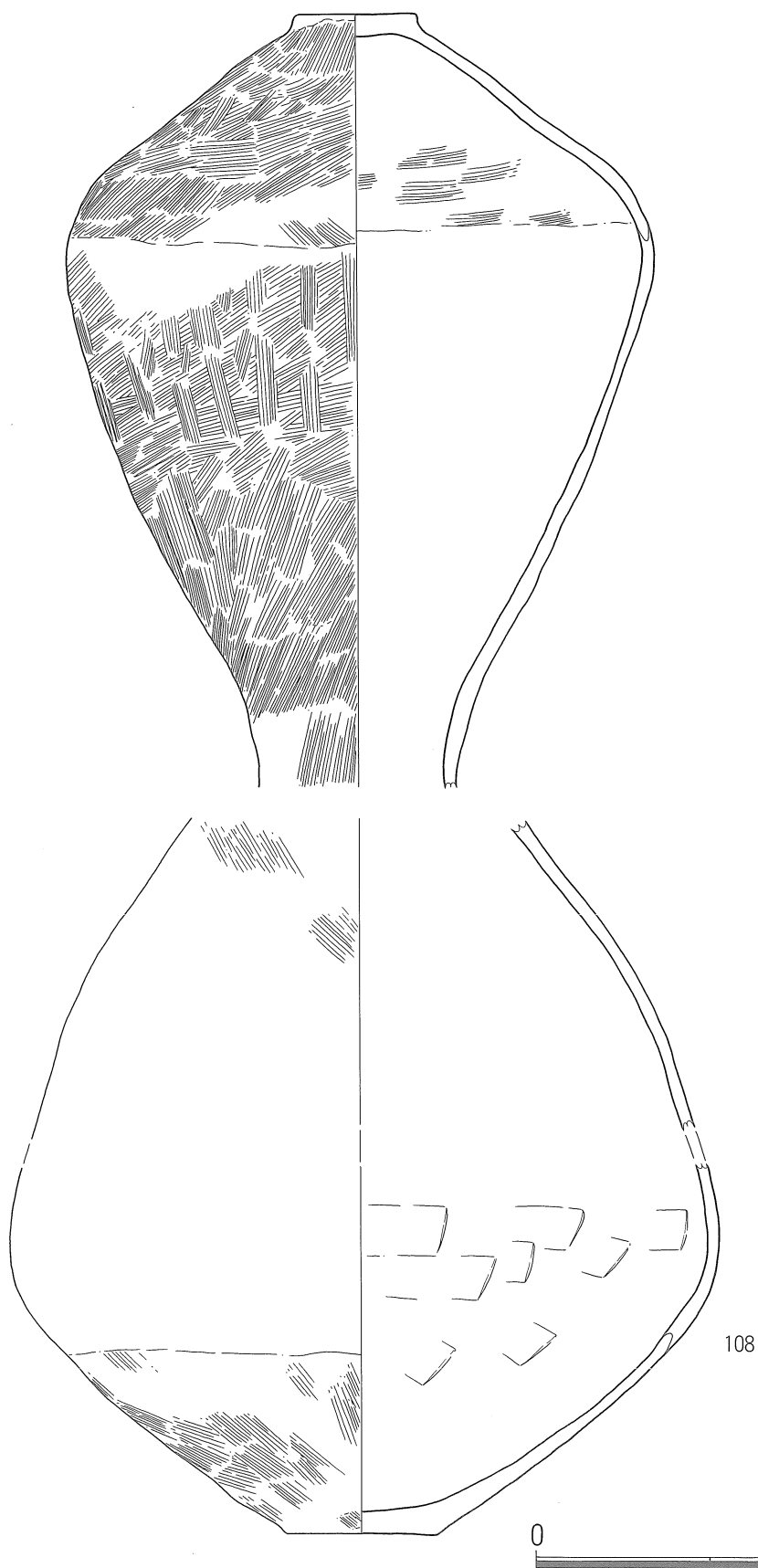
(78~80 = S X 37 81 = S X 41 82~93 = S X 43 94・95 = S X 44 96~98 = S X 47 99 = S X 51
100 = S X 53 101~104 = S X 57)



0 20cm

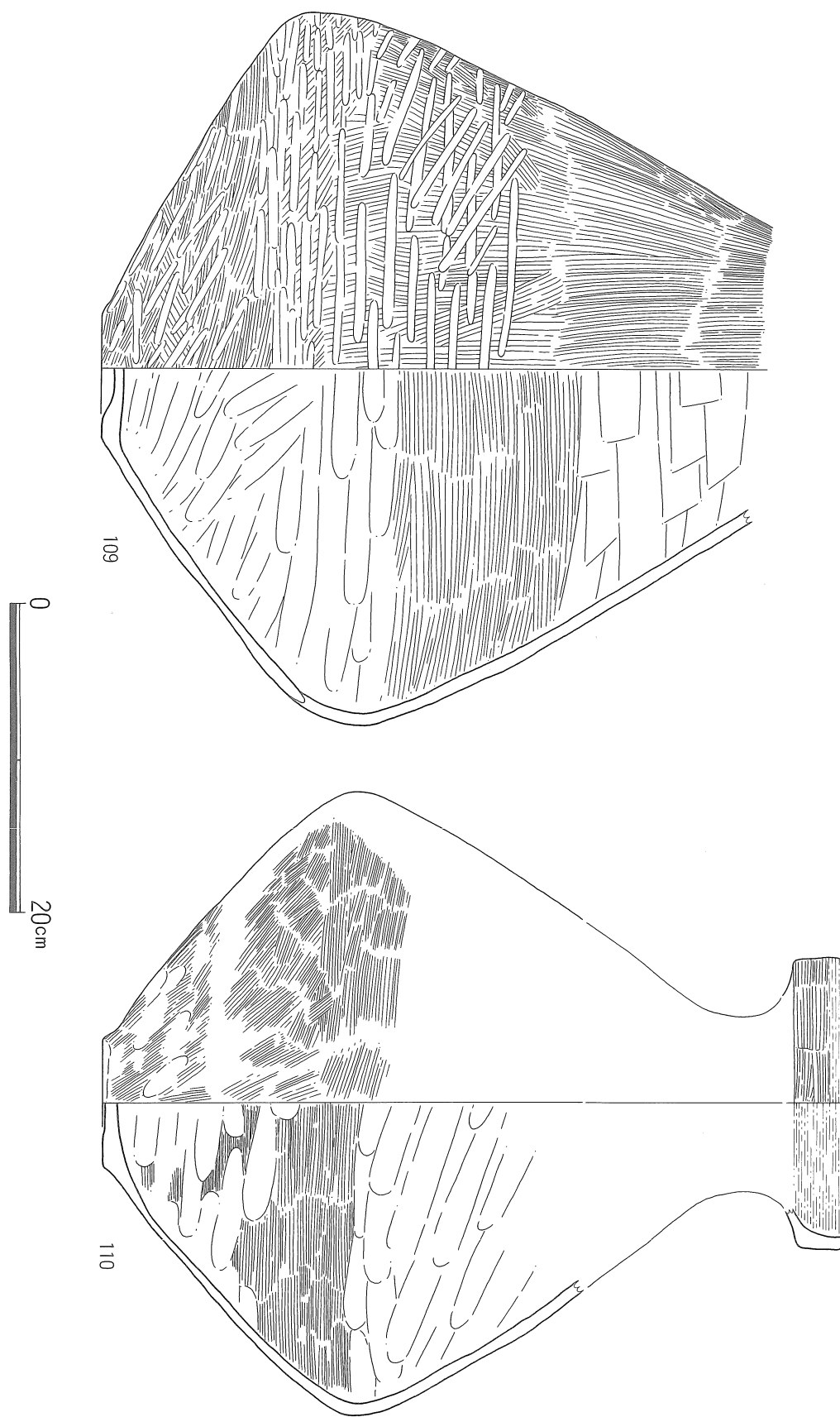
第128図 土器実測図(5)

(105 = 1号土器棺 106 = 2号土器棺 107 = 4号土器棺)

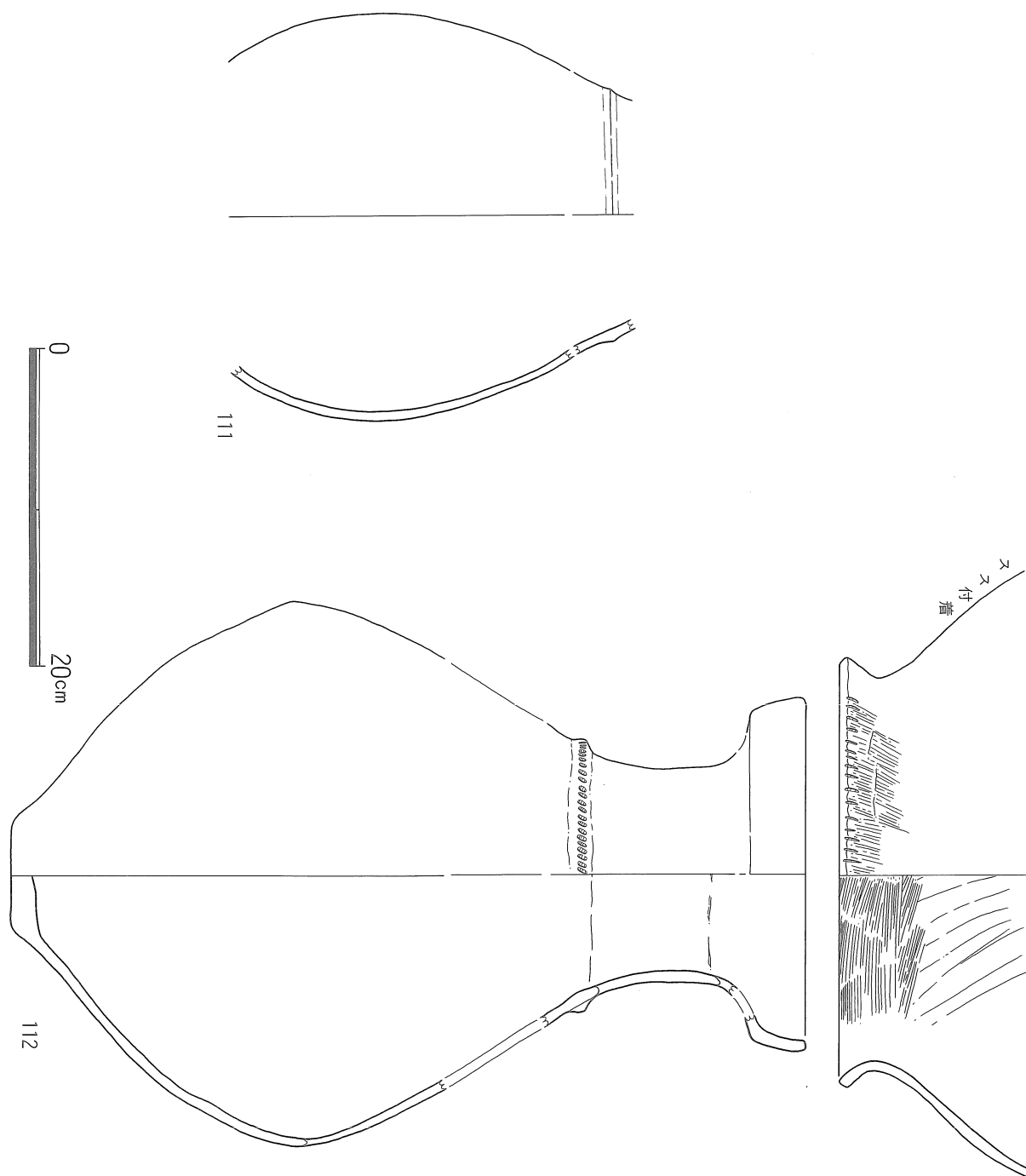


第129図 土器実測図（6）

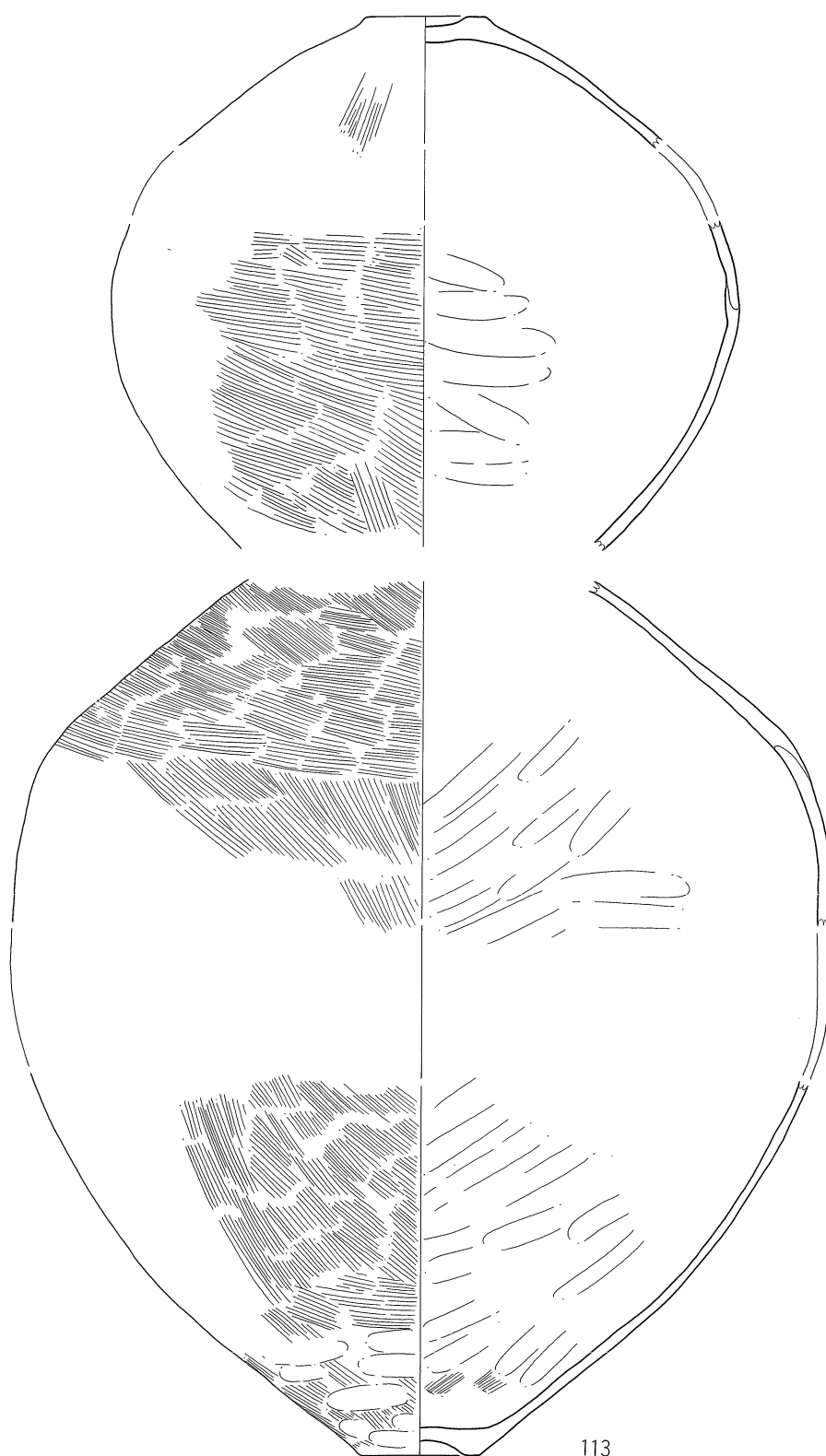
（108＝3号土器棺）



第130图 土器実測図(7)
(109= 5号土器棺 110= 6号土器棺)



第131図 土器実測図（8）
 （111＝7号土器棺 112＝9号土器棺）

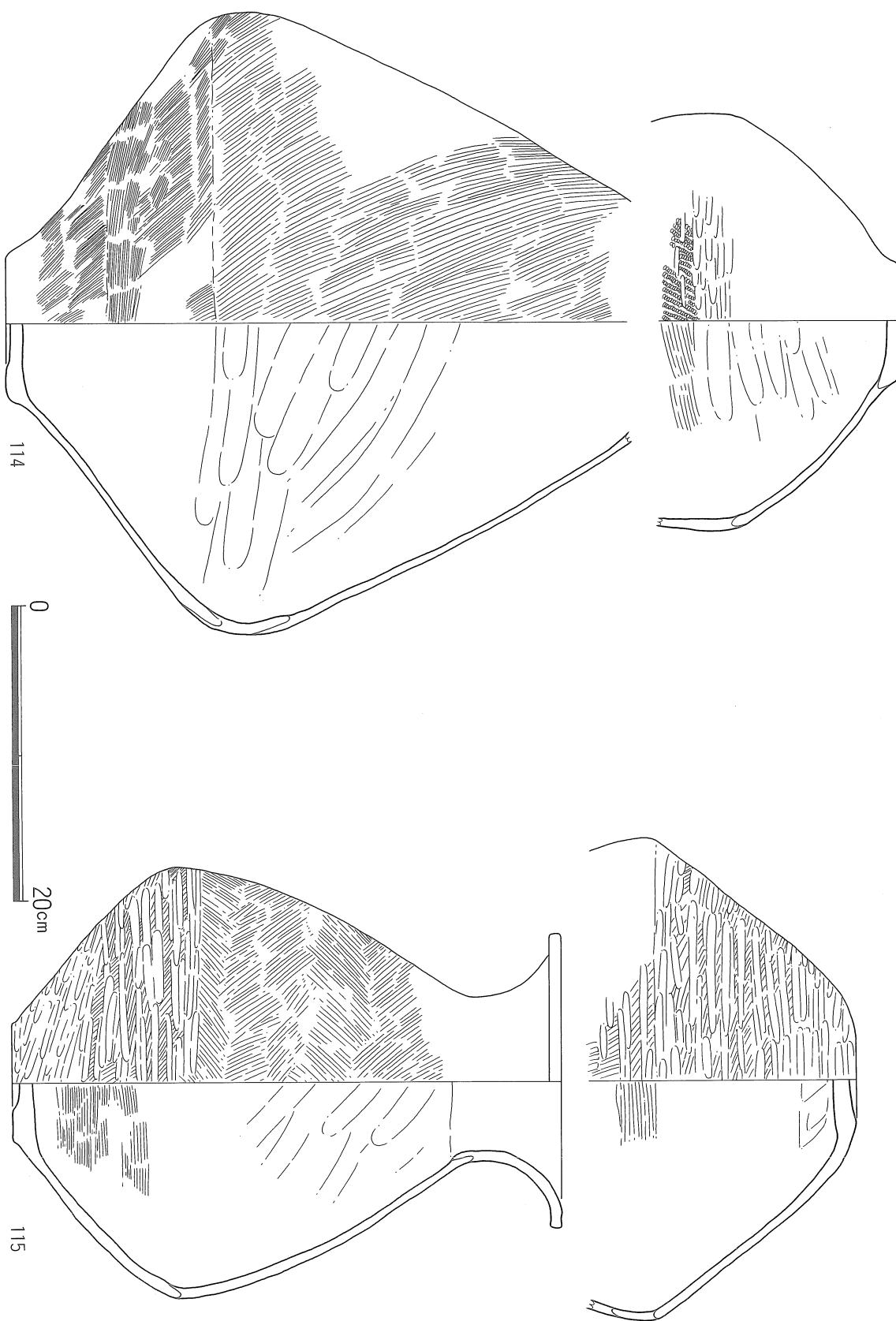


113

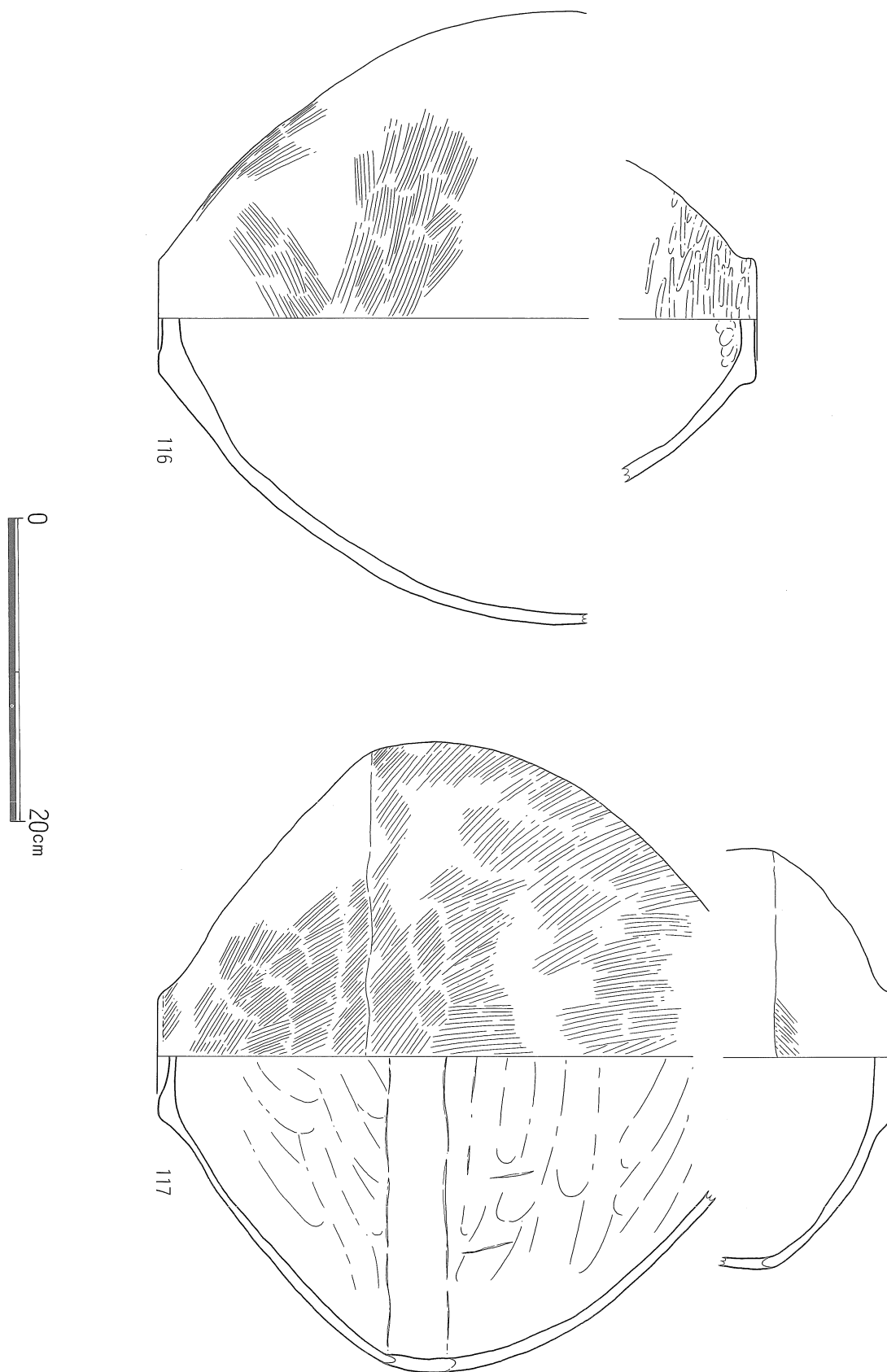
0 20cm

第132図 土器実測図(9)

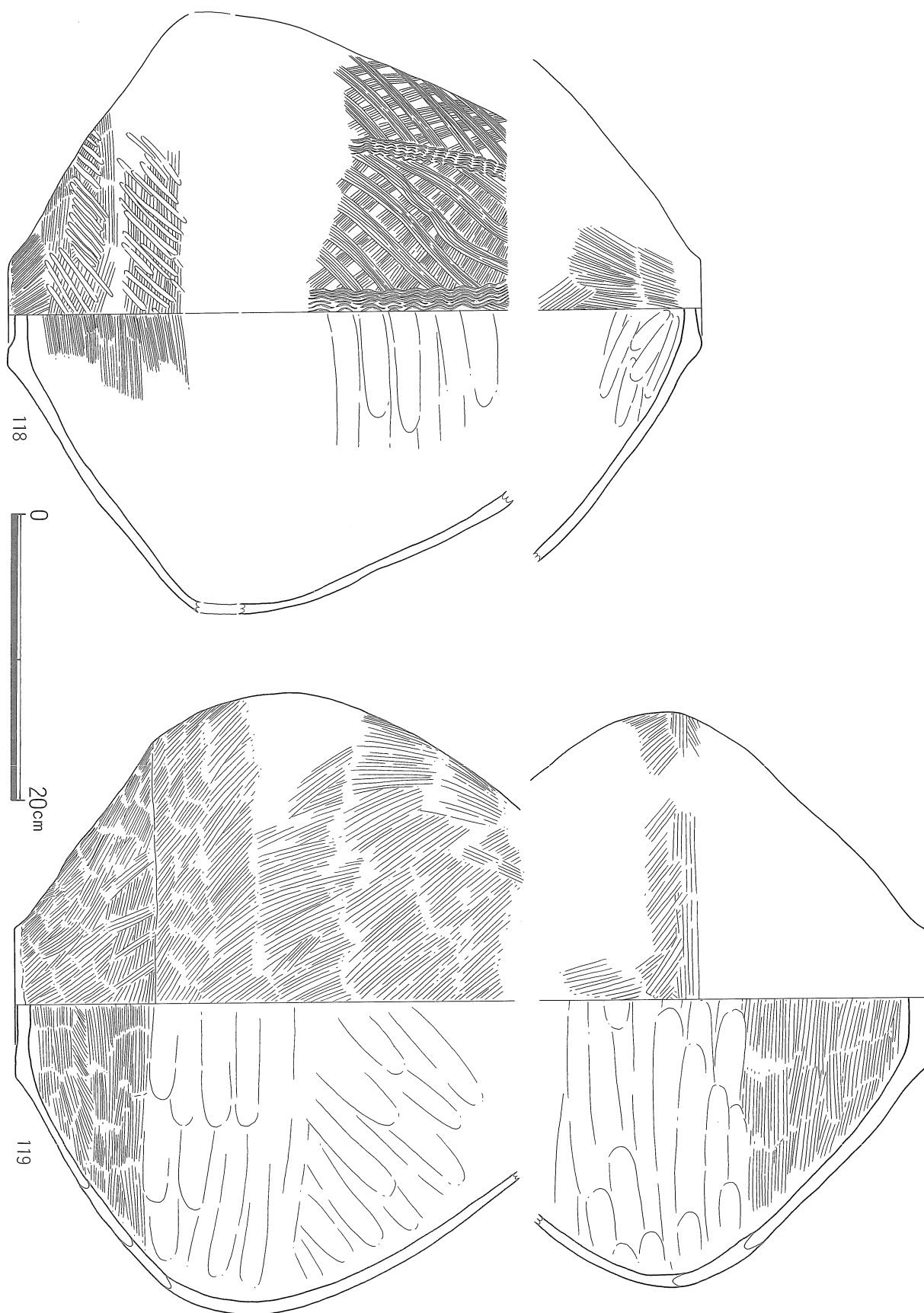
(113=10号土器棺)



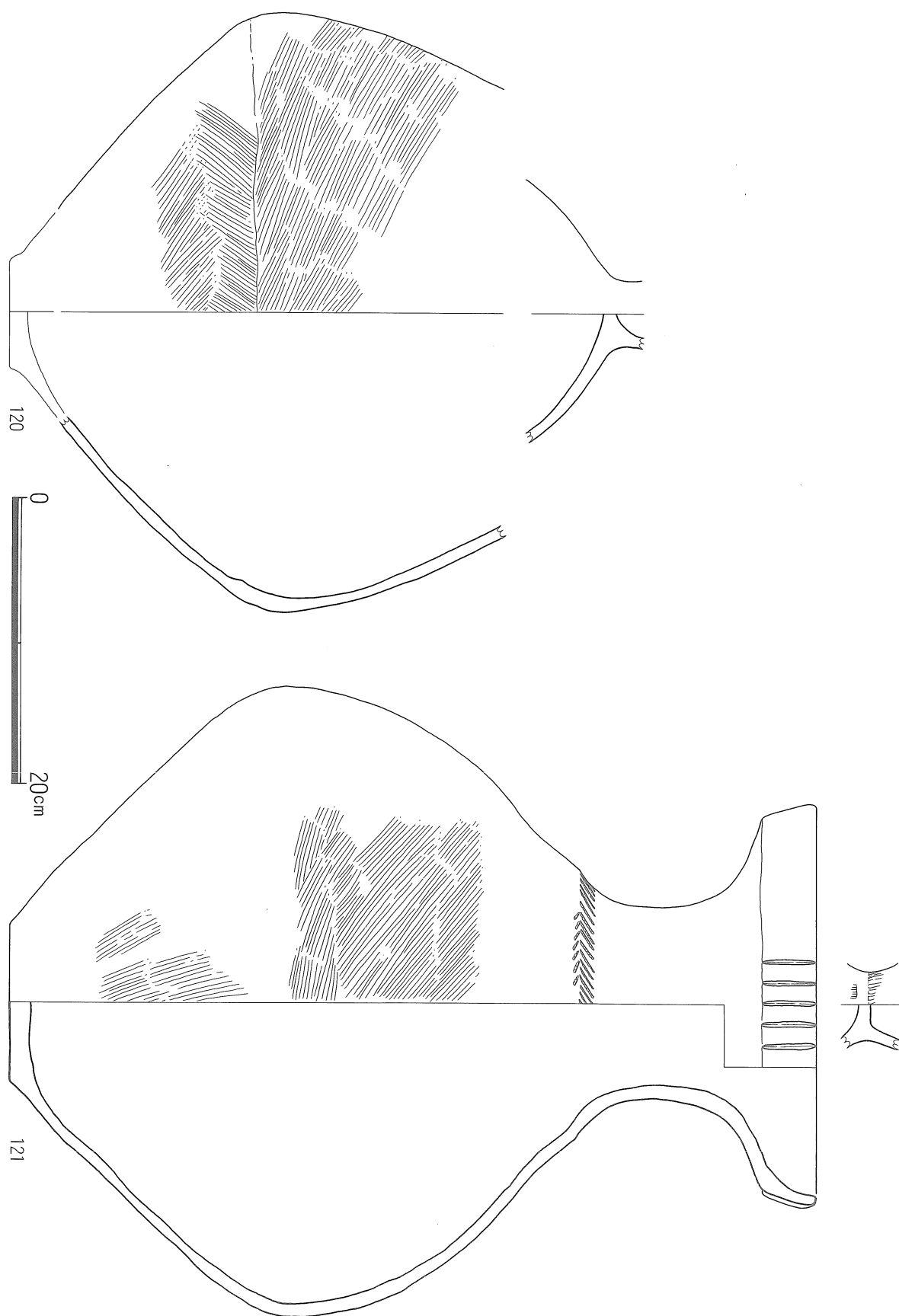
第133図 土器実測図 (10)
(114=11号土器 115=12号土器)



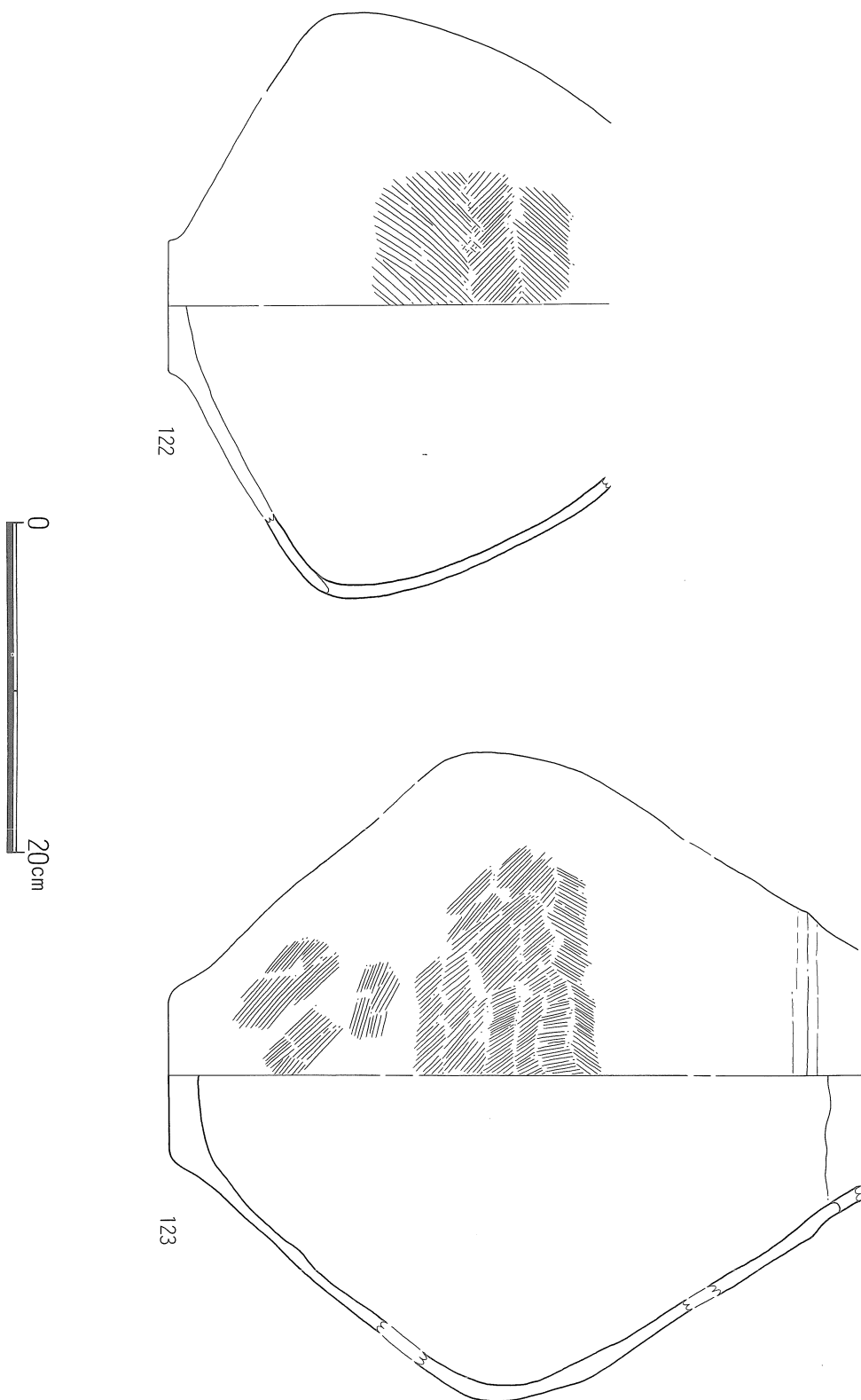
第134図 土器実測図 (11)
(116=13号土器棺 117=14号土器棺)



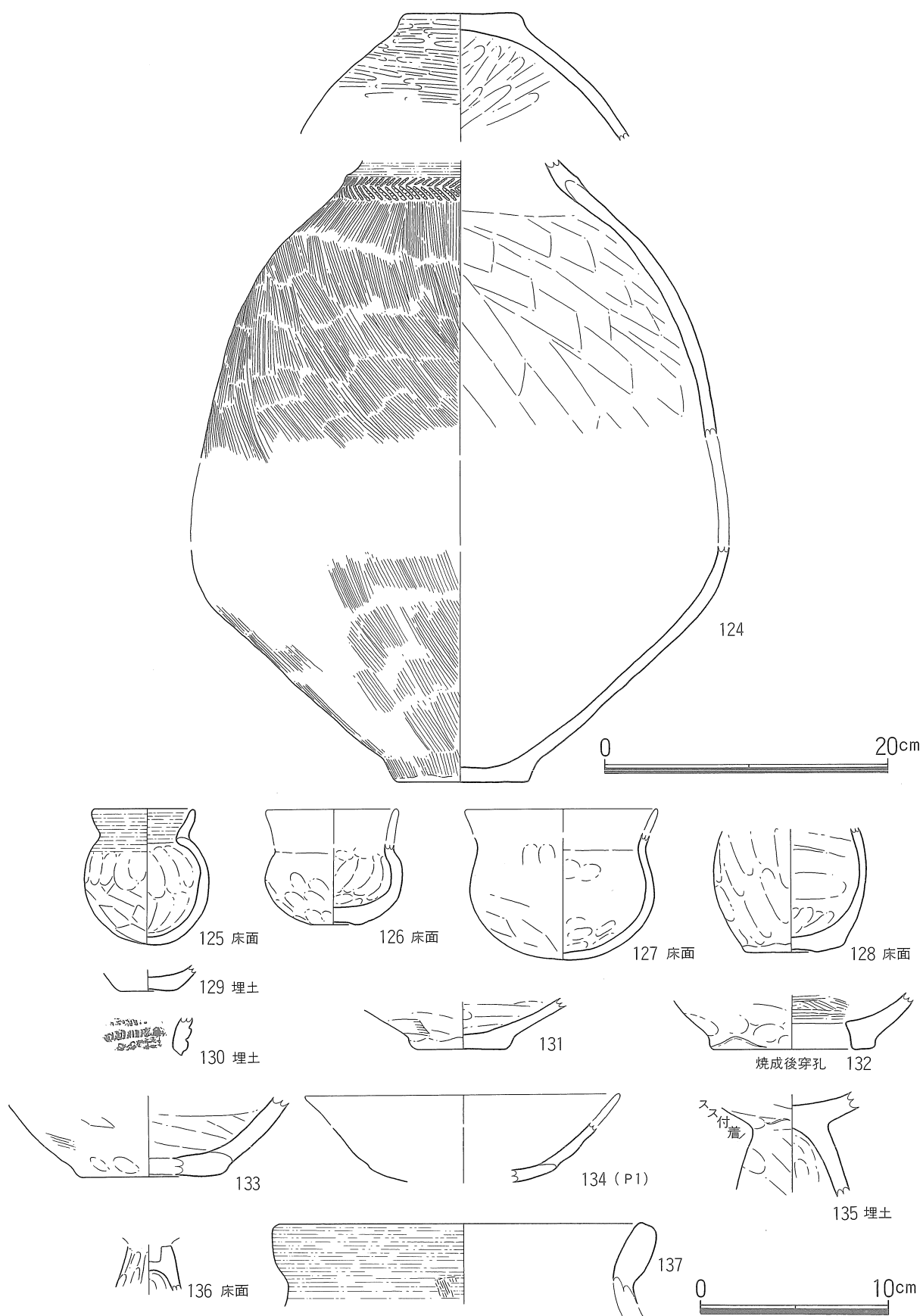
第135図 土器実測図 (12)
(118=15号土器棺 119=16号土器棺)



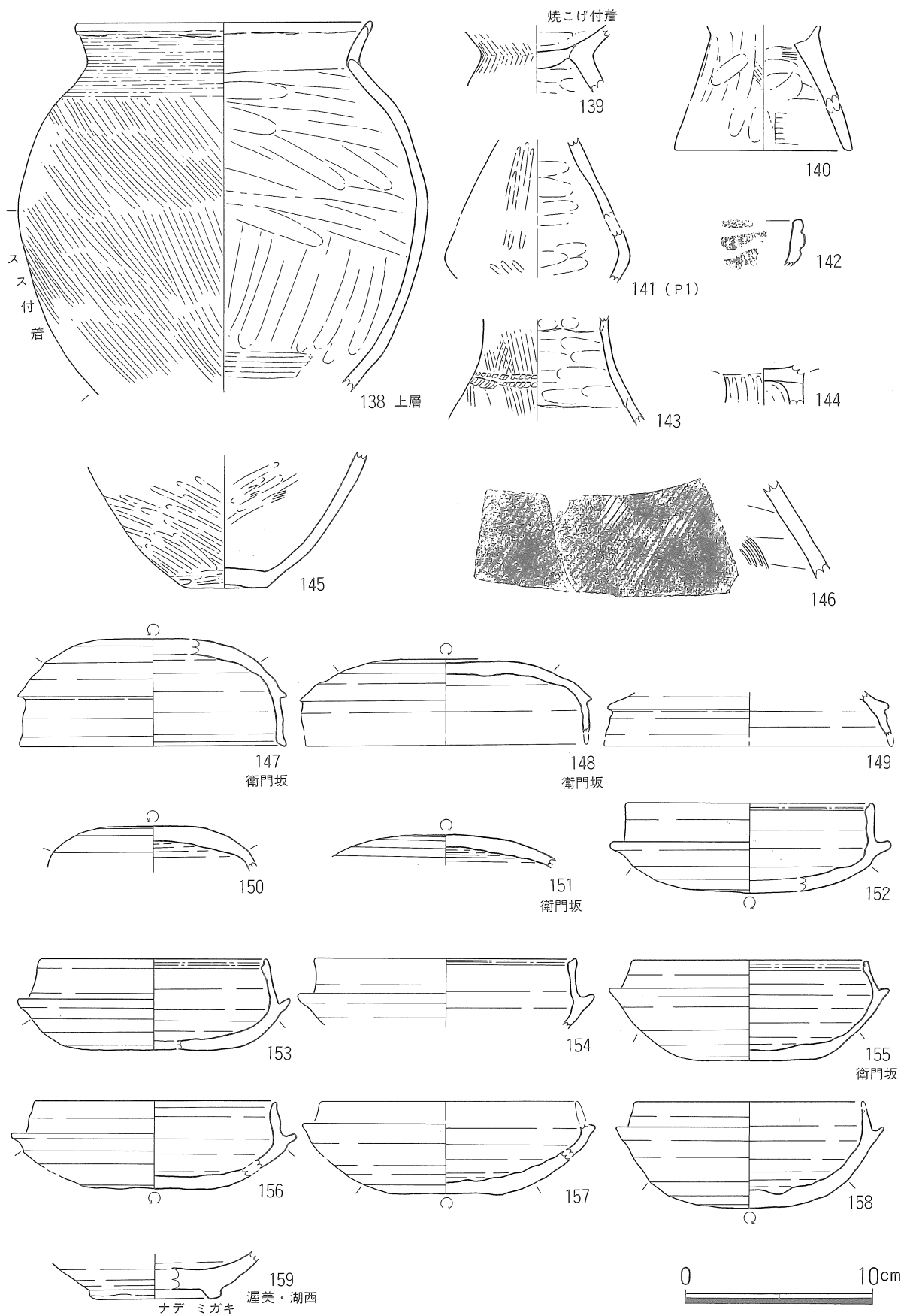
第136図 土器実測図 (13)
(120=17号土器棺 121=18号土器棺)



第137図 土器実測図 (14)
(122=20号土器棺 123=21号土器棺)

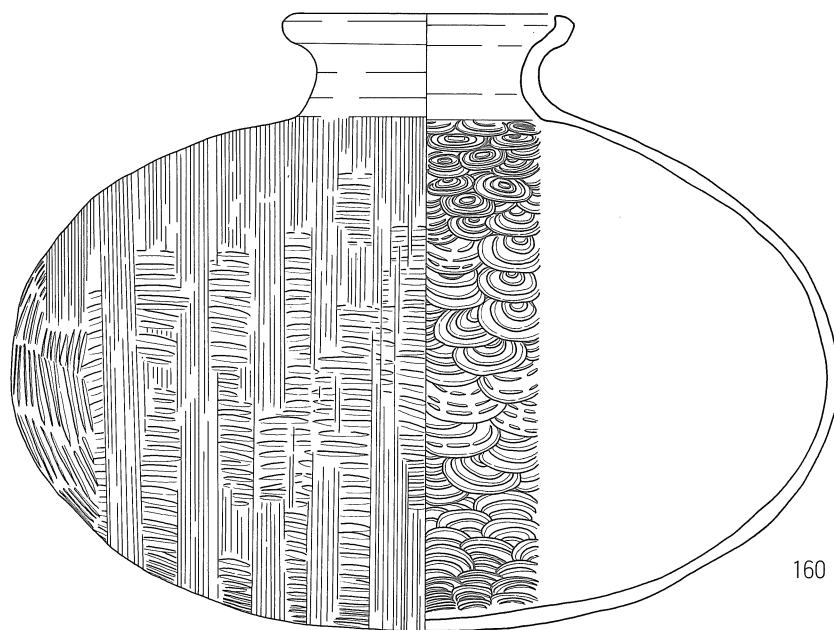


第138図 土器実測図 (15)
 (124 = 8号土器棺 125~137 = S H 1)

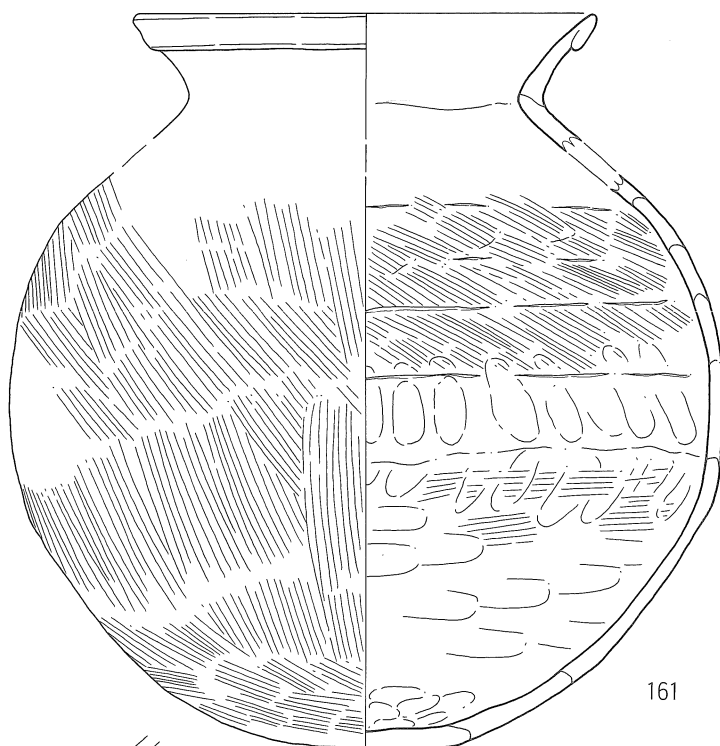


第139図 土器実測図 (16)

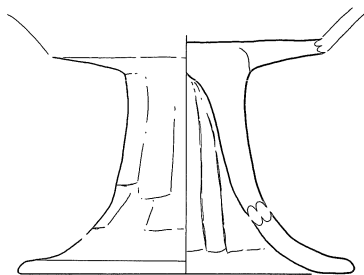
(138~140=SH 1 141=SB 1 142=SB 4 143・144=SK 23 145=SD 1 146=第Ⅱ区
SD 1 147~159=1号墳)



160

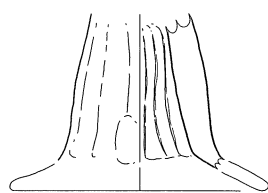


161



ケズリ

162 周溝



ケズリ→シボリ

163 周溝



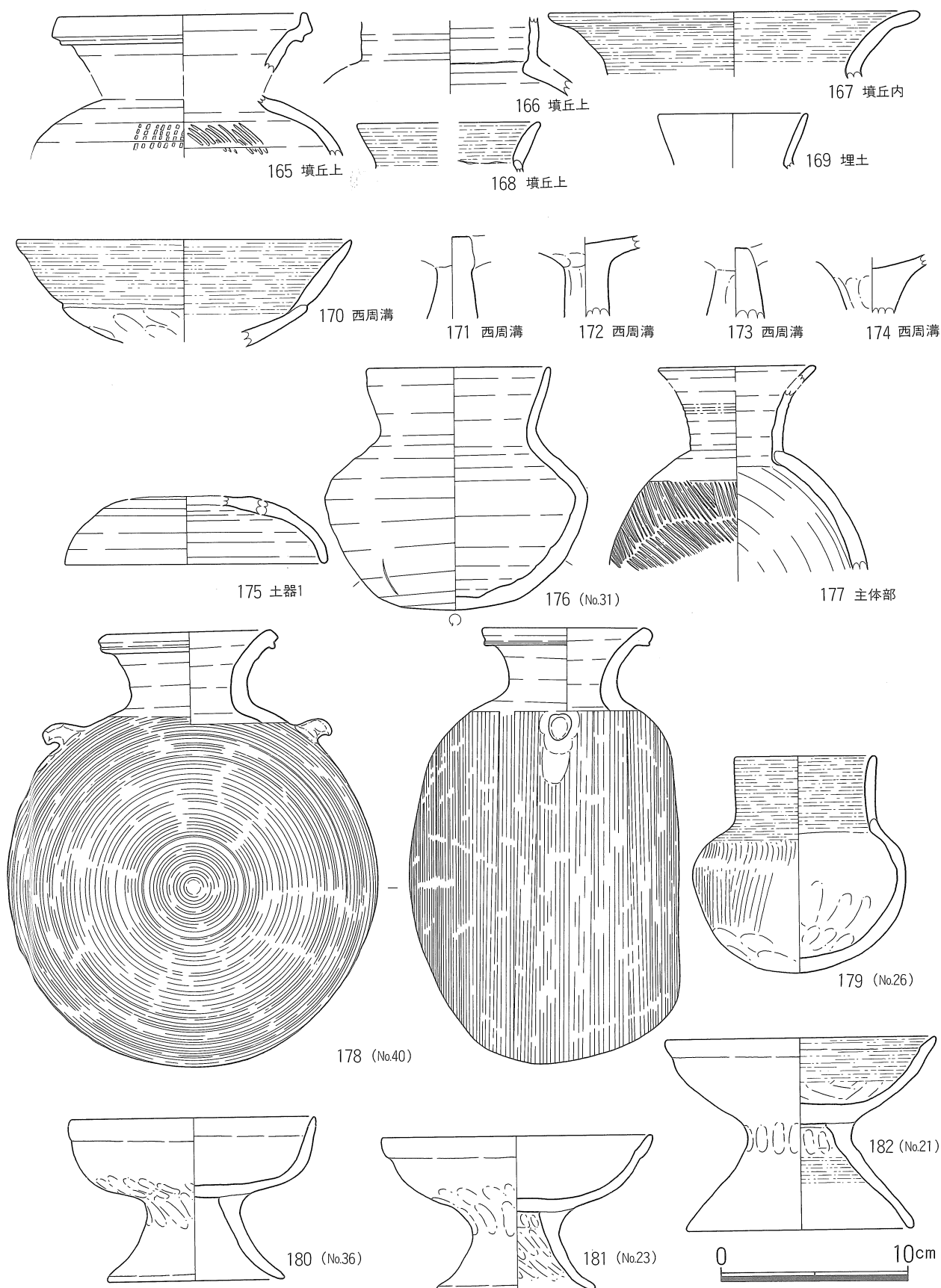
ケズリ

164 周溝



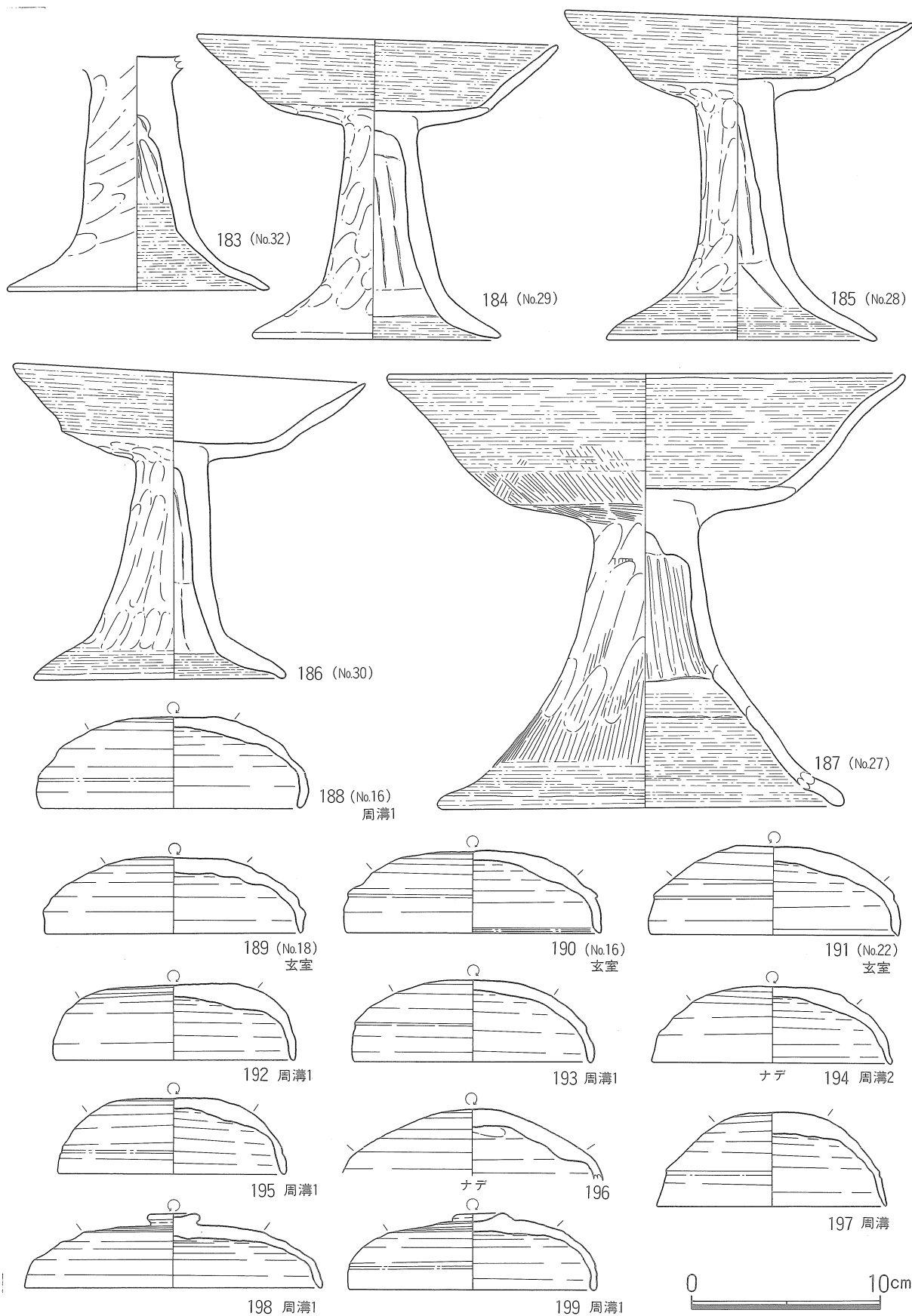
第140図 土器実測図 (17)

(160・161= 1号墳 162~164= 2号墳)

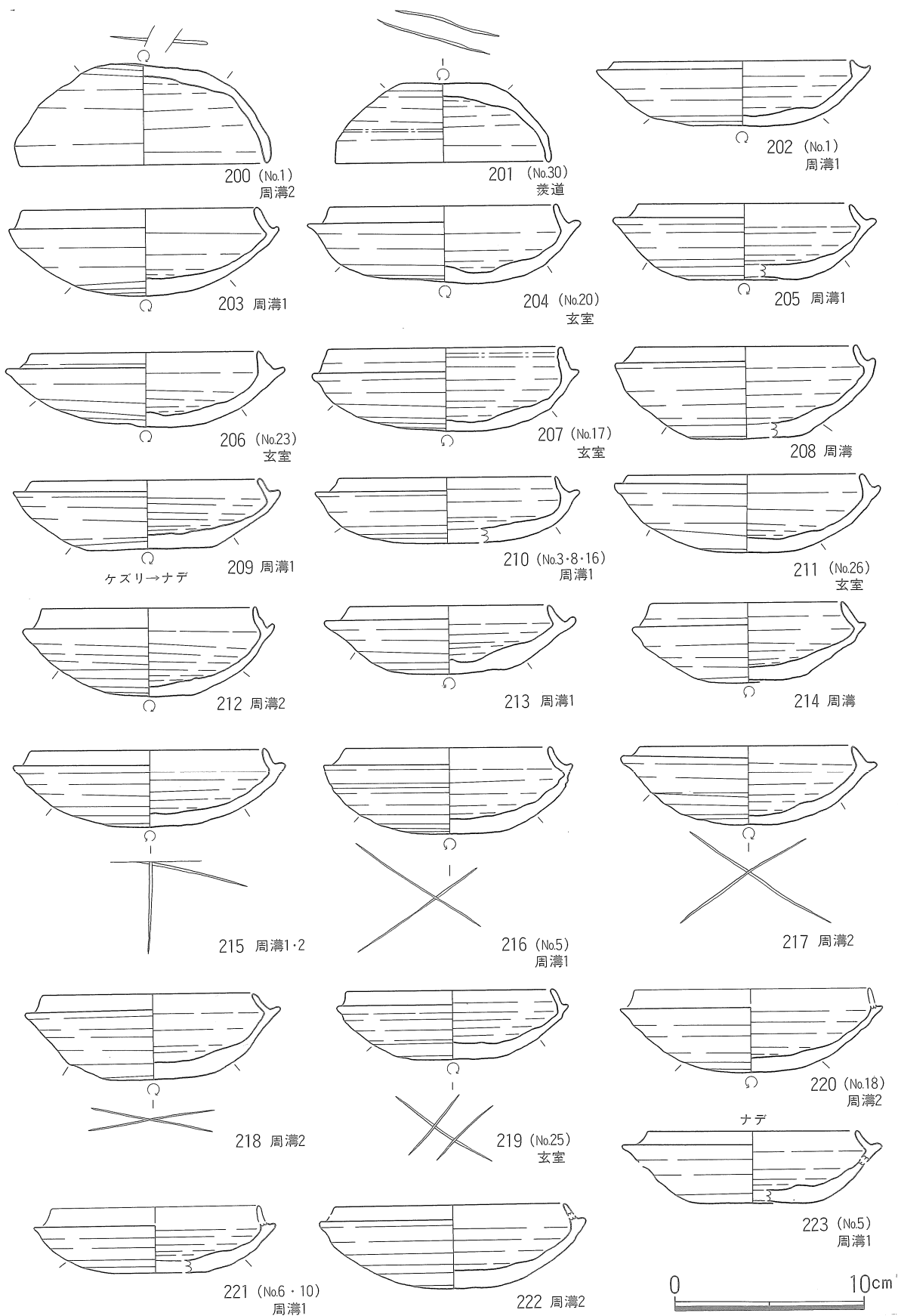


第141図 土器実測図 (18)

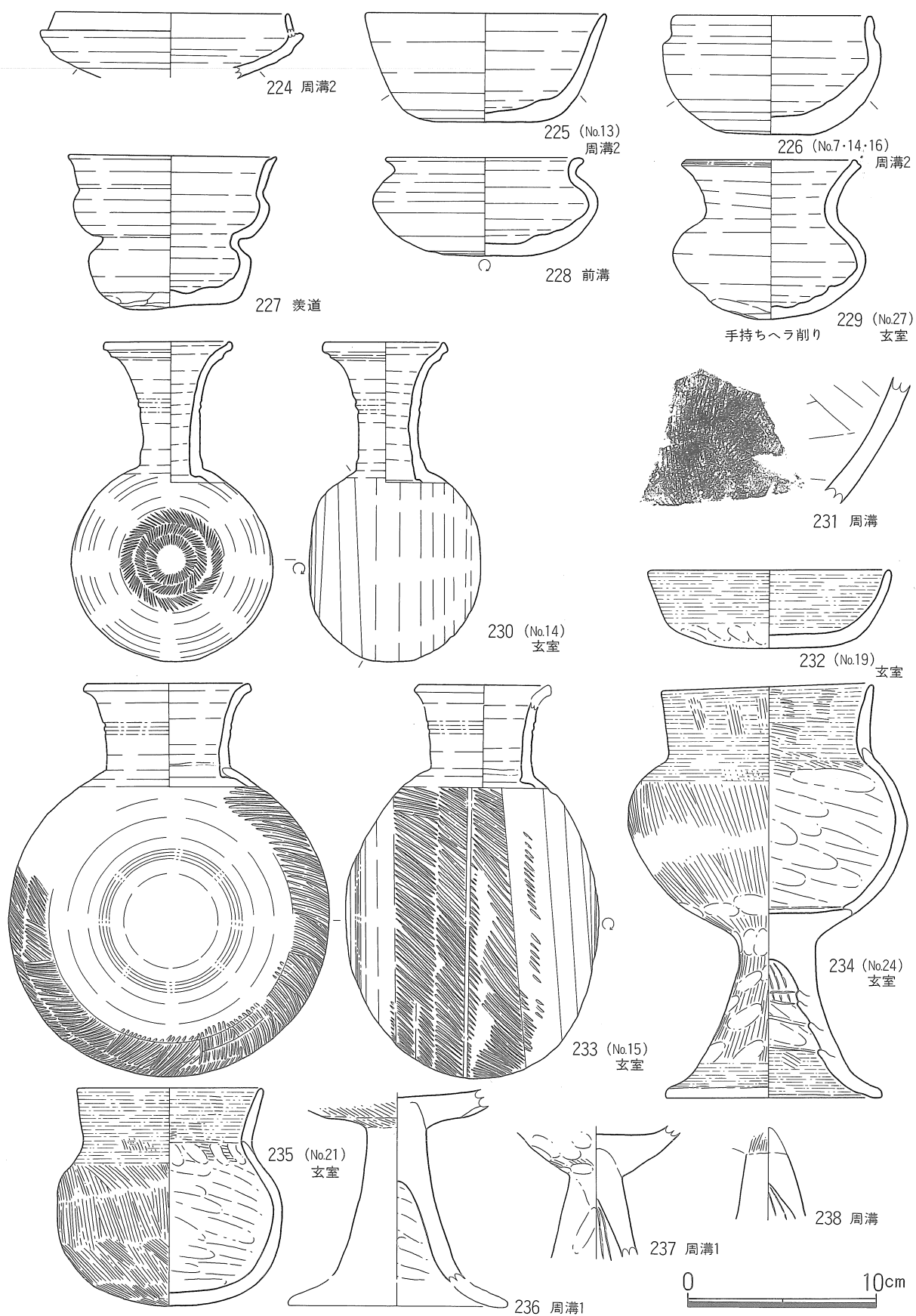
(165~168= 3号墳 169~174= 4号墳 175~182= 5号墳)



第142図 土器実測図 (19)
(183~187= 5号墳 188~199= 7号墳)

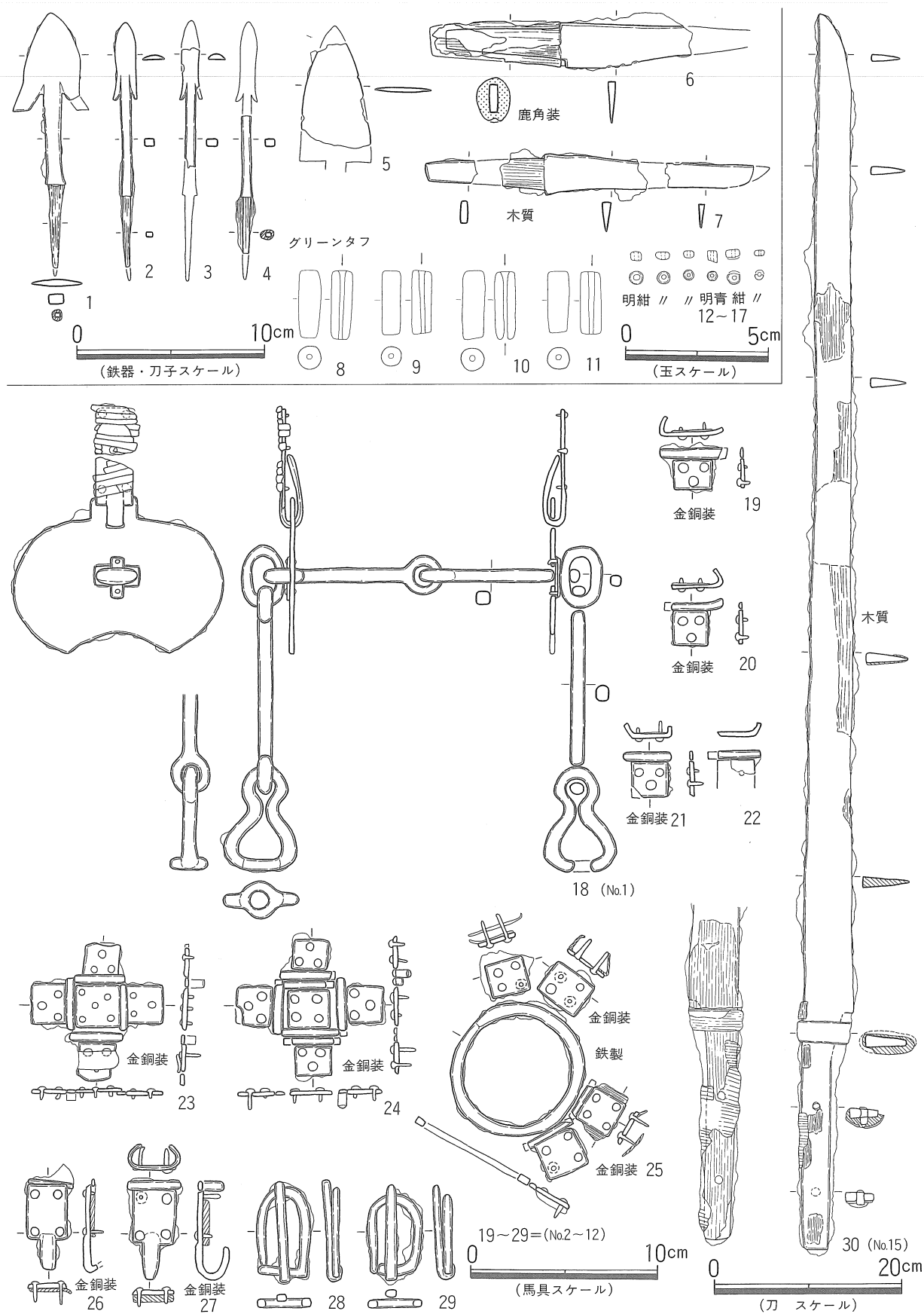


第143図 土器実測図 (20)
(200~223=7号墳)



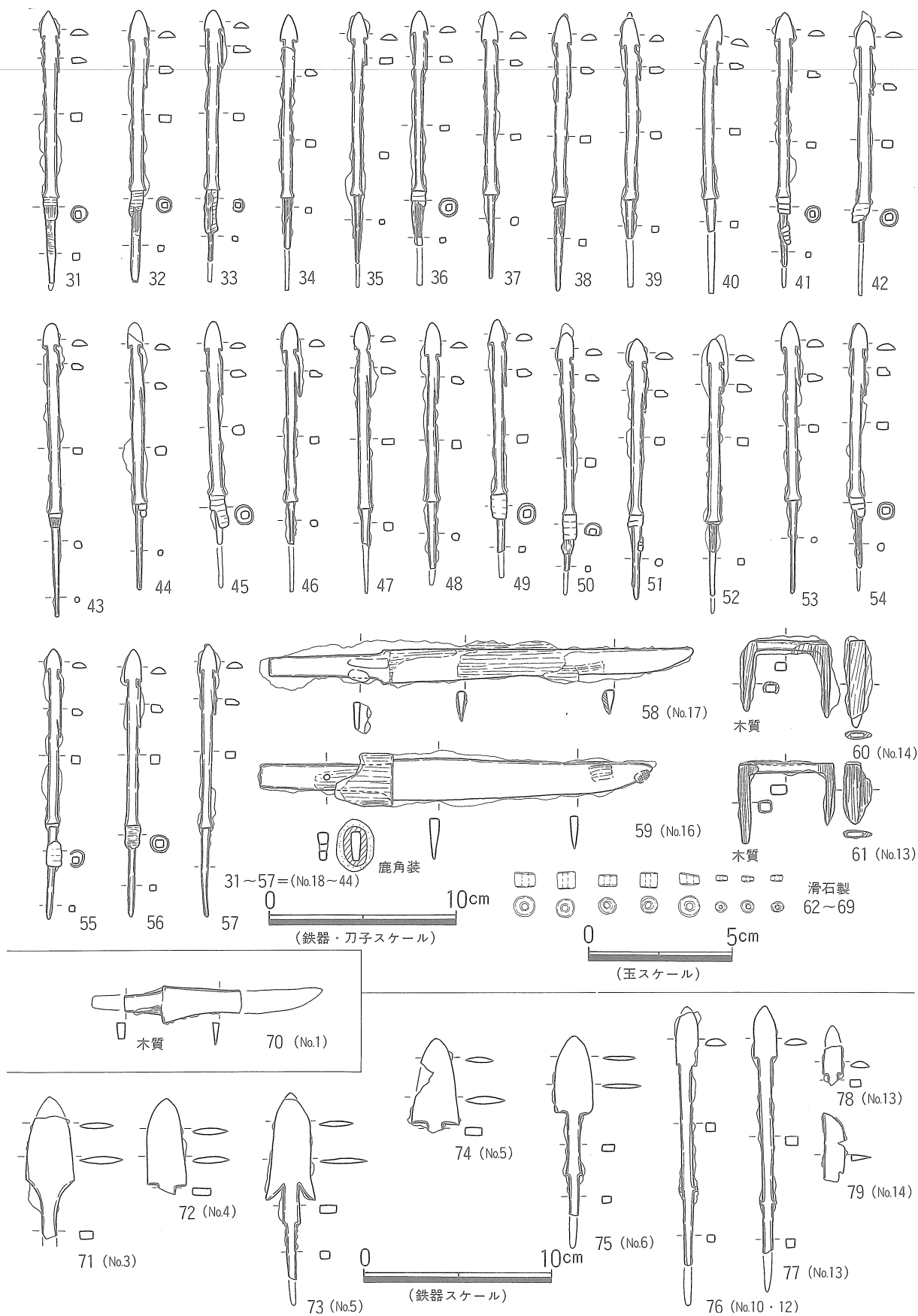
第144図 土器実測図 (21)

(224~238 = 7号墳)

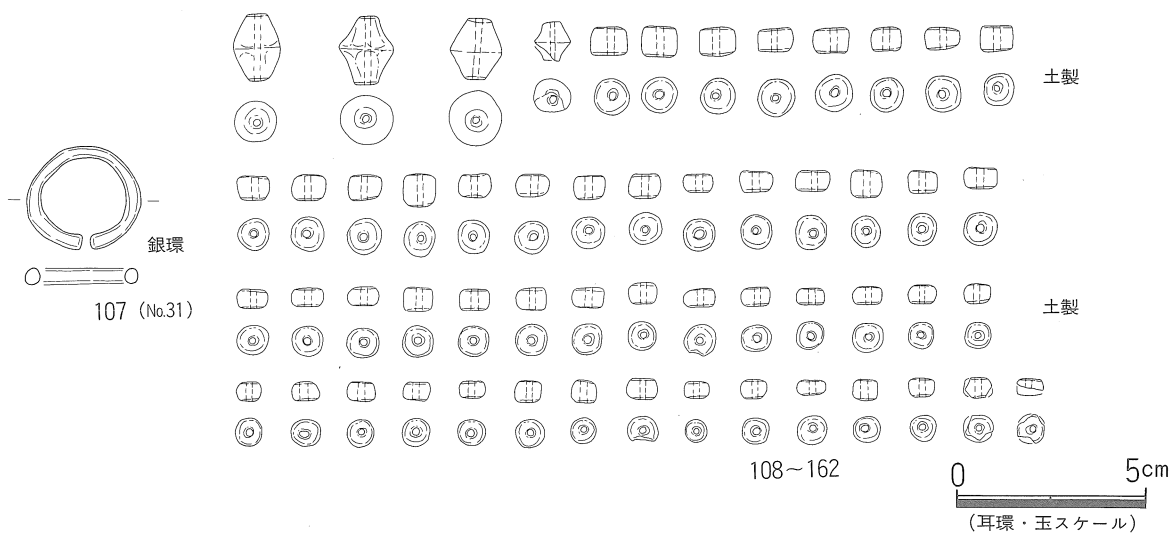
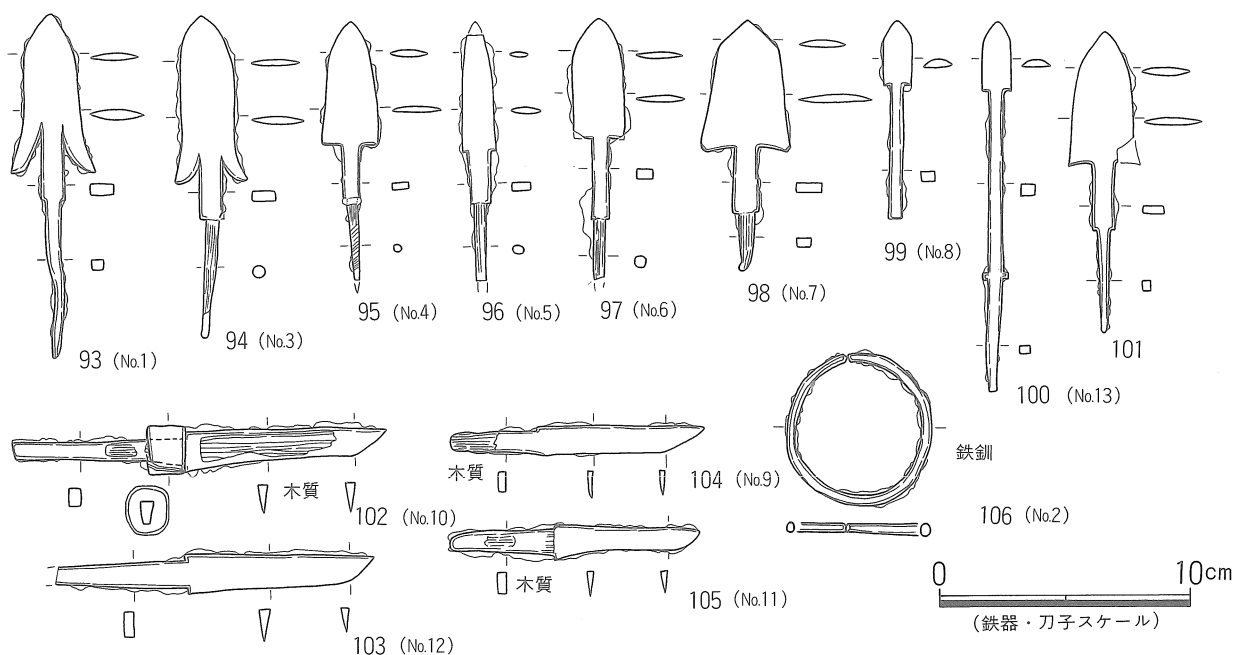
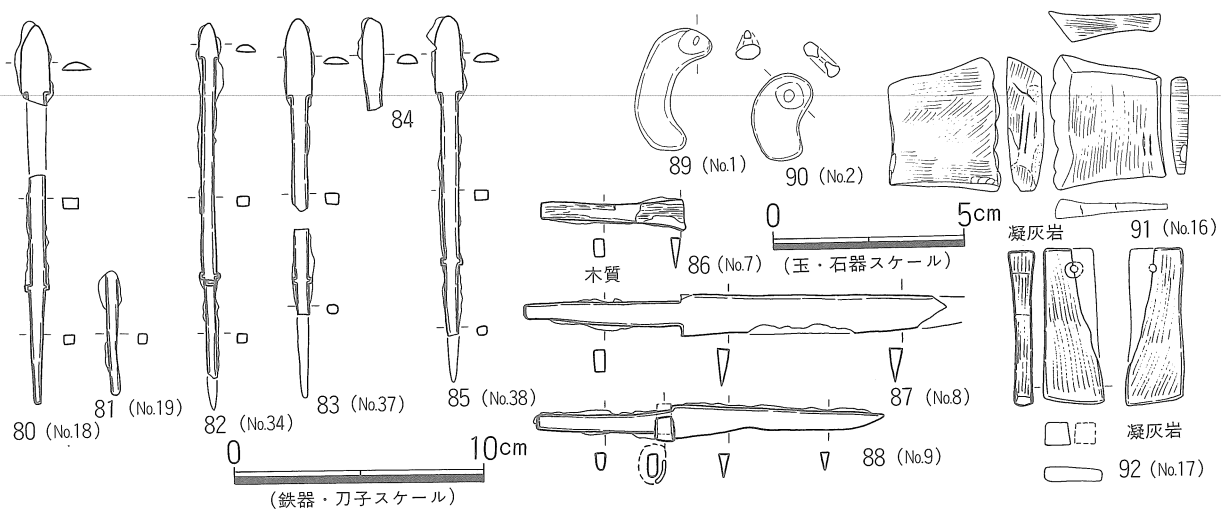


第145図 金属器・玉類実測図 (1)

(1~17= 1号墳 18~30= 3号墳)



第146図 金属器・玉類実測図(2)
(31~69=3号墳 70=4号墳 71~79=5号墳)



第147図 金属器・玉類実測図(3)
(80~92= 5号墳 93~162= 7号墳)

第5章 考 察

第1節 高尾向山遺跡に見る弥生時代後期方形周溝墓の様相

i) はじめに

今回の発掘調査で得られた最大の成果は、静岡県内では袋井市愛野向山Ⅱ遺跡に次いで弥生時代後期に該当する方形周溝墓群の全容、および居住域との対比が可能な資料が提供されたことである。本節では高尾向山遺跡の方形周溝墓群の分析を通じて、静岡県下での他の後期方形周溝墓の構造との比較を試みてみたい。また、平面形態は四隅突出型墳丘墓とでもいえるような印象を受け、この平面形態に関連した分布と、多数埋葬の系譜についても東日本のエリアのなかで考察を加えてみたい。

ii) 高尾向山遺跡の方形周溝墓の分析

規模・平面形態 規模は第149図に示した通り（図の規模は墳丘規模で溝幅は含めていない）、長軸方向12m以上になる大形方形周溝墓が4基存在し、他の方形周溝墓を圧倒している。とくに墓域入り口部に築造され、墳丘中央に巨大な木柱が立てられた特別な意味を持つと思われるSX43は、墳丘部だけで20m近くあり溝の規模まで換算すると20m以上を測る群中の最大の規模であるが、墳丘の高さは1m前後となり他の大形方形周溝墓とさして変わりはない。次のクラスとしては長軸10m以上12m以内の中形方形周溝墓になるものが存在し、SX1・3・34・57が該当している。さらにその下のクラスとしては長軸10m以下の小形方形周溝墓となる。小形方形周溝墓については6m以上になるものと、5m以下のものにランク分けができそうであるが、まとまりとしては弱い。ただし、斜面部に築造された長方形になる方形周溝墓は6m以上となり、5m以下の極小方形周溝墓はない。

平面形態については第3章で述べたように、東海～南関東地域で中期からの伝統的な四隅切れの方形周溝墓の系譜を引くものはわずか2基であったが、大多数の周溝墓は四隅の入り口が強調され四隅突出の方形周溝墓とでもいえる特徴的な形態をなしており、基本的には中期の四隅切れの方形周溝墓の形態から発展したものと理解される。つまり第149図に示した通り、中期中葉に四隅切れのものが中期末～後期初頭の広野遺跡6号墓（豊田町教育委員会 1985）に見られるように四隅の陸橋部に浅い溝を巡らせ周溝同士を連結し墳丘の区画性を高めたものが現れ、後期前半になると高尾向山方形周溝墓や新豊院山C地点1号墓（磐田市教育委員会 1980）に見られるごとく、四隅の幅の狭い溝が周溝と同じ位の深さまで掘削され、それに伴い四隅が少し外に突出させた印象を与える造りに変化している。つまり、中期末～後期初頭段階までの四隅の陸橋部は単なる出入口としての機能をもつものから、後期前半になると入り口部を突出させることにより視覚的な効果をさらに高めていこうとする意図が伺われるのである。予測ではあるが、広野北遺跡で見られた四隅陸橋部に浅い溝を巡らすものは今のところ中期末～後期初頭までのものしか知られていないが、山下遺跡で一部四隅の陸橋部を浅い溝で繋ぐものも見られるため、この形態の初現は中期中葉段階まで遡ると考えている。

この平面形態は、再三述べるようであるが四隅に陸橋を設けることによりどの方向からも墳丘内に入り込める利点がある。つまり、重列タイプの山下型あるいはブロックタイプの瀬名型の墓道形成および墳丘内を通路として使う利点があるということである。これに対し畿内では例えば瓜生堂遺跡（瓜生堂遺跡調査会 1981）などの畿内でよくみられる瀬名遺跡型の群構成の基本型になったと思われるブロックタイプの群構成をなす方形周溝墓の個々の平面形態は長方形で周溝が全周し、たがいに結合しながら造墓を繰り返していくタイプとなり、墳丘の高さを強調した造りとなっている。そのた

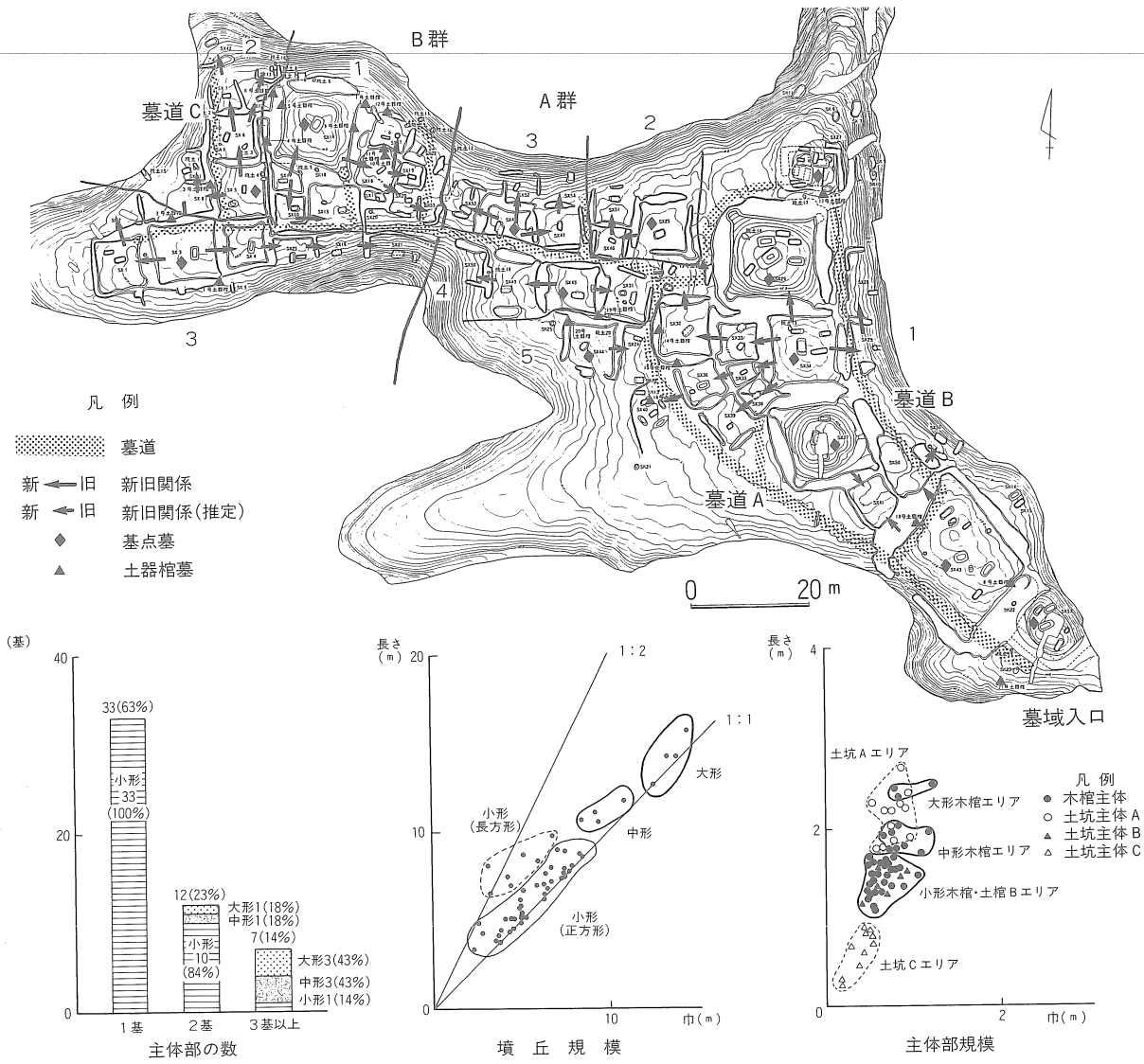
めに、畿内でこのブロックタイプの群構成をもつ方形周溝墓群は溝の内側や底を墓道として墳丘に至る方式をとる（畿内型方形周溝墓Ⅰ類）のに対して、東海～南関東地域で見られる方形周溝墓は墳丘を溝で区画することに重点を置くため、墳丘外、あるいは墳丘内縁を墓道とする方形周溝墓の単位群形成を行うと考えられ、四隅に陸橋をもつ方形周溝墓が盛行する理由の一つにはこの墓道設定に関係したものと考えられる。ただし、畿内や三重県の東庄内B遺跡（Ⅱ期、三重県教育委員会他 1970）、福井県の吉河遺跡の方形周溝墓群（Ⅱ～Ⅲ期？ 福井県教育委員会 1983）を見ると、平面形は正方形に近く溝で区画することに重点を置くタイプの方形周溝墓も存在し、しかも重列タイプになりながらも1箇所には陸橋が見られない方形周溝墓も存在する（畿内型方形周溝墓Ⅱ類）ため、今回の理由づけだけでは畿内型方形周溝墓Ⅱ類についての説明はできないのである。この点については各地域ごとの事情を今一つ検討する必要がある。また、今回検出された四隅突出形態の方形周溝墓についての問題は、近年の北陸地域で見つかつてきている貼石をもたない土造りの墳丘になる北陸型四隅突出型墳丘墓との関連や、近年東海～関東地域で相次いで発見された後期の四隅切れ形態の方形周溝墓群の存在の問題とも関わってくるが、この問題点についてはまとめの項で少し触れることとしたい。

群構成・墓道 群構成についてはすでに第3章にて概略を記述したが、ここでは方形周溝墓同士の切り合い関係を追及し、単位群と墓道の分析をしてみたい。（方法は第3章で一部触れた通りすでに中期方形周溝墓で試みた方法に準拠し分析を進めたい。松井 1992）

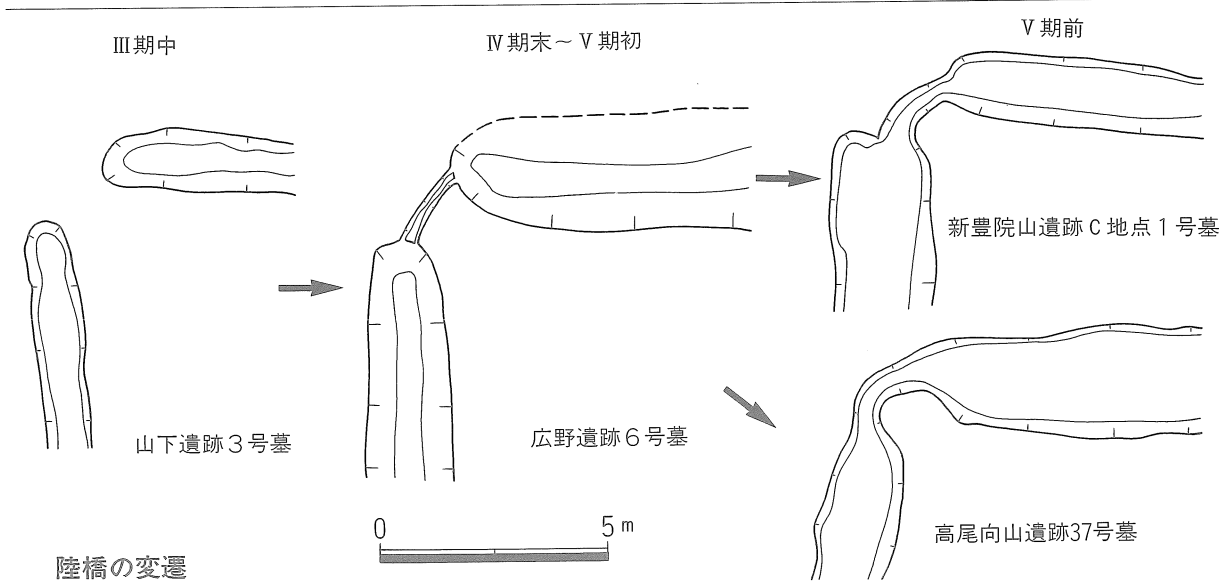
方形周溝墓同士の切り合い関係と出土土器、位置関係から第149図に示した通り、大きく見るとA群とB群の2群、細かな小単位群に分けるとA群で5群、B群で3群の総計8群の小単位の群構成をなしていることが判明した。それぞれの小単位群の位置関係から見て、墓域全体の幹道になると思われる墓道Aが復元できた。また、墓道A以外では墓道B・Cを復元してみると、ほぼ周溝墓群全体を網羅した墓道群が復元しえる。この墓道群の復元についての肯定材料をあげてみたい。すでに第3章でも触れた通り四隅が突出する形態は墓道からの入り口部の意識によるものと考えてみると、SX1の西側の四隅が突出しないことは、それ以上墓道Aが西に向かって伸びていかない状況を示しているのではあるまいか。また、SX1・3・4・37の周溝内土器の出土状況が墓道A・Bに接した突出部を中心に出土していることなども墓道に関連した事象と捉えられないか。SX45とSX47の間の空地の設定、A1群のなかでSX36・35がより西に造墓域を拡げず、SX28・29など窮屈な斜面部に造墓域をもとめている点などから、明らかに墓道を意識した群構成になっていることがわかる。

墓道の設定の意義は、一つめには小単位群を設定するために平面空間分割の目安が必要であったことが考えられる。二つめには周溝内の土器出土状況、あるいは焼土遺構を見ると、溝がある程度埋没した段階で祭祀行為がなされたことが暗示され、あたかも周溝墓築造後ある程度の期間を経たからの祭祀行為あるいは埋葬行為がなされるという一連の祭祀プロセスが看守され、その祭祀のための参道としての目的があったと考えられるのである。このことから、高尾向山方形周溝墓群の墓域は、墓道設定を中心として極めて計画的に造墓がなされていたと理解されるのである。

さてこうして墓域設定された小単位群の造墓過程を見ていくと、まず基点となる墓（以後基点墓と称する）が設定され順次造墓が続けられていったものと考えられる。それぞれの周溝の状況を見ると前周溝墓の周溝を再利用して結合したもの（例えばSX1・3・4の関係、結合式）、溝を新たに再掘削して連結させたもの（例えばSX45・31・50の関係、連結式）などが主体的に見られ、溝が互いに重ならない接続したもの（接続式）は僅かにSX36とSX40の関係だけで、小単位群全体の主流方法にはなっていない。ちなみにこの方法で各小単位群の主流型式を検討してみると、A1群は大形方形周溝墓は連結式、小形のものは結合式、A2群は結合式、A3群は連結式、A4群は連結式、A5



方形周溝墓の分析



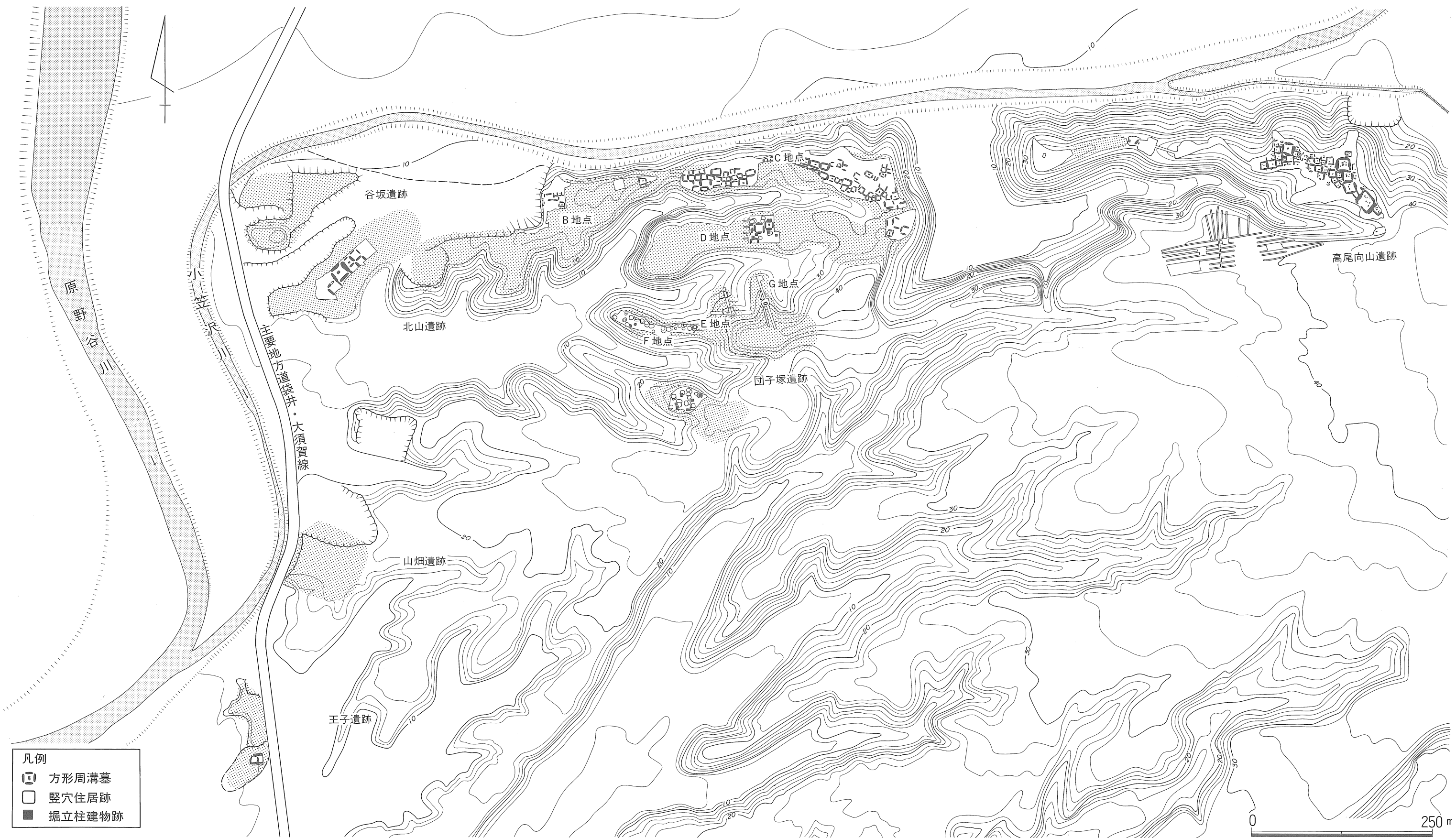
第149図 高尾向山遺跡方形周溝墓分析図

群は連結式、B 1 群は結合式、B 2 群は結合式、B 3 群は結合式となり、A 群は連結式、B 群は結合式と大きく別れる傾向が伺われる。このように、小単位群形成方法からもA群とB群という異なる被葬者集団層の違いが読み取れるのである。

つぎに小単位群内の造墓の広がり（群構成）を見ると、重列状に造墓を拡げていく方法（山下遺跡型）をとるものはA 3・4・5群、B 2・3群であり、基点墓を中心としてブロック状（市松状）に造墓を拡げていく方法（瀬名遺跡型）をとるものはA 1・2群、B 1群となる。小形周溝墓を中心とするグループは山下遺跡型、大形周溝墓を中心とするグループは瀬名遺跡型を採用しているようである。このことは、すでに分析したように（松井 1992）遠江の中期方形周溝墓群は山下遺跡型を基本型とし、しかも中・大形方形周溝墓は含まれないのに対し、駿河の中期方形周溝墓群は小形方形周溝墓からなる小単位群は山下遺跡型、中形方形周溝墓を含む小単位群は瀬名遺跡型となる傾向に類似する。遠江・駿河での中・大形方形周溝墓（全長10～20mの規模になるもの）については、愛知県の朝日遺跡の周溝墓の分析（Ⅱ～Ⅳ期、石黒立人1991）に照らし合わせるとAランク（18m以上）ないしBランク（12～16m）の規模、畿内では大形方形周溝墓といわれる加美Y-1号墓（Ⅲ～Ⅳ期、長軸26m、田中清美1986）や、瓜生堂2・14号（Ⅲ～Ⅳ期、長軸14～18m、瓜生堂遺跡調査会 1981）に匹敵する規模をもつ。畿内や尾張の中形ないし大形規模の方形周溝墓は瀬名遺跡型の群構成をなしており、小形の周溝墓が中心の安満遺跡1972年度調査地点（Ⅱ期～Ⅳ期、高槻市教育委員会 1983）では山下遺跡型の群構成になるため、山下・瀬名遺跡型という2相の群構成は畿内からもたらされた可能性が非常に高いのである。しかも、遠江・駿河での中・大形方形周溝墓を中心とする瀬名遺跡型の群構成は、駿河では早くも中期中葉（瀬名遺跡等）、遠江では高尾向山遺跡で明らかとなったように後期前葉に確立したものと考えられる。この点については、岸本一広氏の畿内での方形周溝墓の分析が参考となる（岸本一宏 1987）。岸本氏の分析でも畿内の中期方形周溝墓については列状をなすものと、市松状をなすものの2相があると指摘されている。ただし、駿河では今のところ中期段階の墳丘規模が12～20mを測る大形方形周溝墓は未発見である。近年の発掘調査では掛川市原遺跡（掛川市教育委員会 1996）で後期前半の段階に該当する中形方形周溝墓を含む瀬名遺跡型の群構成をなす方形周溝墓群が確認され、しかも平面形態は中期以来の四隅の切れる形態であった。また原遺跡で単独であるが中期末段階のもので全長20m近くなる大形方形周溝墓も発見されている。

山下遺跡型の群構成をなす大形方形周溝墓を含むものも存在する。第152図に示した広野北遺跡（豊田町教育委員会 1985）の場合は、大形方形周溝墓を含む小単位群をみると山下遺跡型の群構成になるが、基点墓は大形方形周溝墓にはならない。時期的にも出土土器から中期末（凹線文平行期）～後期初頭に該当するもので、高尾向山方形周溝墓群に比べると若干ではあるが先行する。同様な例として下滝遺跡（漆畑敏 1992）でも中期末に該当する四隅切れ形態の大形方形周溝墓（15mクラス3基集中検出）が発見され、群構成は後期前葉段階まで山下遺跡型をとる造墓活動が続ける方形周溝墓群になるようである。よって、遠江における大形方形周溝墓含む単位群の群構成は、中期前葉以来の山下遺跡型をとる広野北遺跡・下滝遺跡と、瀬名遺跡型をとる高尾向山遺跡と原遺跡の2相があると理解される。そして、中・大形方形周溝墓を含む瀬名遺跡型の群構成が遠江において出現する時期は今のところ後期前葉まで遡ると思われるが、駿河では大形方形周溝墓をも含む瀬名遺跡型の群構成なす方形周溝墓群は今のところ中期・後期とも未発見で、この点については大形方形周溝墓の被葬者層出現時期に地域差があるのかないのか興味深い課題である。

主体部・多数埋葬 木棺については第3章の分析及び第149図に示した通り、長軸2m以上になる大形木棺、長軸1.7m以上の中形木棺が伸展葬、長軸1.6m以下の小形木棺が仰臥屈肢葬（都出比呂志



第150図 高尾向山遺跡周辺の弥生時代遺跡分布図

1986)の埋葬状態になる3種類の木棺が存在すると想定してみた。大形木棺の傾向としてはS X27の中央棺、S X37の中央棺、S X47-2主体部は多数埋葬ないし大形の有力方形周溝墓の主体部といえるものであるが、S X21、S X31、S X32、S X45などとはくに有力方形周溝墓とはいえないものであろう。また、有力方形周溝墓であるS X14の中央棺、S X26の中央棺、S X43中央棺、S X57の中央棺のいずれも中・大形の木棺ではないので、木棺の大きさが必ずしも有力被葬者の木棺になるとはいえない状況である。しかし、発掘調査担当者としては極めて無責任な発言になるかとは思いますが、木棺本体の大きさの認定に際して土層断面観察を重視したため、木棺の腐食・崩壊が早く土層断面に木棺本体の正確な大きさを観察できなかった状況も考えられ、この点についてはもう少し類例資料の出現をまち結論づけたい。ただし、木棺の掘方規模に注目すると平面的に見ると掘方を広くとり、深さも地山内までかなり深く掘削する主体部は、S X14、S X27、S X26、S X34、S X37、S X43、S X57の有力方形周溝墓の中央主体部ないし第2主体部に限られることから、掘方規模によって有力者層の木棺を抽出できそうである。

つぎに木棺の構造であるが、高尾向山遺跡では小口板が底板の下にでない型式(I類、第151図参照)の木棺のみからなる。小口板が底板の下にでる型式(II類)は遠江では中期中葉の山下遺跡(袋井市教育委員会他 1984)、中期後半の宇佐八幡境内遺跡(袋井市教育委員会 1992)、愛野向山A1号墓(袋井市教育委員会 1986)、鶴松墳墓群(袋井市教育委員会 1982)、中期末～後期初頭の広野北遺跡、後期の原遺跡などで確認されている。いずれも木棺本体の長軸規模は1.7m切る小形の木棺で、仰臥屈肢葬の埋葬状態が想定され、伸展葬の可能なものは今のところ見られない。また、該当時期は中期に限られるものがほとんどであるが、中期末の広野北遺跡の他、最近の発掘調査で原遺跡など後期に降る例も確実にあることが知られるようになった。いっぽう、今回検出し得たI類木棺は中期中葉の団子塚遺跡(浅羽町教育委員会 1992)を最古の例として、中期中葉～後半の権現山遺跡(磐田市 1992)、後期初頭の瓦屋西遺跡(円形周溝墓、浜松市教育委員会 1991)、中期後半～後期の原遺跡、後期末の八景山遺跡(静岡県 1990)など幅広い時代で使用されている。中期の例は今のところII類木棺と同じく仰臥屈肢葬が想定できる木棺で、伸展葬可能なものは見られない。ところが後期末になると八景山遺跡において木棺本体の長軸1.7m以上になる伸展葬の可能な木棺が出現する。さらに遠江の例ではないが、焼津市道場田遺跡で古式土師器I期段階で人体以上の大きさをもつ木棺が出現することが確認されている(焼津市教育委員会 1987)。

木棺の大きさの問題点については尾張の状況が参考になる。例えば一宮市山中遺跡で検出された後期中葉～後半に築造された方形周溝墓の木棺本体規模は、長軸3m近くなるものがかなり見られ、しかもS Z10・13は主体部が3基以上ある多数埋葬の方形周溝墓であった(愛知県埋蔵文化財センター 1992)。この状況が尾張を中心とする一般的な傾向だと仮定すると、遠江・駿河における人体以上のスペースをもった大形木棺の出現時期は古式土師器I期段階まで待たなければならないが、尾張地域ではすでに後期中葉には大形木棺が出現していたことになり遠江との地域的格差を感じざるを得ない。おそらく畿内に近い尾張では、遠江より早い段階(おそらく中期後半段階?)から伸展葬可能な木棺が畿内より伝播したのに対し、小・中形方形周溝墓しか築造されなかった遠江では仰臥屈肢葬可能な木棺しか造り出すことができなかったのだろう。そして、三河まで流入し得た中期後半の凹線文土器は天竜川より東には伝播しなかったものの、大形方形周溝墓が中遠江でも出現したが、伸展葬可能な木棺を造る技術は伝播しなかった。それは、後期末ないし古式土師器の流入初期段階まで待たねばならず、この時期になると山中遺跡で見られた大形木棺を造る技術も遠江にももたらされ、道場田遺跡の方形周溝墓の木棺が出現したものと考えたい。実はこの人体以上の空間をもつ大形木棺が古墳

時代前期の小形古墳に多く採用される長軸3 m以上になる細長い割竹木棺や、同じく長軸3 m以上になる細長い箱式木棺（小深田西1号墳、焼津市教育委員会 1984）を受け入れる素地となっていると思われるのである。後期末～古墳時代前期にかけての木棺の段階的大形化の問題は、当地域での弥生時代墳墓副葬品としてはあまり見られない八景山方形周溝墓出土短剣（武器）の副葬問題ともオーバーラップしてきており、楯築墳丘墓（楯築刊行会 1992）などに見られる西日本での大形前方後円墳出現の前段階の墳墓祭祠プロセスの一端が当地方に伝播したと考えられるならば、重要な問題点を提供していると思われる（松井 1994）。

さて、Ⅰ類・Ⅱ類木棺を主体部とする方形周溝墓が、混在して見つかる方形周溝墓群は以外と少ない。現在知りうる限りでは、原遺跡の例が唯一といってもよいくらいである。この状況は、畿内でも同様な傾向があり、同一の方形周溝墓のなかから型式の違う木棺が発見された場合、小数派型式の木棺の被葬者は他の集落からの移入者と考えられている（福永伸哉 1985）。遠江の場合は主体部の種類が認定される例が少ないため、畿内ほど確定的に検討することはできない。しかしながら、比較的主体部が多く確認されている方形周溝墓群の例、例えば中期の方形周溝墓群である山下・宇佐八幡境内方形周溝墓群がⅡ類木棺を主に採用するのに対して、同じ存続時期の団子塚方形周溝墓群はⅠ類木棺を主に採用している点がみうけられ、畿内の状況と同じく集落ごとに木棺の型式が限定されていたのではないかとと思われる状況が確認される。

土坑主体部についてはまず伸展葬が想定されるA類は、多数埋葬の方形周溝墓に限定的に採用されている。土坑主体部B類については、単独埋葬の中央主体部（木棺？）、ないし2基埋葬のものに見られるようだが、確認数が少ないため普遍化したデータは得られていない。土坑主体部C類については多数埋葬の方形周溝墓、ないし2基埋葬の方形周溝墓の第2主体部に多く採用されている。この結果から土坑主体部A類については多数埋葬方形周溝墓に限定的に採用された埋葬主体部といえるのに対し、B・C類土坑主体部についてはとくに埋葬規定はなかったと考えられる。ただし、土坑主体部C類は2基の主体部をもつ方形周溝墓に多く採用される傾向が見られることは指摘しておきたい。

ここで、土坑主体部についての具体的な構造を、良好な資料の得られている畿内方形周溝墓の土坑主体部から比較検討してみたい。土坑主体部A類は人体を直接埋葬したものとも思われるが、土層断面を観察すると土坑中央に黒色土が多量に流入している状況が観察されるものが多い。よって、遺体を埋葬する段階で遺体のまわりにある程度の空間があったことが想定されるので、具体例としては尼崎市田能遺跡で見られた木蓋土坑墓（尼崎市教育委員会 1982）が該当するかもしれない。田能遺跡での木蓋土坑墓は報告書によると布留式段階に降るもので、はたしてⅣ期の方形周溝墓と同時に併存するものか確証はないし、方形周溝墓外の埋葬主体として見られ周溝墓内の主体部とはなりえていない点から見ても、高尾向山遺跡の例とは同列に扱えない資料であろう。その他畿内における土坑主体部と木棺主体部の併存する方形周溝墓の典型例をあげるならば、東大阪市瓜生堂2・15号墓、豊中市勝部第2区墓域（方形周溝墓、Ⅲ～Ⅳ期、豊中市教育委員会 1972）がある。何れも畿内では多数埋葬の有力大形方形周溝墓としてよく紹介されているものである。

瓜生堂2号墓では木棺6基・土坑主体6基・土器棺6基の合計18基の埋葬主体部が検出された。問題の6基の土坑主体部は切り合うものもあり、報告書の記述を見てもすべて土坑主体部として認定してもよいものか躊躇するが、径1 mを測る第1土壇から年齢8～12才の少年ないし少女の臼歯が出土している。瓜生堂2号墓での分析では径1 m内外になる土坑主体は少年・少女の年齢層の埋葬主体部、土器棺は幼児埋葬主体部、木棺は成人埋葬主体部と考察されている。瓜生堂遺跡の成果をそのまま高尾向山遺跡にあてはめると土坑主体部C類については少年・少女の年齢層の埋葬主体部と位置付け

られようか。ただし、瓜生堂23号墓（大阪文化財センター 1980）や巨摩・若江北遺跡10号墓（大阪文化財センター 1995）で発見された小形木棺は内法1mを切る少年・少女の若年層に該当する埋葬主体部と考えられ、木棺主体部が必ずしも成人の年齢層の差をあらわす埋葬主体部とはならないことが判明している。ちなみに、瓜生堂2号墓の木棺主体部については遺存人骨からすべて成人で性別内訳が男性3名・女性3名となり、報告書では2号墓を3代にわたる有力家族の夫婦埋葬の墓とする案が提示されている。埋葬状態は人骨、木棺の大きさからみてすべて仰臥屈肢葬になるようである。

瓜生堂15号墓では木棺4基、土坑主体部2基の合計6基の埋葬主体部が発見されたものの、半分しか発掘調査されていないため調査区域外になお多くの埋葬主体部が存在していると思われる。土坑主体部については、1号土坑で人骨が検出され仰臥伸展葬になると報告されている。2号土坑は人骨が遺存していないが、長軸1.6mを測る伸展葬可能な埋葬主体部であると思われる。この2基の土坑主体部は形態と大きさからみて高尾向山遺跡の土坑主体部A類に該当するものと考えられる。瓜生堂15号墓も高尾向山遺跡と同じく、中央主体部は木棺で構成されその外側に土坑主体部が位置している状況もまったく同じものである。注目されるのは2号土坑の人骨の胸の部分から打製石鏃2点が出土し、中期後半に勃発した戦乱で死亡した被葬者像が報告されている。ちなみに、15号墓の木棺の埋葬状態も残存人骨や木棺の大きさからみていずれも仰臥屈肢葬であると思われる。

瓜生堂遺跡では2号・15号の有力大形方形周溝墓以外にも、木棺と土坑主体部が併存している10・13号墓が存在する。10号墓は完掘されていないものの主体部は木棺1基・土坑主体部2基からなり、13号墓は木棺2基・土坑主体部1基から構成されている。10号墓の1号土坑は楕円形の長軸1mの土坑で5～6才の幼児骨、2号土坑は径0.5m内外の小形円形土坑で屈葬状態の成人埋葬が報告されている。いずれも高尾向山遺跡の土坑主体部C類に該当する。しかしながら、2号土坑については高尾向山遺跡でも人骨の出土がなければはたして埋葬主体部かどうか躊躇する遺構であるが、瓜生堂10号墓の例を尊重すると成人の屈葬埋葬主体部となるのである。ただし、瓜生堂10号墓2号土坑の場合、全骨格が出土しているわけではないため、はたして遺体をすべて埋葬したものか、改葬はないものか、人骨の部分埋葬はないものかなど検討課題が残る埋葬主体部である。13号墓の土坑主体部については伸展葬の18～25才の成人男性が埋葬されていた。土坑の長軸も1.8mを測るもので土坑主体部A類に該当する。ちなみに10・13号墓の木棺の埋葬状態は、いずれも仰臥屈肢葬であった。

勝部2号墓は木棺8基・土坑主体部1基・土器棺3基の合計12基の主体部が検出されたが、全体が発掘調査されたわけではないので、もう少し主体部の増加はあるだろう。土坑主体部は長軸2.3mを測る楕円形土坑で、人骨の遺存状況は良くなかったがおそらく伸展葬になるもので、土坑主体部A類に相当する。勝部2号墓も木棺が中央主体部となり、土坑主体部はその周辺に位置していることからみて、瓜生堂15号墓と同じ主体部配置になるものであろう。

土器棺については、第3章で検討した通り高尾向山遺跡では壺棺を基本とすること、明確に墳丘内に埋葬されるものがないこと、A群ではSX32・43・44、B群ではSX3・14付近に集中する傾向があることを指摘できた。静岡県下の後期における土器棺が、壺棺を基本とすることはすでに羽二生保氏（羽二生保 1988）、向坂鋼二氏（向坂鋼二 1991）の研究から明らかで、おそらく両氏の研究成果から見て身が壺形土器となりはじめる中期前葉段階は、方形周溝墓が当地域へ導入される時期にあたり、さらに壺棺が確立する時期になるとと思われる。すなわち、高尾向山遺跡の後期壺棺墓は方形周溝墓導入後の連動した動きの延長上にある土器棺であることは間違いないと思われる。

高尾向山遺跡で墳丘内に壺棺が埋葬された例（周溝内および墳丘縁については除く）は、唯一SX18の10・11号土器棺である。しかしながら、10・11号土器棺を検討するとSX18の北周溝が両土器棺

を避けるように掘削されていることから、おそらく10・11号土器棺が埋葬されその後にS X18が築造されたと思われるのである。とするならば、10・11号土器棺の埋葬後地表面に何らかの埋葬目印か土盛りがないとこのような状況にはならないだろう。

さて、S X14の周辺には実に5基もの土器棺が埋葬されている。周辺部まで拡大すると10・11号土器棺もS X14に属する土器棺の可能性もでてきており、当地域では1基の方形周溝墓に対する土器棺数としては異常に多すぎる。畿内の瓜生堂2号墓でも土器棺が6基埋葬されていたが畿内でも多い部類の例である。A群の有力方形周溝墓のなかで土器棺をもつものはS X27の1基とS X43の2基だけで、土器棺の埋葬数が必ずしも有力方形周溝墓に反映されないことも瓜生堂2号墓とは異なる。また、畿内での方形周溝墓にともなう土器棺は、乳幼児の人骨が出土する例が多いこと、墳丘内に埋葬される例が多いこと、1基の方形周溝墓からそれ程数多く出土する例が少ないことから、周溝墓に埋葬を許された一部の階層の乳幼児（家長死亡後家長権の継承を見込まれた乳幼児か？）と考えられる。高尾向山遺跡の場合、墳丘内から疎外されている例が多いので畿内ほど乳幼児に対する家族意識が強いものといえないが、例えば第152図に示した愛野向山Ⅱ遺跡の方形周溝墓群では周溝墓13基に対して土器棺は2基しか検出されておらず、高尾向山遺跡の場合は周溝墓58基に対して実に21基もの土器棺が埋葬されており、いかに乳幼児に対する埋葬率が高いものであったかは明らかであろう。

以上の結果から土器棺を評価すると、高尾向山遺跡の場合、方形周溝墓を構成する墓域への乳幼児の埋葬率の高さは確認されるが、個別の有力方形周溝墓への埋葬数にばらつきがあるので、乳幼児の埋葬率の高さは家族の発展段階に関連した要素としては認められるものの、特定の乳幼児が土器棺に埋葬されるか否かの判断は有力家族に委ねられたものではなく、集落全体あるいは高尾向山方形周溝墓群でA群とB群に分けられた単位集団の枠のなかで決められたと推測しておきたい。

さてここで、埋葬主体部のそれぞれの実態と多数埋葬の問題について検討してみたい。第149図に示した通り高尾向山遺跡の場合、単独主体部の方形周溝墓は33基を数え全体量の63%と過半数を越えており、内訳はすべて小形の方形周溝墓であった。つぎに2基埋葬（溝内埋葬も含む）をもつ方形周溝墓を検討すると12基を数え全体量の22%を占めた。2基埋葬の方形周溝墓は大形のもの1基、中形のもの1基以外はすべて小形の方形周溝墓であった。3基以上主体部を持つ（多数埋葬）方形周溝墓は7基で全体量の7%と1割を切る。内訳は大形方形周溝墓3基、中形方形周溝墓3基で小形のものはS X27のわずか1基である。再三述べてきたことだが、墳丘の大きさと多数埋葬は関係した要素であり、多数埋葬の方形周溝墓は有力方形周溝墓といえるものである。例外的なS X27については小形方形周溝墓ではあるが、丘陵東端の有力方形周溝墓群の小単位群中に含まれており、墳丘規模は小さいものの小位群の視点から見ると有力方形周溝墓に含めて考えておきたい。

つぎに多数埋葬における主体部の種類について分析する。多数埋葬の方形周溝墓に限らず単独・2基埋葬のものは、基本的に中央棺は木棺である。2基埋葬の方形周溝墓主体部の種類を検討すると、木棺と木棺の組み合わせになるものはS X3（1基溝内埋葬）、S X14（1基溝内埋葬）、S X23、S X33、S X48の5基で溝内埋葬のものを除くとわずか3基となる。残りの方形周溝墓はすべて木棺と土坑主体部の組み合わせとなりS X5（土坑主体部B類）、S X15（土坑主体部C類）、S X17（土坑主体部C類）、S X18（土坑主体部C類）、S X20（土坑主体部C類）、S X31（土坑主体部C類）、S X36（土坑主体部C類）の7基が確認された。土坑主体部C類については、成人埋葬（屈葬あるいは改葬？）か若年埋葬か結論がだせないで、成人2基埋葬は第2主体部が木棺ないし土坑主体部A・B類の組み合わせと限定しうるならば、その組み合わせをもつものは合計6基となり、そのうち2基は溝内埋葬の方形周溝墓である。ちなみに、溝内埋葬となる方形周溝墓はS X3の中形、S X14の大

形方形周溝墓となり、いずれもB群に含まれる方形周溝墓である。群別に成人2基埋葬になる方形周溝墓を分けると、A群は1基、B群は4基となり、B群のほうが2基埋葬が多く存在していることがわかる。さらに、B群の2基埋葬方形周溝墓の4基の内2基は中・大形方形周溝墓（SX3・14）であり、A群の中・大形方形周溝墓の多くが多数埋葬形態をとるのとは対照的である。本来多数埋葬になるべき中・大形方形周溝墓が、B群ではせいぜい2基埋葬で、しかも第2主体部が溝内埋葬の形態をとっていることから、A群で確認された多数埋葬の中・大形方形周溝墓と比較するならば、明らかに異なる埋葬形態が見て取れる。

多数埋葬の方形周溝墓主体部の内訳を見ると、SX1は木棺3基（内1基溝内埋葬）、SX26は木棺2基・土坑主体部A類4基の合計6基、SX27は木棺4基・土坑主体部A類4基・土坑主体部B類1基・土坑主体部C類1基・不明1基の合計11基、SX34は木棺2基・土坑主体部A類2基の合計4基、SX37は木棺3基、SX43は木棺2基・土坑主体部A類2基・土坑主体部B類2基・土坑主体部C類3基の合計9基、SX57は木棺2基・土坑主体部A類2基・土坑主体部C類1基の合計5基の主体部が確認されている。各多数埋葬方形周溝墓の中央主体部は、先に述べたように広く深い掘方をもつものであるが、それに準ずる木棺を中央近くに伴う例が多く見受けられる。SX1-1と2主体部、SX26-1と2の主体部、SX27-1と4ないし5の主体部、SX37-1と2主体部、SX43-1と2主体部、SX57-1と3主体部で、SX37は1主体部の木棺に対しやや小さい木棺の思われる3が該当する。（中央主体部に準ずる木棺を第2主体部と整理して記述を進めてきた。）

多数埋葬の傾向を群別に見ると、A群は多数埋葬で中・大形の有力方形周溝墓を含むのに対し、B群はわずかにSX1のみであり、溝内埋葬を除外すると多数埋葬になるものはない。先に述べたようにB群の唯一の大形方形周溝墓であるSX14も溝内埋葬を除外すると中央に1基の木棺しか見られない。よって、多数埋葬の内訳形態を見てもA群とB群との質的違いを看守することができる。

ここで、さきに検討した瓜生堂2号墓の成果を再度引用してみたい。瓜生堂2号墓においては木棺の被葬者層は有力家族の3代にわたる成人の夫婦埋葬、土坑主体部は3代の夫婦の何れかの少年・少女の若年層で、土器棺は幼児層の主体部というふうに年齢層別に主体部の使い分けがなされていたと想定される資料である。ところが、木棺でも若年層を対象とする小形のものを採用する例、土坑主体部のなかにも小形の土坑主体部C類で成人の発見される例、成人埋葬と思われる土坑主体部A類の存在などがあり、かならずしも瓜生堂2号墓の成果がすべての方形周溝墓にあてはまる状況にはなく、畿内でも周溝墓群毎や個々の周溝墓毎のバラエティーがあるようである。高尾向山遺跡の多数埋葬の有力方形周溝墓についても、中央主体部と第2主体部は木棺で埋葬されるが、その他の埋葬主体部は木棺であったり土坑主体部であったり周溝内埋葬であったりかなりの多様性が看守される。また、春成秀爾氏（春成秀爾 1985）や都出比呂志氏（都出 1986）が指摘している畿内での夫婦埋葬の木棺が同一頭位方向を意識したものとなっている点についても、高尾向山遺跡では2基埋葬と多数埋葬で同一主軸方向を持つ2基埋葬の主体部をあげるとSX1、SX27、SX57の3基しか該当するものはなく、畿内の夫婦埋葬、あるいは他集落からの移入者の同一頭位方向原理が働いているといえる状況にはない。さらに、高尾向山方形周溝墓群のうち2基埋葬（溝内埋葬のものは除く）と多数埋葬の方形周溝墓は、都出氏が第2類型と分類した（都出 1984）中央主体が木棺、その他の主体部は周溝内埋葬主体部で構成される東日本的な家族構成を示した在り方とは明らかに異なる。むしろ都出氏が西日本的な墳丘内に多数の埋葬主体をもつ第1類型と分類した方形周溝墓群により近いものであろう。

このように埋葬主体部の数の問題点から、高尾向山方形周溝墓群の西日本的な要素のみに注目した考え（案）を述べてみた。ところが、高尾向山方形周溝墓群の実に33%（第149図参照）は単独埋葬

の方形周溝墓である。都出氏は単独埋葬の方形周溝墓について溝内埋葬主体部を想定した家族墓としての位置付けをおこなっている。たしかに伊藤敏行氏の研究（伊藤敏行 1986）等で述べられているように、旧来より関東の方形周溝墓のなかには周溝内埋葬と目される土坑が確認される例も少なからず見られるようである。しかしながら、それらすべてが周溝内埋葬主体部としてもよいものか、さらにすべての方形周溝墓に周溝内埋葬主体部の存在を普遍化しうるのか、もう少し慎重な検討が必要となろう。静岡県下では高尾向山遺跡を始めとし特に近年、愛野向山Ⅱ遺跡、山下遺跡、下滝遺跡、団子塚遺跡など巨大方形周溝墓群の発掘調査が進んできており、発掘調査の精度の問題もあろうがどの方形周溝墓にも周溝内埋葬の痕跡が確認される例は少なく、むしろ単独埋葬のものが多いのを実状である。とするならば、春成氏や都出氏が主張する畿内の方形周溝墓で認められる家族墓の原理は、はたしてどの程度東海～関東にまで浸透しているといえるのだろうか。

ここで、寺沢薫氏の意見（寺沢薫 1990）に耳を傾けてみたい。寺沢氏は畿内の方形周溝墓の「新たな造墓活動は前家長の死に伴って新家長の家長権の継承に際してなされた」と考え、「夫婦並列埋葬が少なからず指摘されている以上、一般論として妻が夫より後に死ぬとは限らないから、家長の没後の造墓では不合理」とされ、「一般的な成人埋葬施設の数が2～4を越えることは少ない点から判断して多くは家長とその直系家族者で構成されることを原則とし、叔父、兄弟などの傍系者は新たに家長として傍系家族を編成し、付随的な方形墓域を給された」と考えている。ここで注目されるのは方形周溝墓の築造が旧家長の死に際して家長権の継承に伴って発生すると主張されたことである。おそらく、高尾向山遺跡S X14の大形方形周溝墓については墳丘内では単独埋葬を採用すること、あるいは関東で中期後半段階に出現する折本西原遺跡（折本西原遺跡調査会 1988）、大崎台遺跡（大崎台遺跡調査会 1987）の大形方形周溝墓が単独埋葬であることに端的に現れている通り、東海～関東の方形周溝墓は夫婦埋葬の原理より家長権の継承という側面が強く現れてきていると思われるのである。すなわち、遠江では中期後半には大形方形周溝墓が出現するが、多数埋葬の大形方形周溝墓は今のところ確認されていない。ただし、愛野向山Ⅱ遺跡C地区において中期後半の多数埋葬の小形方形周溝墓が発見された。よって、遠江では中期後半で大形方形周溝墓に多数埋葬がなされ、家長を含めた夫婦埋葬や家族埋葬の原理が採用されるものも出現したと思われる。また、後期前半段階でも高尾向山遺跡の多数埋葬方形周溝墓群や新豊院山C地点1号墓などでみられるように、ごく一部の集団に採用されていることがわかる。これに対して、駿河・伊豆ではいまだ多数埋葬の大形方形周溝墓の実例はないので畿内的な家族埋葬はついに出現しなかった可能性も指摘できる。

尾張・三河地域ではⅡ～Ⅳ期にかけて大形方形周溝墓が築造された朝日遺跡の状況が気になるが、埋葬主体部が確認されていないのでなんともいえないのが現状である。わずかにⅢ期（貝田町式）に該当するS Z111の小形方形周溝墓で仰臥屈肢葬の人骨が確認された中央主体部の木棺2基と伸展葬の人骨が確認された土坑主体A類？（報告書では木棺の可能性が指摘されている。）、墳丘内から土器棺1基の4基の主体部が見つかった（愛知県埋蔵文化財センター 1991）。推測ではあるが小形の方形周溝墓であるS Z111において4基もの埋葬主体が確認され、土器棺も墳丘内に埋葬されるという極めて畿内的な在り方をしているので、尾張地域では朝日遺跡に限ったことかも知れないが、Ⅱ～Ⅲ期段階において畿内的な夫婦埋葬を主にした家族墓としての性格づけがしうる方形周溝墓が伝播していた可能性が指摘しうる。三河地域では朝日遺跡のような多数埋葬の方形周溝墓は今だ調査例はなく、遠江と類似した状況であったと予想しておきたい。

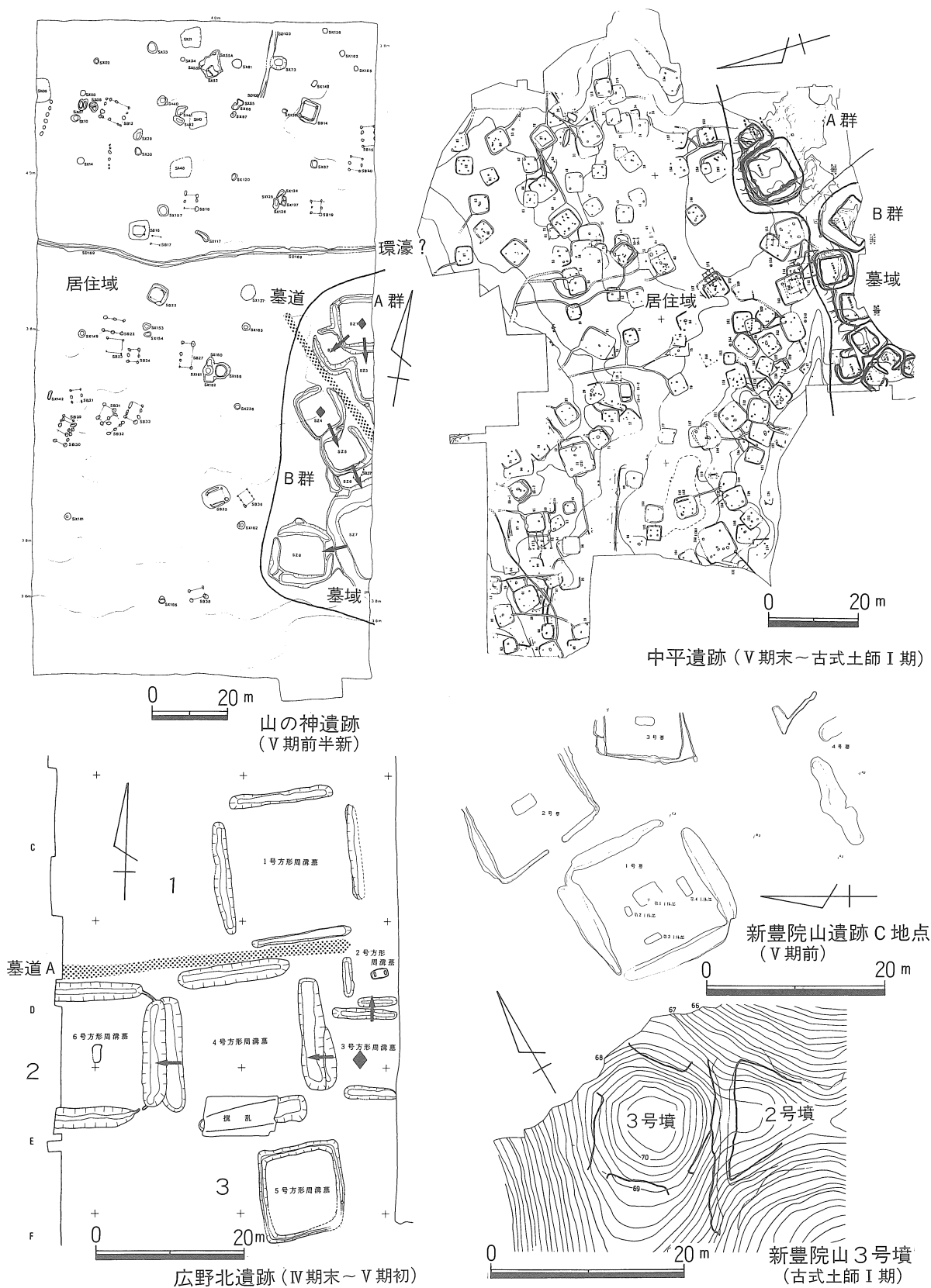
iii) 静岡県下における後期方形周溝墓群と居住域について

さて、高尾向山遺跡で確認された同一方形周溝墓での、A・B単位群ごとの有力方形周溝墓あるい

は大方方形周溝墓の埋葬主体部数の違い、あるいは種類の違いについてはいかなる要因が絡んでいるのだろうか。おそらく、集落との関連で考察するしかないと思われ、次に静岡県下の墓域と居住域の判明した調査例を参考にしつつ考察を進めたい。静岡県内の後期方形周溝墓群のうち群構成や居住域との関連がある程度把握できる例を第152図～第153図に示した。すなわち浜松市山の神遺跡（浜松市教育委員会 1989）、浜松市中平遺跡（浜松市教育委員会 1982）、広野北遺跡（豊田町教育委員会 1985）、新豊院山遺跡C地点（磐田市教育委員会 1980）、袋井市愛野向山Ⅱ遺跡（松井一明他 1987）、掛川市八景山遺跡（静岡県 1990）、富士川町中野遺跡（富士川町教育委員会他 1984）、沼津市二本松遺跡（瀬川裕市郎他 1987）、韭山町宮原遺跡（静岡県教育委員会 1970）がある。まず高尾向山方形周溝墓群の集落分析を行った後に、これらの遺跡との比較検討を試みたい。

高尾向山方形周溝墓群の被葬者層が居住したと思われる集落遺跡は、第2章で述べたように至近距離の団子塚遺跡あるいは北原遺跡を含んだ範囲の遺跡であることはほぼ間違いないだろう。第150図および第151図に示した通り、団子塚遺跡のD点・F地点、北原遺跡などで後期の居住域が発見されている。いずれも部分調査であるが、集落内容・性格は把握できる状況である。報告書ですでに柴田稔氏が指摘しているごとく、団子塚遺跡D地点では掘り方が大きな掘立柱建物が数多く検出されるという当地域では弥生時代後期集落としては特異な集落構造を示すのに対して、団子塚遺跡F地点や北原遺跡では掘立柱建物よりも竪穴住居の軒数が多く、竪穴住居数棟に対し掘立柱建物が1棟伴うごく一般的な弥生時代後期の集落構造を示している。倉庫ともくされる掘立柱建物の占有率の高い集落が有力集落になるとの前提（松井一明 1995）にたつと、団子塚遺跡D地点に居住した集団の優位性が団子塚遺跡F地点、北原遺跡との集落構造の比較の中で際立ってこよう。すなわち、この集落構造のうえで優位性をもつ団子塚遺跡D地点の居住域の住民こそ、高尾向山方形周溝墓群のうち優位性をもつA群に葬られた人々ではなかったかと思われるのである。一方団子塚遺跡F地点や北原遺跡の住民は、B群の方形周溝墓に葬られたものと考えられる。ただし、有力方形周溝墓に葬られた有力家族の具体的居住形態については、居住域が集落内に収まっていること以外明らかになっていない。

さて、団子塚・北原遺跡が居住域、高尾向山遺跡が墓域になる集落構造が正しいとするならば、この集落構造パターンは極めて中期的なものと言わざるをえない。静岡県下において中期方形周溝墓群が検出された遺跡を検討すると、墓域と居住域が隣接して発見された例はない。おそらく、丘陵上の集落では高尾向山遺跡のように谷を隔てた別丘陵、低地の集落の場合は異なる自然堤防あるいは近接した丘陵上に墓域を設定しているものと思われる。低地の異なる自然堤防上に墓域を設定する遺跡としては袋井市鶴松遺跡、静岡市有東遺跡、低地の居住域と丘陵上の墓域を組み合わせにするものとして山下・宇佐八幡境内遺跡（墓域）と不入斗遺跡（居住域）が俎上にあげられる。この中期的なややはなれた地点に居住域をもつと予測される後期遺跡をあげると、広野北遺跡、新豊院山遺跡C地点、二本松遺跡、宮原遺跡などがあげられる。広野北遺跡は中期末～後期初頭の方方形周溝墓群で、墓道復元から中期的な山下遺跡型の群構成を成すもので、隣接地には発掘調査の結果からみても居住域はなくおそらく近接した微高地に存在する広野遺跡が居住域と推定される。新豊院山遺跡C地点の方方形周溝墓は後期前半に該当し、群構成は瀬名遺跡型になるものである。とくに1号墓は2隅が突出するかなのような平面形態をなし、しかも主体部が4基もあり多数埋葬となる方形周溝墓である。出現時期も後期前半にあり高尾向山遺跡例とよく似ている。居住域は今のところ隣接地では発見されていない。方形周溝墓が立地する丘陵下の低地性遺跡の一つの墓域となるのだろうか。二本松遺跡は後期後半に該当し、検討の結果墓道と4つの小単位群が抽出でき、群構成は中期的な山下遺跡型をなしていた。居住域は隣接した谷を隔てた丘陵地上に立地する北神馬土手遺跡が有力視されている。宮原遺跡は後期



第152図 静岡県下の弥生時代後期方形周溝墓集成図1 (各報告書より一部加筆転載)

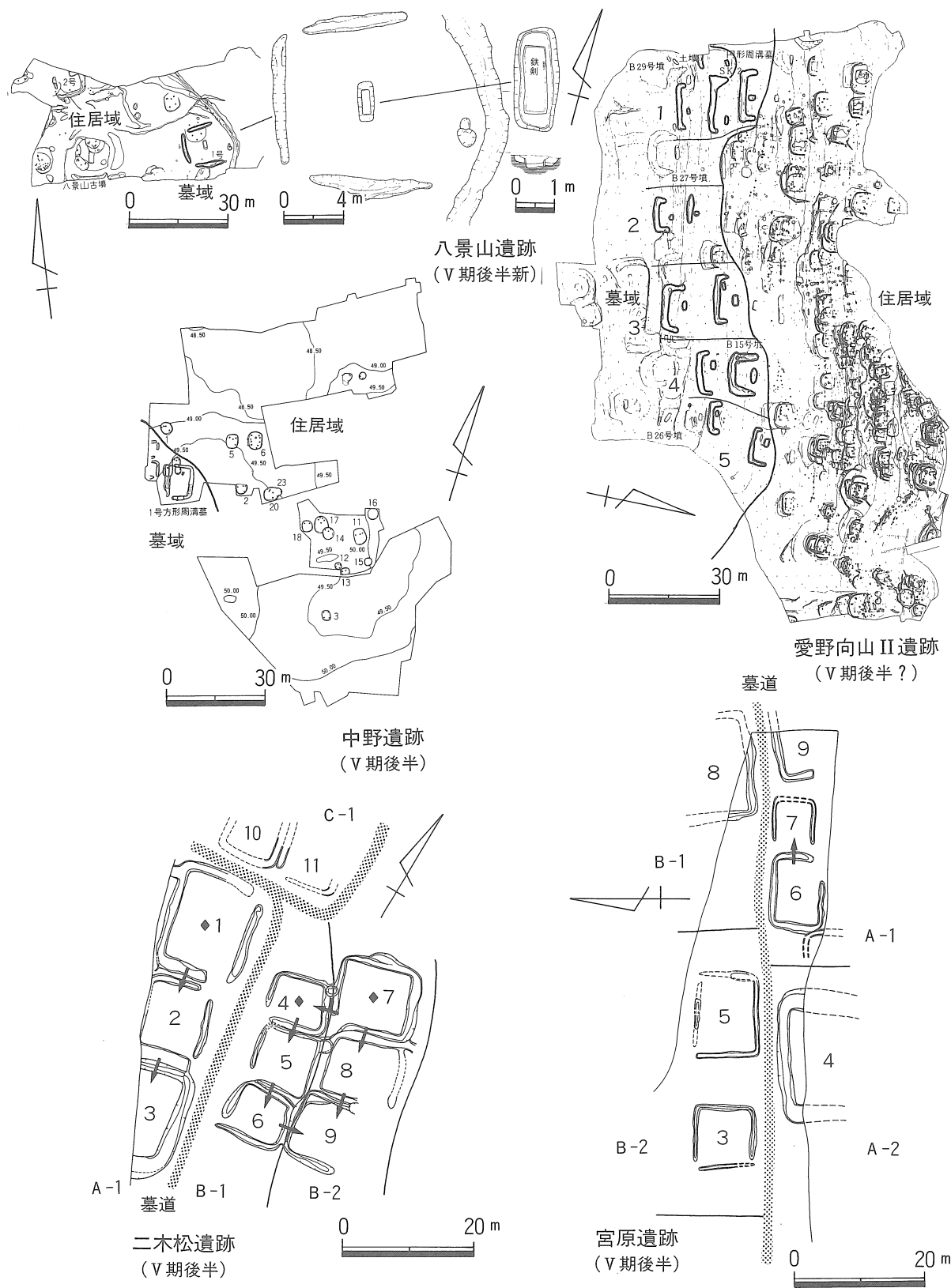
後半に該当し、検討の結果やはり中央に墓道が復元でき4つの小単位群が抽出される。A-1群を見るかぎり中期的な山下遺跡型の群構成になっており、4・8号墓は部分調査であるが中形方形周溝墓と見られ、この中形方形周溝墓を含む小単位群がはたして山下遺跡型の群構成をとるか興味深い。おそらく後期後半の中形方形周溝墓の確認された土手頭南遺跡（沼津市教育委員会 1984）で検討する限り、結合式で2基の方形周溝墓の小単位が形成されているため、山下遺跡型をとる可能性が高いと想定しておきたい。隣接地に居住域はなく、居住域と目される遺跡も付近には見当たらない。

以上、高尾向山遺跡と同様な中期的集落構造をもつ遺跡を分析してみたが、遠江と駿河・伊豆では時期的な差があることに気づく。すなわち、遠江では中期的集落構造は後期前半から始まる集落に限定されるのに対し、駿河・伊豆では今のところ後期後半から始まる集落にも中期的集落構造が見られるということである。では、遠江の後期後半の集落構造はどうなっているのだろうか。浜松市山の神遺跡・中平遺跡、袋井市愛野向山Ⅱ遺跡を典型例として紹介したい。

山の神遺跡は後期後半古段階から規模が拡大する低地性の集落で、第152図に示したとおり居住域と墓域が隣接している。方形周溝墓群は中央に墓道の復元できる中期以来の山下遺跡型の群構成となるが、平面形態は1箇所切れ形態に変化しており尾張・三河地域からの明らかな影響が伺われる。中平遺跡は後期後半新段階から古式土師器Ⅰ期までの短期間存続する丘陵性の集落で、第152図に示した通り居住域と墓域が隣接している。方形周溝墓群は丘陵の縁辺部に集中的に周溝を切り合いながら築造が続いているが、墓道を復元できる中期的な群構成とはなっていない。また、平面形態も周溝が全周するタイプのものが多く見られるようになり、一層尾張・三河地域からの影響が強まったことが看守される。また単位群の格差も大きく中平遺跡で見られたように中形方形周溝墓が明確な小単位群形成をしないことが注目され、弥生時代の方形周溝墓らしからぬ群構成を示している。

愛野向山Ⅱ遺跡は後期後半段階から始まり古式土師器Ⅰ期の直前段階で突如として廃絶される丘陵性の集落で、第153図に示した通り居住域と墓域は隣接している。方形周溝墓は4小単位群が抽出されるが墓道の復元ができるような中期的なものではない。B15号墳下から検出された他の方形周溝墓と比べると大きめのものが有力方形周溝墓と認定される。この方形周溝墓は単独埋葬で伸展葬の木棺が埋納された可能性が高いのに対して、他の方形周溝墓の木棺は掘り方規模からみて仰臥屈肢葬の木棺である。平面形態は丘陵斜面部に築造されているため山側の周溝しか確認されていないが、山側のみに周溝を巡らし斜面側は墳丘で視覚的に区画する特異な形態の方形周溝墓になると推定しているので、中期的な方形周溝墓の平面形態にはなっていない。おそらく高尾向山遺跡の斜面部に築造された方形周溝墓と類似し、平地に築造した場合、周溝は全周する形態の方形周溝墓となろう。

このように、遠江においては後期後半段階になると墓域と居住域の構造が一変すると理解される。おそらくこの状況は尾張・三河地域からの直接的な影響と考えられる。尾張・三河地域の墓域と居住域を示す良好な集落資料がないため確定的なことはいえないが、伊勢のⅤ期後半（欠山式）の集落である松坂市草山遺跡（榎本義譲 1988）の集落構造に類似しており、遠江での後期後半集落の変化が伊勢湾からの影響で成立したことを推測せしめる資料である。さてこの遠江で後期後半段階で確認された後期的な集落構造は、駿河・伊豆では採用されていないのだろうか。第153図に示した通り後期後半段階の集落である富士川町中野遺跡を検討すると、居住域と墓域が隣接していることがわかる。方形周溝墓はわずか3基しか確認されていないが、中期的な山下遺跡型の群構成にはならないと思われる。平面形態は宮原遺跡や二本松遺跡で確認されたように1～2箇所切れのタイプになり中期のものとは異なる。宮原遺跡、二本松遺跡、中野遺跡の方形周溝墓の時期認定が正しいならば、駿河・伊豆地域は宮原遺跡、二本松遺跡などの中期的な要素をまだ残す集落構造の遺跡と、中野遺跡のように



第153図 静岡県下の弥生時代後期方形周溝墓集成図2 (各報告書より一部加筆転載)

遠江の後期的集落構造の遺跡が混在して存在する地域といえるのである。

このように墓域と居住域の関係という視点に立って集落構造を分析してみると、墓域と居住域が明確に分離している中期的集落構造は遠江で後期前半段階、駿河・伊豆では後期後半段階まで存続していた可能性が高く、後期後半古段階（山中新段階）になると居住域と墓域が極めて接近した後期的集落構造が遠江に伝播するが、駿河・伊豆では中期と後期的集落構造が混在していたと考えられる。

iv) まとめ

高尾向山遺跡でえられた後期方形周溝墓の内包する諸問題は、東海～関東の弥生時代の社会構造を考えるうえで、基本となる家族構造を知るため非常に重要な問題点を投げ掛けてくれたと思われる。本報告書のまとめとして、高尾向山遺跡の方形周溝墓のもつ重要な問題点、すなわち、①四隅切れ形態の方形周溝墓が後期段階の関東や北陸といった東日本においてどのような展開を示すのか、②多数埋葬の畿内の方形周溝墓が関東・北陸で出現するのかの2点に絞って若干の課題点を提出し、今後の周溝墓研究の一助とし、まとめたい。

①の問題については近年関東地域で確認された後期～古式土師器Ⅰ期段階の四隅切れ形態の方形周溝墓について、管見で知りうる限りあげてみたい。神奈川県では横浜市殿屋敷遺跡（後期後半、群馬県考古学研究所他 1988）、東京都では北区御殿前遺跡（後期後半？、北区教育委員会 1988）、千葉県では市原市毛尻遺跡（後期後半、毛尻遺跡調査会 1983）・市原市根田遺跡（後期後半、群馬県考古学研究所他 1988）・袖ヶ浦町境遺跡（後期前半、君津郡市文化財センター 1985）、埼玉県では坂戸市柵遺跡（後期、群馬県考古学研究所他 1988）・坂戸市花影遺跡（後期後半、埼玉県遺跡調査会 1974）・坂戸市広面・中耕遺跡（後期後半～古式土師器Ⅰ期、埼玉県埋蔵文化財事業団 1990・1993）・東松山市駒掘遺跡（後期後半 埼玉県教育委員会 1974）・滑川町新井遺跡（後期後半、木村俊彦 1986）・大里村円山遺跡（後期後半、大里村 1990）、群馬県では高崎市鈴の宮遺跡（後期初頭？高崎市教育委員会 1978）・高崎市日高遺跡（後期前半、群馬県埋蔵文化財事業団 1982）・高崎市新保遺跡（後期前半、群馬県埋蔵文化財事業団 1982）・渋川市有馬遺跡（後期、群馬県埋蔵文化財事業団 1990）、吉井町川内遺跡（後期、群馬県考古学研究所他 1988）で確認されている。

南関東の場合、四隅切れ形態の方形周溝墓の築造時期は、境遺跡で後期前半、北関東では鈴の宮遺跡の後期初頭、新保遺跡の後期前半の例も見られるが、概ね後期後半の資料が多いようだ。分布の問題を考えてみると群馬県、埼玉県において比較時複数の遺跡で確認されているが、各県とも全県のエリアに分布するのではなく比較的集中する傾向が伺われる。すなわち、埼玉県だと荒川上流域の支流である入間川流域の坂戸市周辺、群馬県だと利根川上流域の高崎市～渋川市周辺である。さらに、東京湾沿岸部だと東京都の荒川下流域に位置する御殿前遺跡、あるいは横浜市殿屋敷遺跡や市原市毛尻遺跡など東京湾という海と荒川という河川を通じての遺跡間相互の交流関係が注目される。すなわち、後期後半荒川流域に中・東遠江の後期後半古段階の菊川式に類似した土器がある程度まとまって見られる現象が近年確認されつつある（東海埋蔵文化財研究会 1990）が、この現象と神奈川県東部域や東京都ばかりでなく埼玉県下でも後期後半段階において四隅切れ形態の方形周溝墓が採用されている動きと連動するのか、土器分布圏を越えた現象であるため慎重な手続きのいる検討課題となろう。

また、南関東地域では後期前半の方形周溝墓の状況が今一つかめない現状ではあるが、例えば袖ヶ浦町境遺跡でも居住域と墓域は接近してなさそうな状況であるため、これらの遺跡の集落構造が南関東における後期前半の集落構造として一般化しうるものならば、高尾向山遺跡と同様に中期的な様相をもつ集落が南関東でも後期前半に存在しているといえるのである。さらに、横浜市殿屋敷遺跡においては後期後半に該当する環濠集落と四隅切れ形態の方形周溝墓がやや離れた場所に存在するようで、

南関東でも中期的集落構造が後期後半まで続いていることを証明する資料となろう。よって、南関東では中期中葉以降の四隅切れ形態の方形周溝墓が後期前半を通じて後期後半まで地域的に残存している可能性もすてきれない。この点の検証から高尾向山遺跡で確認された墓域と居住域の占地にみる中期的様相の集落構造から後期的な様相の集落構造への変化が、小河川毎の小地域あるいは集落毎の差をもつのか、時期的な差が存在するのか解明することが今後の重要な問題点となってこよう。

群馬県での動きについても、例えば有馬遺跡で円形周溝墓と四隅切れ形態の方形周溝墓の2形態が併存して見られるが、主体部はどちらも高崎市周辺でしか見られない礫床主体部である。礫床主体部は木棺の底板の有無の問題はあるが基本的にはⅡ類木棺を採用する礫槨構造の主体部であり、報告書でも指摘されているとおり円形周溝墓とⅡ類木棺については、長野県の千曲川水系の篠ノ井遺跡群で発見された円形周溝墓などに代表される墓制との関連性が指摘できよう。しかしながら、長野県下では四隅切れ形態の方形周溝墓の発見はないため、高崎市周辺で見られる四隅切れ形態の方形周溝墓については、今のところ埼玉県坂戸市周辺からの伝播経路で捉えるしかないのである。異なる土器文化圏同士で同一の平面形態の周溝墓が採用されるという墓制面での繋がりが存在するならば、関東での弥生時代後期の社会的広域交流を考えるうえで大変興味深い現象である。

つぎに、②の多数埋葬の問題について検討してみたい。高尾向山遺跡で見られたような多数埋葬の方形周溝墓は、南関東においてまだ主体部の発見された例が少ないため明確に分析を進められる立場にはないが、現在管見で知りうる資料の中では皆無であると思われる。ある程度まとまって主体部の発見された南関東での中期方形周溝墓を念のため検討してみると、例えば横浜市権田原遺跡では中央埋葬主体部はほとんど1基埋葬（中期後半、横浜市埋蔵文化財センター 1990）、横浜市歳勝土遺跡でも1基埋葬（中期後半、横浜市埋蔵文化財調査委員会 1975）、東金市道庭遺跡でも1基埋葬（中期後半、東金市教育委員会 1983）、佐倉市寺崎向原遺跡でも1基埋葬（中期後半、佐倉市寺崎遺跡群調査会 1987）などの例が存在するので、溝内埋葬主体部や土器棺を除外するとほとんどが1基埋葬となる。これに対し2基埋葬という視点に絞れば後期段階にいくつか例をあげることができる。すなわち横浜市受地だいやま1号墓（奈良地区遺跡調査団 1986）、大原遺跡1号墓（横浜市埋蔵文化財センター 1990）などの2基埋葬がわずかに知られる程度である。とするならば、南関東では墳丘内埋葬は1基埋葬が基本で、後期段階にわずかに2基埋葬のものが出現する。言い換えれば、より畿内的な墳丘内の2基埋葬が後期段階に若干ではあるが導入された可能性も指摘しうるが、普遍化できるものか今後の検討課題であろう。

これに対して北関東のうち埼玉県においては、今のところ中期中葉～後期を通じて多数埋葬はおろか2基埋葬になるものも管見で知る限りでは皆無である。しかしながら、群馬県では先に紹介した有馬遺跡の礫床主体部をもつ円形周溝墓や四隅切れ形態の方形周溝墓は何れも多数埋葬形態になっている。同様の例は渋川市中村遺跡（渋川市教育委員会 1986）でも確認され、高崎市周辺で多数埋葬の周溝墓を形成しうる集団が存在した可能性を指摘しうる。人骨の分析からも礫床主体の埋葬遺体は成人以外の青年や10歳前後になる若年層も含まれることから、極めて畿内的な様相が伺われる。土器棺については特定の周溝墓の墳丘内に埋葬されず墓域の中で2群に別れて集中的に埋葬される傾向があり、一見高尾向山遺跡での在り方に類似する。しかし、土器棺は周溝墓と隔離した位置で群をなしていることから、さらに周溝墓と土器棺が遊離した状況と見てとれ、有馬遺跡の場合乳児や小児（4歳以下）埋葬については特定の家族に属しておらず、集落全体のなかでの埋葬管理をしたと考えざるをえない。よって、幼児埋葬について検討すると、完全に畿内的な家族社会になっているとはいえない状況だろう。

さて、有馬遺跡での多数埋葬形態は北関東・南関東を通じていかにも奇異な印象を受けざるを得ない。この辺りの解明には鉄剣や鉄釧、ガラス小玉などの玉類の副葬が、関東の弥生時代後期という段階からみて異常に多く副葬されていることが重要なヒントになると思われる。鉄剣・鉄釧については最近埼玉県下の東松山市周辺からも報告される例（宮島秀夫 1995）、東京湾～相模湾にかけて（中村倉司 1994）増加しつつあり、先に述べた四隅切れ形態の方形周溝墓の伝播ルートと同じく、埼玉県の入間川水系の集団と群馬県の高崎市周辺の集団の交流に関係した現象と捉えられないだろうか。おそらく、この地域の弥生時代後期集団は地理的要因ばかりでなく交易ルートの視点にたっても、南には荒川水系を通じて東京湾沿岸部に開かれた東海からのルート、北には千曲川水系を通じての善光寺平とさらには日本海ルート開かれた重要なポイントに属していると思われるのである。この集団が何らかの社会的に重要な役割、例えば推測ではあるが鉄剣などの鉄の交易ルート、玉などのガラス製品の交易ルートなどの関東・東海ばかりでなく北陸や東北までのびた物流の重要地点を押さえていた可能性も考えられ、多数埋葬の周溝墓出現の社会状況をここに見いだしたいと思うがいかなるものであろうか。いささか推論を重ね過ぎた仮説で多くの御批判を頂くかとは思いますが、周溝墓が提示した東海～南関東～北関東～善光寺平の交易ルートの問題は今後避けては通れない重要な検討課題になるとわれ、あえて問題提起しておきたいと思う。

つぎに北陸の状況を検討してみたい。福井県では坂井町長屋遺跡（後期末～古式土師器Ⅰ期、福井県教育庁埋蔵文化財センター 1976）、石川県では金沢市七ツ塚墓群（後期末～古式土師器Ⅰ期、石川県教育委員会 1976）・高松町中沼遺跡（後期？、群馬県考古学研究所他 1988）・松任市旭遺跡（後期末～古式土師器Ⅰ期、松任市教育委員会 1995）、富山県では小杉町南太閤山Ⅰ遺跡（後期後半、富山県教育委員会 1983・1984）・富山市杉谷遺跡（古式土師器Ⅰ期、富山市教育委員会 1975）・大門町布目沢北遺跡（後期？、富山県埋蔵文化財センター 1992）で確認されている。関東地域と同じくほとんど後期後半～古式土師器Ⅰ期の資料である。

前田清彦氏の研究によると（前田清彦 1993）北陸地域において方形周溝墓は中期段階には伝播してはいるものの、敦賀市吉河遺跡（Ⅲ期、福井県教育庁埋蔵文化財センター 1983）では1隅切れ形態、七尾市細口源田山遺跡（Ⅳ期、七尾市教育委員会 1982）では2隅切れと4隅切れの形態が混在して存在していることからわかる通り、必ずしも4隅切れ形態が普遍化しておらず、むしろ畿内的な四隅が繋がる傾向のあるものがより多く伝播している状況を示している。とするならば、後期後半にとくに四隅切れ形態の方形周溝墓が盛行する理由は、やはり最近とみに注目されてきている北陸型四隅突出型墳丘墓の成立と密接に関わっていると考えられるのではないだろうか。

近年発掘調査された福井県小羽山30号墓の発見により、山陰地域で中期後葉で成立した四隅突出型墳丘墓が、後期後半段階に北陸に伝播していることが判明したのである。北陸型四隅突出型墳丘墓と山陰の四隅突出型墳丘墓との決定的な違いは、すでに前田氏や古川氏が指摘しているように貼石を省略している点にある（古川登 1993、前田清彦 1995）。山陰の四隅突出墓はほとんど例外なく貼石もつタイプで、おそらく「石造りの墳墓」の特徴を強調しているのに対して、北陸型四隅突出型墳丘墓は「土造りの墳墓」でしかなく、両者の間には墳墓を視覚的に見た場合、大きな隔たりがあることを感じざるを得ない。すなわち、北陸型四隅突出型墳丘墓は大形の墳丘と四隅を入り口とする祭祀形態をもった墳墓としての理解がされ、「石造りの墳墓」としての理解にまで到達していないのではない。さらには、後期後半段階の山陰の首長層あるいは有力家族層が四隅突出型墳丘墓自身を政治権力のモニュメント位置付けていたと考えた場合に「石造りの墳墓」となるのは当然の帰結であったと思われるのに対し、北陸地域での首長層ないし有力家族層においては墳墓にそこまでの政治権力意義

を見いだしていたとは考えられないのである。また、すでに両氏の研究で明らかなように、庄内古段階の松任市一塚21号墓（旭遺跡群）、あるいは富山市杉谷4号墓では四隅の陸橋がより発達している状況に見られるごとく、本来の「石造りの墳墓」よりも四隅を入り口とする墳墓形態に力点を置いていたと理解され、この状況は墳丘上で行われていた祭祀形態の反映と考えざるをえないだろう。

さてここで、小羽山墳墓群でも小形の22～24号墓も四隅突出型を示し大形の26号や30号墓と共存し群集する状況があり、さらに松任市一塚墳墓群でも四隅突出墓と四隅切れ形態の小形方形周溝墓が併存している状況が注目される。このことから、大形の四隅突出型墳丘墓があたかも従属的な立場にたつ小形方形周溝墓にも祭祀形態の影響を与え、さらには四隅切れ形態の方形周溝墓の盛行を促したと考えられるのである。後期末～古式土師器Ⅰ期段階に築造された金沢市七つ塚墳墓群でも比較的大形の台状墓の周辺に四隅切れ形態の方形周溝墓が分布していることから、小羽山墳墓群、一塚墳墓群との構造比較が可能なものとなっている。こうして生まれた四隅切れ形態の方形周溝墓が、石川県・富山県でも最近発見されつつあるように、後期末～古式土師器Ⅰ期の段階で四隅突出型墳丘墓と切り離され四隅切れ形態の方形周溝墓をもって独自に墳墓群を形成した集団も出現したと考えたい。

北陸地域での多数埋葬の系譜はすでに古川氏が指摘しているごとく（古川登 1994）、やはり四隅突出型墳丘墓の伝播と密接に関わっていると思われる。山陰地域での四隅突出型墳丘墓の埋葬主体数は四隅突出型墳丘墓出現期（中期後葉）の広島県三次市宗祐池西墳墓でも3基見られ多数埋葬の系譜が四隅突出型墳丘墓出現期から存在していたことがわかる。後期前半でも岡山県鏡野町竹田8号墓の14基以上が最高で、1基埋葬は小形の部類に属する広島県庄原市田尻山1号墓のみが知られている（東森市良 1988）。北陸型四隅突出墓の成立時期である後期後半～古式土師器Ⅰ期では、島根県安来市仲仙寺10号墓で11基を最高に、1基埋葬は小羽山30号墓のみである。さて、大形四隅突出型墳丘墓としては例外的な1基埋葬の小羽山30号墓に対して、同じくほぼ同時期で同規模の小羽山26号墓は埋葬主体が5基検出され山陰地域と同じく多数埋葬になっている。高尾向山遺跡との比較で考えるならば、1基埋葬の小羽山30号墓のほうがより弥生時代中期的であると規定される。しかしながら、小羽山30号墓の主体部には玉類のほか鉄剣が副葬されていたのに対し、同26号墓中央棺には碧玉製管玉1点が副葬されているのみであるため、先に述べた楯築墳丘墓と同じく副葬品の内容から古川氏の指摘通り30号墓のほうが、他の家族構成員を排除したより首長墓の性格が強い墳墓として位置付けられよう。

小羽山26号墳で導入された多数埋葬の系譜は、小形の方形周溝墓にも影響を与えたと思われる。例えば七つ塚墳墓群の内大形台状墓が小羽山30号墓と同様に1基埋葬であるのに対し、周辺部に従属的に築造され続けた四隅切れ形態の小形方形周溝墓の主体部は1基のものも存在するが2～3基埋葬のものも同基数存在している。富山県の南太閤山墳墓群でも四隅切れの方形周溝墓群のうち、1基埋葬のものは少なく2基埋葬のものが卓越するようである。このように、北陸地域は吉河遺跡や細口源田山遺跡でみられた中期の1基埋葬から、北陸型四隅突出型墳丘墓とともに多数埋葬の原理、おそらく山陰の家族形態も発展的に導入されたものと考えたい。よって、高尾向山遺跡での多数埋葬の系譜は家族形態が畿内から尾張地域通じて発展的に伝播してきたことによるもの、四隅突出形態については従来より中期前葉に導入された四隅切れ形態の方形周溝墓から強調され出現したと考えられることから、一見似たような形態を示す北陸型四隅突出型墳丘墓と比較するとまったくの別系譜の墳墓と考えざるをえない。ただし、東海も北陸も中期段階において発見される方形周溝墓の数の隔たりは大きいもの（北陸が圧倒的に少ない）があるが、どちらも基本的には方形周溝墓需要地域である。よって、墓道と墳丘内に入出入りする入り口部の祭祀形態が強調される方形周溝墓という墓制が、すでに中期段

階に親しまれていた状況はまったく同じであったことが、「土造りの墳墓」である北陸型四隅突出型墳丘墓の成立の下地になったと推測することは許されるだろう。

以上のように、比較的高尾向山遺跡と関連が取りだされそうな関東と北陸地域に限って、四隅切れ形態の方形周溝墓、四隅突出型墳丘墓や多数埋葬の墳墓の系譜の検討を試みてみた。北陸地域ではほとんど関係を見いだせなかったが、関東では交易ルートと四隅切れの方形周溝墓の残存、多数埋葬の成立と関連づけて考えてみたがはたして、正しい歴史認識なのか極めて心もとない。各地域の周溝墓の研究の伸展に伴いご批評を受けられれば幸いである。また、本節の考察にあたっては冒頭に記した諸先生、諸兄には色々なご教示、資料の提供を受けながらも基礎手続きをとばして結論的内容になったことをあくまでも問題提起としてお許しを請うとともに、記して感謝の意を表したい。

【 参考文献 】

- 袋井市教育委員会 1982 『鶴松古墳群・機ヶ谷古墳群』
袋井市教育委員会他 1984 『山下遺跡』
袋井市教育委員会 1986 「愛野向山A 1号墓」『昭和60年度国庫補助事業発掘調査報告書』
袋井市教育委員会 1992 『宇佐八幡境内遺跡』
袋井市教育委員会 1992 『団子塚遺跡―遺構編―』
磐田市教育委員会 1980 『新豊院山遺跡（A-2・3地点）』
磐田市 1992 「権現山遺跡」『磐田市史―史料編1―』
掛川市教育委員会 1996 『原遺跡見学会資料』
浜松市教育委員会他 1982 『中平遺跡』
浜松市教育委員会他 1989 『浜松市山の神遺跡発掘調査報告書』
浜松市教育委員会 1991 『瓦屋西古墳群』
焼津市教育委員会 1984 『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』
焼津市教育委員会 1987 『道場田・小川城遺跡Ⅲ 宮之腰遺跡Ⅱ 道下遺跡』
沼津市教育委員会 1984 『土手頭南遺跡発掘調査報告書』
浅羽町教育委員会 1992 『団子塚遺跡（Ⅰ）』
豊田町教育委員会 1985 『広野北遺跡』
富士川町教育委員会他 1984 『中野遺跡―2・3次調査―』
静岡県教育委員会 1970 『田方郡韭山町奈古谷遺跡緊急調査概報』
静岡県 1990 「八景山遺跡」『静岡県史―資料編考古1―』
東海埋蔵文化財研究会 1993 『転機4号 東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』
愛知県埋蔵文化財センター 1991 『朝日遺跡Ⅰ』
愛知県埋蔵文化財センター 1992 『山中遺跡』
三重県教育委員会他 1970 『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』
福井県教育庁埋蔵文化財センター 1976 『長屋遺跡』
福井県教育庁埋蔵文化財センター 1984 『吉河遺跡第2次調査調査概報』
清水町教育委員会 1992 『小羽山古墳群調査中間報告』
石川県教育委員会 1976 『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』
七尾市教育委員会 1982 『細口源田山遺跡』
松任市教育委員会 1995 『旭遺跡群Ⅰ～Ⅲ』
富山県教育委員会 1983 『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要』
富山県教育委員会 1984 『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要（2）』
富山県埋蔵文化財センター 1992 『富山県埋蔵文化財センター年報―平成3年度―』
富山市教育委員会 1975 『富山市杉谷遺跡発掘調査報告書』
北区教育委員会 1988 『御殿前遺跡』
横浜市埋蔵文化財調査委員会 1975 『歳勝土遺跡』
横浜市埋蔵文化財センター 1990 『全遺跡調査概要』

- 東金市教育委員会 1983 『道庭遺跡』
- 佐倉市寺崎遺跡群調査会 1987 『寺崎遺跡群発掘調査報告書』
- 奈良地区遺跡調査団 1986 『奈良地区遺跡群発掘調査報告Ⅰ』上巻
- 折本西原遺跡調査会 1988 『折本西原遺跡Ⅰ』
- 毛尻遺跡調査会 1983 『千葉県市原市毛尻遺跡発掘調査報告書』
- 君津都市文化財センター 1985 『千葉県袖ヶ浦町境遺跡』
- 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1987 『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅲ』
- 埼玉県教育委員会 1974 『駒堀』
- 埼玉県教育委員会 1974 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ－南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影－』
- 埼玉県埋蔵文化財事業団 1990 『広面遺跡』
- 埼玉県埋蔵文化財事業団 1993 『中耕遺跡』
- 大里村 1990 『大里村－通史編－』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団他 1982 『日高遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団他 1982 『新保遺跡Ⅱ』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団他 1990 『有馬遺跡Ⅱ』
- 高崎市教育委員会 1978 『鈴の宮遺跡』
- 渋川市教育委員会 1986 『中村遺跡』
- 群馬県考古学研究所他 1988 『第9回三県シンポジウム東日本の弥生墓制』
- 大阪文化財センター 1980 『瓜生堂』
- 大阪文化財センター 1995 『巨摩・若江北遺跡』
- 高槻市教育委員会 1977 『安満遺跡発掘調査報告書－9地区の調査－』
- 豊中市教育委員会 1972 『勝部遺跡』
- 瓜生堂遺跡調査会 1981 『瓜生堂遺跡Ⅲ』
- 尼崎市教育委員会 1982 『田能遺跡発掘調査報告書』
- 楯築刊行会 1992 『楯築弥生墳丘墓の研究』
- 石黒立人 1991 「墓制について」『朝日遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター
- 伊藤敏行 1986 「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅰ」『研究論集Ⅳ』東京都埋蔵文化財センター
- 漆畑敏 1992 「方形周溝墓群－下滝遺跡群・矢海道遺跡・半田山G小支群の発掘－」『静岡の原像をさぐる！』
静岡県埋蔵文化財調査研究所他
- 榎本義讓 1988 「草山遺跡の小銅鐸」『考古学雑誌』73巻4号 日本考古学会
- 岸本一宏 1987 「畿内弥生社会構造に関する一考察」『横田健一先生古稀記念文化史論叢』
- 大村俊彦 1986 「滑川町新井・打越遺跡の調査」『第19回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 瀬川裕市郎他 1987 「二本松遺跡の土器と方形周溝墓」『沼津市歴史民俗資料館紀要』2 沼津市歴史民俗資料館
- 田中清美 1986 「大阪府大阪市加美遺跡の調査」『日本考古学年報』37 日本考古学協会
- 寺沢薫 1990 「青銅器の副葬と王墓の形成」『古代学研究』121 古代学研究会
- 都出比呂志 1984 「農耕社会の形成」『日本歴史1 原始・古代』東京大学出版会
- 都出比呂志 1986 「墳墓」『日本考古学4 集落と祭祀』岩波書店
- 中村倉司 1994 「権力の象徴「鉄剣」」『検証関東の弥生文化』埼玉県立博物館
- 羽二生保 1988 「土器棺墓について」『十王山砦跡発掘調査報告書・善千鳥遺跡確認調査報告書』森町教育委員会
- 東森市良 1988 『四隅突出型墳丘墓』ニュー・サイエンス社
- 福永伸哉 1985 「弥生時代の本棺墓と社会」『考古学研究』32巻1号 考古学研究会
- 古川登 1993 「北陸地方の四隅突出型墳丘墓について」『島根考古学会誌』10 島根考古学会
- 古川登 1994 「福井県丹生郡清水町小羽山墳墓群」『日本考古学年報』46 日本考古学協会
- 春成秀爾 1985 「弥生時代畿内の親族構成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第5集 国立歴史民俗博物館
- 前田清彦 1993 「方形周溝墓平面形態考」『古代文化』43巻8号 古代学協会
- 前田清彦 1995 「四隅突出型墳墓と北陸弥生墓制」『旭遺跡群Ⅲ』松任市教育委員会
- 松井一明他 1987 「静岡県愛野向山遺跡」『日本考古学年報』38 日本考古学協会
- 松井一明 1992 「静岡県下における中期方形周溝墓の出現過程について」『宇佐八幡境内遺跡』袋井市教育委員会
- 松井一明 1994 「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開について」『向坂鋼二先生還暦記念論集 地域と考古学』
- 松井一明 1995 「古墳時代の掘立柱建物について」『古墳時代の集落－収録集－』静岡県考古学会
- 宮島秀夫他 1995 「銅釧・鉄剣出土の方形周溝墓」『比企丘陵』創刊号 比企丘陵文化研究会
- 向坂鋼二 1990 「静岡県下の土器棺」『静岡県博物館協会研究紀要』第13号 静岡県博物館協会

第2節 高尾向山遺跡の横穴式木室墳について

i) はじめに

高尾向山遺跡で検出しえた横穴式木室については遠江において近年資料が増加しつつあるもので、県内研究者でもある柴田稔氏（柴田稔 1983）や鈴木敏則氏（鈴木敏則 1991）らにより精力的で広範囲な研究が進められてきている。よって、本節では横穴式木室と横穴式石室や横穴といった追葬可能な主体部をもつ主体部内祭祀との比較検討を試み、また近年白澤崇氏より提示のあった首長墓の分布と交通ルートとの関連、遠江における横穴式木室墳出現の政治的背景、および被葬者層の性格づけについて小考察を試みてみたい。

ii) 横穴式木室墳の構造

磐田原東南部古墳群および袋井市・浅羽町で見つかった横穴式木室について、第155図に床石や遺物の出土位置から木棺の位置を推定復元してみた。すると、大きく2棺埋葬できる高尾向山7号墳、権現山2・3号墳（柴田稔 1983）、屋敷山1号墳（柴田稔 1983）とそれ以外の1棺埋葬しかできないものにとわけられた。木室は粘土で補強しているとはいえ木質部分が腐食すると、石室や横穴とは異なり耐用年限が非常に短い致命的な構造的をもっている点を重視すると、当初から多数の被葬者の追葬を考えている構造とは思えない。また、1棺埋葬のものを検討すると団子塚10号墳（袋井市教育委員会 1992）、北山3・4号墳（浅羽町教育委員会 1987）、明ヶ島10号墳（柴田稔 1983）など棟持柱が障害になって、追葬どころか玄室内に玄門から木棺を入れることができたかどうかすら疑問なものもある。2棺埋葬の高尾向山7号墳、権現山2・3号墳は棟持柱が玄門部中央になく入り口が確保されている構造と見てとれ、1棺埋葬と2棺埋葬のものは基本的に棟持柱の位置が異なっていることがわかる。しかしながら、2棺埋葬のものもおそらく木室の耐用年限を考えると、極めて年齢層の接近した人間関係、例えば夫婦ないし兄弟などの埋葬形態が考えられる。よって、横穴式木室は横穴式石室や横穴のような多数の被葬者を埋葬できる墓制とは異なり、1体ないし2体程度の年齢層が接近した小数の被葬者を対象としていたことが看守され、同じ横穴系の主体部に見えるが実は被葬者層の性格は全く異なっていたと思われる。関連性はないと思うが、むしろ6世紀中葉以前当地域で一般的に築造される木棺直葬墳の主体部が、1棺ないし2棺のものが見られるのに類似している。

つぎに被葬者の性格を知るうえで、副葬品の在り方を検討してみたい。盗掘を受けているものもあるが、木室が自然に腐食し壊れていくため埋没時期が格段に古くなり盗掘を受け難いことと、追葬が少ないため、横穴式石室や横穴と比べると副葬品の組み合わせを知るうえでは条件が良い。すでに横穴群で分析した方法（袋井市教育委員会 1996）に準じて直刀を保有するものとししないものにまず分類してみると、北山1・2号墳、権現山2・3号墳、屋敷山1号墳で直刀の副葬が見られるが、とくに直刀を副葬するものが多いという結論にはならない。また、権現山2号墳では素環の鏡板付轡が出土しているが、これも特別優秀な副葬品といえるものではない。土器類の副葬状態を検討してみても、横穴式石室や横穴でも確認されるのと同様に木棺付近での瓶類や埴、甕などの水容器類の器を見いだすことができ、横穴式石室や横穴の初葬状態を見事に残していると考えられる。高尾向山7号墳の墓前域である周溝から出土須恵器にも若干の時間差があったものの1型式に満たないもので、2棺目の追葬に際して墓前祭祀に使われたものか、あるいは2棺埋葬後に一定期間置かれた時点で実施された墓前祭祀に使用されたものかのいずれかであろう。このように横穴式木室の副葬品の在り方は、特に横穴式石室や横穴の在り方とは大きく異なることはなく、1棺埋葬ないし2棺埋葬が証明できるのがせいぜいである。



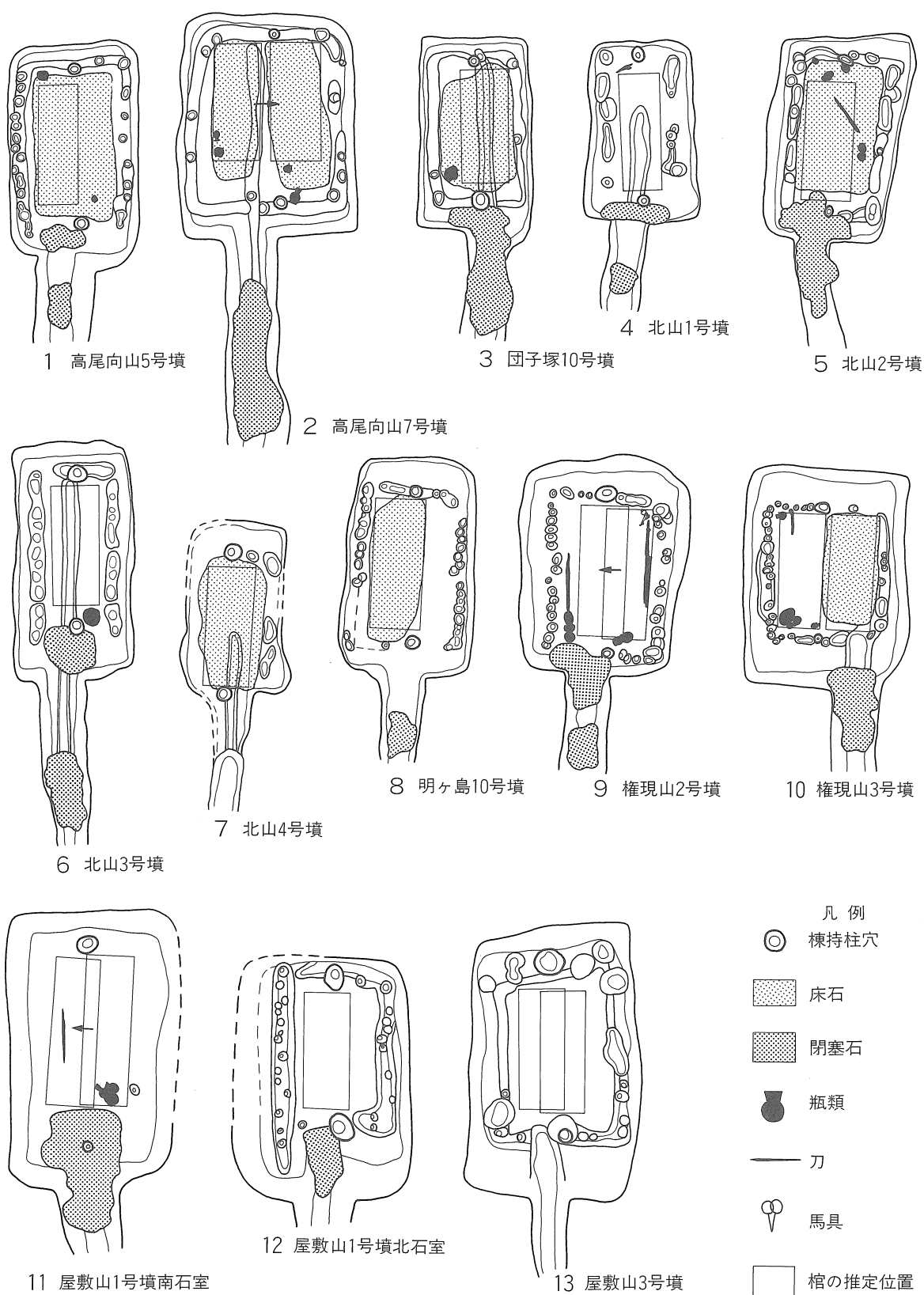
第154図 高尾向山遺跡周辺の古墳時代遺跡分布図

次に墳丘について検討してみたい。中遠江では権現山2号墳が全長18mの小形前方後円墳、屋敷山1号墳も全長17mの小形前方後円墳、堀ノ内13号墳は最大径25mの円墳（前田庄一 1992）で首長墓クラス、その他の古墳については径10m前後を測る後期群集墳のなかではやや大きいクラスのものである。首長墓クラスのものも後期群集墳のなかに含まれるもので、はたして群集墳の盟主あるいは首長層になる古墳であるのかもわからないが、堀ノ内13号墳は鏡や金銅装の馬具の副葬がなされ、後期群集墳とは隔絶した首長墓としての位置付けをしよう。しかし、ほぼ同時期に隣接地に造墓された宇洞ヶ谷横穴の副葬品内容（静岡県教育委員会 1971）は堀ノ内13号墳を凌駕するものがあり、山麓山横穴（静岡県教育委員会 1983）を含めたうえでの横穴首長墓に従属するような首長墓である。

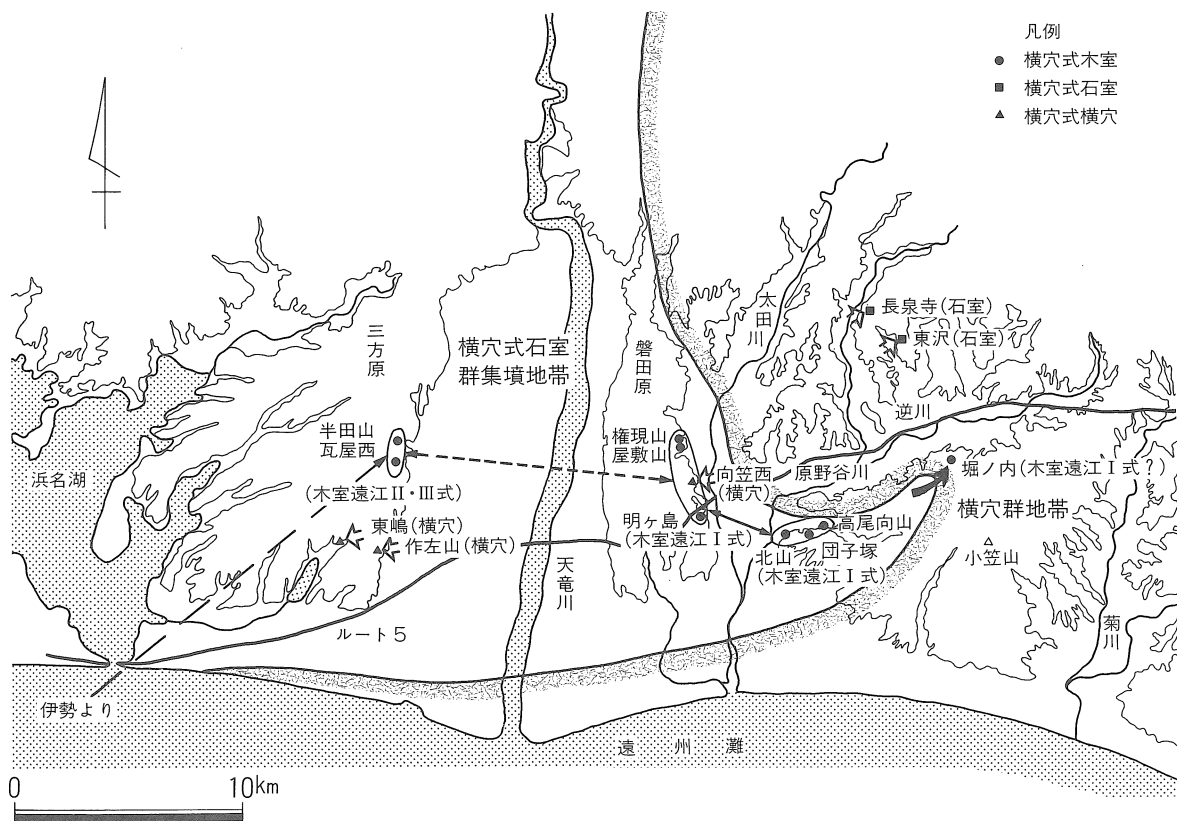
墳丘規模や副葬品の内容でみるかぎり堀ノ内13号墳の首長墓的色彩の強いものから、小形前方後円墳のように群集墳の中でも首長墓的な墳形を採用するが、副葬品の内容はせいぜい直刀や鉄製馬具をもつ程度の後期群集墳のなかでも上位クラスにしかかなりえないもの、墳丘は後期群集墳のなかでも大きい部類に属する円墳にはなるが副葬品の内容は何ら変わらないものなど多種多様のランク付けができそうな被葬者層に受容されたものであろう。また、堀ノ内13号墳の場合は周囲に横穴の首長墓とそれに従属する小形の横穴群が存在し、団子塚10号墳・高尾向山古墳群・北山古墳群の場合も付近に馬具など顕著にもつ後期群集墳というには優勢な横穴式石室をもつ団子塚古墳群が存在し、明ヶ島10号墳・権現山古墳群・屋敷山古墳群の場合も付近に明ヶ島1・4号墳など横穴式石室と思われる銅鏡や金銅装の飾り金具などが出土した首長墓的な古墳を含む優勢な明ヶ島古墳群が存在してる。また注目される現象として、団子塚古墳群では6世紀中葉に直径26mの円墳で金銅装の馬具や銅鏡の副葬品をもつ大門大塚古墳（袋井市教育委員会 1987）、明ヶ島古墳群では6世紀前半に直径26mの円墳で墳丘に埴輪をもち金銅装の馬具や銅鏡の副葬品をもつ甕塚古墳（磐田市史編さん委員会 1992）が隣接地域に築造されており、横穴式木室墳出現の直前段階に優勢な首長墓が存在している地域であることが指摘しうる。とするならば、横穴式木室墳の出現を考えるうえで周辺部での首長墓の存在、それに後続する優勢な横穴式石室の古墳群や横穴群の存在が重要な要因として注目される。

高尾向山古墳群での横穴式木室の玄室形態は天井が尖頭形になる合掌式で、鈴木氏分類遠江Ⅰ型（鈴木 1991）となる。遠江Ⅰ型の分布域は第156図に示した通り磐田原東南部古墳群と袋井市・浅羽町の団子塚古墳群周辺部の狭い地域と、横穴群地帯の真っただ中に孤立して存在する掛川市堀ノ内13号墳で確認されている。これに対して、同じ遠江でも三方原の半田山古墳群や瓦屋西古墳群での状況はどうであろうか。最古の横穴式木室は全長28mの前方後円墳である瓦屋西B3号墳（浜松市教育委員会 1991）、全長23mの前方後円墳である瓦屋西C5号墳（浜松市文化協会 1991）、全長21mの前方後円墳である半田山B4号墳（浜松市博物館 1971）の3基が知られ、遠江須恵器編年ではⅡ期ないしⅢ期前半段階に築造された古墳である。木室の型式は瓦屋西B3号墳が箱形形態の鈴木分類遠江Ⅲ式？、瓦屋西C5号墳・半田山B4号墳は棟持柱なしの合掌式形態の鈴木氏分類遠江Ⅱ式である。遠江の木室の編年は鈴木氏がすでに試みているように、箱形の鈴木氏分類遠江Ⅲ式がより古い古墳で採用され、それが三重県の伊勢における横穴式木室からの系譜がたどれるのだろう。さらに遠江において遠江Ⅲ式として導入された横穴式木室は、伝播と同時に西遠江では鈴木氏分類遠江Ⅱ型、少しおいて中遠江で遠江Ⅰ型の地域色をもった省略型の横穴式木室が出現したものと考えられる。

三方原での横穴式木室墳の墳丘規模や副葬品の内容はどうであろうか。まず、堀ノ内13号墳のような首長墓的色彩の強いものは存在しない。瓦屋西B3号墳・瓦屋西C5号墳・半田山B4号墳の小形前方後円墳については、中遠江同様に群集墳の中でも首長墓的な墳形を採用するが副葬品の内容はせいぜい直刀をもつ程度の後期群集墳のなかでも上位クラスにしかかなりえないものである。その他の円



第155図 高尾向山遺跡周辺古墳・磐田原の横穴式木室概念図（各報告書を基に作成）



第156図 遠江の後期群集墳・横穴群と横穴式木室墳分布概念図

墳は墳丘が後期群集墳のなかでも大きい部類に属し、瓦屋C25号墳のように鉄製馬具、瓦屋西C10号墳のように鹿角装の直刀をもつものが含まれ、やや上位ランクになる後期群集墳の内容を示しているものも含む。また、周辺部には甕塚古墳や大門大塚古墳などの首長墓の内容を示す古墳も存在していないことから、三方原の横穴式木室墳は磐田原東南部古墳群や袋井市・浅羽町団子塚古墳群周辺地域とは異なる政治的状況下で成立している可能性が指摘しうる。ただし、横穴式木室の存在する古墳群は今のところ瓦屋西古墳群や半田山古墳群に限られ、横穴式石室の後期群集墳密集地帯のごく小地域で築造されていると理解され、この状況は磐田原東南部～袋井市・浅羽町地域のごく小地域に存在する状況と類似する。

iii) 遠江における横穴式木室墳の分布

遠江の後期古墳群の分布は第156図に示した通り、太田川以東は横穴群地域、太田川以西は横穴式石室の後期群集墳地帯に大きく別れている。その中でも高尾向山古墳群の存在する小笠沢川流域は、長者平古墳群・団子塚古墳群をはじめとし横穴式石室の一大後期群集墳地域となっており、横穴群地帯にあたかも楔が打ち込まれたような状況を示している。また、同様に横穴群地帯でも長泉寺古墳群や天段古墳群（掛川市教育委員会 1989）が存在し、横穴式石室の後期群集墳地帯でも磐田原東端の笠西横穴群（静岡県教育委員会 1983）や三方原の作左山横穴群（向坂鋼二 1976）、東嶋横穴群（静岡県教育委員会 1983）が存在しているが、いずれも小単位群規模の横穴式石室の後期群集墳あるいは横穴群であるため、小笠沢川流域の状況とは比較にはならない。

さて、横穴式木室墳を含んだ群集墳の狭い分布と小笠沢流域の横穴式石室の群集墳の在り方を説明するために、6世紀前～中葉の首長墓の分布状況に注目してみたい。この点については白澤崇氏がす

でに分析を試みている（白澤崇 1993）。白澤氏によると4世紀～5世紀前半の首長墓の分布から浜名湖北岸～磐田原東南部古墳群に至るルート（ルート1）が重視されていたのに対し、5世紀後半～6世紀中葉になると首長墓の分布から浜名湖南端～天竜川下流域～磐田原東南部古墳群に至る近世東海道にほぼ重なるルート（第156図中ルート5）が重視される変化が起り、この変化がすなわち奈良時代の官道である東海道の下地ともなる交通ルートの整備がなされた状況を示すと考察した。

たしかに5世紀後半以降埼玉県稲荷山古墳の鉄剣銘文に代表されるように、雄略朝以降の畿内政権が東国経営をより重視したという政治的变化に対応した交通網の整備、おそらく尾張・三河地域からの陸路ばかりでなく、畿内から見てより即効性の高い伊勢から海路で遠江に至るルートが重視されたと見たい。とするならば、6世紀後半の遠江における交通ルートも、6世紀中葉からのものをそのまま踏襲していた可能性が大だと考えらる。横穴式木室を含む後期古墳群の6世紀後半以降の対応集落は、半田山古墳群・瓦屋西古墳群の場合は天竜川下流域西岸の自然堤防上に展開する浜松市市野遺跡群・天王遺跡群・飯田遺跡群、磐田原東南部古墳群の場合は鎌田鋤影遺跡・長江崎遺跡などの集落群、袋井市・浅羽町の団子塚古墳群周辺地域の場合は掛之上遺跡・大門遺跡などが該当すると推定され、この集落群の分布と先に述べた小笠沢川流域の横穴式石室の後期群集墳の分布状況、堀ノ内13号墳の位置などをルート5にオーバーラップさせるとほぼ重なることがわかる。すなわち、大後期群集墳を築造した有力集落の発展は、ルート5と呼んだ交通ルートに大きく関わっていたと思われるのである。遠江での横穴式木室はおそらくその型式的変化から畿内～伊勢を通じて伝わってきた可能性が高く、この現象を捉えてもルート5の有効性が理解されるのである。また、堀ノ内古墳群を曾我国造に関連した墓所、明ヶ島古墳群付近を久努国造に関連した墓所と想定（松井一明 1966）し検討するならば、これら国造クラスが居住したであろう有力集落がこのルート5にのっている可能性も大きいと想定される。このように、横穴式木室墳は、後期古墳群・集落の分布の検討結果から、6世紀後半の遠江の重要な交通ルートにのった有力集落に居住していた人々の墓であったことが指摘しうるのである。

iv) まとめ

遠江の横穴式木室のもつ問題点を再度まとめると、①1棺ないし2棺埋葬が基本で多数の追葬が可能な横穴式石室や横穴とは基本的な構造が異なり、おそらくこのことは一般的後期群集墳あるいは横穴に対する考え方、家族構成の異なる集団が築造したものらしいこと。②墳丘や副葬品を比較すると中遠江では従属的な首長墓クラスのものから、小形前方後円墳の群集墳のなかの盟主層？、普通の円墳である一般構成員など多様な階層の被葬者層の姿、西遠江では首長墓クラスのものではなく小形前方後円墳の群集墳の中でも盟主層？と思われる被葬者層、やや優秀な副葬品をもつ円墳に葬られた被葬者層が存在すること。③集落を検討すると近世東海道の近い交通ルートにのった有力集落に被葬者たちが居住しており、おそらく畿内～伊勢と関連があった人々の可能性があったことの3点の問題点にまとめられた。

以上の3点の問題点から、横穴式木室の被葬者層の性格について若干の考察を試みまとめに代えたい。静岡県における横穴式木室の被葬者の性格づけには、柴田稔氏の横穴式石室や横穴の被葬者と同じ階層の渡来系氏族説、鈴木敏則氏の鍛冶技術を有した渡来系氏族説が展開され、両氏とも渡来系氏族築造説に傾いている。両氏ともすでに指摘していることだが、②の問題点で明らなように墳形や副葬品の内容で渡来系氏族、鍛冶技術を有することを証明する資料は存在しない。よって横穴式木室墳の被葬者集団は、今後の資料の増加をまたなければならない現状であり、①～③の問題点からも渡来系氏族であったかどうかはわからない。

ではどのような被葬者層の性格づけが可能性なのかさらに考察を加えたい。まず③の問題から考え

てみると、交通の要衝に存在する有力集落の住民層であることを考えると、鈴木氏が述べたごとく一般農民ではなく何らかの技術者集団の性格づけが可能かとも思われる。この点を補強する問題点は①の問題点である。①の問題点からは家長とその婦人あるいはその兄弟のみが埋葬される姿が彷彿され、通常の横穴式石室や横穴に葬られる一般農民層の墳墓ではないことは明らかであろう。

②の問題点からは中遠江おいての横穴式木室群は有力横穴式石室墳ないし首長墓級の横穴に従属するような例も知られているため、集落を統括していた階層に従属する集団の墓制にも見える。また、西遠江では群集墳の中でも古い築造の古墳のグループに属し、前方後円墳の横穴式木室墳より上位にランクづけされる首長墓が付近に存在しないうえ、通常の横穴式石室の古墳よりもやや優秀な副葬品をもつ円墳が存在するため、6世紀前半から横穴式木室墳の被葬者層が一般農民層より上位の階層に位置付けられていた可能性がある。すなわち、中遠江では6世紀前半～中葉において甕塚古墳あるいは大門大塚古墳を頂点とする有力首長が出現し、その配下に属する木棺直葬墳の集団が組織されていた極めて重層的な社会状況がすでに存在し（松井 1994）、6世紀後半になると畿内政権により政治的勢力を削がれはするが国造クラスの有力首長層の末裔集団のもとに、横穴式木室墳の被葬者層が畿内～伊勢よりルート5を通じて移り住み、ある種の技術者集団として組織されたことにより政治勢力を維持しようとしたと考えられはしないだろうか。西遠江では半田山古墳群・瓦屋西古墳群の周辺において今のところ中遠江に匹敵する首長墓は、ルート5からだいぶ遠距離のむしろ浜名湖北岸ルートであるルート1に属する全長30mの前方後円墳で金銅装馬具などの副葬品をもつ興覚寺後古墳（浜北市教育委員会 1989）しか見当たらないため、はたして瓦屋西B3号・C5号墳、半田山B4号墳の被葬者層が興覚寺後古墳のもと技術者集団として重層的に組織されていた状況とは思えない。おそらく、6世紀前半には政治的勢力を持っていなかった新興の瓦屋西古墳群・半田山古墳群を形成した一般農民層を、畿内～伊勢方面から移住してきたある種の技術者集団が指導的立場にあたりつつ組織化を図ったのではないかと推測しておきたい。その階層性は、中遠江の明ヶ島古墳群の被葬者層あるいは山麓山・宇洞ヶ谷横穴の被葬者層と比べるとかなり低いランクに属していたと思われ、このクラスの人々を首長層と呼ぶことには躊躇する。そこに移住してきた原因については、今のところ畿内から見て東国の入り口に当たる遠江を畿内政権が重視した結果起こった移住現象と考えたいが、推測の域をでるものではない。

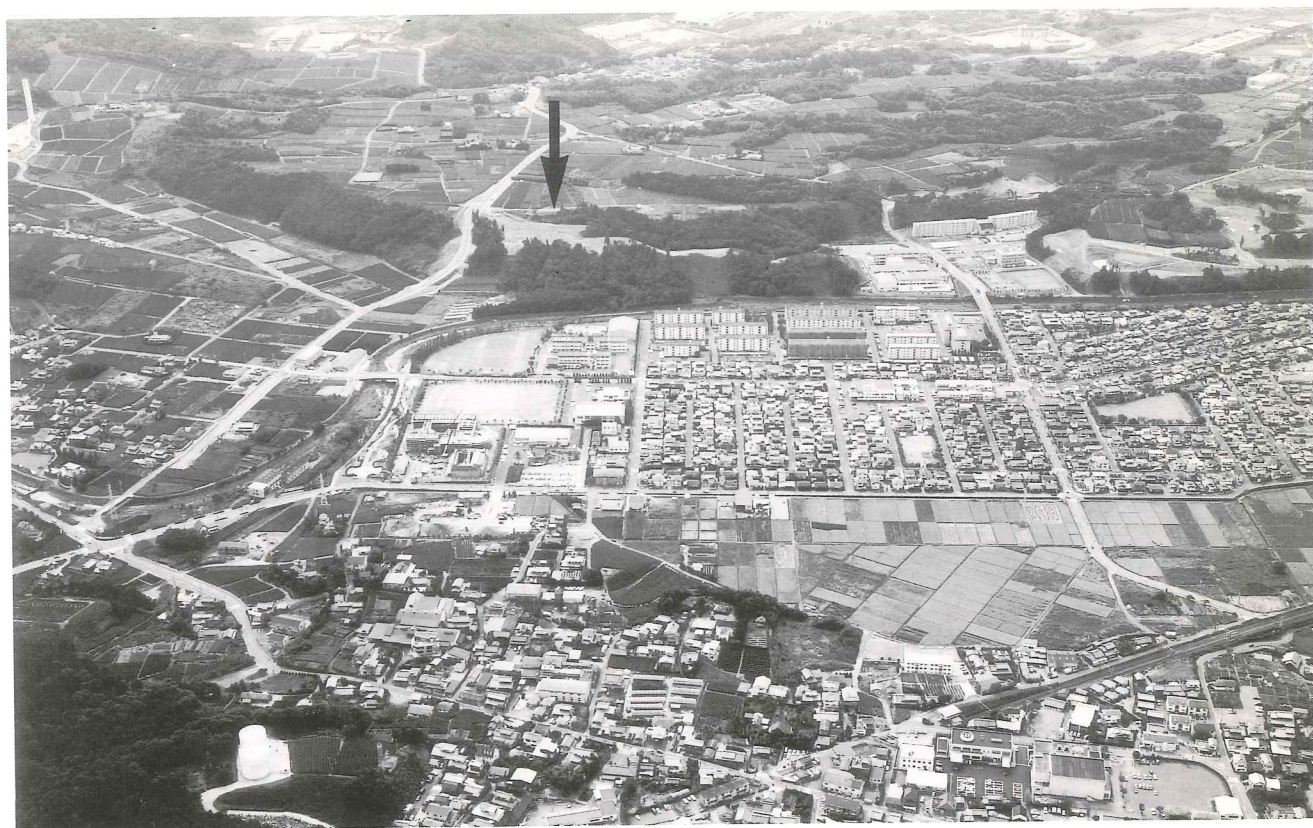
以上のように横穴式木室墳の被葬者層の性格づけを試みたが、副葬品の内容からは鈴木氏や柴田氏の説と同じく明確な根拠をもてないので、技術者集団の具体的な職種まで規定することはできない。よって、技術者集団という性格づけが適当であるかどうか説得材料をもたないが、一般農民と同じ経済基盤にあった人々の墓制とは到底思えない。また、渡来系の人々であったという説に対しても現状では肯定・否定材料ともに提示できないので、現時点では畿内ないし伊勢からの移住者という視点で考えてみたが、これとてもさして確証のあるものではない。鈴木氏が述べたように今後の資料増加に期待するしかないだろう。

最後になったが、横穴式木室墳についてはその用語の問題に始まり被葬者の性格の問題まで、柴田稔氏には色々ご教示を賜わった。ご教示を十分に理解していない内容になってしまった可能性が高いと思われるがご容赦願ひ、とくにここで感謝の意を表したい。

【 参考文献 】

- 袋井市教育委員会 1987 『大門大塚古墳』
袋井市教育委員会 1992 『冢子塚遺跡－遺構編－』
袋井市教育委員会 1996 『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ』
磐田市 1992 「甕塚古墳」『磐田市史－史料編Ⅰ－』
掛川市教育委員会 1989 『天段古墳群・東沢遺跡』
浜松市博物館 1971 『浜松市半田山古墳群（B群）調査記録』
浜松市教育委員会 1991 『瓦屋西古墳群』
浜松市文化協会 1991 『有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』上巻
浜北市教育委員会 1989 『浜北市北麓古墳群』
浅羽町教育委員会 1987 『北山遺跡』
静岡県教育委員会 1971 『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書』
静岡県教育委員会 1983 『遠江の横穴』
柴田稔 1983 「横穴式木芯粘土室の基礎的研究」『考古学雑誌』68巻4号 日本考古学会
白澤崇 1993 「川会坊主山古墳と大門大塚古墳出現の背景」『袋井の前方後円墳』袋井市教育委員会
鈴木敏則 1991 「横穴式木室雑考」『三河考古』4号 三河考古刊行会
前田庄一 1992 「曾我氏一族の墓所？発見－堀ノ内古墳群－」『静岡の原像をさぐる！』静岡県埋蔵文化財調査研究所他
松井一明 1994 「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開について」『向坂鋼二先生還暦記念論集 地域と考古学』
松井一明 1996 「原野谷川中流域における初期群集落の終末と後期群集落墳（横穴群）の成立について」『金山古墳群・金山古墳群Ⅰ・Ⅱ』袋井市教育委員会
向坂鋼二 1976 「浜松市動物園内作左山横穴群」『森町考古』10 森町考古学会

写 真 图 版



(1)遺跡遠景（中央住宅地が古笠西池跡、北より）



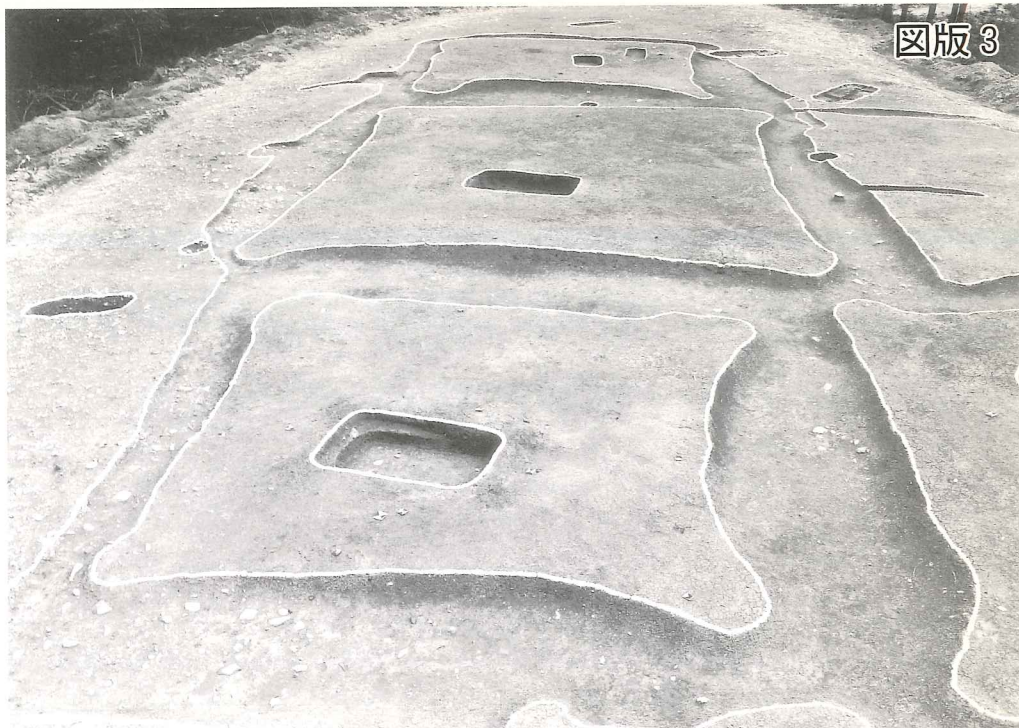
(2)遺跡全景（真上より）



(1)遺跡全景（北より）



(2)遺跡全景（東より）



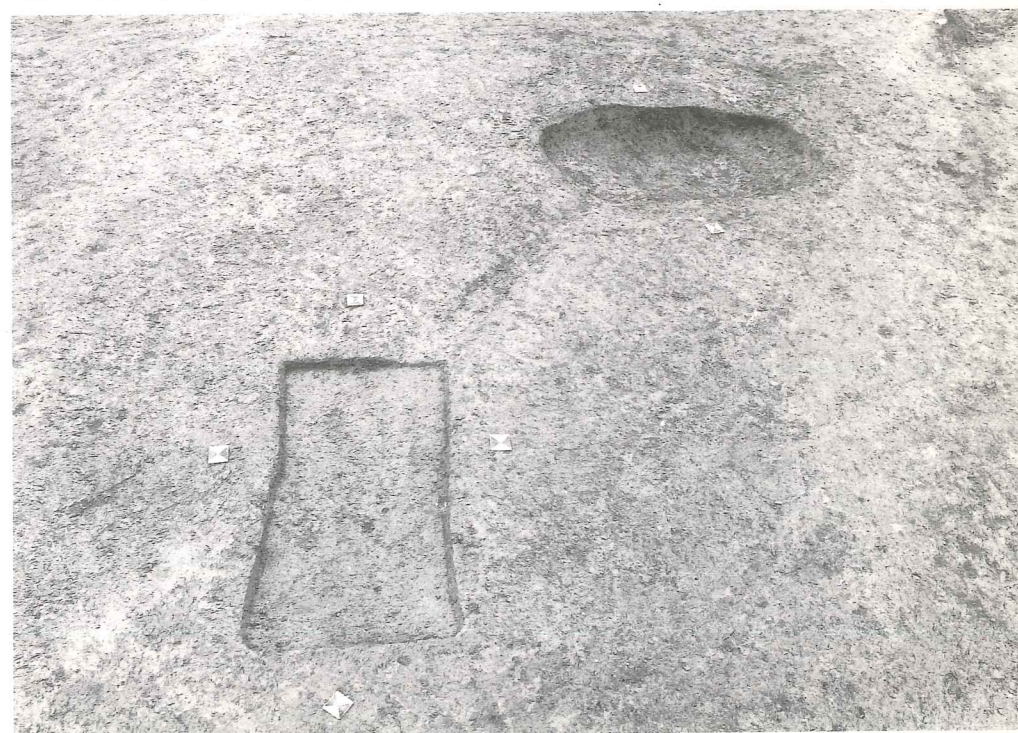
(1) S X 1・3・4 (東より)



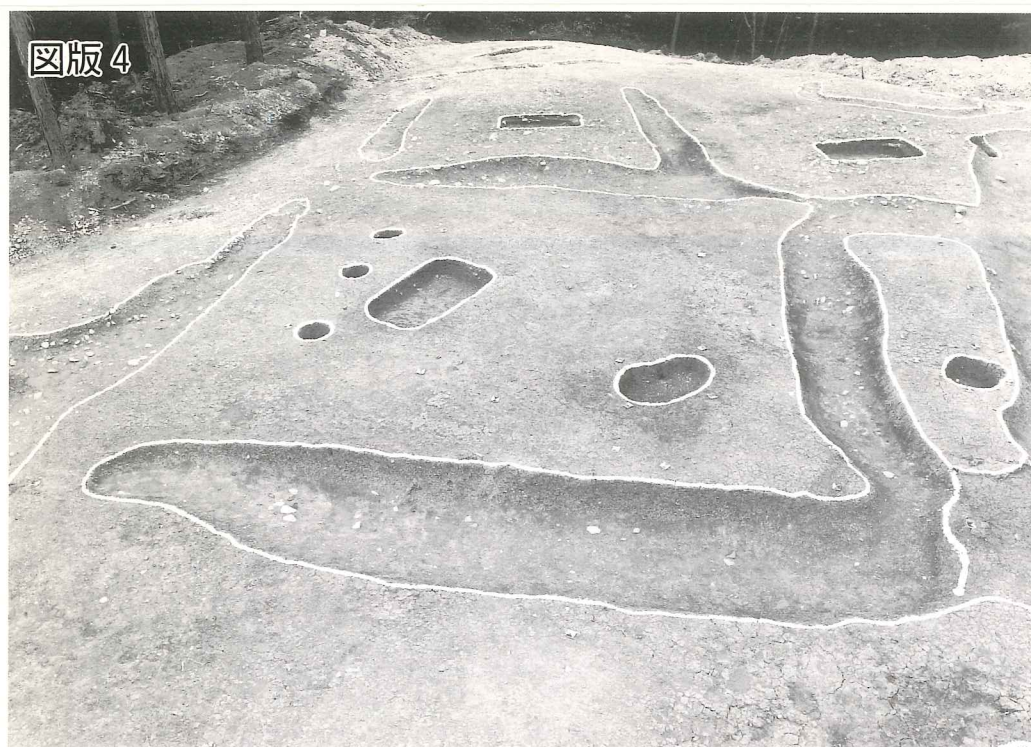
(2) S X 1 主体部 (棺上より
土器出土、東より)



(3) S X 3 主体部 (棺上より
礫出土、東より)



(4) S X 5 主体部 (木棺と土
坑主体部B類、北より)



(1) S X 6・7・12 (南より)



(2) S X 14・17・18・19 (東より)



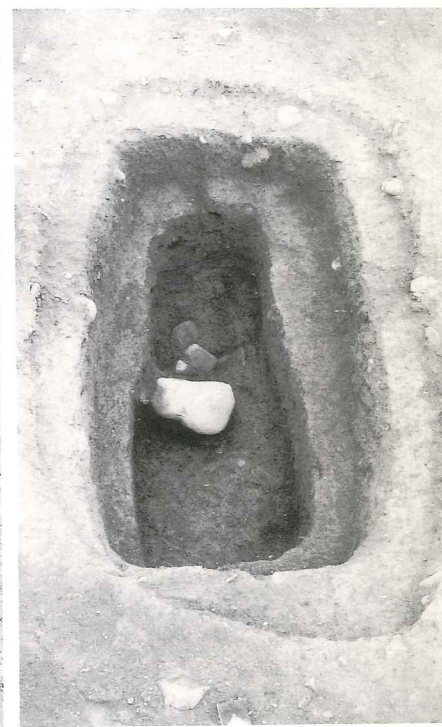
(3) S X 14 (東より)



(1) S X 14墳丘断面（南より）



(2) S X 14主体部（広い掘り
方を持つ木棺、南より）



(3) S X 14主体部（棺上より
礫出土、北より）



(4) S X 14主体部（完掘、南
より）



(5) S X 22主体部（棺上より
礫出土、南より）



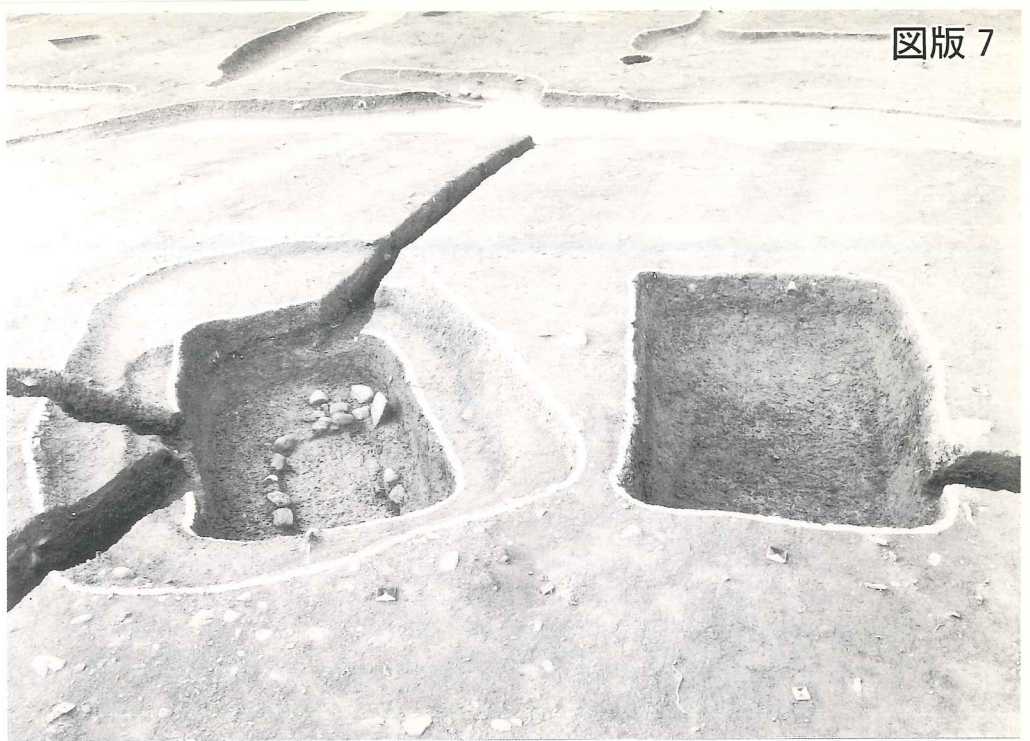
(1) S X 14 (大形方形周溝墓
南より)



(2) S X 16・21 (丘陵斜面部
立地、北より)



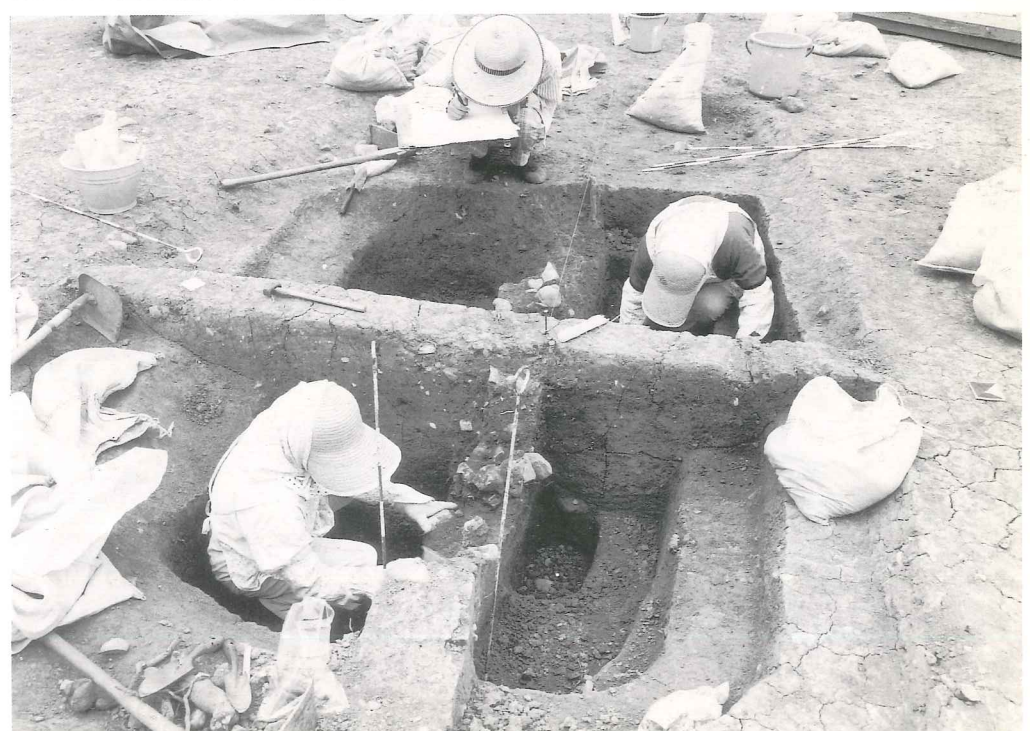
(3) S X 26 (四隅突出部完掘
状況、南より)



(1) S X 26第1・2主体部
(完掘、東より)



(2) S X 26主体部土層断面
(東より)



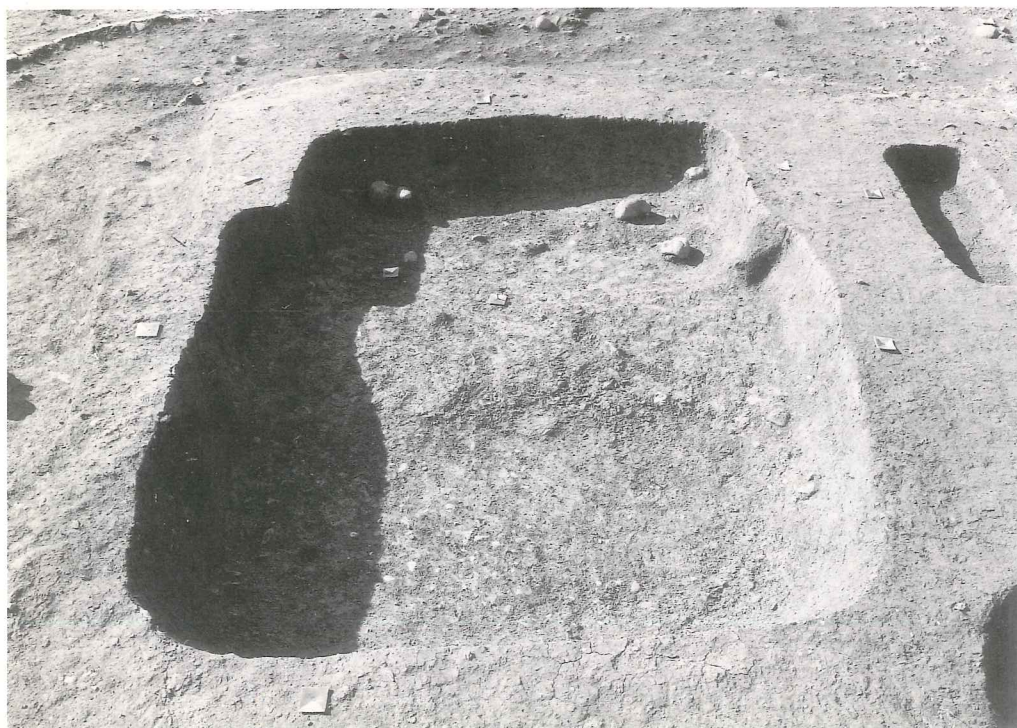
(4) S X 26主体部発掘風景
(上層礫出土)



(1) S X26第4・5主体部
(土坑主体部A類、東より)



(2) S X27 (南より)



(3) S X27第1・4・5主体部
(木棺主体部切り合う、東より)

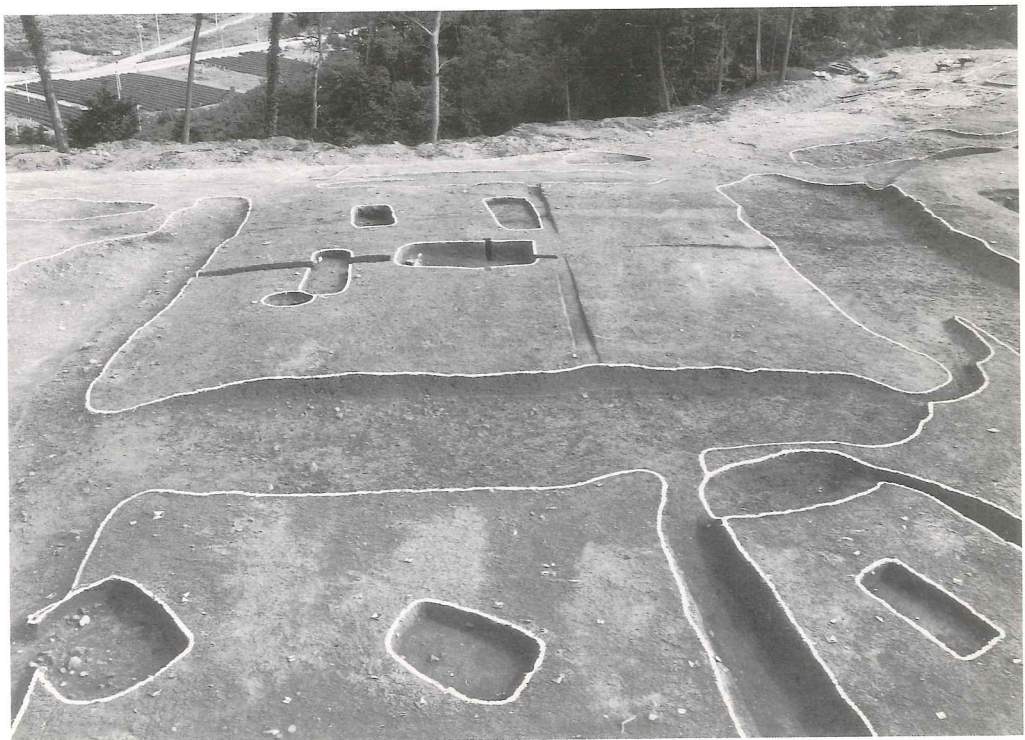
(1) S X31 (南より)

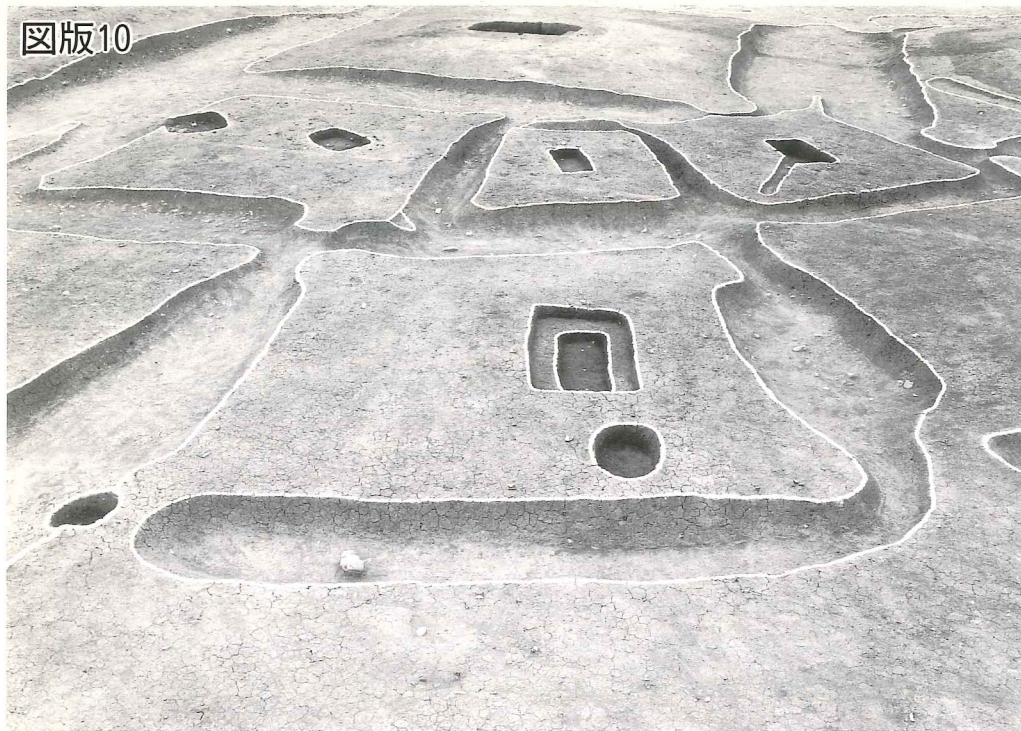


(2) 東南端群全景 (北より)



(4) S X34 (西より)





(1) S X33・35・36・38
(西より)



(2) S X37 (5号墳と重なる。
西より)

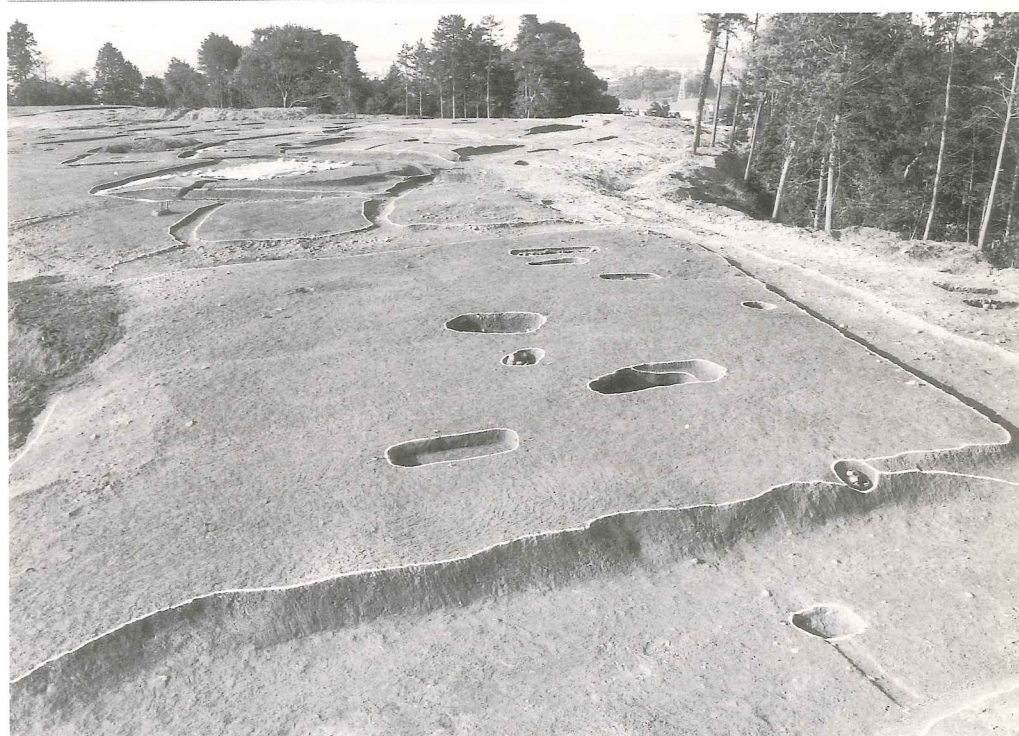


(3) S X37墳丘断面 (南より)

(1) S X 40、S K 12・13 (小
形方形周溝墓と木棺墓、
南より)



(2) S X 43 (多数埋葬大形方
形周溝墓完掘、南より)



(3) S X 43第1主体部 (木棺
主体部、棺上より礫出土、
東より)



(4) S X 43第2主体部 (木棺
主体部、東より)

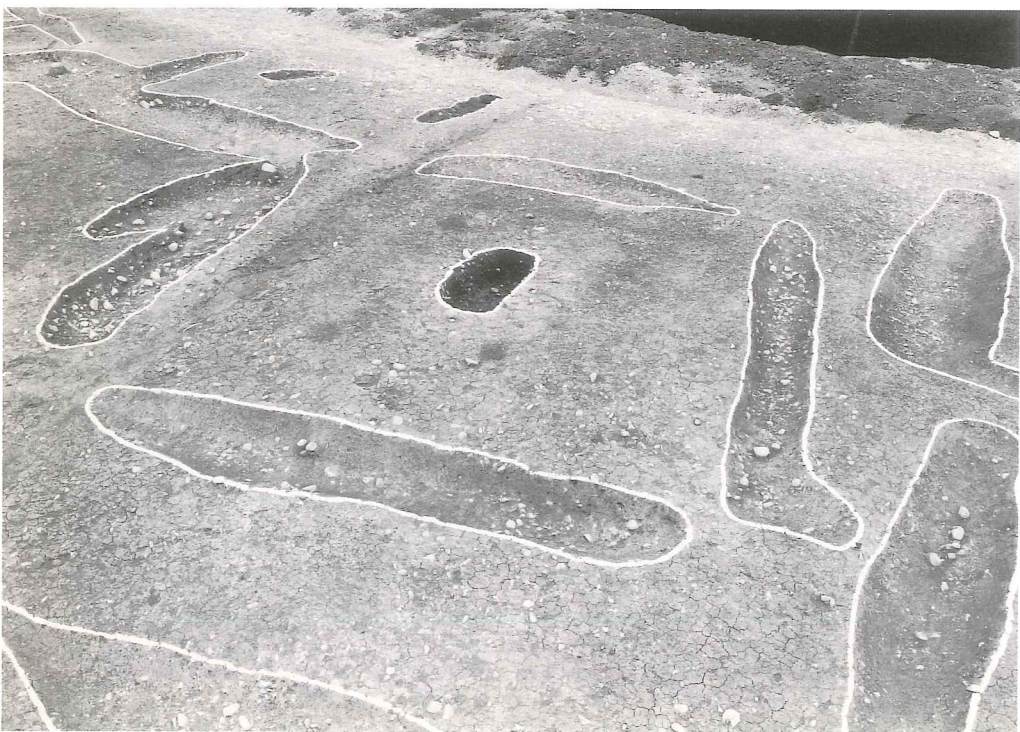




- (1) S X 43第 5 主体部（土坑
主体部A類、上層より礫
出土、東より）
(2) S X 43中央Pit（柱穴裏込
礫使用、東より）

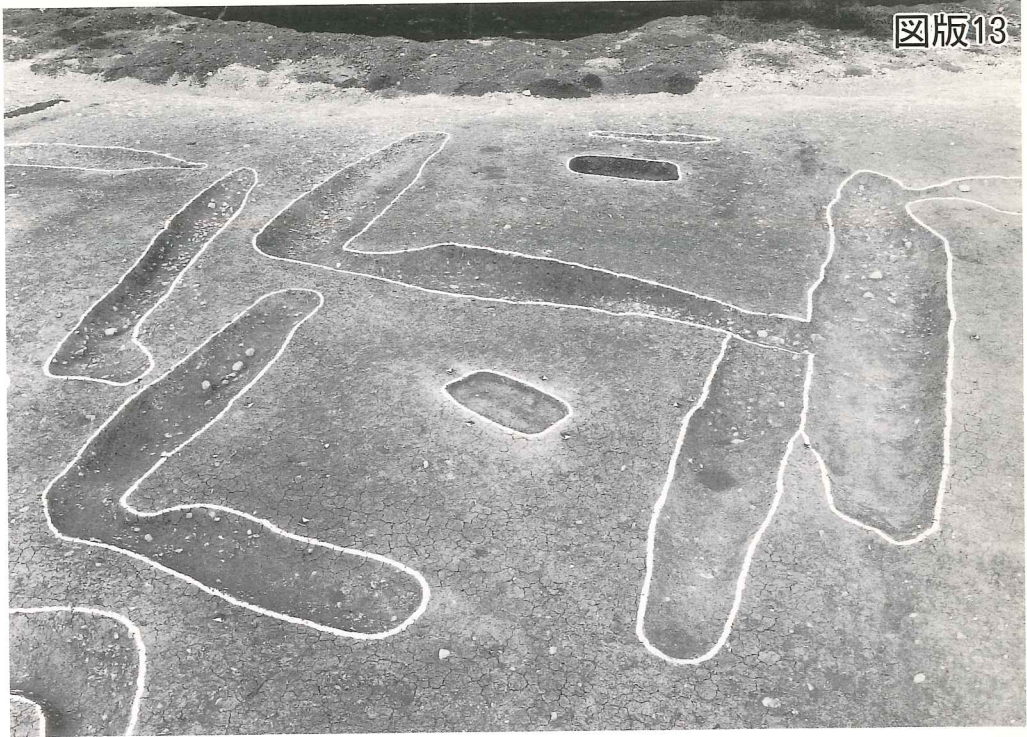


- (2) S X 45（南より）

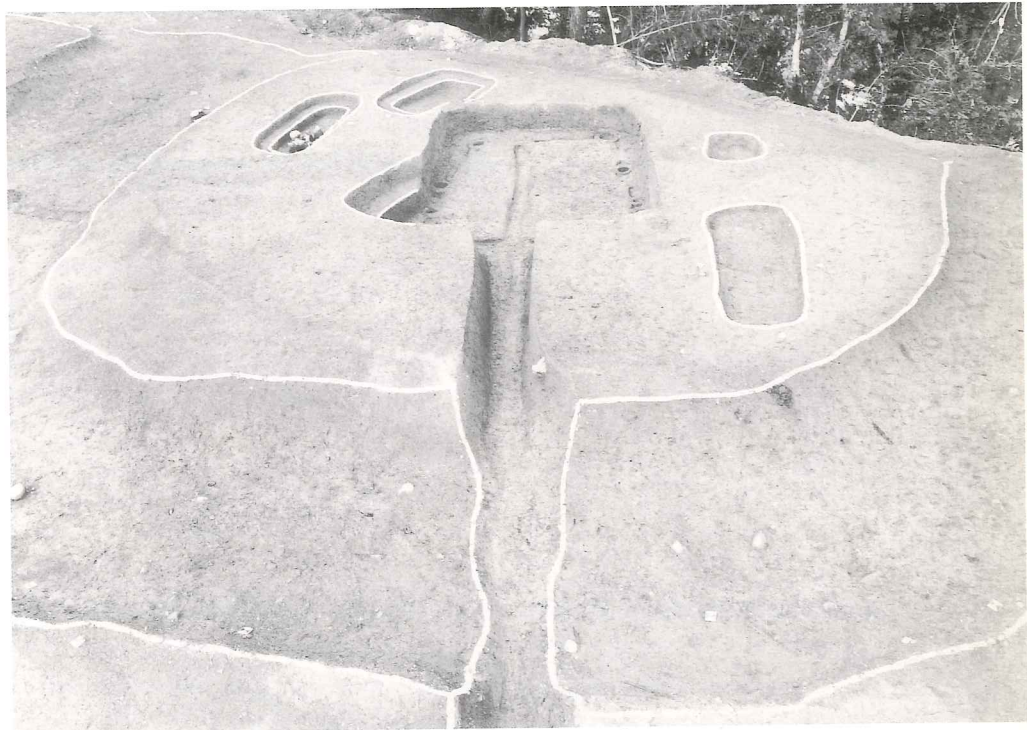


- (3) S X 47（南より）

(1) S X46・51 (南より)



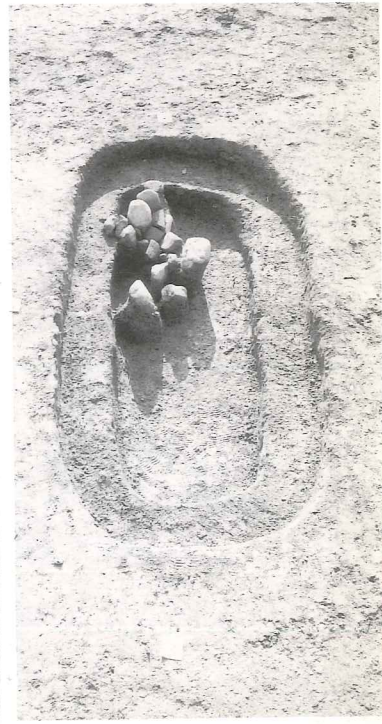
(2) S X57 (横穴式木室墳と重なる、西より)

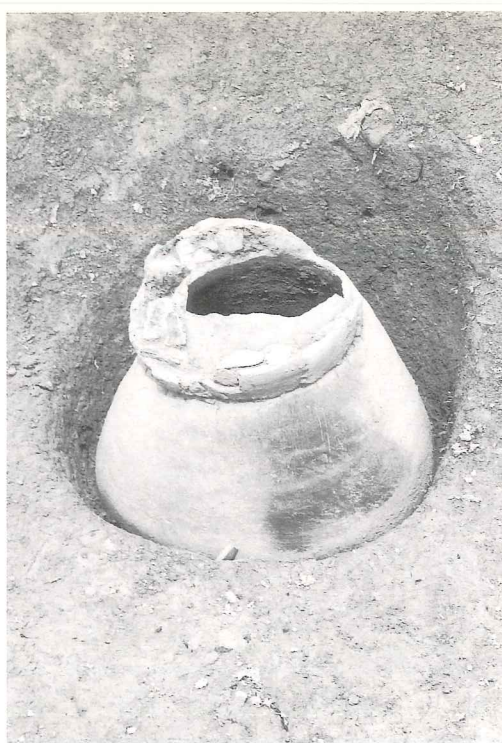


(3) S X57第1 主体部 (土坑
主体部A類上層より礫出
土、東より)



(4) S X57第2 主体部
(西より)





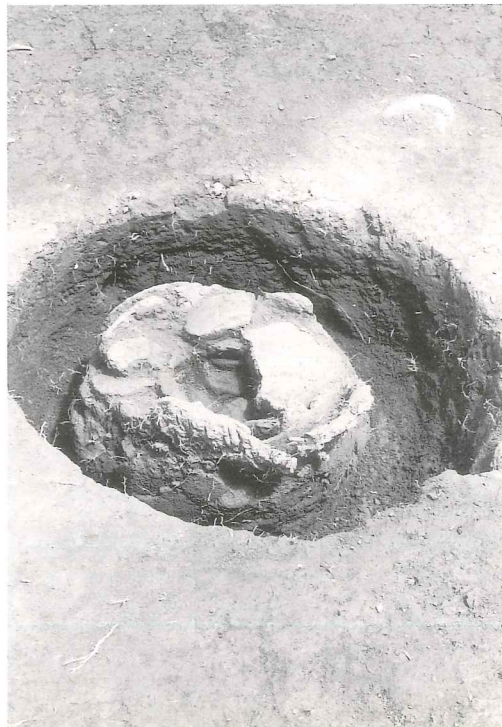
(1) 4号土器棺（横置き単棺、南より）

(2) 5号土器棺（身壺と蓋壺で直立置きの合口棺、西より）



(3) 8号土器棺（身壺と蓋壺で直立置きの合口棺、南より）

(4) 9号土器棺（身壺と蓋甕で横置きの合口棺、東より）



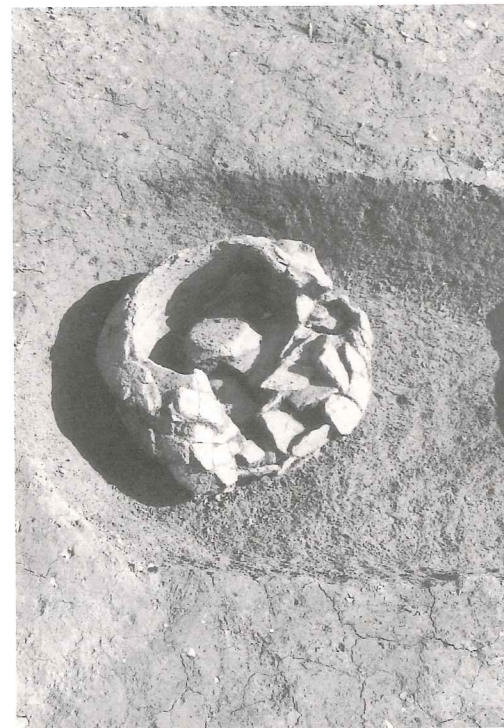
(5) 10・11号土器棺（どちらも身壺と蓋壺で、直立置き、斜行置きの合口棺、南より）

(6) 13号土器棺（身壺と蓋壺で直立置きの合口棺、南より）

(1)14号土器棺（身壺と蓋壺
で直立置きの合口棺、西
より）



(2)15号土器棺（身壺と蓋壺
で直立置きの合口棺、西
より）



(3)16号土器棺（身壺と蓋壺
で直立置きの合口棺、北
より）

(4)18号土器棺（横置きの単
棺、西より）



(5)19号土器棺（横置きの単
棺東より）

(6)21号土器棺（横置きの単
棺北より）



(1) S X 3 第 2 主体部 (溝内
埋葬主体部、木棺か？
東より)



(2) S K 14・15 (木棺墓、東
より)



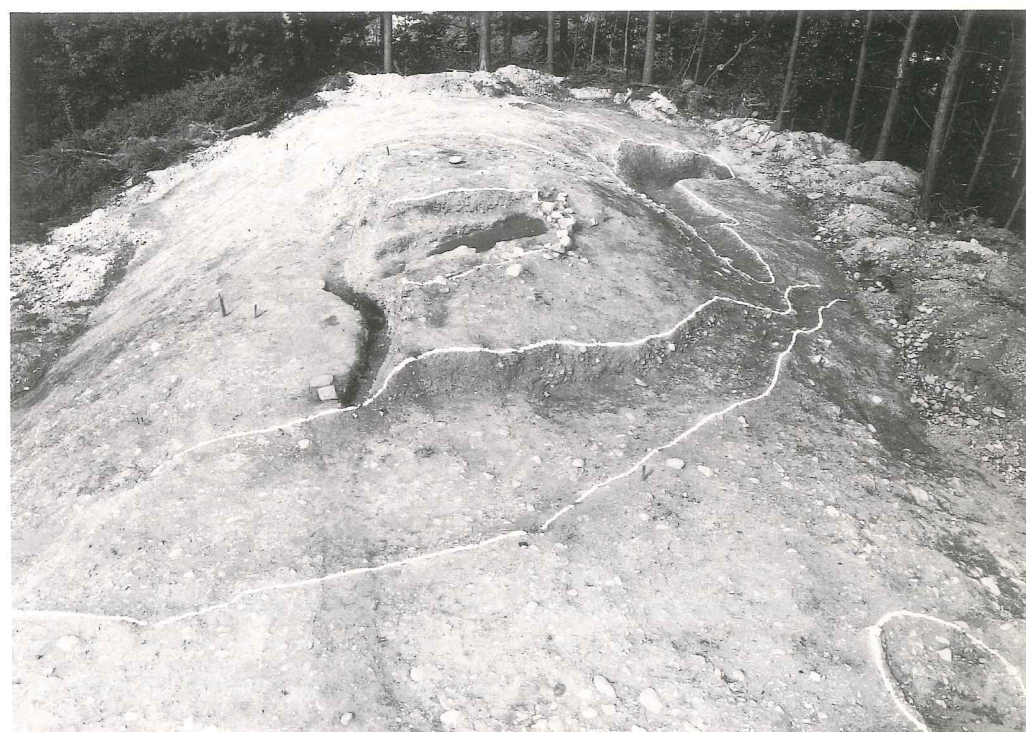
(3) 焼土10・11・12(焼土坑、
西より)

(1) 焼土 4 (焼土坑 S X 5 東
溝より検出、東より)

(2) S X 26 焼土 14 (墳丘下検
出、南より)



(3) 3 号墳 (木棺直葬墳、南
より)

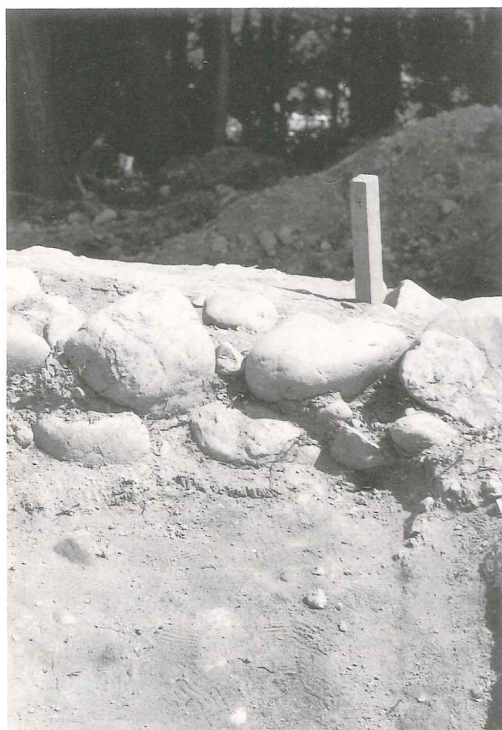
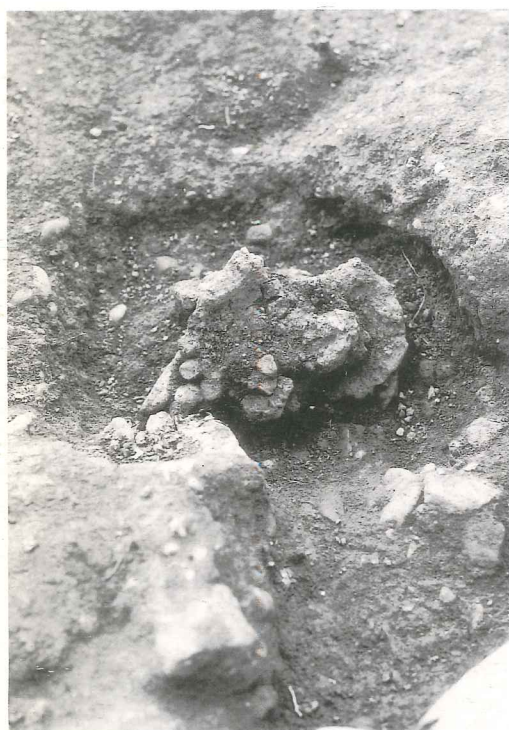


(4) 3 号墳主体部 (箱式木棺、
南より)





(1) 3号墳主体部（完掘、西より）



(2) 3号墳主体部（馬具木棺直上より出土、東より）

(3) 3号墳小口礫積（礫間粘土つめる。西より）



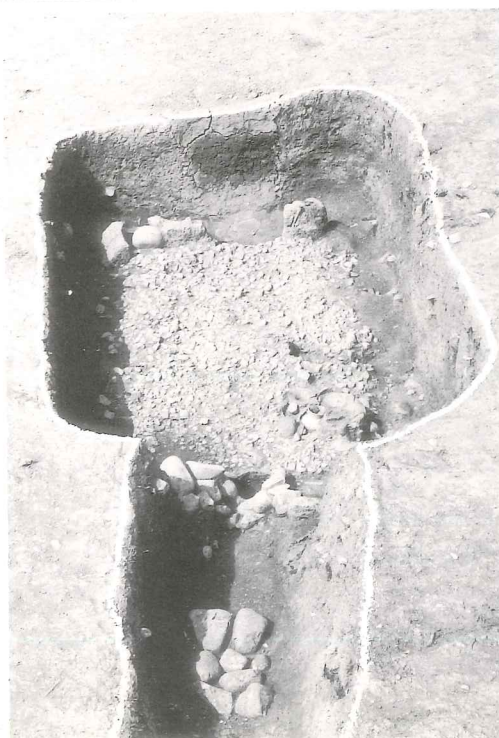
(4) 4号墳（木棺直葬墳S X 27と重なる。半分破壊、南より）



(1) 4号墳主体部（小口に礫と粘土あり。西より）



(2) 5号墳（横穴式木室墳S X37と重なる。南より）



(3) 5号墳主体部（床面小石敷き、南より）

(4) 5号墳主体部（完掘、柱穴検出、南より）

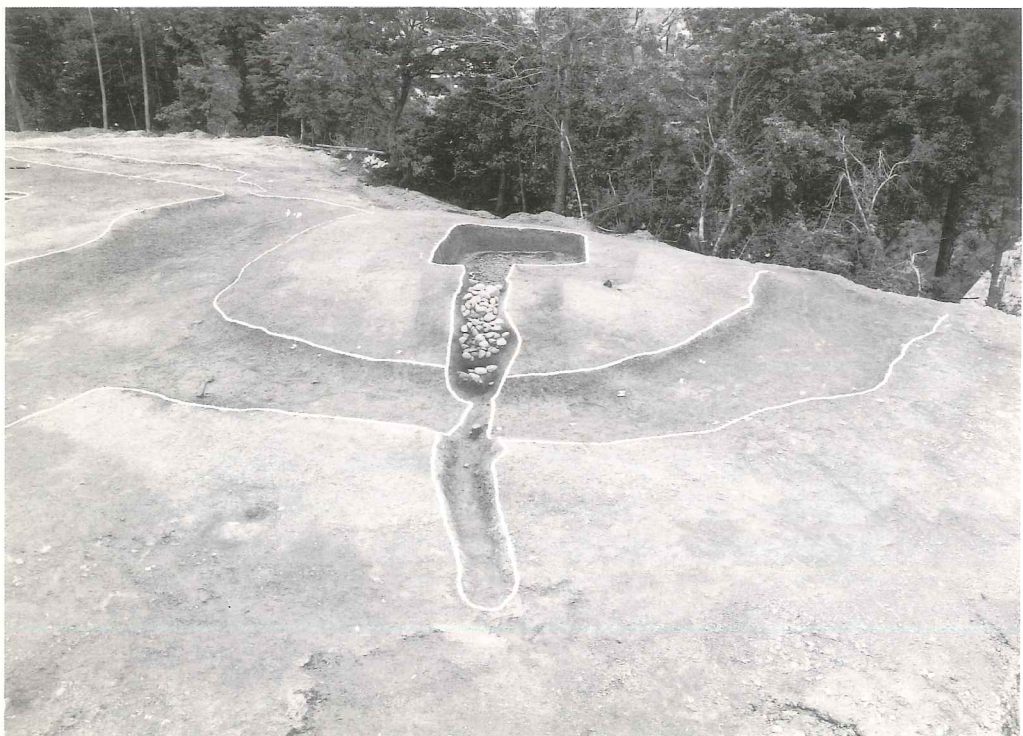




(1) 5号墳玄室内土器出土状況（土師器高杯主体）

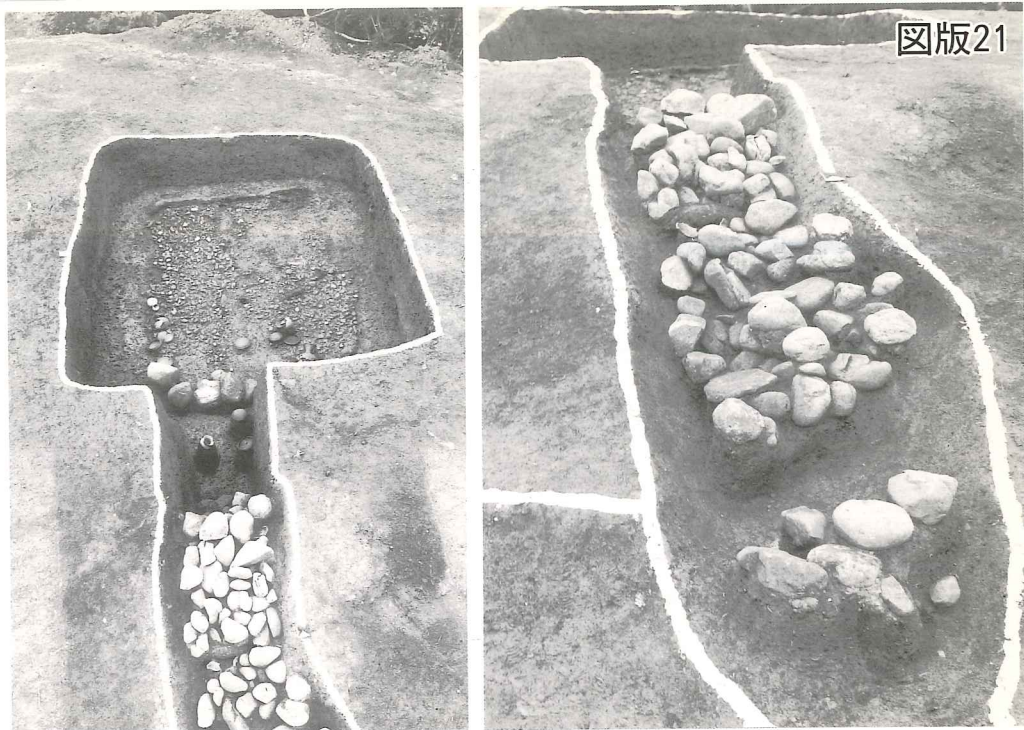


(2) 5号墳閉塞石（南より）



(3) 7号墳（横穴式木室墳、西より）

- (1) 7号墳主体部（床面小石敷き、西より）
 (2) 7号墳閉塞石1面（西より）



- (3) 7号墳土層断面（尖頭アーチ型の土層断面が観察される。東より）



- (4) 7号墳周溝土器2出土状態（破碎されている。南より）





(1) 7号墳主体部玄室内土器
出土状態（東より）



(2) 8号墳全景（横穴式石室
状遺構、南より）

(3) 8号墳主体部（南より）



(4) 1地点西端（東より）



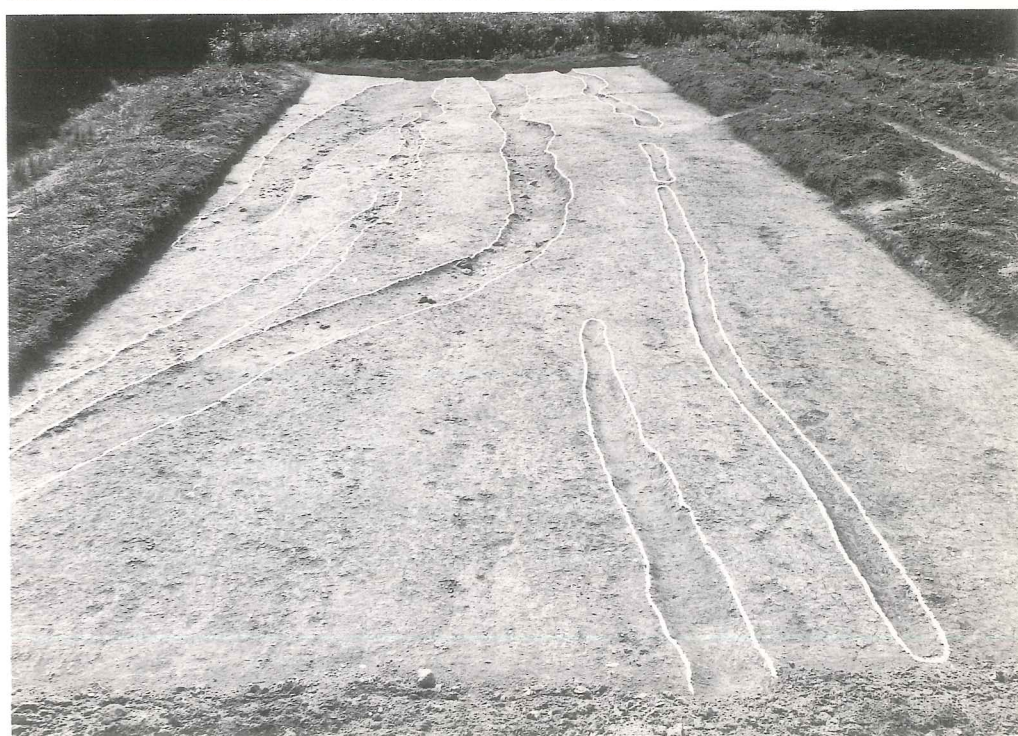
(1) SH 1、SB 2・3 (丘陵凹地に立地する。東より)



(2) 2号窯 (炭焼窯、中央に小溝あり。北より)



(3) 3号窯 (炭焼窯、中央に小溝あり。西より)



(4) 2地点拡張区4全景 (流水路か? 東より)



1



2

1 = S X 1 2 = S X 4



51

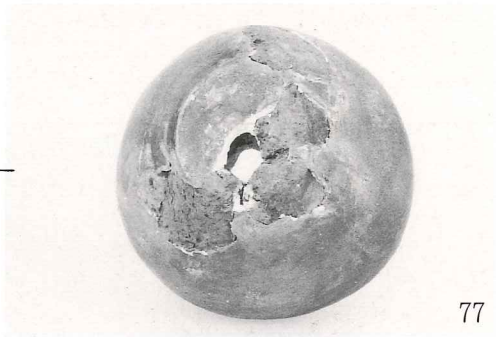


68

51 = S X 27 68 = S X 27



77



77

77 = S X 37



79



79

79 = S X 37



81



81

81 = S X 41



80



125

80 = S X 37 125 = S H 1

遺物写真(1)

※No.は実測図No.と一致する。

126 = S H 1 138 = S H 1



126



138

1号墳破片



1号墳破片



176

176~186 = 5号墳



178



179



180



181



182



184



185



186

遺物写真(2)

※No.は実測図No.と一致する。



187



188

187 = 5 号墳



189

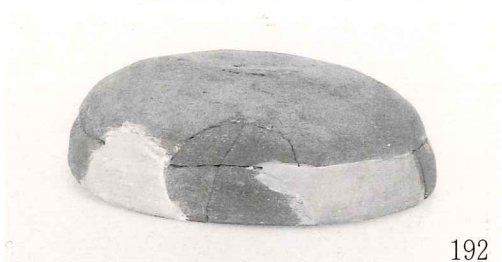


190

188~203 = 7 号墳



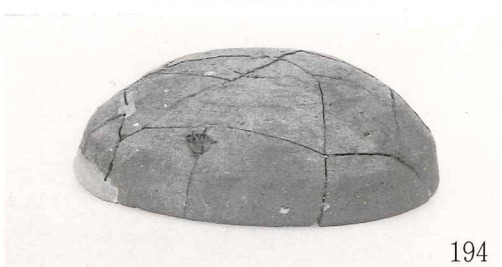
191



192



193



194



195



196



198



199



200



201



202

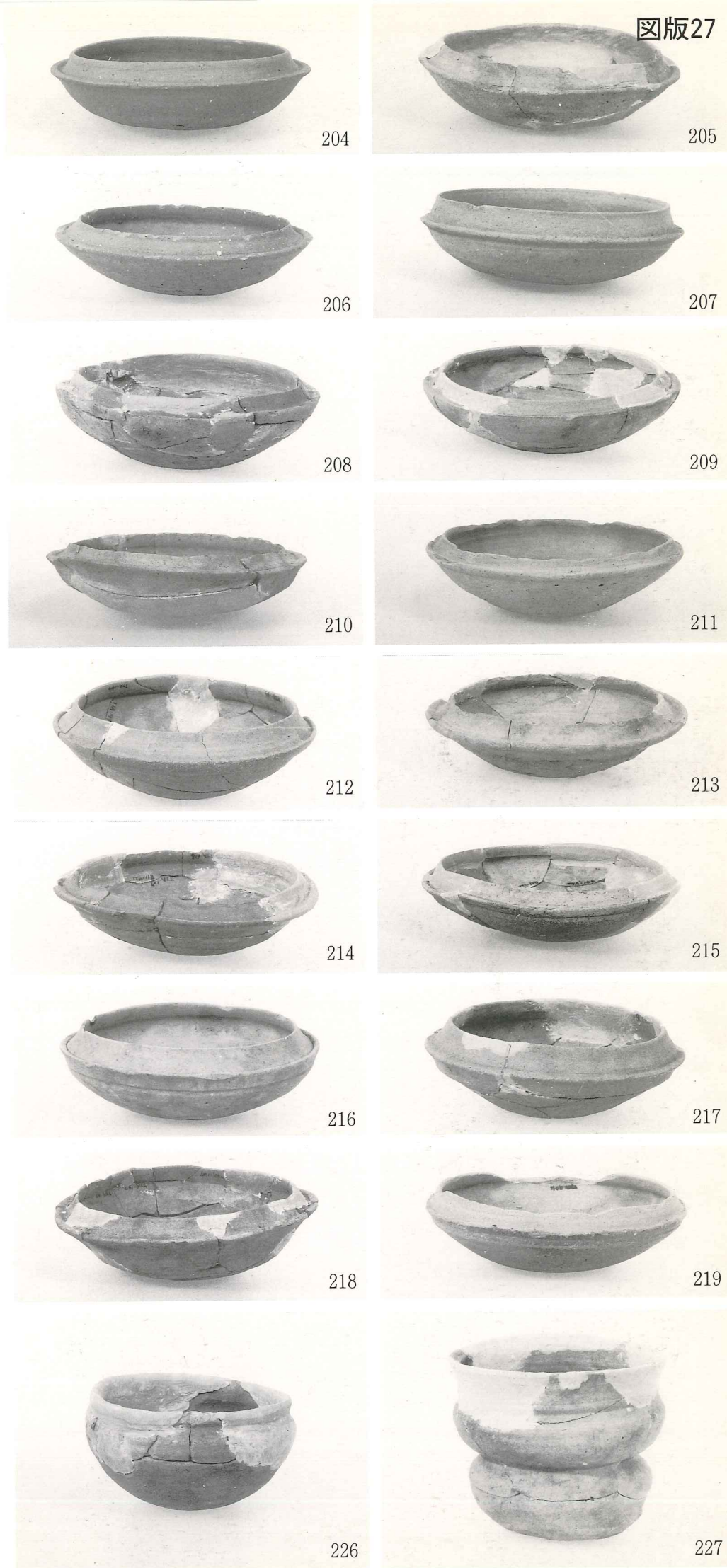


203

遺物写真(3)

※No.は実測図No.と一致する。

204~227 = 7 号墳



遺物写真(4)

※No.は実測図No.と一致する。



228



229

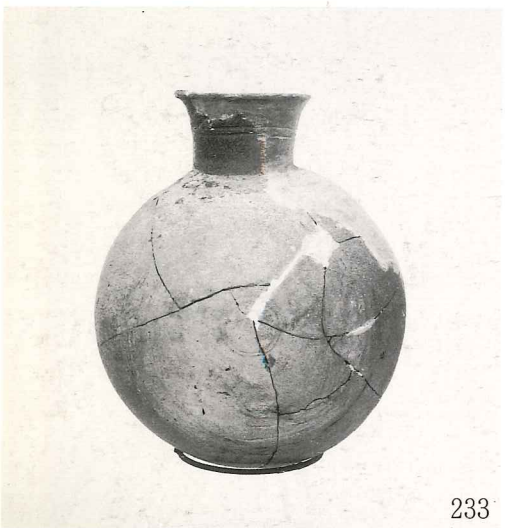
228~235 = 7号墳



230



232



233



234

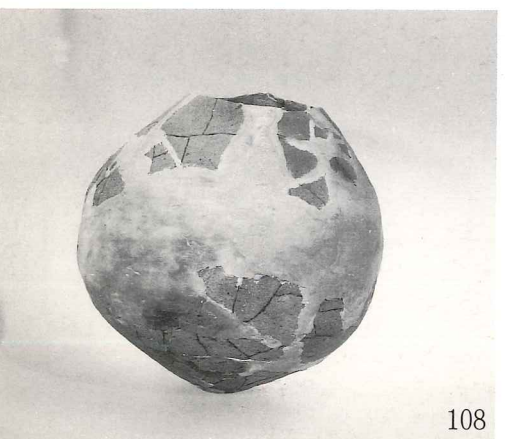


235

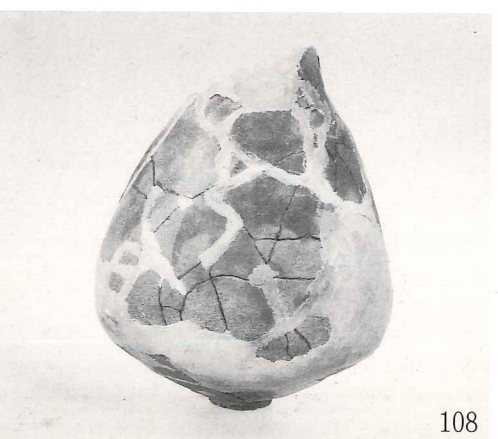


107

107 = 2号土器棺



108



108

108 = 3号土器棺身・蓋

遺物写真(5)

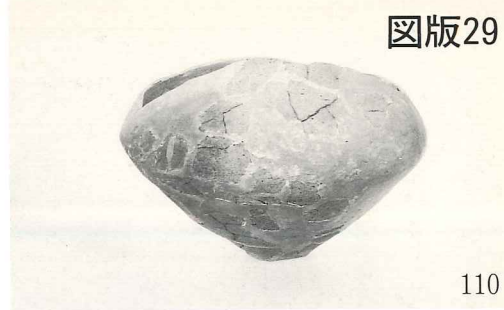
※No.は実測図No.と一致する。

109= 5号土器棺

110= 6号土器棺



109



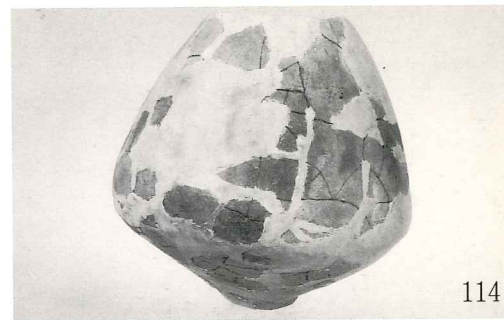
110

113=10号土器棺

114=14号土器棺



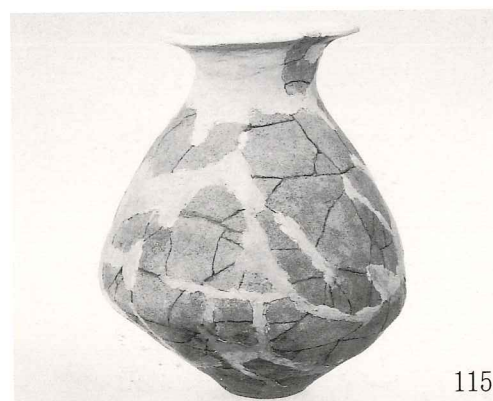
113



114

115=12号土器棺

117=14号土器棺



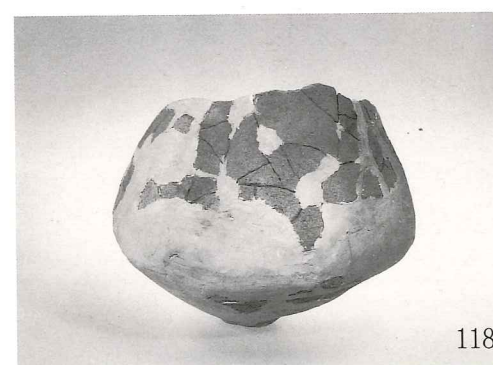
115



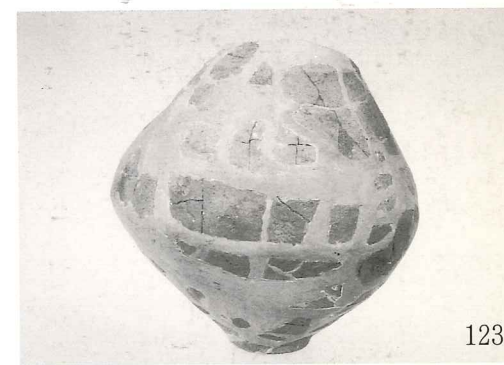
117

118=15号土器棺

123=21号土器棺



118

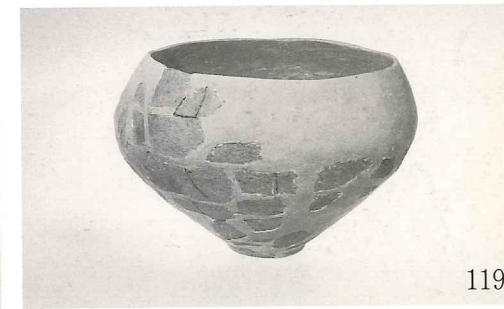


123

119=16号土器棺身・蓋



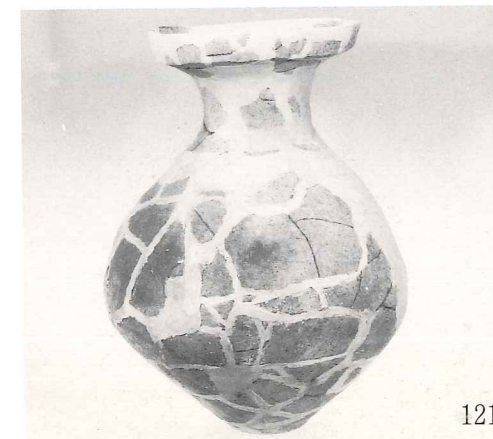
119



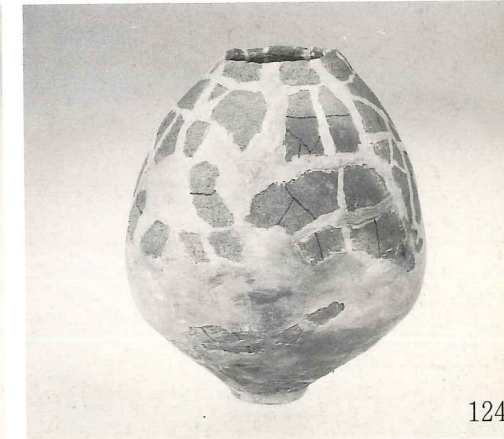
119

121=18号土器棺

124= 8号土器棺



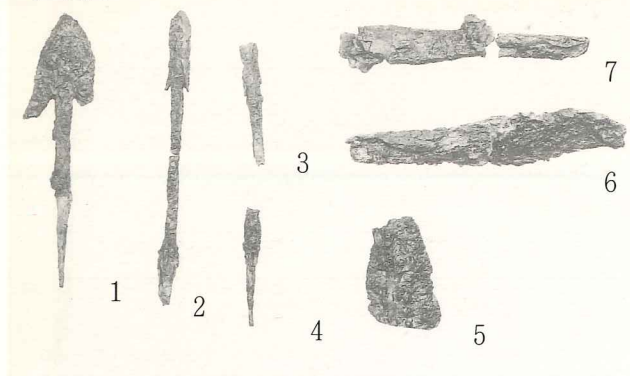
121



124

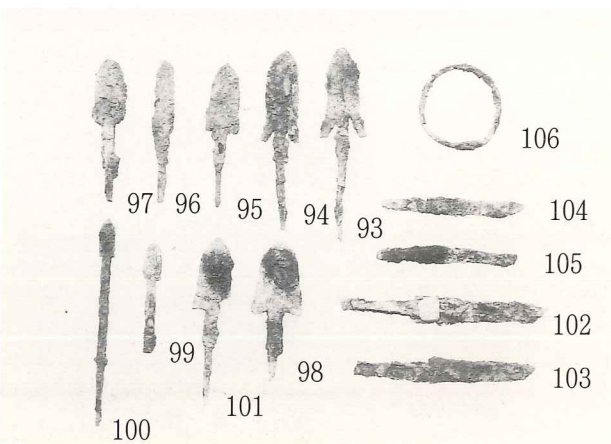
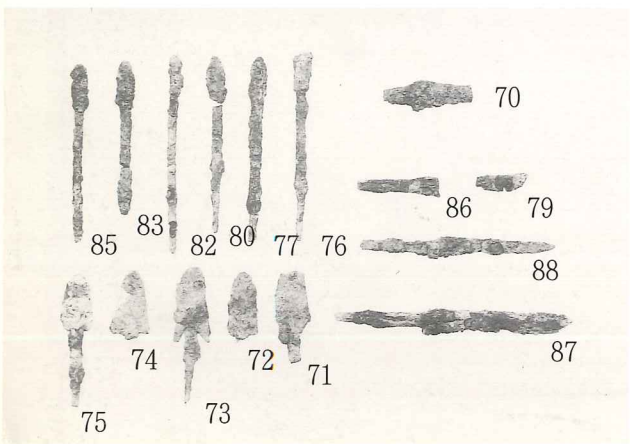
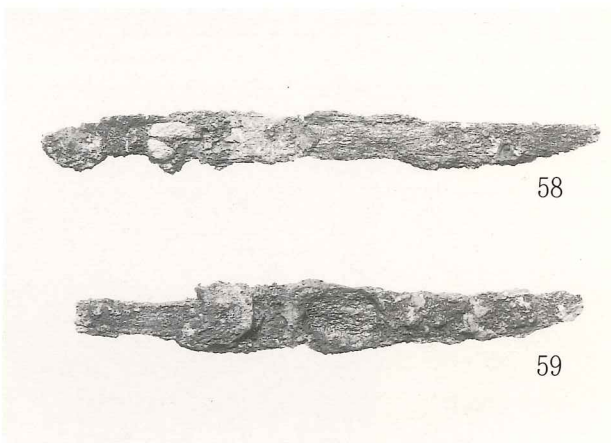
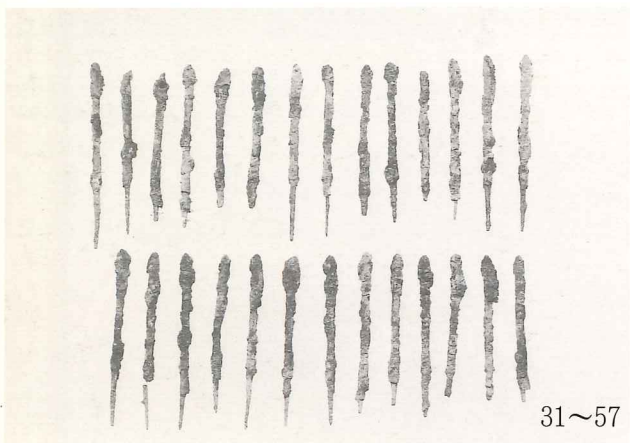
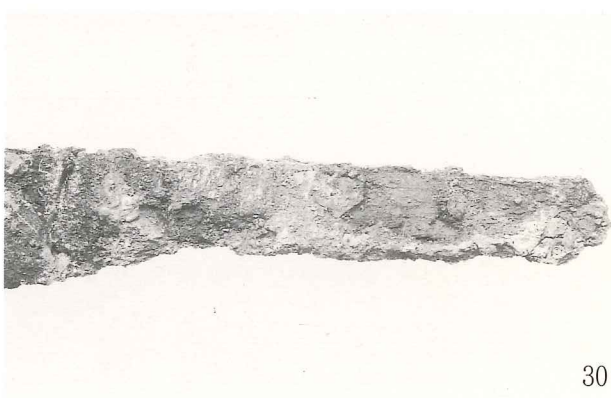
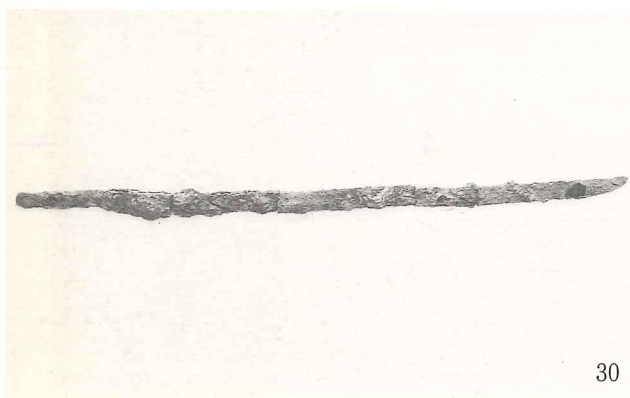
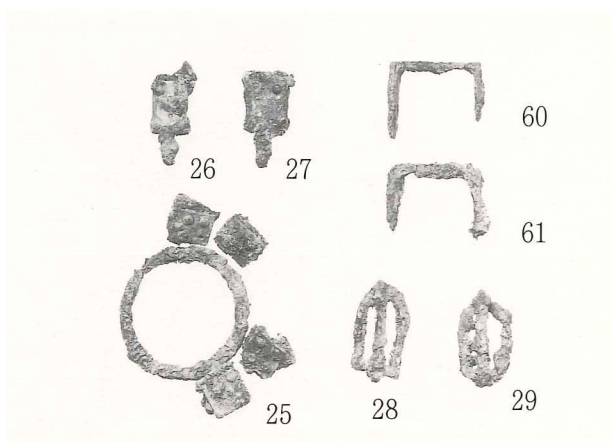
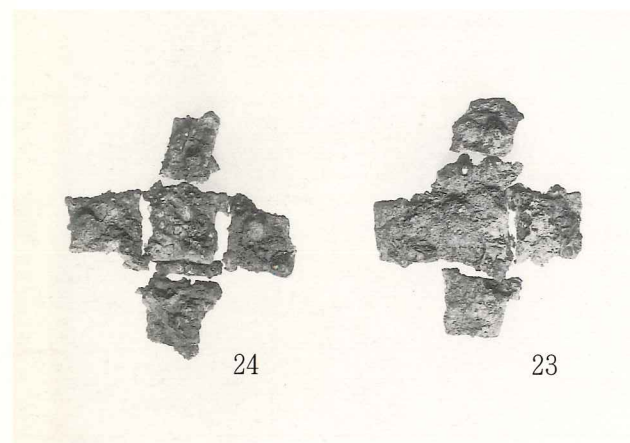
遺物写真(6)

※No.は実測図No.と一致する。



1～7 = 号墳

18、23～61
= 3 号墳



70 = 4 号墳
71～88 = 5 号墳
93～106 = 7 号墳

遺物写真(7)
※No.は実測図No.
と一致する。

【 報 告 書 抄 録 】

フリガナ	タカ オムカイヤマイセキ					
書 名	高尾向山遺跡Ⅱ					
副 書 名						
編 集 者 名	松井一明					
編 集 機 関	袋井市教育委員会					
所 在 地	〒437 静岡県袋井市新屋一丁目1番地1					
発 行 年 月 日	1996年3月25日					
所収遺跡名	タカ オムカイヤマイセキ タカ オムカイヤマコ フンゲン 高尾向山遺跡・高尾向山古墳群					
所 在 地	シズオカケンフクロイシ タカ オ ムカイヤマ 静岡県袋井市高尾・向山					
コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
市 町 村	遺跡番号	51°30'00"	140°70'00"	19920601	1500.0㎡	宅地造成事業
22216	193・194	}	}	}		
		51°70'00"	141°00'00"	19930331		
所収遺跡名	種 別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
高尾向山遺跡	墳墓群	弥生時代	方形周溝墓58基	土器・玉類・土器棺		方形周溝墓群
	窯跡	後期 鎌倉時代	土器棺墓21基 炭焼窯3基			
高尾向山古墳群	古墳群	古墳時代 中～後期	木棺直葬墳2基 横穴式木室2基	須恵器・土師器・馬具・耳環・直刀・鉄鏃		初期群集墳 後期群集墳

高尾向山遺跡Ⅱ

発行年月日 1996年3月25日

編集・発行 袋井市教育委員会

〒437 静岡県袋井市新屋1-1-1

☎0538-43-2111

印 刷 株式会社 開明堂

〒430 浜松市中沢町1-1